916-137

老殘遊記

漢籍國字解全書

早稲田大學圖書館藏版

開始
43. 10. 29
閉架

第九卷

老子　山本洞雲講

莊子　毛利貞齋講

列子　太田玄九講

緊急の廣告

（御一讀を煩し候）

謹啓昨年來豫約發表以來、滿天下の好評を博し、之が爲に漢書流行の氣運を助成したる**漢籍國字解全書**は豫約以外に幾多の有益なる附錄を添へ、紙數に於て無慮**九百頁の超過**（豫約七千餘頁、實際紙數七千九百十四頁）を來たしたるに拘らず、一日の遲滯無く、既約十二冊の完成を告げ、江湖諸家より無數の**祝辭謝狀**を寄せられたるは、當部の大に光榮とする處に之あり候

豫約發表の當時に在りては、其規模が十二冊七千頁の打算なるより、必須の典籍にして其選に漏れたる者も之あり候處、加盟諸彦中、其缺漏を追補續刊せんことを**熱望**し來るもの極て多く、且つ當部に於ても續刊の必要を認めたるを以て、今回七部十三冊を追補して**全二十五冊の一大文庫**たらしむべき計劃を發表せしことは、既に御承知の事と存じ奉り候

追補書籍のうち、**左氏傳國字辨**は、必須の經籍なるに拘らず原文卅卷、講述文卅卷、合せて六十卷の大部なれば、坊間に於て、容易に發行せられざるべく、**傳習錄筆記**、**楚辭師說**の二書は何れも學者帳中の秘書なれば、容易に得難きこと言ふに及ばず候

管、墨、荀、韓の四大典に至りては、先哲の研究、殆と全く缺けたれば、本全書以外には完璧の講述書は絶えて無きものに候、特に**墨子**は難書中の難書にして、和漢ともに何人も讀み得ざるものに候、其著者たる墨翟（ボクテキ）はミル、ベンザム等の碩學が初めて十九世紀に唱へ出したる**功利主義の倫理說**を二千年前に首唱して天下を風靡し、其勢力が大聖孔子と伯仲して孔墨と併稱せられし程の大學者なれども、其歿後に學統の繼承者その人を得ざりしが爲に、其書は全く世に誤解せられて**異端邪說の巨魁**と目せられ、遂には之を讀む者すら無きに至りたるは千歲の恨事に之あり候、されば墨子の書は、傳寫の間に無數の譌誤を生じ、經上下、經說上下の四篇の如きは一句も讀み得ざる**不可解の奇書**と相成りたるは、是非も無き次第と存じ候、墨子中の最良注釋書たる「經訓堂本墨子」に、著者が**「不可句讀也」**と浩歎して筆を投ぜし篇章尠からざるを見ても古來難讀の書たるは疑を容れざる事と存じ候、墨子に對する本邦唯一の解釋書は、近年物故せし高名の老儒**內藤恥叟翁**の著せる、「墨子講義」なるが、今之を見るに、和刻の經訓堂本に訓點なき篇章には、殆と全く訓點を施さず（訓點なき處に講義文なきは勿論なり）たゞ白文を掲ぐるに過ぎず候、これ先哲の研究の全然缺如せるが爲に、翁の如き老大家も、尙且つ本書を讀み得ざりしものと存じ候

內藤翁の講義本の一節（此節にも經訓堂本の儘なる訓點を施したれども少も講義文を掲げず）を抄出して本全書の墨子と對照し、之を裏面に掲げおきたれば御一讀を煩し度候

荀子、韓非子の二書には、近年發行せられたる二三の講義書あれども、概して誤釋を免れず、有名の政治書たる**管子**に至りては、一の解釋書すらも無きものに付、先哲遺著に繼ぐに管墨荀韓の四大典を以てしたるは、先哲の足らざるを補ひて本全書の一大完成を圖る所以に御座候

今や本全書は**先哲遺著の甘部**（孝經、大學、中庸、論語、孟子、易經、詩經、書經、小學、近思錄、老子、莊子、列子、孫子、唐詩選、古文前集、古文後集、左氏傳、傳習錄、楚辭）に加ふるに**管墨荀韓の四大典**を以てしたれば、經書、諸子類より

謹啓 昨年末豫約發表以來、滿天下の[illegible]したる**漢籍國字解全書**は豫約以外に幾多の有益なる附錄を添へ[illegible]於て無慮**九百頁の超過**（豫約七千餘頁、實際紙數七千九百十四頁）を來たしたるに拘らず、一日の遲滯無く、既約十二冊の完成を告げ、江湖諸家より無數の**祝辭謝狀**を寄せられたるは、當部の大に光榮とする處に之あり候

豫約發表の當時に在りては、其規模が十二冊七千頁の打算なるより、必須の典籍にして其選に漏れたる者も之あり候處、加盟諸彦中、其缺漏を追補續刊せんことを**熱望**し來るもの極て多く、且つ當部に於ても續刊の必要を認めたるを以て、今回七部十三冊を追補して**全二十五冊の一大文庫**たらしむべき計劃を發表せしことは、既に御承知の事と存じ奉り候

追補書籍のうち、**左氏傳國字辨**は、必須の經籍なるに拘らず原文卅卷、講述文卅卷、合せて六十卷の大部なれば、坊間に於て、容易に發行せられざるべく、**傳習錄筆記、楚辭師說**の二書は何れも學者帳中の秘書なれば、容易に得難きこと言ふに及ばず候

管、墨、荀、韓の四大典に至りては、先哲の研究、殆と全く缺けたれば、本全書以外には完璧の講述書は絕えて無きものに候、特に**墨子**は難書中の難書にして、和漢ともに何人も讀み得ざるものに候、其著者たる墨翟（ボクテキ）はミル、ベンザム等の碩學が初めて十九世紀に唱へ出したる**功利主義の倫理說**を二千年前に首唱して天下を風靡し、其勢力が大聖孔子と伯仲して孔墨と併稱せられし程の大學者なれども、其歿後に學統の繼承者その人を得ざりしが爲に、其書は全く世に誤解せられて**異端邪說の巨魁**と目せられ、遂には之を讀む者すら無きに至りたるは千歲の恨事に之あり候、されば墨子の書は、傳寫の間に無數の譌誤を生じ、經上下、經說上下の四篇の如きは一句も讀み得ざる**不可解の奇書**と相成りたるは、是非も無き次第と存じ候、墨子中の最良注釋書たる「經訓堂本墨子」に、著者が「**不可句讀也**」と浩歎して筆を投ぜし篇章尠からざるを見ても古來難讀の書たるは疑を容れざる事と存じ候、墨子に對する本邦唯一の解釋書は、近年物故せし高名の老儒**內藤恥叟翁**の著せる、「墨子講義」なるが、今之を見るに、和刻の經訓堂本に訓點なき篇章には、殆と全く訓點を施さず（訓點なき處に講義文なきは勿論なり）たゞ白文を掲ぐるに過ぎず候、これ先哲の研究の全然缺如せるが爲に、翁の如き老大家も、尙且つ本書を讀み得ざりしものと存じ候

內藤翁の講義本の一節（此節にも經訓堂本の儘なる訓點を施したれども少も講義文を掲げず）を抄出して本全書の墨子と對照し、之を裏面に掲げおきたれば御一讀を煩し度候

荀子、韓非子の二書には、近年發行せられたる一二の講義書あれども、概して誤釋を免れず、有名の政治書たる**管子**に至りては、一の解釋書すらも無きものに付、先哲遺著に繼ぐに管墨荀韓の四大典を以てしたるは、先哲の足らざるを補ひて本全書の一大完成を圖る所以に御座候

今や本全書は**先哲遺著の廿部**（孝經、大學、中庸、論語、孟子、易經、詩經、書經、小學、近思錄、老子、莊子、列子、孫子、唐詩選、古文前集、古文後集、左氏傳、傳習錄、楚辭）に加ふるに**管墨荀韓の四大典**を以てしたれば、經書、諸子類より詩文集に至るまで、苟も不變の眞價を有する根本漢籍は殆と其全部を網羅する事と相成り候に付、永く**學界の至寶**たるべきは申すに及ばざる事と存じ候、斯る大部册の書籍の**再刊は殆と不可能**に付、今回の豫約期（十一月十日）を逸せずして陸續御加盟相成り候やう、深く希望いたし候、敬具

明治四十三年十月

早稻田大學出版部

絶好の對照（墨子の一節）

墨子の原本には、如何なる誤脫錯簡あるか、其書が如何に難讀のものなるかを示さんが爲に、先づ墨子唯一の講義本たる內藤耻叟氏の墨子講義より天志第二十八の一節を抄出し、次に牧野巽洲氏の稿本より同節を抄出して對照の便に供す、

【內藤氏講義本】　且天之愛百姓也。不盡物而止矣。今天下之國。粒食之民國殺一不祥。曰誰殺不辜。曰人也。孰予之不祥。曰天也。若天之中實不愛此民也。何故而人有殺不辜。而天予之不祥哉。且天之愛百姓厚矣。天之愛百姓別矣。既可得而知也。何以知賢者之必賞善罰暴也。吾以昔者三代之聖王知之。故昔也三代之聖王堯舜禹湯文武之兼愛之天下也。從而利之。移其百姓之意焉。率以敬上帝山川鬼神。天以爲從其所愛而愛之。從其所利而利之。於是加其賞焉。使之處上位。立爲天子。以法也。名之曰聖人。以此知其賞善之證。

（注意）講義本には此處全く講義文を缺けり、其訓點は殆んと全く和刻の「經訓堂本墨子」を取りたるものなり、斯る訓點にては文意全く通ぜず、講義文を掲げざるは蓋し已むを得ざるなり、

【牧野氏稿本】　且天之愛百姓也。不盡此而止矣。今天下之國。粒食之民。國殺一不辜者必有一。不祥曰。誰殺不辜者。曰人也。孰予之不祥。曰天也。若天之中實不愛此民也。何故而人有殺不辜而天予之不祥哉。且天之愛百姓厚矣。天之愛百姓別矣。既可得而知也。何以知賢者之必賞善罰暴也。吾以昔者三代之聖王暴王知之。是故昔也三代之聖王堯舜禹湯文武之兼愛天下也。從而利之。移其百姓之意焉。率以敬上帝山川鬼神。天以爲從其所愛而愛之。從其所利而利之。於是加其賞焉。使之處上位。立爲天子。以爲民父母。業延萬世。子孫繼嗣。以爲法儀。是以天下之庶民。屬而譽之不廢也。名之曰聖人。以是知其賞善之證。

【通釋】　且や天帝が百姓を愛するとは、專ら此の事のみにては非ざるなり、今天下の國に、粒食を用ゐて生活せる人民は極て多けれども、僅に一人の無罪者を殺すも、必ず不吉なる災禍あるなり、誰が此の無罪者を殺せしかと云はゞ、即ち下手者は人なり、誰が不吉なる災禍を與へしかと問はゞ、即ち天帝が災禍を與へしなり、此の如く僅に一の殺生を爲すも天帝は必ず赦さざるなり、若し天帝が誠に此の人民を愛せざる者ならば、何が故に、人に無罪者を殺せる者ありとて、無關係なる天帝が、之に不吉なる災禍を與ふることあらんや、且つ天帝が百姓を愛することの厚くして、百姓を愛することの偏きは、今更に云ふ迄も無く、既に確と知れたることなり、何を以て、天帝の百姓を愛することを知るかと云はんに、吾は、世の賢者が必ず其の善行を天帝より賞せられ、不賢者が必らず其暴行を天帝より罰せらるゝを以て之を知るなり、何を以て賢者は必らず天帝より賞せられ、不賢者は必らず罰せらるゝを知るかと云はんに、吾は昔し三代の聖王暴王の事跡を以て之を確め知るなり、その故は、昔し三代の聖王堯舜禹湯文武の諸王が天下を兼愛するや、從ふて天下の人々に利益を授け、其氣心を何時と無しに自然に移し易へ、此所に率ゐ連れて上帝山川鬼神に敬ひ事ふることを爲せり、天帝は此の狀態を臨み覽られ、以て天帝の百姓を愛する意に從ふて百姓を愛し、天帝の百姓を利する意に從ふて百姓を利する者と爲せり、是に於て天帝は喜びて聖王に賞譽を加へ、之をして上位に居らしめ、立てゝ天子となし、以て天下萬民の父母

而利」之。於」是加」其賞」焉。使」之處」上位」立爲」天子」以法也。名」之曰」聖人」。以」此知」其賞」善之證。

（注意）講義本には此處全く講義文を缺けり、其訓點は殆んと全く和刻の「經訓堂本墨子」を取りたるものなり、斯る訓點にては文意全く通ぜず、講義文を掲げざるは蓋し已むを得ざるなり、

【牧野氏稿本】且天之愛百姓也、不盡此而止矣、今天下之國、粒食之民、國殺一不辜者必有一不祥、曰、誰殺不辜曰、人也、孰予之不祥、曰、天也、若天之中實不愛此民也、何故而人有殺不辜而天予之不祥哉、且天之愛百姓厚矣、天之愛百姓別矣、既可得而知也、何以知天之愛百姓也、吾以賢者之必賞善、不肖者之必罰暴、知之也、何以知賢者之必賞善、不肖者之必罰暴、知之也、何以知賢者之必賞善、不肖者之必罰暴、知之也、吾以昔者三代之聖王堯舜禹湯文武之兼愛天下也、從而利之、移其百姓之意焉、率以敬上帝山川鬼神、天以爲從其所愛而愛之、從其所利而利之、於是加其賞焉、使之處上位、立爲天子、以爲民父母、業延萬世、子孫繼嗣、以法之不廢也、名之曰聖人、以是知其賞善之證、

【通釋】且や天帝が百姓を愛するとは、專ら此の事のみにては非ざるなり、今天下の國に、粒食を用ゐて生活せる人民は極て多けれども、僅に一人の無罪者を殺せしかと云はゞ、即ち下手者は大なり、誰が不吉なる災禍を與へしかと問はゞ、即ち天帝が災禍者を殺せしかと云はゞ、必ず不吉なる災禍あるなり、誰が此の無罪を與へしなり、此の如く僅に一の殺生を爲すも天帝は必ず赦さざるなり、若し天帝が誠に此の人民を愛せざる者ならば、何が故に、人に無罪者を殺せる者ありとて、無關係なる天帝が、之に不吉なる災禍を與ふることあらんや、且つ天帝が百姓を愛することの厚くして、百姓を愛することの偏きは、今更に云ふ迄も無く、既に確と知れたることなり、何を以て、天帝の百姓を愛することを知るかと云はんに、吾は、世の賢者が必ず其の善行を天帝より賞せられ、不賢者が必らず其暴行を天帝より罰せらるゝを以て之を知るなり、何を以て賢者は必らず天帝より賞せられ、不賢者は必らず罰せらるゝを知るかと云はんに、吾は昔し三代の聖王暴王の事跡を以て之を確め知るなり、その故は、昔し三代の聖王堯舜禹湯文武の諸王が天下を兼愛するや、從ふて天下の人々に利益を授け、其氣心を何時と無しに自然に移し易へ、此所に率ゐ連れて上帝山川鬼神に敬ひ事ふることを爲せり、天帝は此の狀態を臨み覽られ、以て天帝の百姓を愛する意に從ふて百姓を愛し、天帝の百姓を利する者と爲せり、是に於て天帝は喜びて聖王に賞譽を加へ、之をして上位に居らしめ、立てゝ天子となし、以て天下萬民の父母となしたれば、其の業は萬世に延び亘り、後世子孫のもの繼嗣し以て法儀と爲せり、是を以て天下の萬民も相從ふて之を譽めて止まず、之を名けて聖王と曰ひ、其の榮譽の光り、永く滅びざるなり、吾は此れを以て、天帝が賢者の善行を賞するの證據を確め知れり、

（注意）稿本には大意、通釋、解義、總釋、文評、存異の諸項あれども、今は餘白なければ通釋のみを掲げたり、本書の刊行を待ちて其詳を知らんとを望む○本文に黑點（●）を施せるは幾多の考證を經て改訂せし處なり、其說は存異に詳なり、

先哲遺著

漢籍國字解全書　第九卷

解題　附著者小傳

老子

山本洞雲講

【本書の解題】老子、姓は李氏、名は耳、字は聃。楚の苦縣厲鄉（今の河南省歸德府鹿邑縣）の人にして周の守藏吏たり。孔子の周に適きて禮を老子に問ひしこと、老子が周室の衰微を見て、將に隱れんとせし時、關令尹喜の請によりて道德經五千言を著せることは、史記の列傳に見えたり。所謂道德經は即ち是書なり。老子の學說は虛無を根本義とし、宇宙萬化、皆虛無より出で、虛無に歸するものとせり。されば孔子の理想とせる仁義禮樂の如きも、彼れは悉く排斥して、大道廢而有仁義、と云ひ、道廢而仁、仁廢而義、義廢而禮、と

云ひ、道之可道、非常道と云ひて、人爲に出づるものは自然の理にあらざれば、必ずしも唯一の標的と爲すに足らずとなせり。或は云く、老子、其實は仁義禮樂を排斥するにあらず、周代文弊虛飾に流れて、眞實堅朴の道、地を掃へるを慨嘆し、故らに奇矯の言を發して、一世を警醒せしなりと。此れ亦一理なきにあらざるも、要するに老子は老子として、純然一派の學と爲して看るに如かず。老子の學は、孔子の教と同じく、先秦時代に行はれ、漢に至りて、黃帝に配し、黃老の學と稱し、頗る盛に行はる。西晉の初は、周易と共に老易或は易老と稱し、哲學家の經典たり。唐に及んで、儒者、老子の孔子と同じからざるを論辨し、別に配するに莊子を以てして、老莊と云ひ、傳へて今世に至る。注解の書頗る多し、魏の王弼、宋の蘇轍、林希逸の解、尤も世に行はる。老子の文、古朴簡奥にして、其義亦自から深遠なり。希逸の解、煩長に失し、他義に涉る弊なきにあら

ざるも、其講述の懇切にして平易なること、諸注釋書の隨一たり。故に今、山本洞雲が林注に據りて講述せる老子經諺解大成（十冊本）を收む。但原文冗長煩瑣なるを以て、林注に對する諺解を削りて簡明ならしめたり。又廣瀨淡窓の著せる老子摘解あり、老子の全文を解せしにはあらざれども、老學の要旨を研究する參考書として看るべし。

【講者の小傳】山本洞雲、名は泰順、字は三徑、洞雲は其號、京都の人なり。宇都宮遯庵に從ひ學ぶ。洞雲漢學を善くし、老子經諺解の外に、太極圖說諺解、月令諺解、和漢兩鏡錄、節序詩集、四家絕句、山城名所記等の書あり。歿年未だ詳ならず。

莊子　毛利貞齋講

【本書の解題】莊子、名は周、蒙（今の河南省歸德府商邱縣）の漆園吏た

り。梁の惠王、齊の宣王と同時の人たる事は史記の列傳に見ゆ。而して惠宣二王と孟子との問答語は、孟子の書中に載せたるを以て、古來皆、莊子を以て、孟子と同時代の人となせり。莊子の學は、或は老子を祖となすと云ひ、或は陽に孔子を詆毀し、其實は崇拜歸依すと云ひ、或は老に非ず、孔に非ず、別に莊子の一派をなせりと云ひ、諸說紛如として決し難きも、其書中に就きて、其孔子觀を推すに、時に或は詆毀に似たる文章あれども、多くは爲にする所ありて云へる者にして、歷史上より觀察すれば、一見して寓言たるべき者多し。而して其精神の注く所は、反て孔子を知るの深きこと、後世儒者の企て及ぶ所にあらざる者あり。されば莊子は老子の如く全く孔子と異なるにあらずして、孔老二者の間に立ちて、別に一見識を具ふるものと云ふべし。史記に子夏、孔子に學び、田子方、子夏に學び、莊周、又、子方に學びしことを載するを觀れば、莊

子の孔子に對すること、老聃の如くならざるは、亦推して知るべきなり。全篇大率寓言にして、文章の絶妙は、古より仙才と稱せらるる。されば、後世文を學ぶ者は、孟子と竝び稱して、孟莊と云ひ、哲理を論究する者は、老子に配して老莊と云ひ、共に必讀の書となせり。東洋哲學を研鑽する者は、固より論なく、苟も心を物外に遊ばしめ、一世の煩悶を消遣せんとする士の爲には、超然解脫の良導師たらずんばあらず。本書の解釋甚だ多し、而して普の郭象の注せる郭注莊子、宋の林希逸の莊子口義、清の林雲銘の莊子因、尤も我が邦に行はる。今毛利貞齋が希逸の口義に據りて講述せる莊子口義大成俚諺鈔（十冊本）に據り、口義に對する諺解を削りて本文に對する諺解のみを收む。此諺解が內篇に止りて、外篇に及ばざるは、洵に遺憾の至なれども、未だ他に代ふべき良本なければ、姑く之を省けり。外に荻生徂徠の著はせる莊子國字解あり、全篇を

逐句解釋せしにあらざれども、莊子の大意太體を概知するに於ては、一參考書たり。

【著者の小傳】毛利貞齋、名は珊、字は虛白、通稱は香之進、貞齋は其號なり。京都に居り、著述敎授を以て業とす。常に窮鄉僻地の人、志ありて良師友なきを憐み、爲に諸書の講義を著し、國字を用ひて解說し、名けて俚諺鈔と云ふ。著述の富、宇都宮遯庵と相敵す。上梓の際、誤字脫字ありて、人を誤らんことを恐れ、皆自から筆寫して之を授けたりと云ふ、亦以て其篤實敦厚の風を想見すべし。四書俚諺鈔、莊子口義大成俚諺鈔、蒙求俚諺鈔、孝經詳解、首書會玉篇等、尤も著はる。其歿年未だ詳かならず。

列子　太田玄九講

【本書の解題】列子、名は禦寇、鄭（今の河南省開封府新鄭縣）の人なり。

列子も老子の徒なれども、莊子より稍、先輩なり。或は其書を莊子が援きしを見て、列子を以て莊子より剽竊し、他書と混交して僞作せし者と爲し、之を貶斥する者あれども、此れは酷論に失すと謂ふべし。孟子が、畢生の力を盡して、楊墨の道を排斥し、善言而距楊墨者、聖人之徒也と疾呼したる墨翟の兼愛說は、今尙墨子の書ありて知るを得べきも、楊朱の爲我說は、其著書散佚して、之を知るに由なし。只幸に列子中に楊朱篇あり、其他にも楊朱の言行を載せたる篇章少からざるを以て、其學說の全豹を推すことを得るなり。若し列子微かりせば、楊朱の說は全く之を知ることを得ざるなり。故に列子の書は、獨り虛無因應の理を研究する書たるのみならず、又楊子平生の學說を研究する爲にも必須の書と謂はざるべからず。書中の事、概して寓言なることは、莊子に類す。文章の妙は、莊子に遜ることあれども、亦戰國時代の一文章たるを

失はず。至理名言の取りて參考に資すべき者、亦頗る衆し。注解の書、晋の張湛を始め、少からざれども、老莊二子の如くはあらず。今茲には太田玄九の講述せる張注列子國字解（刊本四冊）を收む。

【著者の小傳】太田玄九、名は善世、字は子龍、玄九と號す、陸奥の人なり。江戸に出て、諸家の門に游び、好んで諸子を研精す。後に居を赤阪に卜し、隱れて出でず。横田乾山と友として善し。文政年間、乾山の戰國策正解を著すや、玄九爲に序を作り、其死するや、亦爲に墓銘を作れり。玄九の歿年年壽、未だ詳ならず。莊子國字解、列子國字解の著あり。

老子諺解序

老子載道之書也、嘗自筆以授關尹子、其文簡古其旨奥妙、而其救俗格弊之意亦切、故曰、絶聖棄智民利百倍、又曰、絶學無憂、又曰、禮者忠信之薄而亂之首也、蓋欲使人黜聰明隳肢體、去智與故而登無爲之域、鼓舞發揮不覺自馳奇怪、讀者逞々爲之跌蕩、古今註者幾六十餘家、可謂盛也、

本朝古來唯用河上公、不知有其餘、近世膚齋口義行乎世、學者專宗之、而又不知有河上公、凡天地之間不可無此書、又不可不讀此書、而書之難讀、亦未有如此書者、口義比之諸家頗爲優也、予暇日以俚諺解釋之、幷附諸賢註解可便覽者於其後、以便乎初學、嗚呼知者不言、言者不知、予既非言之者、知之豈敢哉、以俟是心於來哲、延寶乙卯仲夏初六難波教授梅室子山本洞雲序、

老子諺解目次

虛齋口義發題……一
○道可道章第一……四
○天下皆知章第二……六
○不尙賢章第三……七
○道冲章第四……八
天地不仁章第五……一〇
谷神不死章第六……一〇
天長地久章第七……一一
上善若水章第八……一三
持而盈之章第九……一三
載營魄章第十……一四
三十輻章第十一……一五
五色章第十二……一六
寵辱章第十三……一七
視之不見章第十四……一七
古之善爲士章第十五……一八
致虛極章第十六……二〇
太上章第十七……二一
大道廢章第十八……二一
絕聖棄智章第十九……二三
絕學無憂章第二十……二三
孔德之容章第二十一……二四
曲則全章第二十二……二五
希言自然章第二十三……二七
跂者不立章第二十四……二八
有物混成章第二十五……二八
重爲輕根章第二十六……二〇
善行無轍迹章第二十七……二一
知其雄章第二十八……二二
將欲取天下章第二十九……二三
以道佐人主章第三十……二四
夫佳兵章第三十一……二五
道常無名章第三十二……二七
知人者智章第三十三……二八
大道汎兮章第三十四……二八
執大象章第三十五……二九
將欲喩之章第三十六……三〇
道常無爲章第三十七……三〇
上德不德章第三十八……三一
昔之得一章第三十九……三三
反者道之動章第四十……三四
上士聞道章第四十一……三四
道生一章第四十二……三六
天下之至柔章第四十三……三七
名與身章第四十四……三八
大成若缺章第四十五……三九
天下有道章第四十六……四〇
不出戶章第四十七……四〇
爲學日益章第四十八……四一
聖人無常心章第四十九……四一
出生入死章第五十……四三
道生之章第五十一……四四
天下有始章第五十二……四五
使我介然章第五十三……四六
善建不拔章第五十四……四七
含德之厚章第五十五……四八
知者不言章第五十六……四九
以正治國章第五十七……五〇
其政悶々章第五十八……五一
治人事天章第五十九……五三
治大國章第六十……五三
大國者下流章第六十一……五三
道者萬物之奧章第六十二……五四
爲無爲章第六十三……五五

其安易持章第六十四……七七
古之善爲道章第六十五……七八
江海爲百谷王章第六十六……七九
天下皆謂章第六十七……八〇
善爲士章第六十八……八一
用兵有言章第六十九……八一
吾言甚易知章第七十……八二
知不知章第七十一……八三
民不畏威章第七十二……八三
勇於敢章第七十三……八四
民不畏死章第七十四……八五
民之飢章第七十五……八六
人之生章第七十六……八七
天之道章第七十七……八七
天下柔弱章第七十八……八八
和大怨章第七十九……八九
小國寡民章第八十……九〇
信言不美章第八十一……九二

老子諺解

老子鬳齋口義發題

【老子】書の名に見るべし、聖人の書を經と云、賢者の書を子と云、老子經は子書の部なり、漢の景帝の時改て經の部に入、○文獻通考二百十一卷云、晁補之曰、老子道德經二卷、李耳撰、以周平王四十二年授關尹喜、凡五千七百四十有八言、八十一章、言道德之旨、○焦氏筆乘第三曰、老子本子書、漢景帝時、改爲經、吳關澤對孫權曰、許成子、原陽子、老子、莊子、皆修身自玩、放暢山谷、縱法其心、學歸澹泊、至漢景帝以黃子老子義體尤深、改子爲經、始立道學勅令朝野悉誦一焉、

【鬳齋口義】鬳齋は林希逸の書齋の號なり、口義は文章を成さずして、俗語を以て口つから其義を解すると云の義なり、○鬳齋の二字は後人の加たるなるべし、○林經德莊子後序曰、竹溪林氏、名希逸、字肅翁、嘗爲文字官矣、以資謨直主王局觀、鬳齋其書室也、其諸文類似莊子、此書以口義名者、謂其不爲文雜俚俗而直述之也、

【發題】題辭と云に同じ、序の別名なり、古今紀要曰、後漢趙岐、爲孟子題辭、即序也、岐每好異、故異名、

【林希逸】萬姓統譜曰、林希逸字肅翁、福清人、紹定間進士第四人、初爲平海軍節度推官、以清白稱、淳祐中遷祕書省正字、固對乞信任給諫、又乞早決大計以慰人望、上皆開納、景定間、司農少卿言、亦之漢及林公逸、俱經明行修、終於布衣、乞褒贈以厲後學、從之、官終中書舍人、號鬳齋、所著有易講春秋傳老莊列口義考工記解竹溪稿等書行于世、

老子姓李氏、名耳、字伯陽、以其耳漫無輪、故號曰聃、楚國苦縣

人也、仕周爲藏室史、當周景王時、吾夫子年三十、嘗問禮於聃、其言屢見於禮記、於夫子爲前一輩、語曰述而不作竊比於我老彭、太史公謂、夫子所嚴事亦非過與也、及夫子沒後百二十九年、有周太史儋、嘗見秦獻公言離合之數、或曰儋即老子、非也、儋與聃同音、傳者訛云、

【老子姓李】老子の姓は李氏、名は耳、字は伯陽と云、その耳漫して耳の輪なきを以て故に號して聃と云、【聃】は耳の輪なきを云、楚國の苦縣の人なり、周に仕て藏室の史となれり、書を藏る室を主とるの官なり、【當周景王―】周の景王の時にあたつて、吾が夫子年三十、嘗て禮を老聃に問り、其言しば〳〵禮記に見ゆ、夫子に於て前一輩たり、【夫子】は孔子を云、【前一輩】は一等の前輩なり、年長せるを云、【語曰】論語曰、述而不作竊比於我老彭、【老彭】は老聃なり、夫子既に身を以て老彭に比せり、老彭を慕へるもの也、太史公が史記に老子を以て夫子の嚴しみ事る所と謂るは過與にあらず、【過與】はすぎたるを云也、【及夫子―】夫子の沒して後百二十九年に及で、周の太史儋と云ものあつて、嘗て秦の獻公にまみえて離合の數のことを云り、【離合】は周と秦と合て離れ離て合の數なり、【數】は限數なり、或人の曰く儋は即ち老子なりと、此說非なり、儋と聃と同音の字なるによりて、傳者訛りて云なり、

【老子】史記列傳第三曰、老子者楚苦縣厲鄉曲仁里人也、姓李氏、名耳、字伯陽、謚曰聃、周守藏室之史也、修道德、其學以自隱無名爲務、居周久之、見周之衰、廼遂去、至關、關令尹喜曰、子將隱矣、强爲我著書、於是老子廼著書上下篇、言道德之意五千餘言而去、莫知其所終、正義曰、老子身長八尺八寸、周時人、李母八十一年而生、又玄妙內篇曰、李母懷胎八十一載逍遙李樹下、廼割左腋而生、又上玄經云、李母晝夜見五色珠大如彈丸、自天下、因呑之、即有娠、索隱曰、按葛玄云、李氏女所生、因母姓也、又云、生而指李樹、因以爲姓、許愼云、聃耳漫也、故名耳、字聃、今胙字伯陽非也、佛祖通載第三曰、老聃父姓韓、母曰精敷、孕八十一年而生於李樹下、因以爲姓、

【姓】左傳隱公八年衆件曰、天子建德、因生以賜姓、胙之土而命之氏、林注因其所由生以賜姓、若舜由嬀汭而生、故爲嬀姓、報之以土地、由其所封之地、名爲之族氏、若胡公封於陳、命目陳氏也、○姓生なりと云て、其人の先祖の生れたる所を以て姓とす、姓は下も百世にいたるまで改めず、又其人の子孫、國に封せられて、其國を以て氏とす、たとへば舜は嬀汭と云處にて、むまれたまへるによりて、嬀姓なり、舜の子孫の胡公と云人、周の武王の時に、陳の國に封せられて、胡公の家は陳を氏とす、氏は其人々によりて替る也、たとへば本朝にて源家の人々を云とき、源と云は姓なり、源姓の中に、新田、足利、里見、鳥山、小笠原などゝ云は皆氏なり、氏は替れども源の姓はかはらず、

【名耳字伯陽】神仙傳云、老子姓李、名耳、一名重耳、外字、聃○禮記曲禮上、名子者不以國、不以日月、不以隱疾、不以山川、又曰、男子冠而字、郊特牲曰、冠而字之敬其名也、凡そ子のむまるゝ時は、父その子に名つく、是を名と云、臣としては君の名をいむ、子としては父の名をいむで、其名を稱することなし、故に是を諱と云、二十にして始めて冠す、其時字をつく、冠して後は成人なるゆゑに、名を呼ぶことなし、其人を敬すればなり、故に字を呼ぶ、凡そ己より長上の人をば、字をよび、己より少賤の人をば、名をよぶ、字を呼を敬とす、名をよぶを慢とす、

【耳漫】正義曰、聃耳漫無輪郭也、史記には謚して聃と云とあり、索隱には字を聃とす、史記神仙傳等に字を伯陽とす、林希逸の說、名耳、字伯陽と云るは、史記神仙傳の說に隨へるなるべし、

【藏室史】書を納ることを司どるの官也、索隱曰、藏室史、乃周藏書室之史也、又張陽傳、老子爲柱下史、即藏書之柱下、因以爲官名、

【問禮】孔聖全書曰、三十一歲己卯、周景王二十三年、魯昭公二十年也、孔子適周訪樂於萇弘、問禮於老聃、○史記孔子世家曰、魯南宮敬叔言魯君曰、請與孔子

適周、魯君與之一乘車兩馬一竪子、俱適周問禮、蓋見老子云、孔子自周反于魯、魯昭公之二十年、而孔子蓋三十矣、索隱曰、莊子云、孔子年五十一、南見老聃、蓋系家亦依此爲說、林希逸の說は史記に從へり○宋羅璧孔子師老聃辨曰、孔子師老聃之說、肇於莊子、而西、是月融風三扇、天理西行、知有聖人度關、乞出爲函谷關令、昭王癸丑五月壬午、紫氣浮雲、有老人乘青牛白轂車、諸子聚乘徐甲爲御將度關、喜迎拜下風、則老子也、喜曰、大道將隱、强爲我著書、遂館終南山樓觀師事之、明年授道德五千餘言、及考穆王內傳言王西遊上終南修草樓、則知授經爲昭王時明矣、關尹亦自著書九篇、名關尹子、○文獻通考二百十一卷曰、晁補之曰、老子道德經二卷李耳撰、以周平王四十二年授關尹子、凡五千七百四十有八言八十一章、言道德之旨、

按するに焦氏の說は、周の昭王の二十六年甲寅、老子書を關尹子に授くと云へり、昭王は周第四の主なり、二十六年より景王の二十三年、孔子適周問禮於老子と云の年に至るまで、合五百四年なり、又晁補之の說は、周の平王の四十三年に當て、老子五千言の書を關尹子に授くと云へり、平王は周第

十四の主なり、平王の四十三年より景王の二十三年に至るまで、合二百五年なり、景王は周第二十五代の主なり、又史記老子列傳の注に、正義曰、王肅云、老子以周平王時見衰、於是去、孔子と老子と時を同うせざること如此なり、史記列傳に、老子何れの年に生れ、何れの代に當ると云ことを記せず、蓋老子は百有六十餘歲、或言ふ二百餘歲と記せり、尤分明ならざるもの也、司馬遷老子生時の年月を詳かにせずして、莊子の說に從て老子と孔子と同時の人とすること必せり、孔子師老聃之說、肇於莊子と云る羅璧の論、千歲の惑をやぶるものなり、又按するに、子曰我欲觀夏禮是故之杞而不足證也、我欲觀商道是故之宋而不足證也、此言を以て見れば、孔子夏商二代の禮を觀んために、杞にゆき又宋に往けり、二國ともに證とするに足らざることを歎きたまへり、此時老子周に在らましかば、夫子豈周に往て老子に見えて是を得たりと云の一語なかるべけんや、既に一言なきときは、老子に禮を問ざること明かなり、又子曰我觀周道幽厲傷之、吾舍魯何適矣、孔子は周人なり、魯は周公の國なり、周の禮は悉く魯にあり、故に夫子坐らにして周の禮を知る、是を以て其言此の如し、周に適かざること明かなり、論語の書は、夫子の門人の筆記するところにして、有子曾子の門人の手に大成す、其書に一言も老聃に見ると云の事なし、莊子は孟子と時を同せり、其書論語の後に出たり、孔子南見老子問道の語、莊子の寓言なること明なり、禮記は漢儒の手に成れり、其本をつまびらかにせずして、我聞諸老聃の語を處々に載たり、孔舒の孔子家語をあらはせるに、孔子周に行て禮を老子に問ことを擧げたり、皆附會の說なり、凡聖人に常の師なし、其道を知る人を師とす、故に夫子官を郯子に學べり、人と歌て其歌善きときは、必ず反さ、ふせしめて、詳に習て後に又和す、其善を人に取ること如此なり、又孔文子が下問に恥ぢざるを以て文とすと稱せらる、たとひ孔子老聃を師とすること實定なりとも、何の傷みかあらん、然れども、學者の惑を解かん爲めに略擧するところ此の如し、

【僕見】禮記曾子問等の篇に、吾聞諸老聃の語、數箇處見えたり、鄭註、老聃古之善考之號也、與孔子同時、石梁先生曰、此老聃非作五千言者矣、

【竊比】論語古註、包氏曰、老彭殷賢大夫、好述古事、朱子集註、老彭商賢大夫、見大戴禮、蓋信古而傳述者也、正義の說には、老聃は莊子所謂彭祖なり、又一には即老子なりと云へり、これ皆たしかならざるの說なり、老彭、彭祖、老聃、其名別なり、推て老彭を彭祖なり老子なりと云は、牽強せるの說なり、朱子包咸の古注に從て、商賢大夫也とせり、別人なること必せり、老聃には非ず、

【嚴事】史記弟子傳曰、孔子所嚴事於周則老子、於衞遽伯玉、於齊晏平仲、於楚老萊子、於鄭子產、於魯孟公綽、嚴事とは禮を嚴にして交を成すを云ふなり、師とし事るにはあらず、遽伯玉、子產、晏嬰は、皆夫子の友なり、遽伯玉は門弟子の列なり、老子と孔子と同時の人と書けるは、史記のあやまりなるべし、

【過與】過たるを云なり家語曰召忽雖死過與取仁未足多也、

【離合】史記老子傳曰、自孔子死之後百二十九年、而史記、周太史儋見秦獻公曰、始秦與周合而離、離五百歲而復合、七十歲而伯王者出焉、或曰儋即老子也、或曰非也、世莫知其然否、

周室既衰、老子西遊將出散關、關令尹喜知爲異人、强以著書、遂著上下篇五千餘言而去、其上下篇之中雖有章數亦猶繫辭上下、然河上公分爲八十一章、乃曰上經法天天數奇其章三十七、下經法地地數偶其章四十四、嚴遵又分爲七十二、曰陰道八、陽道九、以八乘九得七十二、上篇四十、下篇三十二、初非本旨、乃至逐章爲之名、皆非也、唐元宗改定章句、以上篇言

道、下篇言德、尤非也、今傳本多有異同、或因一字而盡失其一章之意者、識眞愈難矣、

【周室既衰】周の王室の政おとろへたるを見て、老子西にあそび去んとて、西の方散關を出んとする處を、關の令尹喜と云人、老子の異人なることを知て、老子を留めて强て書を著さしめたり、老子遂に上下篇五千餘言を著して尹喜に授けて去ぬ、其上下篇の中一章一章の數は有けれども、章段を分つにさのみ深き意はなかりし、孔子の易の繫辭を著し玉ふ時に、上繫辭下繫辭二つに分て、一章一章易の義を說たまふが如し、【然河上公ー】漢の河上公老子の註を著せるとき、章段を分て八十一章に定て云く、上篇の經は天に法る、天は陽數にて奇なり、故に其上經の章三十七、三も七も奇の數なり、下經は地に法る、地の數は陰數にて偶なり、其章四十四、四は偶の數なり、奇は半の數なり、一三五七九なり、偶は長の數なり、二四六八十なり、【嚴遵又分ー】漢の嚴遵老子の註を著せる時に、章段を分て七十二章とす、云く陰の道は八を用、陽の道は九を用、八を以て九に乘じて、八九七十二を得たり、七十二章を二つに分て、上篇四十章、下篇三十二章と定たり、此等の說は初めより老子の書を著したる本旨にあらず、又章を逐て名を付て第一の章を體道、第二の章を養身、第三の章を安民、第四の章を無源と名付て、一章一章にことく〳〵く名を付たるは皆非也、【唐玄宗改定ー】唐の玄宗皇帝老子の註を著し玉ふ、開元御註と號す、章句を改て上下篇に分て、道を說を上篇とし、德を云を下篇として、上下に分ち玉へるは尤非なり、皆附會せるものなり、【今傳本多有ー】今の世林希逸の時に當て、世に傳る本多く文字の同異あり、或は一字の遂よりて、其一章の本意をうしなふものあり、老子の眞實の處を識ことよく〳〵難し、

【西遊】史記老子列傳曰、老子居周久之、見周之衰、迺遂去至關、關令尹喜曰、子將隱矣、强爲我著書、於是老子迺著書上下篇、言道德之意、五千餘言而去、莫知其所終、註括地志曰、散關在岐州陳倉縣東南、

【繫辭】本義曰、繫辭以其通論二經之大體凡例故、無

經之可附、而自分上下、○上繫辭十二章、下繫辭十二章、合せて二十四章、皆周易の義を述ぶ、孔子の作なり、

【河上公】列仙傳云、河上翁、漢文帝時、結草庵於河上、帝謂老子有不解、道使問之、公曰、道尊德貴、非可鑑聞、帝幸其菴問曰、普天之下莫非王臣、不能自屈無乃高乎、公即坐躍冉々在空、去地數丈曰、余上不至天、中不至人、下不至地、何臣民之有、帝乃下車稽首、公授素書一卷、遂失所在、

【奇偶】易本義曰、一者奇也、陽之數也、一者偶也、陰之數也、○一三五七九は奇の數なり、二四六八十は偶の數なり、陽は全德を得たり、故に其數一なり、陰は陽の半を得たり、故に其數一なり、一は一を半分するの義なり、倍するには非ず、

【嚴遵】前漢書、嚴遵字君平、蜀成都人、修身自保、非其服弗服、非其食弗食、卜筮於成都市、得百錢足自養、則閉肆下簾而授老子、

【元宗】廣川董迫藏書志曰、唐玄宗註老子、始改定章句、爲道德經、凡言道者、類之上卷、言德者、類之下卷、刻石潤口老子廟中、○宋朝に玄の字を諱て元とすること、文公家藏の註に見えたり、

大抵老子之書、其言皆借レ物以明レ道、或因二時世習尙一就以諭レ之、而讀者未レ得二其所一以言、故晦翁以爲、老子勞攘、西山謂、其間有二陰謀之言一、

【大抵老子】大抵老子の一書は其言皆物を借て道の妙を明にす、天地不仁章は芻狗を借て聖人の無心を明にす、上善若水の章は水を借て至善の理を明かにす、三十輻章は車輻を借て虛無の妙を明かにす、此類多し、是皆物をかりて道を明かにせり、或は又時世の人の習ひ尙とぶ事に因て其事に就て道の妙を諭す、善爲士章には戰の事に因て不爭の德をあらはし、民不畏死章には司殺の者の人を殺すことに就て刑を用の過をあらはし、夫佳兵章には兵を用る者は不祥の器なることを說て人を殺す者の天下を得ざる道をあらはせり、此類多し、此皆時の人の尙ぶ事に就て道を

諭せり、

【而說者一】しかるに老子經をよむ もの、其老子の言る所以の意を得ず、故に朱晦翁は老子は勞攘なりとそしり、眞西山は老子八十一章を說る其間に陰謀の言ありとそしる、此等は老子の意を得ざる者なり、

【習尙】人々のならはしたつとぶことを指て云、

【諭】說文曰、諭告也、告之使レ曉也、

【勞攘】性理大全朱子曰、老子極勞攘、莊子得些兒也乖、勞攘はみだれかはしく雜駁なるを云、

【陰謀】眞西山曰、老子將欲レ翕レ之、必固張レ之、將欲レ奪レ之必固與レ之、此陰謀之言也、陰謀之術、則申商韓非之所本也、

【晦翁】言行錄曰、朱熹字元晦、間自稱曰仲晦、世爲徽州人、居二紫陽山下一、紹興十八年登第、授二泉州同安簿一、後築二室建陽蘆峯之巓一、號曰二雲谷一、其草堂曰二晦菴一、自號二雲谷老人一、又號二晦翁一、晚居考亭、慶元六年三月甲子逝、享年七十一、嘉定元年諡曰文、三年贈二寶文直學士一、慶三年、贈二太師一、追二封信國公一、紹定三年、改徽國公、淳祐元年詔列二孔廟一從祀、

【西山】宋鑑云、眞德秀字景元、浦城人、四歲受書、過目成レ誦、慶元中第進士、累官至二參知政事一、世稱二西山先生一、卒諡二文忠一、其學以二朱文公一爲レ宗、從祀二孔廟一、

蓋此書、爲二道家一所レ宗、道家者流過爲二崇尙一、其言易レ至二於誕一、既不足以明二其書一、而吾儒又指以異端、幸其可非而非之、不復爲レ之參究、前後注解雖レ多、往々皆病二於此一、

【蓋此書】蓋は疑の辭なり、又發語の辭なり、此老子の書は道家の人のために宗とせらる、【道家】は道士の術をする者なり、【宗】は祖宗としてたつとぶを云、道家の人が老子を元祖に立る也、是に依て道家者流の輩がほめすごして崇尙をなす故に、其言虛誕にいたりやすし、如此なる故に既に老子の書の本意を明かにするにたらざる也、【崇尙】はあがめたつとぶなり、誕はいつはり也、韻會曰、妄爲二大言一也、廣韻曰、欺也、而して道家者流は道士の流を汲で其道をまなぶ

輩を云なり、【而吾儒―】我儒の道をまなぶ輩又老子の道を指て異端なりとし、異端は聖人の道にあらずと云て、是をそしるべきよりどころあるを幸として、老子をそしりおとして、老子の道の深き旨を參へ究めず、是に依て古今諸家の人々老子の注解をあらはすこと多と云とも、多くは皆此病にからまされて、終に老子の眞實の處を說出すものなし、【前後】は古今と云義なり、【往々】今の人の云へる多くはと云ことばに叶へり、

【道家】前漢書藝文志に、老子を道家者流部に入たり、

【異端】論語集註、范氏曰、異端非聖人之道、而別爲一端、如楊墨是也、

【可非】莊子秋水篇云、因其所非而非之、則萬物莫不非、

【往々】文選甘泉賦云、往々離宮般以相燭、註往々非一也、

獨穎濱起而明之、可謂得其近似、而文義語脈未能盡通、其間窒礙亦不少、且謂其多與佛書合、此却不然、莊子宗老子者也、其言實異於老子、故其自序以生與死與爲主、具見天下篇、所以多合於佛書、若老子所謂無爲而自化不爭而善勝、皆不畔於吾書、其所異者特矯世憤俗之辭、時有大過耳、

【獨穎濱起―】穎濱は蘇子由なり、前後の注解多き中に、只蘇子由一人起りて老子の註をあらはす、尤老子の眞實の近似を得たり、しかれども老子經の文義と語脈とにことごとく通ずる事あたはず、此故に其注解の間にふさがりさはりて通ぜざること多し、【文義】は老子經の文の義理なり、【語脈】は老子經の語のつゞきたるすぢめ〳〵を云、【不少】は多きを云、且又穎濱謂らく老子の書は多く佛書の意に合りと、是却

て然らず、佛書とは合はず、【不然】とは左はなしと云義なり、【莊子宗老子―】莊子は老子の道を宗としたる者也、其莊子の言は實に老子と異なり、故に自から道の事を序づる語に生か死かと云を以て主として義論を立たると、具に莊子の天下の篇に見えたり、莊子の論ずる所は多く佛書と合へり、釋氏の一大藏經の說はことごとく莊子より出たりと先儒も云置り、【若老子所謂―】老子の書に謂る無爲而自化と云るは、我書に云る無爲而治者其舜也與と云るとよく合り、不爭而善勝と云は、我書に云る君子無所爭と云るによく合り、皆我が書の旨に畔かず、然れども其老子の書の我が書と異なるところの者は、特に世間の非を矯すごし、世俗の道を知らざるを憤りすごすの辭に、太過のついえあるのみなり、【吾書】とは聖人の書を云、

【穎濱】三蘇文集曰、蘇轍字子由、小字同叔、洵次子、與兄軾登進士、累官翰林學士門下侍郎、致仕居許州、號穎濱遺老、卒謚文定、宋元符三年庚辰、作老子註四卷、○穎濱自題老子解後曰、予年四十有二、謫居筠州、有僧道全者、黃檗山南公之孫也、行高而心通、喜從予遊、是時予方解老子、每出一章輒以示全、全輒嘆曰、皆佛說也、予居筠五年而北歸、全不久而化去、逮今二十餘年也、凡老子解、亦時有所刊定、未有不與佛法合者、時人無可與語、

【天下篇】莊子天下篇曰、寂寞無形、變化無常、死與生與、天地並與神明往與、芒乎何之、忽乎何適、萬物畢羅、莫足以歸、寂寞無形とは本來無物なるを云ふ、變化無常とは、生は化して死となる、死は化して生となる、生死の二法一に歸せざるを云、死與生與とは、死とも生とも定むべからざるを云、天地並與とは、天地と人と同體にして並び立つを云ふ、神明往與とは、人は造化と運を共にするを云、芒乎は、茫として極むべからざるを云、何之とは動て迹なきを云、忽乎は忽然として定むべからざるを云、何適とは其適する所なきを云、萬物畢羅は萬物の理を盡すを云、莫足以歸とは、其歸著する處を知ざるべきを云、

【無爲】老子第五十七章曰、我無爲而民自化、○論語曰、子曰、無爲而治者、其舜也與、

【不爭】老子八十一章曰、聖人之道爲而不爭、

伊川曰、老氏谷神一章最佳、胡文定曰、老子五千言中、如我無事我好靜我有三寶皆至論也、朱文公亦曰、漢文帝曹參只得老子、皮膚、王導謝安何曾得老子、妙處、又曰、伯夷微似老子、又曰、晉宋人多說莊老、未足盡莊老、實處、

伊川の曰、老子谷神不死の一章、其說最佳なり、胡文定の曰、老子五千言の中、我無事と云、我好靜と云、我有三寶と云る說の如きは皆至極の論なり、朱文公も又曰、漢の文帝と曹參とは只老子の皮膚を得たり、王導謝安何ぞ曾て老子の妙處を得ん、皮膚は淺近なるを云、又朱文公の曰、伯夷少し老子に似たり、又曰、晉と宋との天下を有つ時の人、多く莊老を說、いまだ莊老の眞實の處をつくすにたらず、此一段は先儒の語を擧て、先輩も皆老子の書をよみしことを證す、

【伊川曰】朱子語類曰、莊子形容道體之語、儘有好處、老子谷神一章、最佳、此語程伊川の語たること、いまだ考へず、

宋鑑曰、程頤字正叔、少有高識、非禮不動、仁宗時、上疏欲勵世俗之論、以王道爲心、大臣屢薦、不起、哲宗初、詔授西京國子教授、力辭、見召、崇政殿說書、文彥博稱爲眞侍講、與兄顥倡道學、出其門者最多、世稱伊川先生、卒謚正公、封伊陽伯、從祀孔子廟庭、

【胡文定】是に引ところの語、出處未考、○宋鑑云、胡安國、字康侯、崇安人、紹聖中進士、擢大學士、靖康初、除太常少卿、起居舍人、皆辭、高宗時、除中書舍人、兼侍講、累官至給事中、謝良佐嘗稱其爲人、如大冬嚴雪百草悉死、而松栢獨秀、所著有春秋傳、卒謚文定、從祀孔子廟庭、

【皮膚】性理大全、朱子曰、如漢文帝曹參便是用老子之効、然又只用得老子皮膚、

【妙處】朱子語類曰、或問老子之道、曹參文帝用之皆效、何故、以王謝之力量、反做不成、朱子曰、王導謝安、又何曾得老子妙處、

【文帝】史記本紀第十曰、孝文皇帝高祖中子也、高祖十一年、立爲代王、都中都、太后薄氏子、高后八年七月高后崩、諸呂爲亂、以危劉氏、大臣共誅之、謀立代王爲天子、代王賢聖、仁孝聞於天下、故大臣因天下之心而立之、在位二十三年六月己亥崩於未央宮、廟爲太宗、○評林、盧大經曰、漢文帝以六月己亥崩、乙巳葬、總七日耳、景帝必不忍以天下儉其親、此殆文帝之願命也、雖未合中道、見亦卓矣、文帝此等見識、皆自黃老中來、

【曹參】史記世家第二十四曰、平陽侯曹參者沛人也、高祖爲沛公而初起也、參以中涓從、天下定、高帝以長子肥爲齊王、而以參爲齊相國、食邑平陽萬六百三十戶、號曰平陽侯、相齊九年、齊國安集大稱賢相、惠帝二年蕭何卒、參聞之告舍人趨治行、吾將入相、居無何、果召參、參始微時、與蕭何善、至何且死、所推賢唯參、參代何爲漢相國、舉事無所變更、一遵蕭何約束、清淨民以寧、一參爲漢相國、出入三年、卒、謚懿侯、○評林董份曰、參以戰伐封侯、一勇夫耳、此宜剛爲性、而篤好黃老術、尙清淨、所以不自盛滿、而保其身也、

【王導】晉書列傳三十五、王導字茂弘、少有風鑒識量清遠、元帝爲琅琊王、與導素相親善、導知天下已亂、遂傾心推奉、潛有興復之志、帝亦雅相器重、常謂曰、卿吾之蕭何也、

【謝安】晉書列傳四十九、謝安字安石、陳國陽夏人、桓彝王導等深器之、由是少有重名、初辟除、並以疾辭、遂捿遲東山、常往臨安山中、放情丘壑、

【晉宋】晉は世祖武皇帝、姓司馬、名炎、魏の禪りを受て天下を有つ、西晉四代五十二年、東晉十一代百四年、合百五十六年にして亡ぶ、○宋は高祖武皇帝、姓は劉氏、名は裕、漢の元王交の後胤なり、東晉の恭皇帝の禪りを受て天下を有つ、すべて八世五十九年にして亡ぶ、

然則前輩諸儒亦未嘗不與之、但以其借諭之語、皆爲指實言之、所以未免有所貶議也、此從來一宗未了款案、若研究推

尋得其初意、眞所謂千載而下、知其解者旦暮遇之、

【然則先輩】然則は上をうけたる辭なり、上にあらはすところの說を以てみれば、前輩の諸儒も嘗て老子をよむことに與せずんばあらず、然れども但老子の物を借て諭すの語を以て、道の實を指て言の語とす、是故に老子を貶義することを免ざるなり、【貶義】貶はそしりおとすなり、議は議論なり、そしり論ずるを貶議と云、【此從來一宗】この從來一宗とは、老子を云ぞ、未了とはいまだ了悟せざるなり、欵は叩なり問尋するを云ぞ、案は公案を欵て其意に參ずるを欵案と云なり、初意は本意なり、此謂は、此從來の一宗老子の道に於ていまだ欵案を了せざるゆゑに貶議す、若研き究めて其根源を推尋て老子の本意を得るときは、實に謂る千歲の後に生れて其意を解することを知るものは、旦暮に老子にあひあふものなり、一說に未了は不盡と云ふの義なり、きはめつくすべからざる也、謂ろは此從來の一宗老子の道は不盡の欵案なり、きはめつくすべからず、若研き究めて其根源を推尋て老子の本意を得るときは、實に謂る千歲の後に生て其意を解するものは、旦暮に老子にあひあふものなり、上にあらはすところの說を以てみれば、前輩の諸儒も嘗て老子をよむことに與せずんばあらず、然れども但老子の物を借て諭すの語を以て、道の實を指て言の語とす、是故に老子を貶義することを免ざるなり、【貶義】貶はそしりおとすなり、議は議論なり、そしり論ずるを貶議と云、【此從來一宗】この從來一宗とは、老子を云ぞ、未了とはいまだ了悟せざるなり、欵は叩なり問尋するを云ぞ、案は公案を欵て其意に參ずるを欵案と云なり、初意は本意なり、此謂は、此從來の一宗老子の道に於ていまだ欵案を了せざるゆゑに貶議す、若研き究めて其根源を推尋て老子の本意を得るときは、實に謂る千歲の後に生て其意を解するものは、旦暮に老子にあひあふものなり、一說に未了は不盡と云ふの義なり、きはめつくすべからざる也、謂ろは此從來の一宗老子の道は不盡の欵案なり、きはめつくすべからず、若研き究めて其根源

道可道章第一

道可道非常道名可名非常名、
無名天地之始有名萬物之母、
常無欲以觀其妙常有欲以觀
其徼此兩者同出而異名同謂
之玄玄之又玄衆妙之門、

【道可道】とは道を行て道とすると云、道を行て道とするときは、變ずることあり、易ることあり、常の道に非ず、夫天道に在て春夏秋冬を以道とするときは、春は一氣の始、夏は一氣の通、秋は一氣の成、冬は一氣の藏、若人道に在て仁義禮智を以て道とするときは、仁は温和慈愛の理、義は斷裁裁割の理、禮は恭敬撙節の理、智は分別是非の理なり、是皆變々化々するの道なり、常の道に非ず、常の道と云は何ぞや、天地未分より以來曾て變せず曾て易らず、此は是本然の妙、我儒に云る太極なり、是を常の道とす、常道に大用あり、全體なり、可道の道は大用なり、全體あつて後に大用あり、全體は第一義なり、大用は第二義なり、老子の意、人をして第一義を知しめんとす、故曰道可道非常道【名可名】とは名を立て名とするを云、名を立て名とするときは、變ずることあり、易ることあり、既に元亨利貞の名あるときは、元は以て亨とすべかなず、亨は以て利とすべからず、利は以て貞とすべからず、既に仁義禮智の名あるときは、仁は以義とすべからず、義は以て禮とすべからず、禮は以て智とすべからず、此皆變々化々する名なり、常の名にあらず、太極未分なるときは何元亨利貞の名あらん、寂然不動なるときは何仁義禮智の名あらん、常の名と云ば何ぞや、此名は是太極未分より以來曾て變せず曾て易らず、故に常の名とす、常名の名は全體なり、

可名の名は大用なり、全體は第一義なり、大用は第二義なり、老子の意、人をして第一の名を知しめんとす、故曰名可名非常名、常道と常名と其實は一なり、其道たるより常道と云、其名たるより常名と云、【無名天地之始】とは、上の句に常道と常名と雙說て、此に至て道を略して名の字に付て說出せり、文の法なり、無名は上の句に云る常の名なり、名付べからざるの妙なる故に無名と云、名付べからざる處より天地も出來る故、曰無名天地之始【有名萬物之母】とは既天地の名あるときは萬物是より生ず、故曰有名萬物之母子の母より生ずるが如し、故に母と云【常無欲以觀其妙】とは、常無は上の句に云る無名なり、混沌未分の處なり、是に於て道の妙を觀んと要す、【常有欲以觀其徼】とは常有は上の句に云る有名なり、天地の出來る處也、是に於て萬物の出生する徼を觀んと要す、【觀】は目に見るには非ず心通するを云、【欲】は要也もとむるの義なり、如此に究竟せんことを要するなり、【徼】は禮運の注に孔なりと云り、地氣の出入する處、物の出來る處を云ぞ【此兩者】とは常無と常有との二なり、無と有との名は異なれども、無

の外に有なし、有の外に無なし、二而不二なる者なり、【同出異名】とは、有あれば無あり、無あれば有あり、有無相離ざるを云、有と無と相並て出と云にはあらず【同謂之玄】とは、有と無と合一する是を玄と云なり、凡そ遡して至り極る處なきものは其色必ず玄し、天蒼々然測べからず、淵の湛々然として窺ふべからざるが如し、故に老子玄の字を以て道の極至を表せり、【玄之又玄】此一句極て其妙を云の語なり、既に玄と云て其妙極り、然れども猶玄あり、玄の又玄にして至れり極れり、以て加べからず、【衆妙之門】衆理の出入する妙門なり、○按するに此章前には常無と常有を說、次に同謂之玄と說て、又推あげて玄之又玄と說て、玄々妙々に入て心を置處なからしめて、又打かへして衆妙之門と云り、是老子の妙處古今獨歩する者なり、學者思を致ざるべけんや、

○呂吉甫註、常道者固不可道也、故曰、道乃久、沒身不殆、常名者固不可名也、故曰、自古及今其名不去、不殆不去是之謂常、道常無名則無名者道也、天地之所自而始也、故曰無名天地之始、○蘇子由註、無名者道之體而有名者道之用也、聖人體道以爲天下用矣、入於衆有而常無、將以觀其妙也、體於至無而常有、將以觀其徼也、

天下皆知章第二

天下皆知美之爲美、斯惡已、皆知善之爲善、斯不善已、故有無相生、難易相成、長短相形、高下相傾、音聲相和、前後相隨、是以聖人處無爲之事、行不言之教、萬物作焉而不辭、生而不有、爲而不恃、功成而不居、夫唯不居、是以不去、

【天下皆】とは、廣く天下の人を指て云なり、【知美之爲美】とは天下の人皆身に美德あれば其美德を美と

することを知て美にほこる、其美却て惡となるなり、鄙しき辭に昧噌の昧噌くさきと、法の法くさきは、食れぬと云は此ことわり也、【皆知善之爲善】とは天下の人身に善行あれば其善行を善とすることを知て善にほこる、其善却て不善となるなり、此兩句は其美を忘れ其善を忘るを至れりとするの義を云、佛氏の謂る心境具忘眞道人と云の意なり、【故】は上の句を受たる辭なり、【有無相生】とは有は無より生じ無は有より生ずるを云、【難易相成】とは天下の難事は必易より成、易き事は又難に由て成を云、【長短相形】とは春の日の長きは冬の日の短に由てあらはれ、冬の日の短きは春の日の長に由てあらはるゝの類を云、【高下相傾】とは高きものは下きに傾き、下きものは高きに由てそばだつ、山と谷と相よるが如きを云、【音聲相和】とは單に出るを聲と云、五聲雜なるを音と云、聲は音に依てあらはれ、音に依て起るを相和と云、【前後相隨】とは凡そ天下の事前あれば後あり、夏より春を見れば春は夏に先だつ、夏は春に後る、秋より夏を見れば夏は秋に先だつ、秋は夏に後る、是を相隨と云、是皆必然の理なり、如何ぞ離得ん、是を以て見れば美惡善不善、如何か離得ん、此六句は皆上の美惡、善不善相離ざるの意を喩ふ、【是以聖人】是を以聖人は無爲の事に處して、美なるものは其美に任、惡なるものは其惡に任せ、善なるものは其善に任、不善なる者は其不善に任す、常の事を處して其事皆無爲なり、常の教を行て其教皆不言に出たり、是聖人の無心なり、【萬物作爲而不辭】より下の四句は天地の無心を述べて聖人の無爲を證す、天地の間に萬物起り作れども天地其勞を辭せず、萬物生ずれども己が有とせず、萬物を作て恃まず、其功を成て其功にも居らず、是天地の無爲なり、聖人も又如此、【夫唯不居是以不去】とは是結語なり、上の句の功成不居と云の不居の二字を擧て結せり、夫唯天地は其功に不居、是を以其功を失はず、不去は不失を云ぞ、

不尙賢章第三

不尙賢使民不爭、不貴難得之貨使民不爲盜、不見可欲使心

不亂、是以聖人之治、虛其心、實其腹、弱其志、強其骨、常使民無知無欲、使夫知者不敢爲也、爲無爲則無不治、

第一の章に道の大源を說き出し、第二の章に身を守り事に處するの要を說、此章に至て民を治の道を說り、【不尙賢】とは國家を治る人、其賢知に矜る故に、天下の人又賢知を爭ふ、上たる人賢に矜らざれば、民爭ふことなし、【不貴難】とは得がたき貨を貴び、利を專とする故に、民も又盜をなす、上たる人、財を貴ざれは民盜をなさず、荀子之不欲、則雖賞之不盜と云る、是なり、【不見可欲】とは人の心を亂るは可欲を見るが故なり、諸苦所因貪欲爲本と云へるが如し、可欲を見されば心亂れず、【不見】は捨て顧ざる義也、聖人賢知を用ざるにはあらず矜らざるのみ、難得貨を棄るにはあらず貴び貪ざるのみ、可欲の心を斷滅するにはあらず見ざるのみ、【是以聖人】とは是を以て聖人の天下を治るは民の心を虛にして思慕すると無らしめ、物に牽れ利に趁の志を抑て弱からしめ、飽しむるに食を以てして飢寒無らしめ、其筋骨を强く壯にして常に民をして知もなく欲もなく純朴ならしむ、上如標枝民如野鹿と云る是なり、【使夫知者】とは上の句の無知無欲の知の字を擧て云り、聖人無爲純朴の敎を以て天下を治る故に、天下の人知もなく欲もなく、たとひ知あり欲ある者ありて、其知起り萌と云とも肯て知らすることなし、爲無爲とは天下を治るに無爲をするときは天下治らすと云なし、不見可欲を無爲と云、無垢子曰、虛其心者無思慕計較之念也、但以神氣相守實其腹者、腹者內也、內懷道德抱一守眞以養命也、弱其志者、柔弱低下不好剛強而安其神也、強其骨者、養其骨力不使虛耗而全其形也、

道沖章第四

道沖、而用之或不盈、淵乎似萬物之宗、挫其銳、解其紛、和其光、

同其塵、湛兮似若存、吾不知誰之子、象帝之先、

【道沖而用之一】沖は虛なり、道は虛にして量もなく又限もなし、充滿科と云る是なり、而して此道を用るときは、或はつきず、不盈とは盡ざるを云ぞ、用盡ざるなり、口義には或盈或不盈、隨時而不定也、とあり、易の乾卦の九四の爻に或躍在淵とある文法を以て云るか、九四の龍は躍べきときは躍り、をどるまじきときは躍らず、をどるべきに當て躍て淵にあり、故に或と云て躍不躍にかけたり、此章の或不盈と云は、只盡ざる義なり、道は本虛にして限量なし、是を用ゆれども或は盡ざるなり、蘇子由、呂吉甫息齋の諸賢の諸說、皆用て盡ざるの義に云り、息齋注、道沖虛而妙邈、而取之若不可得、故曰、或不盈、然其深妙愈用而愈不窮、此說、道は沖虛なれども是を用て盡ざるの義也、【淵乎似萬物之宗】とは贊美の辭なり、淵は呂吉甫註、淵分者言乎其深也、宏甫註、淵深靜遠無有涯涘何れにも道の深妙なるを云、【宗】は太宗師の宗に同じ、大に萬物の宗となるを云、似とは疑て贊美するの辭なり、實著せぬぞ、似字妙なり、【挫其銳】とは德の圭角を磨礲て渾然たるを云ぞ、化するなり、【解其紛】とは世事紛々擾々たる中に交ていとすぢの亂れたるを解如く事物の理を辨するを云、【和其光】とは德の光をかゝやかざるなり、【同其塵】とは身を潔せずして世間の塵に同するを云、【湛兮】は微茫として識度すべからざるを云、【似若存】とは有にもあらず無にもあらざるなり、此又贊著せぬ辭なり、存亡は有無なり、【吾不知誰之子】是又贊美の辭なり、此道は誰か子、何れの處より來ると云ことを我もしらず、只天帝の先より存るに似たりとなり、【象】は似たりと云義なり、【帝】は天を指ぞ、程子易傳以其主宰謂之帝とあり、造化の主たるよりして帝と云、△翼曰沖本作盅、器之虛也、李約云、帝生物之主也、群化皆處後、唯道獨居其先、象似也、道性靜、故不言定處其先而云似、△呂吉甫註、萬物負陰而抱陽、沖氣以爲和、則沖者陰陽之和也、陰爲虛、陽爲盈、道之體則沖而、其用之則或不盈、

天地不仁章第五

天地不レ仁、以二萬物一爲二芻狗一、聖人不レ仁、以二百姓一爲二芻狗一、天地之間、其猶二橐籥一乎、虛而不レ屈、動而愈出、多言數窮、不レ如レ守レ中、

【天地不仁ニ】不仁は仁あらずと云にはあらず、其仁を仁とせざるを云ぞ、仁を忘れたる也、天地は萬物の主なり、萬物を生育するは天地の至仁なれども仁とせず、萬物と相忘る、【芻狗】は草を以て狗の形やうの物を作て、物のまじなひに用ゆ、是を以て祭るときは、齋戒して用れども、既に用畢るときは再び取用ることなし、是は忘れたることの喩なり、天地の萬物を生て物と忘るに喩ふ、聖人不仁とは聖人も亦復如此、萬民を撫育するは聖人の至仁なれども仁ともせず、萬民と相忘る、百姓は民を云ぞ、書經に云る昭二百姓一の百姓は官姓あるものを云、【天地之間】橐は皮にて靈を作て風を出す器なり、籥は竹の管を其皮囊に付て風をいだす、今の俗に云る手ふいがうと云ものゝ類なり、其體虛にして是を用て盡ず、動かすときは風生ず、愈生じて愈有、天地の間の萬物を生するも亦然り橐籥の風を生するに於て何ぞ曾てよく生せんと云心をいれんや、天地の物を生ずる上に於ても其如く也、何ぞ曾て心を容れんや、故に是を以喩、【多言數窮】造化の妙は言語を以て說つくすべからず、詞は屈して天地の妙はつきず、說ときはいよ〳〵妙なり、多言はしば〳〵窮る、只不言にあるのみ、【守中】は不言を云ぞ、多言を戒にあらず、

谷神不死章第六

谷神不レ死、是謂二玄牝一、玄牝之門、是謂二天地根一、綿綿若レ存、用レ之不レ勤、

【谷神不死ニ】谷は虛なり、谷の中は空虛なるを取て谷を虛釋せり、谷神は虛神なり、所謂虛靈なり、言は人の神は虛靈なり、故に長く存して死せず、神は易に云る神也妙萬物一也の神也、是は本然の神なり、豈只人のみならんや、天地萬物皆此神を稟て心の靈とす、萬物の相は生滅すれども只此神は曾て生せず曾て滅す、若滅すべくんば乾坤も毀なん、【玄】は幽妙にして測べからざるの義、【牝】は虛にして實ならざるの義なり、玄牝の二字は一の虛の字を形容せり、天地も是より出る故に根と云、【綿々若存】綿々はやます絶さるの意なり、【若存】とは有るが如く無に似たり、古より今に至まで是を用て勞せずして長く存す、【不勤】とは勤勞せざるの義也、心を用て勤ざるを云、○翼曰、谷喩也、以二其虛而能受一、受而不レ有、微妙莫測、故曰二谷神一、牝能生レ物、猶二前章所謂母一也、謂之玄牝、亦幽深不測之意、

天長地久章第七

天長地久、天地所レ以能長且久一者、以二其不一自生一、故能長生、是以聖人後二其身一而身先、外二其身一而身存、非レ以二無レ私邪一、故能成二其私一、

【天長地久ニ】天は長く地は久し、天地のよく長しで又久しき所以のものは、其自から物を生とせずして無心無爲なるが故によく長生なり、【長生】は長久と云に同じ、【不自生】とは自ら物を生ずとせざる也、物を生ずるに心なきを云、【是以聖人】聖人の世に處する、人に勝んとするの心なし、其身を以て敢て人に先たゝず常に人に後にす、故に人推貴て人の上に置、是を以てよく人に先たつ、其身を外にして却て身存す、【外】にすとは貴び愛せざるを云、【非以無私】聖人私なきを以てする故によく其私を成せり、私の字聖人の一身を全するにかけて見るべし、公私の私にはあらず、公私の私をなすと云は〻心を容ことなしと云ことを得じ、豈聖人の所爲ならんや凡そ常の人は身を以て人に先たゝんとする故に、却て人の後となる、身を貴び愛すること厚き故に、却て身をあやまる、是は私をせんとする故に、却て成らざるもの也、

○呂吉甫註、長短形也、久近時也、天以時行者也、嫌不足于形、故以長言之、地以形運者也、嫌不足于時、故以久言之、○李息齋註、天施地生、施生之道、在天地未嘗一日捨由其施物不已、其生物不測、天地未嘗愛其施、地未嘗息其生、是之謂不自生由其不自生、萬物恃之以生、故能長生、聖人亦然、知此心不變不壞、浩然與天地同流、故于此身無可愛者、故天下之人莫我若也、是謂後其身而身先、外其身而身存、人所以不能成物者、以其自私也、我無自私、故能成人之私、物得其私、我得其得、是謂兩得、

上善若水章第八

上善若水、水善利萬物而不爭、處衆人所惡、故幾於道矣、居善地、心善淵、與善仁、言善信、政善治、事善能、動善時、夫惟不爭、故無尤矣、

此章は水を以て有道の人の心を容ることなきに喩ふ、【上善若水】上善は至極の善なり、上善の人は水の如し、水は能萬物を利して物と爭はず、流に順て逆らず、上善の人も亦如此、よく萬民を利して人と爭はず逆はず、水は卑に就、下に居、上善の人も亦里に居、下に處す、衆人の惡む處は卑下なり、上善の人は卑下に處す、是を以てみれば水は有道の人に近し、【居善地】とは上善の人は往處にして其居を安んず、水の地上に在て居を撰ざるが如し、【心善淵】とは上善の人は心淵の如にして測べからず、所謂微妙玄通深而不可測なり、【與善仁】とは上善の人は天下と仁を與にすること水の萬物をうるほして親疎なきがごとくなり、【言善信】とは上善の人は言の信あること水の物に當て流のまゝにするが如し、【政善治】とは上善の人は其無事なる處を行水の無事なる處を行が如し、【事善能】とは上善の人の事を能するは水の周流して滯る事なきが如し、【動善時】とは上善の人の動て時に中するは、水の流動して東西南北時に中て流行するが如し、【夫唯不爭】是は結句なり、水に衆善あれども、畢竟爭ざる故に尤なし、上善の人も爭ざるを以て本とす、

持而盈之章第九

持而盈之不如其已、揣而銳之不可長保、金玉滿堂莫之能守、富貴而驕自遺其咎、功成名遂身退天之道、

【持而盈之】器に物をもりて十分に盈るを持することは難し、盈るを持んよりは持ざるには如ず、已とは持ことを已るを云、【揣而銳之】とは器を揣て極て鋭なるに至れば折ざるはなし、鋭からざるが長く保べきにはしかず、此四句は喩なり、下の句を云興せり、詩の興の體に似たり、又此句は盈而持之不如其已、銳而揣之不可長保、と云べきを字を倒に置けり、是錯綜の文法なり、【金玉滿堂】金玉堂にみつるもよく久しく守ることなし、やがて費るなり、【富貴而驕】富貴にして驕るときは其咎を遺す、久く保べからず、【功成名遂】其事の功を成其名を遂るときは、天の道に任て功成名遂て身退にはしかず、○口義曰、欲全其功保其名者、必知早退乃爲天道、早く退るを天の道とすと云るは經の旨に合はす、經の意は退べきに當て退を云り、早く退べしと云にはあらず、其功を全し其名を保ん爲に、身を全せん爲に、早く退るものは、人欲の致す所なり、豈天心ならんや、春夏秋冬の代謝、日月晝夜の去來、是天道なり、皆退べきに當て退のみ、早く退にはあらず、蘇子由註、日中則移、月滿則虧、四時之運成功者去、天地尚然、而況于人乎、此說尤經の旨に合へり、○翼曰、持而盈之謂盈而持之也、揣而銳之謂銳而揣之也、古文多倒語耳、懼其溢而左右以枝之曰持、懼其折而節量以治之曰揣、○王元澤註、寒暑相推、物極則返、陰陽代運、天道固然、而世之愚者、一遭其變、一犯其名、則終身有之、認以爲已、曾不知造化之密移、吉凶之倚伏、故終至于坐蒙憂患、無以自存、唯至人不然、○李息齋

曰、金玉滿堂、莫知其止、富貴而驕、自遺其咎、四時之運、功成者退、天道如此、況于人乎、

載營魄章第十

載營魄抱一能無離乎專氣致柔能如嬰兒乎滌除玄覽能無疵乎愛民治國能無爲乎天門開闔能無雌乎明白四達能無知乎生之畜之生而不有爲而不恃長而不宰是謂玄德

【載營魄一】營は魂なり神なり心の神靈を云ぞ、是は陽の靈なり、心に備を神と云、一身に發用して、手に在ては取、足に在ては步み、耳に在ては聞、目に在ては見るの靈を魂と云、魄は精なり氣なり、氣は血氣なり、精は陰の靈、體の精を云、畢竟魂は神明の官、魄は耳目の官を云ぞ、載營魄の三字は謎語の如し、謂は營載魄ときは神明の官を以て耳目の官を役す、是聖人の所爲なり、形を以て心の役とするなり、魄載營ときは耳目の官を以て神明の官を役す、是衆人の所爲なり、心を以て形の役とするもの也、載營魄と云て兩方へかけたるは謎語の辭の如し、魄と營とは合て云ときは一なり、離て云ときは二つなり、能合せて一ならんや、一なることなるまじきや、人の自參し自悟せんことを欲す、故曰、抱一能無離乎、乎の字意重し、德清曰、乎字責問之辭【專氣一】專氣とは純氣を守を云、致柔とは柔順を致し極を云、氣を專に守り柔順を致してよく嬰兒の純全なるが如なるべきか、成まじき乎【滌除玄覽】心のけがれを滌き除て玄妙の理を觀覽して又不垢不淨なるときは疵なし、如此なるべきか成まじき乎、無疵とは分別せざるを云、【愛民治國】民を愛し國を治むるに無爲を以てせんか以てすまじきか、【天門開闔】天門は天地の間、自然の理、造化の出入する機を云、陰は闔ち陽は開て雌雄交感するは造化自然の機の致す處なり、雌雄交感の理を知

て交感の心を止るは抱一也、如此なるべきか成まじきか、焦氏筆乘ニ曰、天門開闔能無雌乎、所謂雄守雌也、謂は人の耳目動靜は皆天理の出入するの門なり、或開ち或は闔て能雄を知て雌を守ること無らんか、是所謂知其雄守其雌と云の義なり、此說尤明白なるものなり、【明白四達】とは明白は聰明を云ぞ、四達とは四方に達するなり、通せずと云處なき也、聰明四方に達して能守るに無知を以てせん乎、以てすまじき乎、以上の數句皆人に責詰て道を敎るの辭なり、【生之】とは萬物を生する也、【畜之】とは萬物を畜ふなり、【生而不有】とは萬物を生じて己れが有とせざるなり、【爲而不恃】とは其功を成て賴まざるなり、【長而不宰】とは萬物に長上たれども主宰するの心なき也、是五句は造化の無心なるを云、【是謂玄德】是句は結語なり、此章の大意は無爲にして爲、自然にして然ることを云へり、

三十輻章第十一

三十輻共一轂當其無有車之用埏埴以爲器當其無有器之用鑿戶牖以爲室當其無有室之用故有之以爲利無之以爲用

【三十輻】は車輪の中に立並たる小木なり【轂】は車輪の心なり、軸をさし入る處を云ぞ、三十輻の木は只一の轂にあつまる【共】にすとは共にあつまるを云、轂の中虛なるが故に輪轉して車をやる、若轂の中虛ならずして塞るときは轉るべからず、無は虛なるを云ぞ【埴】は俗に云るねば土なり、埴を埏して器を作る、器の中虛なるが故に器の用を成す、若器の內に土を盈るときは器の用成べからず、室を作て戶を開き、牖を穿て室の用を成す、若四方八面皆壁をぬりふさぎたらば室の用成べからず、是を以て見れば、有の利をなすは無の用を成す故なり、

○翼曰、轂古木反、輪所輳也、考工記曰、轂也者所以

爲利觜也、埏始然反、埴市力反、考工記曰、埏和、埴黏也、和水土燒以爲陶也、半門曰戶、牖窓也、○吳臨川曰、轅輪之輻也、轂輪之心也、無室廬之處也、埏和土也、埴土之黏膩者爲器、謂以水和黏膩之土爲陶器也、

五色章第十二

五色令人目盲、五音令人耳聾、五味令人口爽、馳騁田獵令人心發狂、難得之貨令人行妨、是以聖人爲腹不爲目、故去彼取此、

【五色令人】目はよく色を見て美惡を辨ずるを以て目とす、五色の美を見て目を惑して正色を辨せず、是を目盲と云、朱子語類曰、青木色而主東方、赤火色而主南方、白金色而主西方、黑水色而主北方、黄土色而主中央、五方之正色也、○鄭玄周禮註曰、五采施曰五色、【五音令人】耳はよく音を聞て邪正を知て耳とす、五音の盛なるを聞て耳を惑して正音を分たず、是を耳聾と云、宮商角徵羽を五音と云、宮は土の聲、商は金の聲、角は木の聲、徵は火の聲、羽は水の聲、五行の正聲なり、詳に禮記の樂記の註に見えたり、【五味令人】口はよく食て五味を辨ずるを以て口とす、五味の旨を食て口を惑して正味を知ず、是を口爽と云、鹹酸甘苦辛を五味と云、鹹は水の味、酸は木の味、甘は土の味、苦は火の味、辛は金の味なり、五行の正味にて鹹は腎、酸は肝、甘は脾、苦は心、辛は肺、五臟の正味なり【馳騁田獵令人】馬を馳車を騁て禽を田、獸を獵ることを好み遊樂するときは、心是がために狂騖して清淨の德をみだす【難得貨令】貨は國用を成有無を通ず、君子の忽にせざる物也、然れども難得貨を貴ときは淸廉の操を害し德行を妨く【是以聖人】此五は皆外物なり、而して內德を亂る故に、聖人は內を爲て外をなさず、故に彼外物を去て此內德を取る、【腹】は內を云、【彼】は外物を云、【此】は內德を云、

寵辱章第十三

寵辱若驚、貴大患若身、何謂寵辱、寵爲下、得之若驚、失之若驚、何謂貴大患若身、吾所以有大患者爲吾有身、及吾無身、吾有何患、故貴以身爲天下、則可寄於天下、愛以身爲天下、乃可以託於天下、

【寵辱若驚】寵は榮なり、辱ははづかしめおちぶるゝなり、寵辱は外物なり、驚にたらず、世の人しかも驚く、【貴大患若】身は我大患なり、世の人大患の身を貴ぶ、先此兩句を提起して下の文に其義を述たり、貴身若大患なりと云べきを貴大患若身なりと云る、是倒語の文法なり、【何謂寵辱】とは問辭なり、【辱爲下】とは答る辭なり、寵爲上、辱爲下云べきを辱爲下と一句云て寵爲上の意をふくめり、文の法なり、得之若驚、寵を上とし辱を下とする故に、寵を得ては喜て心を驚、寵を失ては悲て心を驚かす、【何謂貴大】是は問かけて論ずるの辭なり、【吾所以有】我に大なる患あるは我身あるがためなり、身は患の集る處なり、我身なくんば何の患が有ん、【故貴以身】吾身の貴と云ことわりを知て其心を以て天下を治るときは、天下に身を寄たるばかりにて身を以て天下に易ること有べからざるなり、身の貴く愛すべきことを知ときは、天下を有つともあつかるまじき也、況や其餘をや、○翼曰、貴大患若身、當云貴身若大患、倒而言之、古語類如此、○焦氏筆乘曰、不輕以身爲天下者、天下反可寄、惜以身爲天下者、天下反可託、

視之不見章第十四

視之不見、名曰夷、聽之不聞、名曰希、搏之不得、名曰微、此三者不可致詰、故混而爲一、其上不皦、其下不昧、繩繩兮不可名、復歸於無物、是謂無狀之狀、無象之象、是謂惚恍、迎之不見其首、隨之不見其後、執古之道、以御今之有、能知古始、是謂道紀、

【視之不見】とは色相を以て求べからざるなり、【聽之不聞】とは言語を以て知べからざるを云なり、【搏之不得】とは形器に就て得べからざるなり、是は道の微妙不測なるを形容せるなり、無聲無臭と云る如し、三の差別あるにはあらず、【此三者】夷希微の三の者は其妙を致め詰べからず、謂ろは言語道斷なるものなり、故に混じて一とす、一は道はり、【其上不皦】とは仰で見れども明なるにもあらず、【其下不昧】とは俯でうかゞへども昧にもあらず、【繩々兮不可名】とは此道大虛に充滿して名付べき樣もなし、繩々は多而連たるを云、放之則彌六合なり、【復歸於無物】とは畢竟無物に歸するぞ卷之則退藏密、なり、目に見手に取の形を狀と云、目には見れども手に取れぬ形を象と云、無狀之狀、無象之象はよく無にして有なるを云ぞ、【是謂】の是の字無狀の狀無象の象を指て云ふなり、【惚恍】は洪武正韻曰、微妙不測貌、【迎之不見其首】とは前より見れども其首もなし、【隨之不見其後】とは後より見れども尾もなし、始もなく終もなきなり、此等の句は皆道の妙を形容せる辭なり、【執古之道】此道は古よりの道なり、古の道を取て今の一切の有爲を治るときは、能古の道を知べし、器の外に道なし、道の外に器なし、是を道紀と云、【道紀】は道を統くゝるなり、

古之善爲士章第十五

古之善爲士者、微妙玄通、深不可識、夫惟不可識、故強爲之容、豫兮若冬涉川、猶兮若畏四鄰、儼若客、渙若氷將釋、敦兮其若樸、曠兮其若谷、渾兮其若濁、孰能濁以靜之徐清、孰能安以久之徐生、保此道者、不欲盈、夫惟不盈、是以能敝不新成、

此章は、有德の人の、深妙にして測知べからざるを形容す、【古之善爲士】士は有道の人を云、古の有道の人は、微妙玄に通ずる故に、其德容の形にあらはるゝ處、深邃にして識知なし、粗つきて微に入、微より妙、妙より玄に至るときは通せずと云ことなし、【夫唯】の二字は、上の句を受たる詞なり、【豫兮】はためらふなり、有道の人の恭しく放ならぬは、たとへば、冬川の寒を涉る心地の如し、【猶兮】はうらをもひなり、心に遠慮あるを云、有道の人、身を敬しみ畏ること、たとへば、人の四鄰の聞を憚るが如し、【儼若客】儼はをごそかなるなり、客は賓客なり、有道の人の心のおごそかなること、たとへば、賓客となつて他人の席に臨が如し、【渙若】はとくるとよめり、ゆるやかなるなり、有道の人のゆるやかなることは、氷の日に照されて釋んとする如し、【敦兮】は篤實なるを【樸】はすなをなり、質樸なるを云、有道の人は、篤實にして樸の如し、【曠兮】は廣虛なるなり、有道の人の心の、虛廣なること谷の如し、【渾兮】はにごるなり、有道の人は世と共にして、渾然として濁るが如し、所謂和光同塵なり、【濁以靜之以徐清】とはにごれる中にして、靜にしてやうやくに清し、たとへば、水のにごれるを、靜にして徐に清が如し、【安以久之徐生】とは、安は靜なるを云ふ、生は動を云、靜なること久して徐に生じて動く、【孰能】とは、たれか能如此ならんやと也、此二句は濁らず清からず、動にもあらず靜にもあらざるを云、【保此道者不欲盈】とは、此道を保ものは盈ざるなり、凡そ限あるものは盈なり、此道は限なし、故に盈ず、【夫唯不盈】とは、上の句を受て結する辭なり、【是以敝不新】とは、此道は古よりの敝き道なり、

今更新なる道にあらず、成とは如此にして道大成するなり、○翼曰、豫猶皆獸名、豫象屬也、壚石謂犬爲猶、象能前知、其行遲疑、犬先人行尋又回轉、故遲回不果、謂之猶豫、矜莊貌、渙散也、木未斲曰樸、曠空也、冬涉川常難之也、畏四鄰、雖自持也、儼若客未敢僭也、氷將釋如恐陷也、若樸質而無文章也、若谷虛而無所藏也、若濁晦而不分明也、皆所謂强爲之容也、○王元澤註、士者事道之名、儆而妙、玄而通、有此道而退藏于密、故無迹可見、

致虛極章第十六

致虛極守靜篤萬物並作吾以觀其復夫物芸芸各歸其根歸根曰靜靜曰復命復命曰常知常曰明不知常妄作凶知常容容乃公公乃王王乃天天乃道道乃久沒身不殆

【致虛極―】致は致知の致と同じ、道を學て虛を致して、其極に至るときは靜を守ること篤し、能虛にして能靜なれば、萬物の並作に於て其復を觀る、【復】は歸根復命の時なり、蘇子由、呂吉甫、焦弱侯の說は、致虛極と守靜篤と、二句に見る、口義には、虛而至於極則其守靜也篤と、一句に釋せり、今按するに二句に見て意味深し、【夫物芸々】萬物芸々と多けれども、其終り各其根に歸る、根に歸するを靜と云、此は是本然の理、是に於て復す、所謂萬物未生時なり、復命に至るときは常久にして易らず、故に常と云、常久不易の妙を知るときは、萬物の理目前に粲然たり、故に明と云、靜と復命と、明と常とは一なり、四等あるにはあらず、反復して其妙を云り、常久不易の妙を知ざれば、其心暗昧にして妄作す、凶なり、【知常容】常を知るときは其量太虛に同じ、何物をか容ざらん、よく物を受容るときは公にして私なし、公にして私なきは天下に王たるべし、王道は乃天道なり、天は自然也、自然なるときは長久なり、長久なるは身を沒るまで殆からず、○翼曰、作動也、如日出而作之作、常道之常、以其爲萬象主、故曰王、○蘇子由註、致虛不極則有未亡也、守靜不篤則動未亡也、虛極靜篤、以觀萬物之變、然後不爲變之所亂、知凡作之未有不復也、

太上章第十七

太上下知有之其次親之譽之其次畏之其次侮之故信不足焉有不信猶兮其貴言功成事遂百姓皆曰我自然

【太上】は上古なり、下は天下なり【之】の字君を指、上古大道の君は無爲にして天下化す、天下只君あると知るのみ、日月の天にあるを知ほどのことなり、何の分別もなし、【其次親之】其次の世に及で、大道すたれて始て仁義を以て天下を治、天下其仁に歸して、君を親しみ、其義に懷て君を譽む、【其次畏之】又其次に及で、仁義すたれて、刑法を以て政を成て、善を勸め惡を懲す、故に天下君を畏る、【其次侮之】又其次の世に及で、權謀詐術を以て天下を制す、天下之人、君を侮る、【故信不足】世道いよ〳〵衰て、上の信足ざる故に下に不信あり、信不足は上の信たらざるなり、有不信は、下に不信出來るなり、【猶兮】は、安然の義なり、上の人安然として、ます〳〵言を貴て、號令敎諭を以て國を治めんとす、如何ぞ治らん、【功成事遂】上古の時は、上下ともに功成事遂て、何の心もなく、百姓皆我が自然にして然と云のみ、

大道廢章第十八

大道廢有仁義智慧出有大僞六親不和有孝慈國家昏亂有忠臣

其道自然に行れて、人物各其處を得を大道と云、【仁】は慈也、【義】は宜也、大道行るゝときは、仁義自ら其

中にあり、大道すたれて後に、仁義の敎出來る、たとへば、智慧日出て詐僞の生ずるが如し、六親不和にして、孝子慈孫あるが如し、國家昏亂して、忠信の臣あるが如し、此三句は譬喩なり、上の一句の心を發明せり、○口義には、この三句をば譬喩なりと云り、蘇子由、王介甫、呂吉甫、李息齋、德淸の諸說は、譬喩にはあらず、世道のます〳〵降ることを云と釋せり、今按ずるに、譬喩と云るは鑿せるに似たり、○翼曰、六親、王輔嗣云、父子兄弟夫婦也、孝慈孝子慈孫也、○一說、六親、一外祖父母、二父母、三姉妹、四妻兄弟之子、五從母之子、六女之子○一說、六親、父母兄弟妻子、○善見毗婆娑律曰、六親、一者伯二叔三兄四弟五兒六孫母、六親者一舅二姨三兄四弟五兒六孫○蘇子由註、大道之隆也、仁義行于其中而民不知、大道廢而後仁義見矣、世不知道之足以澹足萬物也、而以智慧加之、于是民始以僞報之矣、六親方和、孰非孝慈、國家方治、孰非忠臣、堯非不孝也、而獨稱舜無瞽叟也、伊尹周公非不忠也、而獨稱龍逢比干無桀紂也、涸澤之魚、相呴以沫、相濡以濕、不如相忘于江湖、

絕聖棄智章第十九

絕聖棄智、民利百倍、絕仁棄義、民復孝慈、絕巧棄利、盜賊無有、此三者以爲文不足、故令有所屬見素抱樸少私寡欲、

【絕聖―】聖智の名出て後、天下の害生ず、聖人をたち、智を棄て、天下自から利せんにはしかず、【絕仁―】仁義の名出て後、孝慈あるを賞し、不慈不孝を罰す、天下ます〳〵薄し、仁義を絕棄て、道と相忘て、孝慈に復んにはしかず【絕巧棄利】たくみを出し、利を計る故に、盜賊出來る、巧を絕ち利をすつるときは、盜賊無らん【巧】は事に便なるを云、利は利用なり、聖智、仁義、巧利の三者は、大道より見れば皆末なり、外をかざるの文なり、用て天下を治るにたらず【不足】とは天下を治るに足ざるなり【故令有】故に天下の人をして、屬る處あつて、素を見、樸を抱、私少く、

欲すくなからしめて無爲なるには如ず、素樸は天性のまゝなるを云、屬は人心の外にはするをあつめて、素樸に歸らしむるを云なり、此は是一時世を憤る語なり、

絕學無憂章第二十

絕學無憂、唯之與阿相去幾何、善之與惡相去何若、人之所畏不可不畏、荒兮其未央哉、衆人熙熙如享大牢、如春登臺、我獨泊兮其未兆、若嬰兒之未孩、乘乘兮若無所歸、衆人皆有餘、我獨若遺、我愚人之心也哉沌沌兮、俗人昭昭、我獨若昏、俗人察察、我獨悶悶、澹兮其若海、飂兮似無所止、衆人皆有以、我獨頑且鄙、我獨異於人、而貴求食於母、

【絕學無憂】謂ろは、世人の學は、皆外を務て、性を飛揚し神を惱亂す、人世識字憂患初なり、故に學を絕ときは心定る、心定るときは神安し、神心安定なるときはうれひなし、故に絕學無憂と云へり、禪家に謂る、絕學無爲閑道人と云るも此意なり【唯之與阿―】唯は答のつゝしむ也、阿は答の侮るなり、唯と云阿と云、其相去こといくそばくぞや、人の學をして、善の惡に勝ると云は、唯を阿に勝と云が如し、共に道を知人にあらず、五十歩を以て百歩を笑ふが如し、【人之所畏―】古の有道の人は、善惡皆爲に足ずと云とも、又、人の畏る處をば畏ずんばあらず、若、人の畏る處を畏れずんば、荒として其殃きはまり有べからず、未央とは、央まりあるべからざる也、【衆人熙熙―】衆人は世味をたのしむこと、大牢の滋味を享が如く、春の

日、臺にのぼるが如し、【我獨ㇾ】泊は無爲なり、未兆とは、一念もおこらざる也、【乘々】は嬰兒のむぐめくを云也、【無所歸】とは心の止る處なきなり、迹を著ざるなり、【衆人皆ㇾ有】餘は無用なり、衆人は皆有餘のことをするなり、我獨有餘のことをば、遺れたるが如し、【我愚人ㇾ】我豈愚なる人にして、如此に沌々と無知ならんや、只其知を照らさざるのみ、【俗人昭々ㇾ】俗人は昭々と智をかゞやかす、我獨昏々として昧が如し、智をてらさず、俗人は察々として分別す、我獨悶々として分別なし、【澹兮其ㇾ】我心、澹として空虛なること、舟に乘て海に浮て、飄然として風に任せて、止る處なきが如し、海澗任ㇾ魚躍、天高信ㇾ鳥飛の意なり、【衆人皆ㇾ】衆人は皆有爲をなす、有以は有爲なるなり、我獨有爲を爲ざる故に、頑にして且つ鄙しと見ゆ、豈眞實に頑鄙ならんや、我獨、衆人の所爲に異なる故に頑鄙なりと云、我は道を味ふことを貴なり、母は道を云ぞ、【食於母】とは道に味を云、〇口義には、衆人熙々如ㇾ享ㇾ大牢、如ㇾ春登ㇾ臺を、世味を樂しむことに云へり、德清の說には、衆人道を忘れ、物を追ふ心を、俗學に馳て厭ことなく、熙々として大牢を享るが如く、春臺に登るが如く樂と釋せり、尤明白なり、凡そ此一章は、句々皆、老子の學と世俗の學と、相反することを云り、內外本末、其學ぶ處の、心を用の異なるを論せる也、學者宜しく眼を著べし　〇德清義解曰、世俗以ㇾ增ㇾ長知見ㇾ日益ㇾ智巧ㇾ馳騁物欲ㇾ爲ㇾ學、聖人以ㇾ泯絕知見ㇾ忘情去ㇾ智遠ㇾ物雖ㇾ欲ㇾ爲ㇾ學耳、衆人忘ㇾ道、逐ㇾ物、汨ㇾ々於物欲之間ㇾ酣嗜無厭、熙々然、如ㇾ享ㇾ大牢之味ㇾ以爲ㇾ至美ㇾ且榮觀不ㇾ休、如ㇾ登ㇾ春臺ㇾ望以爲ㇾ至樂ㇾ、

孔德之容章第二十一

孔德之容、唯道是從、道之爲物、唯恍唯惚、惚兮恍、其中有象、恍兮惚、其中有物、窈兮冥、其中有精、其精甚眞、其中有信、自古及今、其名不去、以閱衆甫、吾何以知衆甫之然哉、以此、

【孔德之容】孔德は盛德なり、容は德容なり、道を知の人は只道に是從ふ、故に、其外にあらはるゝに、自から盛德の容あるなり、【道之爲物唯ㇾ】道の物たる何ものぞと云ふに、唯恍たり、唯惚たり、恍惚は見るべからず、聞べからざるなり、【惚兮恍其中有象】恍たり惚たる其中に、而も象あり、是虛にして實、眞空にして實有なり、【恍兮惚其中有物】恍たり惚たる其中に、而も物あり、是又虛にして實、眞空にして實有なり、【窈兮冥兮其中有精】窈冥はみるべからず聞べからざる也、窈たり冥たり、其中に而も精あり、是又虛にして實、眞空にして實有なり、此三句は一意なり、反復して道の物たることを云へり、象と云物と云、精と云る三字別意なし、皆實有なることを云、老子億ㇾ曰、恍惚窈冥、皆幽深微渺、不可爲象之意、【其精甚眞其中有信】其精なるもの甚眞なり、見るべからざるの中に又信あり、此兩句は、道は眞實の物なり、虛とすべからざることを云り、【自古至今ㇾ】古より今に至まで、道の名、天下に於て一日も去ず、以て萬善を統ぶ、【衆甫】は萬善なり、【閱】は統るなり、【吾何以ㇾ】吾何を以て、衆甫をすぶることの然るを知んや、此道を以てすぶるなり、以此は道を以てと云義なり、翼曰、恍惚窈冥、皆不可見之意、鄧錡云、恍惚便是物、非恍惚之中更別有物、經曰、無狀之狀、無物之象、是謂恍惚、是也、窈冥便是精、非窈冥之中更別有精、張平叔云、窈冥莫測、是眞精是也、王輔嗣曰、信驗也、閱自門出者、一々而數之、言道如門、萬物皆自此往也、漢書此如傳舍所閱多矣、陸機賦、川閱水而成川、世閱人而爲世、其用字之義、並同一訓、經歷亦同此義、甫美也、又始也、

曲則全章第二十二

曲則全、枉則直、窪則盈、弊則新、少則得、多則惑、是以聖人抱ㇾ一爲ㇾ天下式、不ㇾ自見故明、不ㇾ自是故彰、不ㇾ自伐故有ㇾ功、不ㇾ自矜

故長、夫唯不爭、故天下莫能與之爭、古之所謂曲則全者、豈虛言哉、誠全而歸之、

【曲則全】曲の字義、口義にはまがるとよめり、宏甫の註に、五臟六腑四肢百骸至曲也、而人賴以全と云り、此說尤親切なるものなり、此說に從ときは、曲の字ひとつ〳〵とよむべし、中庸の曲、則誠の曲と同じ、たとへば、人の手足耳目を曲にすれば、全き人となり、三百六十日を曲すれば、全き年となるが如し、全を以て、全をするときは、全からず、曲すれば全し、【枉則直】直を以て直をすれば直からず、枉るを以て直をすれば直し、まがりかねにて直を取の類なり、【窪則盈】みつるを以て盈ることをすれば盈す、窪なるときは、盈つ、くぼみに水のたまる類なり、【弊則新】新なるを以て新なるをするときは新ならず、弊るときは新なり、故き歲去て、新なる年來の類、【少則得】とは少きものはよく物を得ぞ、讓受益と云に同じ、【多則惑】とは多くつむものは却て失ぞ、惑は失の義なり、滿受損と云に同じ、是は、少則多と云一句を、引のべて二句に云り、以上の六句は、下の句の意を發明す、【是以聖人—】一を抱て天下の法となる、一は虛なり、無心也、式は法なり、聖人は、自から明なりとせざる故によく明なり、自ら明にするものは明ならず、自ら是とせざる故に是彰る、是を是とするものは是を失ふ、自ら伐らざる故によく功あり、功にほこるを伐と云、自ら賢に矜らざる故に長久なり、賢にほこるを矜と云、宏甫曰、不自長者人必以爲長、謂は、自ら賢に矜らず長とせざるものは人以て長とす、長は長上の義なり、此說よく通ず、【夫唯不爭—】聖人は人と爭はず、故天下よく聖人と爭ふものなし、古の所謂曲則全と云もの、豈虛言ならんや、聖人の爭はずして爭ものなきは、曲すれば全を得と同じ理也、上の六句の中の一句を擧てことわる、天地の我に與る此道を全して闕ることなし、我正に全して歸すべきのみ○宏甫註、夫人無不欲全也、而失其所以全之道、往々以全求全、而卒不能全者、此天下之通弊也、不知、五臟六腑四肢百骸至曲也、而人賴以全、若不曲則不能全矣、此說曲則全の一句よく通ず、○書經大禹謨孔註曰、自賢曰矜、自功曰伐、疏曰、自謂己賢曰矜、自謂己功曰

曰伐、

希言自然章第二十三

希言自然、故飄風不終朝、驟雨不終日、孰爲此者天地、天地尙不能久、而況於人乎、故從事於道者、道者同於道、德者同於德、失者同於失、同於道者道亦樂得之、同於德者德亦樂得之、同於失者失亦樂得之、信不足有不信、

口義に【希】は少なり、自然の二字、其言多からずして、天地の理是に過ざると云へり、此說略通と云ともは親切ならず、品粹曰希言乃無言義也、不曰無而曰希是聖人妙語也、此說尤分明なり、按するに、論語に鼓瑟希と云の希の字と同じ、瑟を鼓し止て、聲のたへたるを希と云、是を以て考れば、希言は無言なりと云るは、尤親切著明なり、【希言自然】とは自然の道は無言なり言べからず說べからず、飄風驟雨は皆天地自然の成處なれども、風は朝を終ずして吹止、雨は日を終ずして降止む、天地のなす處すら久きことなし、況や人に於てをや、得喪窮達豈久しからんや、只浮る雲の如し、故に道を事とするものは、得喪窮達只自然の理に任す、【道者同於道】とは、道の字行の字の義なり、行ふべきときは、行に同してたがはず、【德者同於德】とは、德の字得の字の義なり、得るときは得に同してたがはず、【失者同於失】とは、失ふべきときは失に同してたがはず、【同於道者—】とは、行なふに同うするものは、行て又行ことを得ることをたのしむなり、【同於德者—】とは、得るに同うするものは、得てもたのしむなり、【同於失者—】失ふに同うするものは失ふても又失ふことを得ることをたのしむなり、同するとは、同うしてたがはぬを云、如此なるときは、行ても得ても失ふても皆たのしむなり、得喪窮達

の外に超然たるもの也、【信不足有一】とは、此道を信ずることたらずんば信せざることあらんと也、よく信たらば信ずべき也、○翼曰、飄風疾風也、驟雨暴雨也、自旦及晡爲終朝、自早及莫爲終日、詩蝃蝀篇、崇朝其雨、朱傳曰、崇終也、從旦至食時爲終朝、老子德曰、從事於道者、以道爲事、即抱一者也、

跂者不立章第二十四

跂者不立、跨者不行、自見者不明、自是者不彰、自伐者無功、自矜者不長、其在道也曰餘食贅行、物或惡之、故有道者不處也、

足のさきを地に付て、踵を擧るを跂と云、兩の足をふみはだかるを跨と云、跂つ者は久しく立べからず、跨るものはありくべからず、此二句は譬論なり、下の句を發明せり、自から德を明なりとするものは明ならず、自から是を是とするものは名彰れず、自ら功に伐るものは功を失ふ、自から賢智に矜るものは長久ならず、李息齋註、自矜者不長、由其有自心也、此說は、自ら賢に矜るものは、人の長上たらずとなり、如此なるものは、跂者のたとす、跨者の行ざるが如し、道に於ては、食の餘り形の贅の如し、物の惡む處なり、故に有道の者處らず○翼曰、薛云、擧踵曰跂、張足曰跨、贅疣贅也、行當作形、古字通、

有物混成章第二十五

有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立而不改、周行而不殆、可以爲天下母、吾不知其名、字之曰道、强爲之名曰大、大曰逝、逝曰遠、遠曰反、故道大、天大、地大、王亦大、域中有四大、而王處一焉、

人法地、地法天、天法道、道法自然、

【有物混成】は混沌未分を云、天地いまだあらはれず、萬物未生の時なり、此物、形にもあらず、象にもあらず、新にもあらず、舊にもあらず、有にもあらず、無にもあらず、去ることもなく、來る事もなし、故に混成と云、所謂無極而太極なり、天地の先より生ず、故に先天地生と云、【寂兮寥兮】とは見べからず、聞べからざるなり、所謂無聲無臭なり、【獨立而一】此物は、始もなく終もなし、萬物の相は皆變ずれども、此一物は曾て變ぜず、曾て易らず、獨立して常久なり、故曰獨立而不改、【不改】とは易ざるを云、此物天下に周く、古今に行れて殆からず、而も安平なり、故曰、周行而不殆、天下萬物皆此より生ず、萬物の主たり、故曰爲天下母、傅大士偈に、有物先天地、無形本寂寥、能爲萬象主、不逐四時凋、と云るは、全く此章の意なり、【吾不知其名】とは名づくべからざるなり、字は名に代るの謂なり、實の名には非ず、字して道と云、老子の筆法なり、强とは名づくべからざれども、しひて名づけて大と云、【大】は廣大無邊の義、放之彌六合是なり、然れども、大もつくすにたらず、又名て逝と云【逝】は往なり、深遠にして、追及べからずと云の意なり、逝も又云盡すにたらず、又名づけて遠と云【遠】は遠して、親附すべからざるの謂なり、遠もつくすにたらず、又名て反と云、【反】は根に歸復するなり、物皆々たるも、各復其根と云に同じ、以上は、道の妙を形容する鼓舞の文法なり、故に道大なり、天大なり、地大なり、天下に王たるも亦大なるものなり、域中に大なるもの四あり、而して王者其一に處す、人道は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る、筆端鼓舞して自然に至て結せり、奇論と云べし、域中は世界と云義なり、○凡そ、老子の自然と云るは、天地未分、萬物未生の處、其本然の妙を指て云り、其妙處を形容して自然と云り、或は是を玄とも云、或谷神不死とも云、或は死而不亡者壽とも云、或は無名の樸とも云、或は玄牝とも云、或は十有三とも云り、自然の兩字、極て會し難し、學者極て工夫をつくすべき處、全く妄にあり、眞に明眼の人にあらずんば、會することを得べからず、圭峯の宗密禪師の原人論

に、老子謂道法自然萬物皆是自然生化、非因緣者、則石應生草、草或生人、人生畜等と論難せり、圭峯は、自然の二字を、今の世俗に云る、天然ものと云の義に見たり、此故に此難を立て、萬物皆自然に生じて因緣なくば、石は草を生じ、草は人を生じ、人は畜生等を生すべし、皆天然ものなるべしと論せり、手を拍て一笑するに堪たり、又あはれむにたへたり、

重爲輕根章第二十六

重爲輕根、靜爲躁君、是以君子終日行不離輜重、雖有榮觀燕處超然、如何萬乘之主而以身輕天下、輕則失臣、躁則失君、

輕きものは重きより生す、故曰重爲輕根、動くものは靜なるを主とす、故曰靜爲躁君、【躁】は動なり、【君】は主なり、輜重は軍の時、兵粮軍器軍用を載て、牛を以て引車也、重き車なる故に、重車と云、又輜重と云、【離】は麗なり、つくとよむ、不離輜重とは、重きこと無ときは輕ことなし、靜なること無ときは躁こともなし、君子は終日行とも、輕重動靜に麗ざるを云、【榮觀】は美しきみものを云、燕處は安居なり、【超然】は拔出する也、君子の胸中、天下の美觀ありと云とも、安居して事物の外に超然たり、萬乘は天子なり、如何とは、異てとひなじる辭なり、如何なる事にか、萬乘の天子として、身の重きを忘れ、天下を重んじて、身を以て天下よりも輕くするや、身をかろくするときは、天下を臣服せしむる道を失ふ、躁動なるときは、自から主とする處を失ふ、【失君】とは主とする處を失を云、○龔曰、根本也、躁者動之甚而煩擾也、君主也、古者、凡吉行乘乘車、師行乘兵車、皆有輜車在後、輜車衣車、前後有蔽、所以載行者之衣食器械、以其累重、故稱輜重、榮觀紛華之觀也、燕處猶燕居、超然高出而無繫着也、失根一作失本、一作失臣非、今從王輔嗣本作失根、○前漢書形法志曰、殷周以兵定天下、因井田而制軍賦、地方一里爲井、四井爲邑、四邑爲丘、四丘爲甸、甸六十四井也、有戎馬四疋兵車一

乘牛十二頭甲士三人卒七十二人干戈俱備、是謂乘馬之法、天子畿方千里、提封百萬井、定出賦六十四萬井、戎馬四萬匹、兵車萬乘、故稱萬乘主、○義解曰、重字指身、輕字指外物、靜字指性命、躁字指嗜欲之情、意謂身爲生本、固當重者、功名貨利、身外之物、固當輕者、彼外物、因身而後有、故曰重爲輕之根、性爲形之本、彼嗜欲之狂躁由性而發、故曰靜爲躁之君、世人不知輕重忘身狥物、傷性縱情、惟聖人雖終日行而不離輜重、輜重所載糧食者、乃三軍之司命也、雖于里遠行深入敵國、三軍不以取敗者、賴其有輜重也、聖人遊行生死畏途、不因貪位慕祿馳騁物欲而取戕性傷生之害者、以其身心性命爲重也、故曰、不離輜重、縱有榮爲天子、富有四海之樂觀、但恬澹燕處、超然物慾之外、是舜禹有天下不與也、奈何後之人主、沈腹於聲色貨利、戕性傷生而不悟、是以物爲重、身爲輕也、故曰、以身輕天下奈何者、怪歎之詞、物重則損生、故曰、輕則失根、慾極則傷生、故曰、躁則失君、君謂性也、蘇子由本云、輕則失臣、臣字蓋亦指身而言、莊子齊物論、以身爲臣妾、以性爲眞君、源出於此、

善行無轍迹章第二十七

善行無轍迹、善言無瑕謫、善計不用籌策、善閉無關楗而不可開、善結無繩約而不可解、是以聖人常善救人、故無棄人、常善救物、故無棄物、是謂襲明、故善人不善人之師、不善人善人之資、不貴其師、不愛其資、雖知大迷、是謂要妙、

【善行無轍迹】轍は車迹なり、迹は人の足迹なり、よく行ものは迹のみるべきなし、列子が風に乘が如し、【善言無瑕謫】瑕は言のきずなり、謫は言のとがなり、善言ものは時あつて後に云ふ、法に非れば言はず、故

に言、天下に滿れども口の過なし、【善計不用—】籌策は算數をするの具、竹にて作れるもの也、よく算計に達する者は籌策を用ず、【善閉無—】楗は門を防の木なり、横にして防ぐを關と云、竪にあて、防を楗と云、【善結無—】繩は索なり、約は索を以て縛するを云、此五つは譬喩なり、謂は自然の道をするものは、力を容る處なく、迹を見はす處なし、力を容る迹を見はすものは、至徳に非を發明せり、【是以聖人—】是を以て聖人は人を棄てず、よく人を救ふ、物をすてずよく物を救ふ、人と共にし物と共にす、光を和、塵に同うす、是を襲明と云、襲明は徳の明なるを藏すなり、【故善人—】故に善人は不善人の師なり、不善人を救ふ、若天下皆善人ならは、何ぞ善人の名あらん、不善人あるによりて善人あらはる、是を以てみれば、不善人は善人の資けなり、不善人として其師を貴ばずして、其教を受ず、善人として不善人を棄賤して愛せずんば、たとひ智ありと云とも、大きに迷へるもの也、此道を知を要妙と云ふ、【要妙】は、肝要の妙道と云義なり、○翼曰瑕玉玷也、譴責也、籌策計數者所用之算、以竹爲之、楗拒門木也、横曰關、竪曰楗、結繫也、繩索也、約束也、襲相傳襲也、一作掩襲之襲、言密用也、傅奕曰、是以聖人常善救人二十字、獨見河上本、古本無之、

知其雄章第二十八

知其雄守其雌爲天下谿爲天下常德不離復歸於嬰兒知其白守其黑爲天下式爲天下式常德不忒復於無極知其榮守其辱爲天下谷爲天下谷常德乃足復歸於樸樸散則爲器聖人用之則爲官長故大制不割、

【知其雄—】雄は剛也、人に勝の道なり、雌は柔なり、人にまくるの道なり、雄を知て雌を守は、柔を致もの也、天下是に歸すること、谿に水の歸するが如し、天下の谿たるときは、其徳常住にしてはなれず、嬰兒の混然たるに歸る、佛書に謂る、妙行、下々而歸嬰兒と云る是なり、【知其白—】白は明なり、黑は晦なり、明を知て晦を守るものは、是非邪正を分別せざる者なり、以て天下の法となる、【式】は法なり、天下の法となるときは、其徳常住にして差忒なし、無極に歸る、【知其榮—】榮を知て辱を守るものは、卑下に居るもの也、故に天下の谷たり、卑下に居るものは足ることを知もの也、故に其徳常に足る、樸に歸る、樸は、天地の始を云、嬰兒と云、無極と云、樸と云、詞は異なれども其實は一なり、三等あるにはあらず、反覆して云、【樸散則—】樸は天地未分、萬物未生の處を指ぞ、器は天地より以下、形氣に形はるゝものを云ぞ、樸散じて萬物となる、樸の外に物なし、物の外に樸なし、聖人は、樸器合一を以て、天下の官の長となる、用之の【之】の字、樸器合一なるを指て云【官】はつかさどるなり、凡そ天地萬物皆官あり、天は上に在て覆ことを主どり、地は下に在て載ることを主り、春は生じ夏は長ずることを主り、風は乾かし雨は潤し、牛は耕し、馬は走ることを主る、聖人は萬物の靈として、一切の官の長となる、道を以て物を制するを大制と云、大制なるときは道器相離れず、自然にして然り、聖人の所爲是なり【割】は離なり、不割は不離なり、○王純甫註、此言聖人以無御有微妙同玄之道知知子之知也、有運用之意、守守母之守也、有主宰之意、雄雌以剛柔言、黑白以明晦言、榮辱以貴賤言、谿谷在下衆流所歸也、式法也亦歸之之意、常徳眞常之徳、嬰兒言其和也、無極言其虚也、樸言其質也、皆指常徳言、之此章變文叶韻、反覆吟咏、亦與詩體相類、既曰守雌爲谿、又曰常徳不離、復而言之、非爲谿之外、復有不離之功也、既曰常徳不離、又曰復歸嬰兒、申而言之、非常徳之外、復有嬰兒可歸也、下二者放此、

將欲取天下章第二十九

將欲取天下而爲之者吾見其

不得已、天下神器、不可爲也、爲者敗之、執者失之、凡物或行、或隨、或噓、或吹、或强、或羸、或載、或隳、是以聖人去甚去奢去泰、

【將欲取天下—】將に天下を取んと欲する者は、强て天下を取んとするもの也、强て天下を取んとする者は、吾其人必天下を得ざらんことを知、【天下神器—】天下は神器なり、人力を以て得べからず、【神器】は、人力の及處にあらざるを云、文王の、天下を三分にして其二つを有つ、武王の、八百の諸侯期せざるに會し、湯王の、東征すれば西夷怨み、南征すれば北狄怨るが如く、道厚く德盛にして、天下是に歸し、やむことを得ずして天下を有つ、是を以、神器と云ふ、【爲者敗之】とは、强て天下を取んとするものは、却て失なふなり、以上は譬喩なり、凡そ一切の事、强て爲べからずとの意を云、下句の意を發明す、【凡物或—】凡そ天下の物、或は先つもあり、或は後るゝもあり、【行】は先なり、隨は後なり、或は噓するもあり、噓は昫なり、春の氣のあたゝむる是なり、或は吹もあり、吹は寒なり、秋の氣のひやゝかなる是なり、或は强もあり、弱もあり、成もあり、毀もあり、載は成、際は毀なり、皆是自然にして然り、力を以て致すべからず、是を以て、聖人は甚を去、奢を去、泰を去て、物自然にまかす、○翼註曰、陸農師云、去甚慈也、去奢儉也、去泰不敢爲天下之先也、三者聖人所以取天下也、又曰薛註曰、聖人所謂、甚奢泰者、非謂後世夸淫踰侈之事、凡增有爲於易簡之外者、皆是也、

以道佐人主者、不以兵强天下、其事好還、師之所處、荊棘生焉、大軍之後必有凶年、故善者果而已矣、不敢以取强焉、果而勿矜、果而勿伐、果而勿驕、果而不得已、果而勿强、物壯則老、是謂非道、非道早已、

【以道佐人主—】道を以て人主を佐けて、國を保ものは、兵を以て强きことをせず、兵を以て天下に强からんとするものは、道を知ものにあらず、兵は凶器なり、我兵を以て人を害すれば、人も亦兵を以て我を害す、我身に還すことを好む、【師之所—】師の處する所は、人民逃散し、田野荒蕪して荊棘生ず、大軍を行て後は、天地の和氣を敗て、年穀實らず、飢饉疾疫等の凶年あり、此七句は譬喩なり、我强梁を以て人に勝んとすれば人亦我に勝んとす、是兵を以て强くすると同じ、爭の器なり、人と爭ときは心田に荊棘生じて、天性の和氣を敗ること凶年と同じ、是故に有道の人は爭はず、【故善者—】果は果決の義なり、有道の人の善をするものは果ならくのみ、只我が身にはたし行ふて敢て是を恃て、人より强梁ならんことを取らず、【果而勿驕—】果は是我身に果し行て、外に求るにあらず、其果なるもの我にあり、果して已が能に矜ことなかれ、若ほこるときは、强を取て人に勝んことを求なり、果にして其功に伐ること無れ、果にして驕ことなかれ、果にしてやむことを得ずして、外か事に應ずるに用よ、果にして强こと無れ、此亦前に雄を知て、雌を守ると云章の意なり、矜る者は矜に終らず、伐る者もいつまでも伐るにあらず、驕る者は驕に終らず、强き者なればとて、いつまでも强にはをらず、久しからずして必變ず、たとへば、物の壯なるものは必老するが如し、是を道にあらずと云ふ、道に非るをば早く止よ、

夫佳兵章第三十一

夫佳兵者、不祥之器、物或惡之、故有道者、不處、是以君子居則貴左、用兵則貴右、兵者不祥之器、非君子之器、不得已而用之、恬淡爲上、故不美也、若美必樂

之、樂之者是樂殺人也、夫樂殺人者、不可得志於天下矣、故吉事尚左、凶事尚右、是以偏將軍處左、上將軍處右、言居上勢、則以喪禮處之、殺人衆多、以悲哀泣之、戰勝以喪禮處之、

【夫佳兵者―】佳兵とは軍事に長ずるを云、軍は凶器なり、軍事に長ずる人は凶人なり、凶人を以て凶事を行ふ、是兵は不吉の器なり、不祥は不吉なり、不吉は人物のにくむ處なり、故に有道の人は兵を用ることをせず、不處は不爲なり、【是以君子―】君子平居の禮は、左を貴ぶ、居は平居なり、兵を用るときは右を貴ぶ【兵者不祥】不祥の器なり、君子の用る器にあらず、然れども、已むことを得ずして兵を用るときは、恬淡を尚ぶ、上はたつとぶなり、恬淡は無味なり、兵を用ることを甘んせざるなり、故に兵を用ることを美せず【若美―】若美せば、是兵を樂なり、兵を樂もの は人を殺ことを樂者なり、人を殺ことを樂ものは、志を天下に得べからざること必せり、不可得志於天下とは、天下の人を服せんとおもふ志を得べからざるなり、人を殺ことを樂む者には、天下の人の志くみすべからざるなり【故吉事―】左は陽、右は陰なり、故吉事には左を貴ぶ、凶事には右を貴、是を以偏將軍は左に位し、上將軍は右に位す、【言居上勢】上に居の勢は、喪卑の序を以て言ときは、左に居べき上將軍右に居るは、是喪の禮を以て處するなり、陰を貴なり、兵を用て人を殺すこと衆多なれば、國民悲哀して泣號ぶ、たとひ戰勝ても、又喪の禮を以て處す、是不祥の器なればなり、此一章は全く、兵を借て、人の世に處するに人と爭ひ勝んとするは、兵を用るに同じ、凶德の人にして、善人に非ずと云ことを云り、○蘇子由註、以之濟難、而不以爲常、是謂不處○諸子品節註曰、君子居則尚左、而兵事則尚右、左陽右陰、吉事陽而凶事陰、兵喪皆凶、故屬陰而居右也、上將軍爲用兵之主、故居右、居上將軍之勢、出入皆用喪禮、

道常無名章第三十二

道常無名、樸雖小天下不敢臣、侯王若能守萬物將自賓、天地相合以降甘露、人莫之令而自均、始制有名、名亦既有、夫亦將知止、知止所以不殆、譬道之在天下、由川谷之於江海也、

【道常無名―】道常は、第一の章に云る常の道なり、無名は名づくべからざるなり、【樸雖小―】樸は道を云、此道は質樸なる故に樸と云へり、道は天下に充ち、人事に盈つ、語默動靜土石山河細小の物に至まで、道にもるゝはなし、故に小と云、樸は小なれども天下敢て臣とせず、不臣とは卑しとせざるを云ぞ、不臣服と云の義にはあらず、【侯王若―】侯王若よく樸を守らば、萬物自から賓服せん、天氣は降り下り、地氣は上り昇て、天地の氣相合して甘露降る、人力を以て是を令むるにあらず、自然にしてひとし、均はとゝなふを云ぞ、侯王天下の上に居て、樸を守て下に降るときは、下民必是に從ふ、天地相合て甘露の降と同じ、【始制有名】制は作なり、萬物、始て作て名あるなり、【名亦既有】とは、此名既に有ときは、萬物生々して窮りなきなり、【夫亦將―】知止とは、樸に止ることを知なり、樸に止ることを知ものは、殆からざる所以なり、謂る止於至善なり、樸に止らずして名に隨て末を逐ふものは殆かな、たとへば、道の天下に在て、天下これに歸すること、川谷の水の江海に歸するが如し、【樸小】蘇子由註、樸性也、道常無名、則性亦不可名矣、故其爲物、舒之無所不在、而斂之不盈毫末、此所以雖小而不可臣也、○呂吉甫曰、道常無名、名之爲道、則與道乖矣、方其無名、固未始有物也、其樸可謂小矣、○李息齋註、道常無名、不可得而見、然匹夫得之、樸雖小天下不敢臣、○焦氏筆乘云、道常、首章所謂常道也、無名、首章所謂無名也、以其未彫未琢、故謂之樸、以其曰希曰微、故謂之小、然能見小而守之者鮮矣、侯王若能守、是見小曰明者也、○漁隱叢話曰、熙寧六年、建昌軍城北甘露降、松上濃厚如

酒、其味甜甘、

知人者智章第三十三

知人者智、自知者明、勝人者有力、自勝者強、知足者富、強行者有志、不失其所者久、死而不亡者壽、

【知人者智】とは、他人の賢愚得失善惡等をよく辨知するは、智者の爲所なり、口義には、智私智也と釋せり、私智によらず、他人の是非を知は、智者の事なり、【自知者明】自身の賢愚得失を、辨知するものは明者なり、【勝人者有力】とは、人にかたんとする者は、必ず力を以て爭を云、【自勝者強】とは、己が私に勝ものは強なり、自勝は所謂克己復禮なり、【強】字中庸に云る矯哉強と云の強也、強なるを云にはあらず、【知足者富】とは、一簞の食、一瓢の飲、其樂を改めず、是を富る人と云、若足ことを知ずんば、尊天子たり、富、四海を保と云とも、何日か足らん【強行者有志】とは、道をつとめ行ものは、志ある人なり、【不失其所者久】とは、其安んずる處を失はざるものは、長久なり、【死而不亡者壽】とは、我が儒に云へる太極なり、前章に云る玄牝なり、凡そ生死は物の始終なり、天地日月山川人物野馬塵埃に至るまで、大小長短の不同はあれども、生死の相を免れず、生死の相は變ずれども、只此道は亡せず、莊子の云る不死、列子の不化佛氏の無量壽佛、皆死して亡ざるもの也、

大道汎兮章第三十四

大道汎兮、其可左右、萬物恃之以生、而不辭、功成不居、衣被萬物、而不爲主、故常無欲、可名於小矣、萬物歸焉、而不知主、可名於大矣、故能成其大也、以其不自大、故能成其大、

道は至大無方なり、故に大道と云、【汎兮可左右】とは、左右前後に繫著なく、神妙流通するなり、萬物此道を恃て生ず、しかれども道は萬物を生ずるを以て、勢役すとせず、萬物生ずるの功成て、其功に居らず、【衣被萬物一】道は、よく利澤を萬物に衣被せしむれども、嘗て萬物を主て、宰制するの心なし、道は常に所欲なし、見るべく聞べきの迹なし、小と名づくべし、萬物此道に歸して道を主とす、而して道は、其萬物の主たることを知らず、爰に至て道は大なるものと名付べし、【是以聖人一】是を以て、聖人はよく其大を成す、其自ら其道を大なりとせざる故に、よく其大を成なり、大道の小にして大を成とおなじ、

執大象章第三十五

執大象、天下往、往而不害、安平泰、樂與餌、過客止、道之出言、淡乎其無味、視之不足見、聽之不足聞、用之不可既、

【天象】は無象の象なり、謂る大道なり、【天下往】とは、大道を執て天下に行ふを云、道を執て天下に行ふもの、天下誰か是を害せん、害せざるときは安きなり、平かなり、泰かなり、三字一意なり、反復して云り【樂與餌一】樂は八音を奏して耳を悅しめ、餌は五味を和して口を悅しむ、樂を設、餌を具るも、賓客過れば即止なり、是暫時の慊なり、眞實の樂には、あらず、世人の耳目を悅しむる道は、樂と餌との如し、眞實の道にあらず、【道之出言一】道之言に出とは、道をことばに出して說を云、【淡乎】は無味なり、道を言に出して說ときは、淡乎とあはくして何の味もなし、見れども見るべきものなく、聞ども聞べきものなし、用て盡すべからず、所謂無盡藏なり、彼の樂と餌との如くなる道にはあらず、○翼曰、既盡也、○集解云、今有鼓樂飲食於此、輒能使行者之留止爲有有聲容之美麗、滋味之甘旨故也、廼若道者、則言之而無味、視之而

無見、聽之無聞、曾不如樂餌之可悅、然取而用之、則及天下後世而無盡、區々樂餌之樂、不可同日而論矣、

將欲翕之章第三十六

將欲翕之、必固張之、將欲弱之、必固強之、將欲廢之、必固興之、將欲奪之、必固與之、是謂微明、柔之勝剛、弱之勝強、魚不可脫於淵、國之利器、不可以示人、

【將欲翕之ー】翕は斂なり、弛なり、與は得なり、奪は失なり、謂は、凡そ天下の事、弛んとすれば必ず固に張る、弱まさんとすれば必固に強し、廢んとすれば必固におこる、失はんとすれば必ず固に得る、此理幽隱にして晦と云へども、實は明なり、故に是を微明と云、以上の八句は譬喩なり、【柔之勝剛ー】柔は却て剛に勝、弱は却て強に勝つ、是弛すものは却て張り、廢るものは却て興と同じ、人の此道を外にすべからざるは、魚の淵を脫すべからざるが如し、國の利器を人に示は、盜賊の招なり、示すべからず、道の大用我にあり、自から露顯して人に勝んとするは、利器を人に示すが如し、

道常無爲章第三十七

道常無爲而無不爲、侯王若能守、萬物將自化、化而欲作、吾將鎭以無名之樸、無名之樸、亦將不欲、不欲以靜、天下將自正、

【道常無爲ー】道の常は、常の道を云、常然不變の道なり、常の道は無爲なり、而して爲すと云ことなし、侯王無爲を爲すときは、化することを求めずして萬物自から化す、【化而欲ー】凡そ天地の間に、萬物の變化作て紛々たる時、我但無名の樸を以て是を鎭む、無名の樸は無欲也、無欲にして靜なれば、天下自から正し、不欲は無欲なり、〇口義に、下句化字、不可拈上句化字說と云る意は、上の句の化の字は、萬物無爲に化するを云、下の句の化の字は、天地の間に萬物の變化して作るを云、故に、上の句の化の字に拈して說べからずとなり、按するに、蘇子由、呂吉甫の說は、上の句の化の字を受て釋せり、上の化の字を受たる、前後の文意よく通ず、蘇子由註、聖人以無爲化物、萬物化之、始于無爲而漸至于作譬如嬰兒之長人爲日起苟其方作而不爲之則終以無名之樸鎭之、庶幾可得而止也、呂吉甫註、無爲而無不爲、則未嘗有夫無爲也、故萬物將化、則我與萬物莫非道也、方其自化而欲作、吾將鎭之以無名之樸、

上德不德章第三十八

上德、不德、是以有德、下德、不失德、是以無德、上德無爲而無以爲、下德爲之而有以爲、上仁爲之而無以爲、上義爲之而有以爲、上禮爲之而莫之應、則攘臂而仍之、故失道而後德、失德而後仁、失仁而後義、失義而後禮、夫禮者、忠信之薄而亂之首、前識者、道之華而愚之始、是以大丈夫處其厚、不取其薄、居其實、不居其華、故去彼取此、

【上德不德是以ー】上德の人は、自ら其德を德とせず、化すればなり、是を以て德あり、【下德不失】下德の人は、德を執て失はず、化せざればなり、化せざるものは德とするにたらず、是を以德なし、【上德無爲ー】上德の人は、無爲自然にまかせて、心ありてすることなし、化すればなり、無以爲とは、心ありてする

ことなきを云、【下德爲之一】下德の人は、德をなして而も心ありてするもの也、化せざればなり、爲之とは德をなすなり、【上仁爲之一】上仁の人は、仁をなして而も心ありてすることなし、爲之とは仁をなす也、【上義爲之一】上義の人は、義をなして而も心ありてするなり、【上禮爲之一】上禮の人は、禮をなして人是に應ずること無きときは、臂をかゝげて、引てこれを成しむ、攘臂仍之とは、人をして強てなさしむるを云なり、【故失道而一】夫道は無物なり、無名なり、道を人に寄て、身に有するを德と云、德は道に下ること一等なり、故に曰、失道而後有德、仁は愛利の心あり、是を德に比すれば下ること一等なり、故に曰、失德而後有仁、義は斷制の心、是を仁に比すれば又下ること一等なり、故に曰、失仁而後義、禮は恭敬撙節の心、是を義に比すれば又下ること一等なり、故曰、失義而後禮、【夫禮忠信一】忠信は誠なり、禮は外を修飾す、故に曰、忠信之薄、禮は外を飾る故に、禮合ときは喜び、禮そむくときは怒る、是亂の首なり、【前識者一】前識は、多く前聖の嘉言善行に識通するを云、前識を以て智とするは、皆外に馳するものなり、道の實にあらず、故曰、道之華而前識を專らとして、道を忘るは、是愚の始也、是を以、大丈夫は道の厚に居て、禮の薄を取らず、道の實に居て、前識の華に居らず、故に彼を去て此を取、彼は薄と華とを指て云、此とは、實と厚とを云、

昔之得一章第三十九

昔之得一者、天得一以清、地得一以寧、神得一以靈、谷得一以盈、萬物得一以生、王侯得一以爲天下貞、其致之一也、天無以清將恐裂、地無以寧將恐發、神無以靈將恐歇、谷無以盈將恐竭、萬物無以生將恐滅、侯王無以爲貴而高將恐蹶、故貴以賤爲本、高以下爲基、是以侯王自稱孤寡不穀、此其以賤爲本耶非乎、故致數輿無輿、不欲琭琭如玉、落落如石、

【昔之得一者】昔は往古を云、一は道を云、先づ此一句を云起して、下の句に昔の一を得たる者を云へり、【天得一一】天は一を得て、上に在て、清明にして日月星辰の象を垂れ、地は一を得て寧く、よく物を載す、神は一を得て、虛にして靈なり、谷は一を得て、虛にして盈ち、萬物は一を得て、生々きはまらず、王侯は一を得て、天下を貞す、其跡同じからずと云ども、其致は皆一也、【天無以清將一】天一を得て清きことなくんば、恐らくはやぶれなん、裂は毀なり、【地無以一】地一を得てやすきことなくば、將恐らくは動搖せん、寧は安定なり、發は動搖するなり、【神無以一】神一を得て靈なることなくは、將に恐らくは神の妙用やみなん、歇は已なり、【谷無以一】谷一を得て虛にして盈ることなくは、將に恐らくは盡なん、谷の用盡て、物を受べからざるなり、【萬物無以一】萬物一を得て生々することなくは、恐らくは萬物滅絕せん、【侯王無以一】侯王一を得て以て貞をすることなくて、徒に高貴ならば、將に恐らくは顚りなん、蹶は顚なり、以上一を得て其道を成ことを擧げて、畢竟、侯王の上に歸結せり、仍て下の句に、貴以賤爲本、高以下爲基と云の二句を說て、王侯の事を云へり、【貴以賤爲一】此兩句は喩なり、賤無んば何を以てか貴とせん、下無くんば何を以て高しとせん、下と賤とは高貴の基本なり、【是以侯王一】王侯自から孤と稱し、寡と稱し、不穀と稱するは、是賤を以て本とするが、本とするに非や、非乎とは、疑て決するの辭なり、孤は無德孤立の稱、寡は寡德の稱、不穀は不善なり、皆賤稱なり、【故致數輿一】車は總名なり、仲に隨て數ることを致せば、輪とし轂とし輻とし衡とし軾とす、車は虛名たり、車は有るべくして無るべし、虛にしてよく化するを云、石の如く玉の如くなるときは、碌々落々として、一定にして易べからず、一定にして易べからざるものは、道にあらず、故に、玉の如く石の如くなることを欲せず、庶韻碌々多石貌、落々魁礨貌、

反者道之動章第四十

反者道之動、弱者道之用、天下之物生於有、有生於無、

【反者道之動】反は復なり、靜なり、動の由て生ずる所なり、靜なるより道あらはる、故に曰、反者道之動、これ所謂靜極而復動なり【弱者道之用】よく弱にして強なり、強に專なるものは折る、道の用は弱にあり、故に曰、弱者道之用【天下之物一】反者無なり、動は有なり、天下の物は有より生ず、所謂有名萬物之母なり、有は無より生ず、無名天地之始也、

上士聞道章第四十一

上士聞道勤而行之、中士聞道若存若亡、下士聞道大笑之、不笑不足以爲道、故建言有之、明道若昧、夷道若類、進道若退、上德若谷、大白若辱、廣德若不足、建德若偷、質眞若渝、大方無隅、大器晩成、大音希聲、大象無形、道隱無名、夫惟道善貸且成、

【上士聞道一】上士は、道を聞て、厚く信じて勤行ふ、顔子の克己復禮の教を聞て、言下に了悟して、請事斯語と云て、駸々然として、終に聖域に登る是なり、【中士聞道一】中士は、道を聞て且つ信じ且つ疑ふ、有が如く無が如し、存亡は有無なり、子夏、聖人の至論を聞て心に樂み、又富貴利達を見て、心に好て、一たびは痩せ一たびは肥たるが如き、是なり、【下士聞一】下士は、道を聞て信せず、信せざるのみならず、大に笑ふ、叔孫、武叔が仲尼をそしり、淳于髡が孟子を笑ふが如し、夫道は微妙玄通、深うして知べからず、下士の笑ふに非れば道とするに足らず、最下鄙俚の人の喜ぶ道は、豈に道とするに足らんや、【故建立有之】道を說て、言を世に立る人の云る言あり、下に陳ぬる句々是なり、【明道若昧】明なる道は、却て昧が如し、天明則日月不明と云が如し、【進道若退】よく進むものは、却て退くが如し、參也魯と云の類なり、【夷道若類】夷は平なり、夷道は大道なり、類は同なり、大道は世と同す、謂る和光同塵なり、【上德若谷】上德の人は、其心虛大にして谷の如し、智を捨て、德を隱して虛なるが如し、有若無實若虛是なり、【大白若辱】大に潔白なる人は、却て汚れたるが如し、柳下惠三たび黜られて、父母の國を去らざるが如き是なり、【廣德若不足】廣德の人は、足ざるが如し、大哉孔子、博學而無所成名是なり、【建德若偷】よく德を建る人は、外にあらはさずして、內に積り、偸むが如し、偸は、ぬすむなり、ひそかにするなり、【質眞若渝】質眞は眞實の生質、純一なるを云、如渝とは變ずることと無して、自から己に渝變するが如の意あるを云、己に足て、自ら足とせざるの意なり、翼曰、傳奕音義云、古本作若輸、廣雅曰、輸愚也、此說に從ふときは分明なり、質眞の人は愚なるが如し、柴也愚と云が如し、

【大方無隅】大方は大虛なり、大虛は方隅なし、【大器晩成】大なることをするものは、おそく成なり、任公子が三年魚をつりて、一大魚を得るの類なり、【大音希聲】大音は大言なり、大に言んとするものは常に聲少し、楚莊王三年言ずして、始て言を出して諸侯に覇たるの類なり、【大象無形】大象は天地なり、天地の形豈限りあらんや、【道隱無名】道は隱微にして見るべからず、名づくべからず、豈名あらんや、以上皆上士の聞て行ふところ、下士の聞て笑ふ所の道なり、【夫惟道善一】夫惟此道は、よく人にかして、かく物を成す、たとへば、金銀を人にかして人の用を成て、其金ます〳〵盡べからざるが如し、貸は借なり、貸の字尤妙なるものなり、

【參考】呂吉甫註、大方體之、無南、無北、廓然四解、淪於不測、無東無西、始於玄冥、反於大通、此大方之無隅也、大成若缺、日計之而不足、歲計之而有餘、此大器之晩成也、大音者、聽之不可聞、故希聲、大象者、視之不可見、故無形、凡此皆道也、

道生一章第四十二

道生一、一生二、二生三、三生萬物、萬物負陰而抱陽、冲氣以爲和、人之所惡、唯孤寡不穀、而王公以爲稱、故物或損之而益、益之而損、人之所教、亦我義教之、強梁者不得其死、吾將以爲教父、

【道生一】道は自然なり、道、一を生じ、一より二を生じ、二より三を生じ、三より萬物を生ず【萬物負】陰は北に位す、故に負と云、陽は南に位す、故に抱くと云、萬物は陰をうしろにし、陽を前にす【冲氣以】冲氣虛氣なり、和は陰陽を和するなり、冲虛の氣、其間にめぐつて、陰陽相和す、若冲虛の氣和せずんば、陰陽和同せず、乾坤やぶれなん、道は虛を貴ぶことを發明せり、【人之所惡】凡そ人の惡み卑しむ處は孤寡不穀なり、然を王侯、孤寡不穀を以て自から稱す、道は卑を貴ぶことを云て、下の句へうつる【故物或】天下の物、損するものは益、益ものは損ず、江海の卑下に居て、川谷の水を受るが如く、月の虧れば盈るが如きは、是損じて益すもの也、丘山の高して崩る如く、月の盈れば虧が如は、是益て損するもの也、【人之所教】世の教る者は、義を以て教て、人に勝らんとす、義は强梁の道なり、强梁なるものは其死を得ず、是、益を求て損するもの也、【吾將以】我は柔弱卑下を以て教ふ、是損して益するもの也、世の師たる者、又、吾を以て師とすべし、故に曰、吾將以爲教父、世の教るものは衆人の師なり、老子の教は世を教るもの、上に出たり、故に教父と云へり【吾亦】の吾の字、世間の教をするものを云、【吾將】の吾字、老子自ら云へり、

性理大全、朱子曰、一便生二、二便生四、老子却說二生三、便是不理會、○居業錄第一曰、一各生兩、只是陰陽兩端、交錯變化、自然妙、老子一生二、二生三、是何道理、陰陽兩端、再參得甚物來作三乎、○凡萬物生々の道、易に非んば明ならず、易を離て生々を說くものは、必ず妄に陷る、夫、太極は本然の妙なり、太極の動を陽とす、靜なるを陰とす、太極の外に陰陽なし、陰陽の外に太極なし、陰陽をはなれて太極を說べからず、陰陽を認て太極とすべからず、離れず認めず、其妙を自得すべし、其本然なるより太極と云、其動靜するより陰陽と云、陰陽變合の妙を易と云、易有太極是生兩儀と云るは是なり、兩儀既に分れて、陽中に陰を生ず、天一、水を生ずる是也、陰中に陽を生ず、地二火を生ずる是なり、又陽中に陰を生ず、天三生木是なり、又陰中に陽を生ず、地四生金是なり、又陽中に陰を生ず天五生土是なり、是を五行と云、兩儀生四象とは是なり、五行を四象と云は、易の卦の上について、太陽少陰少陰と立て、四象と云へり、土は四象に配せり、五行既に生じて、或は相生じて足ざるを補ひ、或は相克して餘あるを損し、二氣五行順布し、四時行れて萬物生々す、二氣五行は萬物を生々するの具なり、二氣五行具せざれば萬物生ぜず、是其大略なり、是を以て朱文公、胡敬齋、二生三、三生萬物の語を難せり、林氏の口義に、一太極也、二天地也、三三才也、三極既立萬物生焉と釋せり、夫人は萬物の中の一也、豈に人と天地と三才の極立て、萬物を生出せしむるの理あらんや、此說通ぜず、○蘇子由註、夫道非一、非二、及其與物爲偶、道一而物不一、故以一名道、然而道則非一也、一與一爲二、二與一爲三、自是以往而萬物生、○呂吉甫註、道之在天下、眞與之偶者、莫與之偶則一而已矣、故曰道生一、既謂之一則謂之者與所謂爲二、故曰一生二、有一有二則有三矣、故曰二生三、故唯無名則已、苟謂之一則其適遂至于三三立而萬物生矣、故曰、三生萬物、○司馬溫公曰、道生一、自無而有一生二、分陰分陽二生三、陰陽交而生和、三生萬物、和氣聚而生萬物、○李息齋曰、抱陽一也、負陰二也、陰陽交而冲氣爲和三也、萬物孰不具此三者、此等の說、略通と云ども切實ならず、老子は神人なり、深き旨を有らん、後生の所見の及ばざるならん、

天下之至柔章第四十三

天下之至柔、馳騁天下之至堅、

無有入於無間、是以知無爲之有益也、不言之教、無爲之益、天下希及之矣、

【天下之至柔—】天下の至て柔らかなるものは、天下の至て堅きものを馳騁せしむるなり、水の木石を漂すが如き是なり、至堅は至強なり、馳騁は馬を走らしむる如くなるを云ぞ、自由にする義なり、【無有入—】無有は無形なり、無間はすきまのなきを云、無形のものはよく無間に入る、人の身の營衛のすきまなきも、氣脈はめぐるが如き是なり、是を以て見れば、無爲の益あることを知、有益は功あるを云、【不言之教—】不言にして、をしへ自ら行る、天道言はずして四時の令行るゝが如し、無爲にして功自から成、天道無爲にして百物成が如し、天下是道に及ものすくなし○翼曰、馳騁役使也、堅猶剛強、不曰剛強而曰堅、變文叶韻也、

名與身章第四十四

名與身孰親、身與貨孰多、得與亡孰病、是故甚愛必大費、多藏必厚亡、知足不辱、知止不殆、可以長久、

【名與身—】孰とは、問て詰りたる辭なり、名は外物なり豈に身より親からんや、烈士は名を求め、身を以て名に殉ふ、貨は外物なり、豈に身より重からんや、貪夫は貨をむさぼる、名と貨とは貴にたらず、是を得ると失ふと何かやましき、得ても失ても病とするにたらず、【是故甚—】故に甚だ名を愛するときは、必ず大なる費を成、多く貨を藏るときは、必ず厚く亡ふ、足ることを知るものは身を辱しめず、止ることを知ものは殆からず、辱しめず殆からず、以て長久なるべし○翼曰、多猶重也、薛曰、知足者樂有之已多無求者也、無求奚辱、知止者、懼後進之有損知幾者也、知幾奚殆、

大成若缺章第四十五

大成若缺、其用不敝、大盈若冲、其用不窮、大直若屈、大巧若拙、大辨若訥、躁勝寒、靜勝熱、淸靜爲天下正、

【大成若—】大に成るものは、却て缺たる如し、而して其用やぶれず、天は西北に傾き、地は東南に盈たず、是缺たる如し、而して天地の用やぶれざるが如し、【大盈若—】大に盈るものは虛なるが如し、冲は虛なり、而して其用きはまりなし、不窮は無窮なり、大海の水は盈ざる如くなれどもその用きはまりなきが如し、【大直若—】大に直なるものは、却て屈るが如し、伊尹の五たび湯に就き、五たび桀につくが如し、大に巧なるものは、却て拙きが如し、宋の畫史の畫を成すが如し、大に辯なるものは、却て、どもるものゝ言ふこと不能が如し、孔子、鄕黨に於て不能言者に似たるが如し、【躁勝寒—】躁の勝ものは、其きはまり寒し、靜のかつものは其極まり熱す、躁靜は陰陽を云ふ、言ろは、陰陽の氣一偏に滯ときは、皆よく病を成す、唯道の淸靜は、有にもあらず無にもあらず、動にもあらず靜にもあらず、天下の正たり、正は式と云ふが如し、躁勝靜寒勝熱といはずして、躁勝寒、靜勝熱と云へるは、錯綜の文なるべし、○蘇子由註、天下以不缺爲成、故成必有缺、以不虛爲盈、故盈必有窮、聖人要于大成而不鄙其缺、期于大盈而不惡其冲、是以成而不敝、盈而不窮也、直而不屈、其直必折、循理而行、雖曲而直、巧而不拙、其巧必勞、付物自然、雖拙而巧、辨而不訥、其辨必窮、因理而言、雖訥而辨、成而不缺、盈而不冲、直而不屈、巧而不拙、辨而不訥、譬如噪之不能靜、靜之不能噪耳、夫噪能勝寒而不能勝熱、靜能勝熱、而不能勝寒、皆滯于一偏、而非其正也、唯泊然淸靜不染于一非成非缺非盈非冲、非直非屈、非巧非拙、非辨非訥、而後無所不勝、可以爲天下正、

天下有道章第四十六

天下有道、却走馬以糞、天下無道、戎馬生於郊、罪莫大於可欲、禍莫大於不知足、咎莫大於欲得、故知足之足常足、

【天下有道―】天下道あるときは、無爲して天下化す戰爭の事なし、走馬をしりぞけて田に糞す、天下道なきときは、國をあらそひ、兵を戰はしめ、戎馬郊野に生ず、戎馬は兵馬なり【罪莫大於―】戰爭は皆貪欲より始る、故曰、禍罪は可欲より大なるはなしと、貪欲やまざるときは、人民を損害し、國家を危亂せしむ、故に曰、莫大於不知足、足ることを知ざるときは、得ても又得んことを欲す、欲して得ときは、欲心ますく〳〵熾んなり、故に曰、咎莫大於欲得、【故知足之―】故に足ことを知の足は、常に足る、富にもたり、貧にも足、貴にも足、賤にも足る、往くとして足らずと云ことなき、是を常に足と云、○糞曰、郤屏去也、糞糞田也、戎馬戰馬也、郊交也、二國相交之境也、戎馬生於郊言兵久不還也、○禮記月令曰、可以糞田疇、疏云、糞壅苗之根也、

不出戸章第四十七

不出戸知天下、不窺牖見天道、其出彌遠其知彌少、是以聖人不行而知、不見而名、不爲而成、

【不出戸而―】天下ひろしと云へども、性外の物なし、戸を出ですして知べし、天道隱微にして、測べからずと云へども、天人一也、更に別理なし、牖を窺はすして知べし、千歲之日至可坐而致是なり、若戸を出て求め、牖を出て知んとせば、足迹の及ぶところ、目力の見るところ、いくそばくかあらんや、いよ〳〵出て愈遠し、本を忘て末に走、その知こと愈少し【是以聖人―】是を以て聖人は、不行して知る、智に本づけば

なり、不見して名あり、心に本づけばなり、爲すして成、無爲に本づけばなり○口義には、不出戸知、不窺牖知の句を、喩を設て、下の句の意を發明すと云り、蘇子由、呂吉甫、李息齋、焦竑等の註は、譬喩とはせず、正當の論なりと釋せり、今按ずるに、外に走て求るものは、知ことといよ〳〵少きことを論せり、正當の論なるべし、李息齋註、出而求天地者、求其形也、天地不可以形盡而可理盡故、其出彌遠、其知彌少、若知其理之在此、則雖閉戸可也、聖人知不在形、故不必行名不在色、故不必見成不在事、故不必爲、

爲學日益章第四十八

爲學日益、爲道日損、損之又損、以至於無爲、無爲而無不爲矣、故取天下者、常以無事、及其有事、不足以取天下、

【爲學日益】學をするときは、知見外に馳、有心日增益す、曹溪の曰、迷心修道、但助無明と云へり、是なり、禪家に謂る、帶淫修禪如蒸沙作飯、縱有多智、皆成魔道と云るも、亦是を云り、道をするときは、知見内に約め、有心日に損ず、是を損じて又損ず、以て無爲に至る、無爲に至るときは、無事にして化し、自然にして行はる、天下の事物に於て、爲ずと云ことなし、謂る從容而中道是なり【故取天下―】天下を取るものは、常に無心を以て取る、心あるを以て取んとするときは、取に足らず、天下を失ふ、無事は無心なり、有事は有心なり、天下を取を借て、道をするものは、無爲にして事成、學をするものは、有爲にして事成ざるを喩て戒とす、

聖人無常心章第四十九

聖人無常心、以百姓心爲心、善者吾亦善之、不善者吾亦善之、

得善矣、信者吾亦信之、不信者吾亦信之、得信矣、聖人之在天下、惵々爲天下渾心、百姓皆注其耳目、聖人皆孩之、

【聖人無常心―】常心は主とする所あつて、一定にして移らざる心を云、是偏る心なり、聖人の心は至大無我なり、一定に止る心なし、感じて天下の故に通ず、故に百姓の心を以て心とす、百姓は萬人と云義なり、我に常の心なきときは、善不善、信不信、他人にあり、我何ぞ與らん、百姓の心を以て心とするは、鑑の如し、鑑に常の形なし、來るものゝ形を以て形とす、漢來は漢現じ、胡來れば胡現ず、鑑豈に漢胡を辨せんや、只明を以て照すのみ、聖人の心も亦かくの如し、【善者吾―】善なるものにも善を以てす、不善なるものにも亦善を以てす、聖人の心善を得たればなり、信なるものにも信を以てす、不信なるものにも、亦信を以てす、聖人の心、信を得たればなり、鑑の、漢來るにも、胡來るにも、皆明を以てするが如し、漢胡物にあり、鑑何ぞ與からん、信不信他人にあり、聖人何ぞ與らん、【聖人之在―】惵々は、自安んぜざるの意なり、聖人は、自ら矜り、自ら足りとするの心なし、故に自安せざるの意あり、謂は、矜り安ずるの心なきなり、渾其心とは、混然として圭角なきを云ぞ、善不善、信不信を論せず、渾然として應ず、故に天下の人、皆耳目を聖人に附、聖人孩之とは、聖人の人を見ること、孩兒の人を見る如く、無心なり、人をえらびすつる心なきなり、

出生入死章第五十

出生入死、生之徒十有三、死之徒十有三、民之生、動之死地、亦十有三、夫何故、以其生生之厚、蓋聞、善攝生者、陸行不遇兕虎、入軍不被甲兵、兕無所投其角、虎無所措其爪、兵無所容其刃、夫何故、以其無死地焉、

【出生入死】此一句、一章の綱領なり、出れば生じ、入れば死すと云て、何を出て何に入と云ことを說出さず、其旨奧妙なり、出とは脫離するを云、入とは沈淪するを云、たとへば、水を浮ものは出るなり、沈むものは入なり、【生之徒―】此二句は、上の一句の義を述たり、出て、生の徒となるもの十三、入て、死の徒となるもの十三、出入の機、十三にかゝれり、十三と云て、分明に說破せず、謎語の如し、生死事大なり、言語の說盡すべきにあらず、學者是に於て、思を致さずんば有べからず【民之生動之―】此一句は、上を承て、人の生の、やゝもすれば死地に往と云て、下の句へうつる辭なり、【夫何故】とは、怪んで問の辭なり、【以其生々之厚】是は答へたる辭なり、自問自答して丁寧に說なり、生生とは、此生る身を生る身とするなり、此謂は、民の生の死地に往は、此生を生とすることの厚を以て、却て死地に往なり、身を愛することの厚きに過て、却て身をあやまつなり、【蓋聞】とは、端を改るの辭也【善攝生―】攝は攝養なり、古の、よく此生を攝保人は、陸に行て兕虎の害に遇せず、軍に入て兵甲の殺を被らず、兕も、其角を投じて害せんとするに處なし、虎も、其爪を措て抓んとするに處なく、兵も、其刃を容て殺せんとするに處なし、是、古の、よく生を攝る人の爲ところなり、又問て云ふ、夫れ何の故に然るや、答て云、其人死地なきを以ての故に、此の如くなり、【其】の字、生を攝る人を指ぞ、【無死地】とは、死相なきを云ぞ、死相なきときは生死なし、生死なきとは、生の徒也、○翼曰、出謂自無而見於有、入謂自有而歸于無、莊子、萬物皆出于機、入于機、又曰、其出不忻、其入不詎、又曰、有乎出、有乎入、皆以出爲生、入爲死、攝生如攝政攝官之攝、不認生爲己有、如暫焉管攝之也、○蘇子由註、性無生死、出則爲生、入則爲死、用物取精、以自滋養者、生之徒也、聲色臭味、以自戕賊者、死之徒也、二者、既分生死之道矣、吾又、知作而不知休、知言而不知默、知思而不知忘、以趍于盡、則所謂動而之死地者也、生死之道、以十言之、三者各居其三矣、豈非生死之道九、而不生不死之道一而已矣、不生不死、則易所謂、寂然不動者也、

老子、言其九不言其一、使人自得之、以寄無思無爲之妙也、有生則有死、故生之徒、則死之徒也、人之所類于生者、厚則死之道、常十九、聖人、常在不生不死中、生死且無、焉有死地哉、○焦氏筆乘曰、生之徒十有三、此練形往世者也、死之徒十有三、此狥欲忘生者也、人之生動之死地十有三、此斷滅種性者也、凡此十分之中、率居其九、皆生生之厚者也、夫有生必有死、是生固死之地矣、厚生者九、無生者一、老子于十者之中、闕一自擬、其旨微矣、○諸子品節註曰、凡出生、則入於死矣、生之類不一、死之類不一、凡民之求生、動而入於死地者、亦不一也、何者、以其貪生故、求生而得死也、徒類也、十有三言多也、評云、十有三、諸家類多穿鑿、往往爲古人所愚、○講義曰、原其十有三之說、前後解者雖多、終無定論、然其稍可取者、二三家而已、或曰、在天爲南北斗、在體爲九竅四肢、在用爲六慾七情、古仙有云、陽裏十三言有象、陰中七六、寬無縱、此指水火之成數也、天一生水、地六成之、地二生火、天七成之、七與六者、乃心腎坎離、人之根本也、精神屬之、心藏神、腎藏精、凡聖日用應酬之際、無所不用其精神也、黃庭經云、一身精神、不可失、精神居身、生之徒也、精神去身、死之徒也、蓋水火能活人、亦能殺人、豈非生死之健乎、赤蛇縱動、靈龜遂行、應速於谷、發疾於機、故曰、生之徒十有三、死之徒十有三、人之生、動之死地、亦十有三、

道生之章第五十一

道生之德畜之物形之勢成之、是以萬物莫不尊道而貴德、道之尊、德之貴、夫莫之命而常自然、故道生之畜之長之育之成之熟之養之覆之、生而不有、爲而不恃、長而不宰、是謂玄德、

【道生之】道は自然なり、無なり、物は皆無より生ず、所謂有生於無なり、【德畜之】畜は有なり、造化の、物を生じて有するを云なり、此道と德とは、造化にかけて見るべし、【物形之】萬物既に生じて、各其形あり、勢成之、既に形あるときは、天地は天地の用あり、人は人の用あり、禽獸は禽獸の用あり、各其形に從て、其用を成すものは、皆、勢の必然なり、【是以萬物一】萬物は皆道より生じ、德を以てたもつ、故に萬物、道を尊び、德を貴ぶと云ことなし、道の尊く、德の貴は何ぞや、命ずることなくして、常に自から然り、自然にして、萬物皆なるゆゑに、道尊く德貴し、【故道生之】故に道、物を生じ、物を長じ、物を育み、物を成就せしめ、物を熟せしめ、物を養ひ、物を覆ひめぐむ、【生而不有】萬物を生じて、己れが有とせざるなり、【爲而不恃】其功を爲て、其功を恃まず、【長而不宰】萬物の長上たれども、主宰するの心なし、【是謂玄德】如此なるを、玄妙の德と云、【長之】の長の字は、物を生長するを云、【長而】の長の字は、萬物の長上たるを云、

天下有始章第五十二

天下有始、以爲天下母、既得其母、以知其子、既知其子、復守其母、沒身不殆、塞其兌、閉其門、終身不勤、開其兌、濟其事、終身不救、見小曰明、守柔曰剛、用其光、復歸其明、無遺身殃、是謂襲常、

【天下有始】天下萬物、出生し來る其始めと云もの有て、天下萬物の母となる、始と云は無なり、玄牝なり、【既得其母】母は造化なり、子は萬物なり、造化あることを得て、萬物あることを知、萬物あることを知て、造化を守るときは、道器合一、本末不二なり、故に身を終るまで殆からず、【塞其兌】人身には口あり、人家には門あり、說封曰、兌爲口舌、口をふさぎ門を閉とは、內を守て外に馳せざるを云、如此なるときは、身を終るまで、勞せずして其功成る、是れ有道の人の爲ところ也、不勤とは、勞せずして其功成るを云、【開其兌】其口を開き、其事を益すものは、知見外に馳ものなり、機心、一たび動て外にはするとと

きは、身を終るまで救はれず、是衆人の爲す處なり、濟は益なり、不救は、危ふして助くべからざるなり、【見小曰明―】見る處大にして、よく欲て、小きにするときは、至明なり、【守柔曰剛】主とする處剛にして、柔を守るは至剛なり、【用其光―】光は明の用、明は光の體なり、光を用て明に復歸するは、用をもちひて體に歸するもの也、此の如くなれば、身の殃を遺すことなし、襲は藏なり、常は不易なり、襲常は、其用を藏して、常久にして窮らざるなり、○翼曰、襲常は、猶前言襲明に密而不露也、記曰、揜而充裘曰襲、○李息齋曰、人之患、在于不謹其小、不養其微、若自小而謹之、自微而養之、雖小必明、雖微必強、故曰、見小曰明、知柔曰強、

使我介然章第五十三

使我介然有知行於大道唯施是畏大道甚夷而民好徑朝甚除田甚蕪倉甚虛服文采帶利劍厭飲食資財有餘是謂盜誇非道哉

【使我介然】我とは有道の人を云、介然は、固く守て化せざるの意なり、謂は、至道は知もなく行もなし、固く執て化せざるなり、【有知行―】若、知あつて大道を行んとせば、凡そ行ふところ、皆、有道の者の畏る所なり、○蘇子由の註には、使我介然有知行於大道十字を、一句に見、唯施是畏の四字を、一句に見たり、謂は、我をして、介然として固く執て化せず、小知あつて大道を行ときは、施すこと皆違ふ、道を知もの是を畏る、【大道甚―】大道は甚た平かなり、然して人の道を求る、好て利徑の路を行ふ、譬ば國家を有つ者、朝廷はよく治れども、田畝皆蕪て、民に飢たる色あり、野に餓俄あり、倉廩、空虛にして、米穀なし、而して猶且、文采を服とし、利劍を帶し、飲食に厭足し、其資財餘あるまで積で、務富强を成、是盜賊の其能に誇るが如し、田と倉廩は國の本なり、朝廷と、資財、文采

等は末なり、是末を務て、本を忘るなり、此は譬喩なり、人の、大道を知らずして聰明に矜り、聞見に誇るもの、又此の如し、故に曰、非道哉、○蘇子由註、體道者、無知無行、無所施設、而物自化、今介然有知、而行于大道、則有施設、建立非其自然、有足畏者矣、大道夷易、無有險阻、世之不知者、以爲迂遠而好徑、以求捷、故、凡舍其自然而有所施設者、皆欲速者也、俗人昭々、我獨若昏、俗人察々、我獨悶々、豈復、飾末廢本、以施設爲事、夸以誇盜哉、○翼曰、介然有知、猶言微有知也、

善建不拔章第五十四

善建者不拔善抱者不脫子孫以祭祀不輟修之身其德乃眞修之家其德乃餘修之鄉其德乃長修之國其德乃豐修之天下其德乃普故以身觀身以家觀家以鄉觀鄉以國觀國以天下觀天下吾何以知天下之然哉以此

【善建者不拔】凡そ、たてたるものは抜ずと云ことなし、善建ものはぬけず、善建者は德にたつもの也、【善抱者不脫】抱くものは、脫せずと云ことなし、よく抱くものは脫せず、善抱くものは、朴を抱く者なり、【子孫以祭祀不輟】子孫相續する家は、子より孫を生じ、孫より曾孫を生じ、曾孫玄孫を生じ、耳孫を生じ、祭祀すること止ず、道の、萬物を生じて生々止ざるも、亦如此、【修之身―】此道を身に修れば、其德眞なり、眞は實なり、【修之家―】此道を家に修れば、其德餘あり、餘慶なり、【修之鄉―】此道を鄉に修れば、其德長たり、長は尊なり、人の爲に尊らる、【修之國―】此道を國に修れば、其德豐なり、豐は盛なり、【修之天下―】此道を天下に修れば、其德普し、普とは、廣く天下及なり、【故以身觀―】我身の上に即て、他人

の身をみる、【以家觀ー】我が家に就て、他人の家をみる、【以鄉觀ー】我が鄉を修を以て、他人の鄉をみる、【以國觀ー】我國を修て、他人の國をみる、【以天下觀ー】我天下を修て、他人の天下をみる、【吾何以ー】吾何を以て、天下の然ることを知や、此道を以て然ることを知なり、【以】此とは道を以て也、○按ずるに、口義の註、吾身、我家、我鄉、我國、我天下を以て、人の身、人の家、人の鄉、人の國、人の天下を觀と云るは、經の旨に合はず、老子一生の說、我と人とを比方するの論なし、呂吉甫の註、此道を身に修て、我が身を觀、家に修て、我が家を觀、鄉に修て、我が鄉を觀、國に修て、我國を觀、天下に修て、我天下をみる、吾何を以て、天下の然ることを知や、此道を以てみるに如此なり、呂吉甫註、所以修之身者已足、而無待于外也、以家觀家、以國觀國、以天下觀天下、亦若是而已矣、古之所以藏天下于天下者、用是道也、

含德之厚章第五十五

含德之厚、比於赤子、毒蟲不螫、猛獸不據、攫鳥不搏、骨弱筋柔、而握固、未知牝牡之合、而朘作、精之至也、終日號而嗌不嗄、和之至也、知和曰常、知常曰明、益生曰祥、心使氣曰強、物壯則老、是謂不道、不道早已、

【含德之厚】德を藏畜して、あらはさゞるを含德と云、厚は至なり、德を含畜して、其至を極るものは、赤子の如く然り、凡そ、人初て生るときは、德性厚なり、其長するに及て、外は耳目の爲に誘れ、內、識心の爲めに襲はれて、終に其厚を失ふ、有道の人、其德を含畜して、其初を守る、孟子の云へる、大人不失赤子之心者也是なり、【毒蟲不ー】毒蟲さゝず、猛獸據ず、攫鳥搏たずと云は、物やぶること能はざるを云なり、尾を以て毒をなすをと螫云、爪を以てつかむを據と云、翼を以て擊を搏と云、【骨弱筋ー】赤子の、筋は柔かに骨は弱けれども、手の握ること甚固く、男女、交合の

道を知ざれども、峻の作る、是皆精氣の至なり、牝牡は、男女雌雄の交合を云、終日號べども其嗌嗄ざるは、心に喜怒なくして、其氣和するの至なり、赤子は、純一專固なるゆにゑ、如此なり、含德の人も亦如此、和は純氣の守なり、天性の和氣を守て、純にして雜らざるを純氣と云、【知和曰ー】和を知ときは、常久にして易らざるべし、所謂道の常なり、常を知ときは、道に明なりと云べし、知和曰常、知常曰明の二句は、含德の人にかけて見べし、【益生曰祥】人の生は、天の命分定れり、各其數あり、求て益べからず、求てまさんとするものは、却て殃を生ず、祥は殃なり、【心使氣曰ー】心を以て氣をつかふときは、氣うごく、氣動くものは、純氣の守にあらず、强梁のもの也、故に曰、心使氣曰强、【物壯則ー】强なるものは必折く、物の壯なるが老するが如し、是を道にあらずと云、道にあらざるを早くやめよ、○翼曰、毒蟲、蜂蠆之類、以尾端ー毒曰螫、猛獸、虎豹文貙、以爪按擊曰據、攫鳥、鵰鶚之類、以羽距擊觸曰搏、趙志堅曰、以四指握拇指爲握固、峻子垂反、說文曰、赤子陰也、啼極無聲曰嗄、一作嗌不嗄、黃茂材云、古本無嗌字、嗌不嗄、莊子之文、後人增入之翼作終日號而不嗄、無嗌字、

知者不言章第五十六

知者不言、言者不知、塞其兌、閉其門、挫其銳、解其紛、和其光、同其塵、是謂玄同、不可得而親、不可得而疏、不可得而利、不可得而害、不可得而貴、不可得而賤、故爲天下貴、

【知者不言】道は不言の妙なり、說べからず、道を知ものは、啞子の夢を見たるが如し、密して言ざるにはあらず、其妙言べからず、故に曰、知者不言、【言者不知】言語を以て道を說ものは、皆第二義なり、道を知ものにあらず、故に曰、言者不知、【塞其兌】兌は口なり、塞口とは、出すことを愼むなり、【閉其門】とは、其內を守て、外に輝ざる也、【挫其銳】とは、德を磨

て、圭角なからしむるなり、【解其紛】とは、世事紛々の中に處して、よく條理あつて、紊亂せしめざる也、【和其光】とは、其德の光を、眩露せしめざる也、【同其塵】とは、世間の塵に同じて、人と共にする也、【是謂玄同】とは、物もなく、我もなく、玄妙同然なるを云、【不可得】玄同なるときは、天下得て親んすべからず、得てうとんずべからず、得て貴ぶべからず、得て賤んすべからず、親疎、利害、貴賤の表に、超然たるもの也、故に、道は天下の貴たり、

以正治國章第五十七

以正治國、以奇用兵、以無事取天下、吾何以知其然哉、以此、夫天下多忌諱、而民彌貧、人多利器、國家滋昏、民多技巧、奇物滋起、法令滋彰、盜賊多有、故聖人云、我無爲而民自化、我好靜而民自正、我無事而民自富、我無欲而民自樸、

【以正治國】とは、政事を以て國を治るを云、政は正也、【以奇用兵】とは、奇詐を用ふることをつとむ、此二つは有心なる者なり、天下を取にたらず、【以無事】とは、無爲を以て天下を取る、無事は無爲なり、我何を以て、有心なるは天下を取にたらず、無爲なるが天下を取る事の、然ることを知んや、此を以てなり、以此とは、下の數句を云、此二字は結句なり、結句を以て起語とせり、【夫天下】天下を治に、禁防多き故に、下民いよ〳〵貧し、忌諱は禁防なり、【人多利器】人多く利器を好む、故に、國家ますます昏亂す、【民多技巧】民多く技巧をなす、故に、奇怪の器物ますます起る、技巧は、たくみをつくすを云、【法令滋】國家の法令ますます〳〵あらはれて、盜賊の人ますます〳〵多し、以上は皆、有心なるが國をみだすことを云り、【故聖人云】故に聖人の言に云く、我無爲をすれば、

天下の民自から化す、我清淨を好めば民自ら正し、我事なきときは財用をついやさず、故に民自から富り、我無欲なれば、民自から樸なり、以上は、無爲なるが天下を平治することを云り、○蘇子由註、古之聖人、柔遠能邇、無意于用兵、唯不得已、然後有征伐之事、故以治國爲正、以用兵爲奇、雖然、此亦未足以取天下、天下神器、不可爲也、爲者敗之、執者失之、唯體道者、廓然無事、雖不取天下、而天下歸之矣、人主多忌諱、下情不上達、則民貧而無告也、利器權謀也、明君在上、常使民無知無欲、民多眩謀、則其上眩而昏矣、人不務本業、而趨末技、則非常無益之物作矣、患人之詐僞、而多爲法令以勝之、民無所措手足、則日入于盜賊矣、○義解曰、此言、治天下國家者、當以清淨無欲爲正、而不可用奇巧以誘民、

其政悶々章第五十八

其政悶々、其民醇々、其政察々、其民缺々、禍兮福所倚、福兮禍所伏、孰知其極、其無正邪、正復爲奇、善復爲妖、民之迷、其日固已久矣、是以、聖人方而不割、廉而不劌、直而不肆、光而不耀、

【其政悶々】悶々は、聰明をなさざるなり、醇々は自樂なり、其政悶々たるは、聰明をなさずして、無爲にして治るなり、故に、其民醇々として自ら樂しむ、王者之民皞々如是なり、【其政察々】察々は煩碎なり、いたつがはしく、くだ〳〵しきを云、缺々は不足なり、樂まざるを云、其政察々たるは、是無爲をせず、聰明を用るものなり、故に勞擾す、民、缺々としてたのしまず、【禍兮】禍あれば必ず福あり、禍の中に福あり、福あれば必禍あり、福の中に禍倚伏し極なし、孰か其極を知ん、無正邪の正は、定なり、無正とは、禍福常なきを云、【正復】天下の事、正あれば奇あり、奇あれば正あり、故曰、正復爲奇、善あれば妖あり、妖あれば善あり、故曰、善復爲妖、是非利害皆然り、【民之迷】世人迷て知らず、福を欲して却

て禍し、善を欲して却て妖す、此迷ひ、日固にすでに久し、古よりなり、今日のみならず、【方而不割】方は方正なり、易に、義以方其外と云の方の字と同じ、割は害なり、そこなふなり、聖人の道は、方なれども、害はざる也、【廉而不劌】廉は、かどのある義なり、正しき意なり、廉潔の廉にはあらず、劌は傷なり、聖人の道は、廉正なれども傷ざるなり、【直而不肆】肆は伸なり、聖人の道は、直けれども、其直をのべあらはさゞるなり、【光而不耀】光は、徳の光なり、謂ゆる明徳なり、聖人は、徳光あれども、其光をかゞやかさざるなり、此皆、有を無にかくすなり、○翼曰、缺、殘缺也、一作欮々矣、望貌、以其察々宜無不及、故人望之、而卒失望也、極終也、奇衰也、廉稜也、劌居衛反、割也、皆謂芒利傷物也、

治人事天章第五十九

治人事天莫如嗇、夫惟嗇、是以早復、早復謂之重積徳、重積徳則無不克、無不克則莫知其極、莫知其極、可以有國、有國之母、可以長久、是謂深根固柢、長生久視之道、

【治人事天】嗇は、餘り有て盡く用ざるの義なり、吾儒に云へる儉の字に似たり、人事を治、天道に事つること、嗇より善はなし、嗇なるときは早復る、易に謂る不遠而復るの義なり、【早復】早く復るときは、徳の上に又重て徳を積なり、重て徳を積むときは、人事天理能せずと云ことなし、能くせずと云ことなきときは、其徳窮りなし、無極は無窮なり、用て窮ることなき也、窮りなきときは、以て國を有つべし、【有國】國をたもつの母、長久なるべし、母は養を云、母の子を養ふが如し、嗇は根を深し、柢を固くするの根なり、生を養ふものも亦此の如し、嗇なるときは、長生久視すべし、久視は長生の人、久しく視を云、東方朔は、九千歳まで視たり、彭祖は八百年視たり、○翼曰、柢一作蔕、花跌也、○李息齋註、嗇之爲道、是謂深根

固蔕、長生久視之道也、精神者生之根、嗇而藏之、則根深而生長矣、長生者視之蔕也、衛而保之、則蔕固而視久矣、

治大國章第六十

治大國若烹小鮮、以道莅天下、其鬼不神、非其鬼不神其神不傷人、非其神不傷人、聖人亦不傷之、夫兩不相傷、故徳交歸焉、

【治大國】小鮮は小魚なり、小魚を烹るもの、攪ときはくだく、國を治むるも亦如此、政令繁碎なれば擾る、國を治るには、無爲清浄を宗とすべしと也、此一句を上に置て、國を治には、擾べからざることを云て、下の句に、三才各相擾ざることを云り、【以道莅天下】道を以て天下にのぞむものは、天地人の三才なり、各、其職を職として相侵さず、【其鬼不神】鬼は陰なり、地を云、神は陽なり、天を云、其鬼不神とは、地は、地の職を職として、天の職にあづからぬを云、【非其鬼不神】とは、其地、天の職を職として、人の職を傷らざるを云なり、【非其神不傷】とは、其天は人の職を傷らざるのみならず、聖人も亦、其職を職として、天の職を傷ざる也、【夫兩】天地と聖人と兩つの者、自から相傷らず、天地も自然の道を得、聖人も亦自然の道を得、各其徳を有て、相侵し傷らず、故に交歸と云、

大國者下流章第六十一

大國者下流、天下之交、天下之牝、牝常以靜勝牡、以靜爲下、故大國以下小國、則取小國、小國以下大國、則取大國、故或下

以取、或下而取、大國、不過欲兼二畜人一、小國、不過欲二入事一人、夫兩者、各得二其所一欲、故大者宜爲レ下、

【大國下流—】下流は、卑下に處るを云、大國の人、よく卑下に處ときは、天下歸す、天下は、必ず卑下の人に交會す、卑下は、天下の牝なれば也、牝は靜なるを以て、却て牡に勝つなり、故に、卑下する人も、靜なるを以て下る、卑下は、其大國の威德に、ほこらざるを云、周の文王の、天下を三分にして、其二つを有つて、殷に服事する、卑下と云べし、牝は、柔を守り、卑下に處するの義、【故大國—】故に大國を有つ人、以て小國に下るときは、小國を取て己に從しむ、【小國以—】小國を有つ人、大國に下るときは、大國を取、【故或下以取】故に、或は下て以て小國を取る、以取とは易く取るを云、湯の、大國を以て、葛の小國を取るが如きの類なり、【或下而取】或は下て大國を取る、而取とは、人に取るゝを云、大國に容らるゝを云、勾踐の、吳に事へて、越を全うせしが如し、蘇子由註、大國能下、小國附之、小國能下、則大國納之、大國下以取人、小國下而取于人、此注、尤も分明なり、【大國不—】大國は、天下を兼畜て、四海を掌にせんと欲するに過ず、【小國不—】小國は、力足ざるが故に、大國に事て、國を全せんとするに過ぎず、【此兩者—】此兩つの者、皆其欲する處を得たるは、下ればなり、故に、大なる事をせんと欲するものは、宜く下ることをすべし、

道者萬物之奧章第六十二

道者萬物之奧、善人之寶、不善人之所レ保、美言可以市、尊行可以加人、人之不善、何棄之有、故立二天子一、置二三公一、雖有二拱璧以先二駟馬一、不如坐進此道、古之所以貴此道者何也、不曰求以得有罪以免邪、故爲二天下一貴、

奧字、口義に明釋なし、蘇子由註、凡物之見二于外一者、皆其門堂也、道之在レ道、譬如二其奧一、此說分明也、道は、萬物の奧妙の理なり、人家の奧の如し、萬物、道を以て宗とす、【善人之寶】善人をば、有道の人、是を寶とす、【不善人之所保】不善の人をば、有道の人、保んじて是を容るなり、すつることなし、【美言可以市】美言は嘉言なり、嘉言は、世の爲に用らるゝきものの、うらるゝ如し、【尊行可以加人】尊行は善行あつて人に尊らるゝなり、尊行は、人の上に置る、是を以て見れば、不善の人も嘉言善行を尊とぶ、然らば、人の不善なるを何ぞ棄ることあらん、【故立天子—】故に天子を立、三公を置て、拱璧を以て駟馬に先たてゝ、他の賢者を招求んよりは、坐ながらにして、此道に進むにはしかず、拱璧は、兩手を以て拱するほどの璧なり、駟馬は、馬四疋を以て、車一乘を獻するを云、拱璧をさゝげものとして、車を以て迎るは、賢を招くの禮なり、吳臨川註、拱璧合拱之璧、駟馬一乘之馬、拱璧先二駟馬一、猶二春秋傳一言二乘章先一也、【古之貴—】古より、此道を貴ぶ所以の者は何ぞや、此道は、求れば以て得、たとひ今日にて罪あり、咎ある人と云ども、一旦に此道を得るときは、其罪を免と云ずや、故に、道は天下の貴たり、○吳臨川註、萬物之奧、萬物之貴者、奧室之西南隅、尊者所居、道之尊貴、猶二寢廟堂室之奧一、拱璧、合拱之璧、駟馬、一乘之馬、拱璧先二駟馬一、猶二春秋傳一言二乘章先一也、坐、跪也、朝聘之享、駟馬陳于外、執二拱璧一以將命、曰、先朝聘、以二拱璧駟馬一爲二至貴一而未レ足レ貴也、不レ如跪而進二此道一之尤貴、○李息齋註、賢者、以二道爲一レ貴、故樂得、其得不賢者、非二道莫一レ保、故樂免、其罪、○蘇子由註、凡物之見二于外一者、皆其門堂也、道之在レ物、譬如二其奧一、物皆有レ之、而人莫レ之見耳、夫唯賢者、得而有レ之、故曰、善人之寶、愚者雖不能有、然而非道則不能安也、故曰、不善人之所保、

爲無爲章第六十三

爲二無爲一、事二無事一、味二無味一、大小、多少、報レ怨以レ德、圖レ難於二其易一、爲レ大於二其細一、天下難事、必作於レ易、天下大事、必作於レ細、是以聖人終不レ爲レ大、故能成二其大一、夫輕諾必寡レ信、多レ易必多レ難、是以聖人猶二難レ之一、故終無レ難、

爲無爲、事無事、味無味、大小、多少、報怨以德、圖難於其易、爲大於其細、天下難事、必作於易、天下大事、必作於細、是以聖人終不爲大、故能成其大、夫輕諾必寡信、多易必多難、是以聖人猶難之、故終無難、

於其細、天下難事、必作於易、天下大事、必作於細、是以聖人終不爲大、故能成其大、夫輕諾必寡信、多易必多難、是以聖人猶難之、故終無難、

【爲無爲】とは、無爲にして、なさずと云ことなきを云、舜の、南面して拱を垂れて、天下治る、是なり、【爲無事】とは、事を事とせずして、其無事なる處を行ふて、よく其事をなすなり、【味無味】とは、清淨恬淡を甘ずるを云、【大小】とは、よく、大なる者は、小を守るを云、【多少】とは、多きものは、少を守を云、【報怨以德】怨ある人に報ずるに、恩德を以てするを云、【圖難於其易】とは、事の難儀は、輕易なるより生ずることをはかるなり、【爲大於其細】とは、細をつんで大をなすを云、天下難事、此二句は、上の句の意を重て言ふなり、【是以聖人】聖人は、終に大をせざる故に、よく其大を成なり、下流に居て、天下是に歸するの意なり、【夫輕】夫とは、端をあらたむるの語なり、發語の辭なり、輕しく、人に許諾するときは、必信すくなくして、虛誕となる、易きこと多ければ、必難きこと多し、是を以て、聖人は、事を難しとす、故に、終に難に逢なり、○蘇子由註、聖人爲無爲、故無所不爲、事無事、故無所不事、味無味、故無所不味、其于大小多少、二以道偶之而已、○焦氏筆乘曰、以無爲爲爲、以無事爲事、以無味爲味、愛惡妄除、聖凡情盡、而泊然棲乎性宅、則大小多少、一以視之、而奚怨之可報哉惟德以容之而已、○林子曰、事即爲也、所爲之事也、大小多少、論語所謂、無衆寡無大小也、夫道者、本無爲也、而曰爲無爲者、非無爲也、而無爲以爲之爾道本無事也、而曰事無事者、非無事也、而無事以事之爾、何以謂之味無味也、道之出言、淡乎其無味、而曰味無味者、蓋以道之無味爲味也、惟其能味之於無味、故能爲之而無爲事之而無事也、○王純甫曰、聖人所爲者、無爲之道也、事所爲之條件也、味所爲之理趣也、

其安易持章第六十四

其安易持、其未兆易謀、其脆易破、其微易散、爲之於未有、治之於未亂、合抱之木、生於毫末、九層之臺、起於累土、千里之行、始於足下、爲者敗之、執者失之、聖人無爲、故無敗、無執、故無失、民之從事、常於幾成、而敗之、愼終如是、則無敗事、是以聖人、欲不欲、不貴難得之貨、學不學、復衆人之所過、以輔萬物之自然、而不敢爲、

【其安易持】其事の安平なる時は、持易し、たとへば、無病なる身を持が如し、其事の兆ざるときは、謀易し、たとへば、病のきざゝざるときに、養生するが如し、其事の脆き時に攻れば、攻易し、脆は、かたからざるを云ぞ、たとへば、草木の芽のもろき時に、つみ切が如き、其事の、微たる時に治れば、散じやすし、たとへば、水の源を斷て、流を上が如し、【爲之於未有】事の未起より前に、はかるときは敗れず、翼に曰、未有者、未起也、事を、亂れざるの前に治るときは、亂れず、爲之、治之の之の字は、事を指て云、【合抱】合抱は、俗に云一だかへと云の義なり、毫末は、木の芽の小なるを云、此一句、大は小より生ずるを云、【九層之臺】九層は九重なり、累土は、一簀の土をつみかさぬるを云ふ、此一句は、高は下より生ずるを云、【千里之行】此一句は、遠きは近より始るを云、此數語は、皆、道を學ぶ者は、必幾を知事を、始に愼むを云、【爲者敗之】とは、心あつて、事をせんとするものは、敗を云、【執者失之】とは、心あつて執んとする者は、失ふ、【聖人無爲故無敗無執故無失】聖人は、爲ことなし、故に敗ことなし、執ことなし、故に失ふことなし、【民之從事常於幾成而敗之】民は衆人を云、幾は事の兆を云、衆人の事に處するは、幾を知らず、常に、幾成て事にあらはるゝ上に於て敗る、終を愼む

こと、如是、幾に於てするときは、事を敗ることなし、【是以聖人ー】とは、聖人は、衆人の欲せざる處を欲するなり、學不學とは、聖人は、衆人の學ざる處を學ぶなり、衆人は、皆、有爲を貴ぶ、聖人は無爲を貴ぶ、無爲は衆人の去てせざる處なり、所過とは、すてゝかへりみざる處なり、【以輔萬物ー】聖人は無爲にして、萬物自然の、性のまゝに任せて是を輔く、敢て心あつて作爲することなし、不敢爲とは、敢て作爲せざるなり、

古之善爲道章第六十五

古之善爲道者、非以明民、將以愚之、民之難治、以其智多、故以智治國、國之賊、不以智治國、國之福、知此兩者、亦楷式、能知楷式、是謂玄德、玄德深矣、遠矣、與物反矣、乃至於大順、

【古之善ー】聰明をあらはし、察々を好むは、道の累なり、古のよく道を爲るものは、其聰明を晦して、自から累すに至らざらしめんと欲す、故曰、非以明民、將以愚之、愚の字下し得て過當也、只、人をして、智を鬪しめざるの義なり、【民之難治ー】民の治めがたきは、上の人、智を用ることの多きが故に、治めがたし、【故以智ー】智を以て國を治むるものは、反て國をそこなふ、上下交々智を爭て、國危し、賊は、そこなふを云なり、【不以智ー】智を以て國を治めざるときは、天下淳朴に反る、國の福なり、【知此兩ー】智は賊たり、不智は福たり、此兩つの分を知ときは、楷式なり、窾曰、楷模也、式は法也、規模法則となるを云ふ、【能知楷式ー】楷式を知を玄德と云、深矣遠矣、是は贊美の辭なり、反は復なり、玄德の人は、萬物と共に、其始に復す、乃、大順に至るなり、大順は、自然に任せて、大に、萬物の性に順するを云、○智仁勇の三は、天下の達德なり、國を守り、天下を治に、豈に智を用ざるべけんや、古への聖人は、聰明、神智、古今に傑出す、故に、よく天下を平治す、後世、天下を平治せざるは、智の足らざるが故なり、智豈に一日も棄つべけんや、智を用ることは、火を用るが如し、用る處の分に依て、賊となり、福となる、學者、此分を知らずんば有べからず、○劉仲平曰不以智治國者、開天者也、以智治國者、開人者也、開天則順、順則行其所無事、其政悶悶、而治開人則鑿鑿、則失于太察、其民所以不淳而缺、故曰以智治國國之賊、不以智治國國之福、

江海爲百谷王章第六十六

江海所以能爲百谷王者、以其善下之、故能爲百谷王、是以、聖人欲上人、以其言下之、欲先人、以其身後之、是以、處上而人不重、處前而人不能害、是以、天下樂推而不厭、以其不爭、故、天下莫能與之爭、

【江海ー】王は往なり、物の、往て歸するを王と云、窾曰、王之爲言、天下所往歸也、江海の、よく百谷の王となるは、卑下にあるが故なり、是れ譬喩なり、【是以聖人ー】聖人も又、卑下に處て、天下是に歸す、以言下之とは、言の讓なり、以身後之とは、人に先たゝざるなり、所謂、己欲立而先立人、己欲達而先達人是なり、【是以處上ー】是を以て、聖人は、民の上みたれども、民おのれを壓すとせず、不重とは、壓とせざるなり、民の前にあれども、民已れを害すとせず、【是以天下ー】是を以て、天下、聖人を推し尊ぶことを樂て、厭はず、聖人は人と爭はざるを以ての故に、天下よく、聖人と爭ふことなし、○呂吉甫曰、以其言下之、則處上而人不重、不重則以戴之爲輕矣、以其身後之、則處前而人不害、不害則以從之爲利矣、不重、不害、此天下所以樂推而不厭也、夫以其言下之、以其身後之、則不爭者也、樂推而不厭、則天下莫能與之爭者也、非體玄德者、其能若是乎、故曰、夫唯不爭、故天下莫能與之爭、○李息齋

註、處民上而民不重、不知其有君也、處民前而民不害、不知其有民也、唯其上下相忘、是以天下樂推而不厭、

天下皆謂章第六十七

天下皆謂、我大似不肖、夫唯大、故似不肖、若肖久矣、其細、我有三寶、寶而持之、一曰慈、二曰儉、三曰不敢爲天下先、慈故能勇、儉故能廣、不敢爲天下先故、能成器長、今捨慈且勇、捨儉且廣、捨後且先、死矣、夫慈以戰則勝、以守則固、天將救之、以慈衛之、

【天下皆謂】とは、天下の人、皆、此語あるなり、不肖は、德に象とらざるを云、翼に云、肖似也、德に似ざるを云、何れにも不德を云なり、天下の人の語に云ふ、我德大なるが故に、却て不肖に似たりと、此一句、當時の語なり、老子、此語を擧して證す、【夫唯―】夫れ唯、大なるが故に不肖に似たり、滔々乎民無能名なり、若し肖なりとせば、是德に矜る者なり、德に矜るものは、久かな其細人たること、是は、老子、上の一句を釋せる辭也、【我有三寶―】端を改めて、不肖に似たることを云へり、【慈】は仁なり、慈は愛を主とす、愛は仁なり、仁と云はずして慈と云、【儉】は儉約なり、禮與其奢也寧儉の儉なり、【不敢爲天下先】は、以身後之の義なり、慈なるが故に、よく勇なり、慈は爭はずして勝つ、仁者は無敵なり、儉なるときは、其施し廣し、敢て身を以て、天下の人に先だゝざるが故に、人是を貴ぶ、故に萬物の長たり、成器は形器なり、凡そ、一切の形ある者を云なり、此三寶は、大にして不肖に似たるもの也、【今捨慈―】今の人は、慈を捨て、勇を專らとし、儉を捨て、廣く專とし、人に後ることを捨て、人に先んとす、是を以て、身を害す、故

曰、死矣、是は肖なりとするの細人なり、【夫慈以戰―】戰とは、心、外物と交を云、守とは内を守を云、慈は、心、物と交るときは、物にかつ、内を守るときは堅固なり、天より是を救ふ、如何となれば、慈を以て衛ればなり、衛は身を衛るを云なり、警衛するの意也、

善爲士章第六十八

善爲士者、不武、善戰者、不怒、善勝者、不與、善用人者、爲之下、是謂不爭之德、是謂用人之力、是謂配天、古之極、

【士】は士師なり、獄訟を主り、罪を行ふの官なり、よく士師たるものは、武からず、士として武を用るものは、士にあらず、皐陶の士たるが如きは、武からざるもの也、よく戰ふものは、怒らず、戰て怒る者は、暴兵なり、撫劒疾視曰、彼安敢我、是戰て怒るものなり、よく人に勝つものは、人と敵せず、【不與】とは、人と與に敵せざるを云ふ、所謂、不戰而能屈人之兵、善之善者也と云へる是なり、よく人を用るものは、人に下る、舜の舍己從乎人是なり、是を爭ざるの德と云、あらそはずして人に勝ものは、人の力を以て人に勝つ、故曰、是謂用人之力、如此なるを天道に配すと云、古へよりの極至の道なり、【配】は、男女の匹配ある如く、衣服の裏表あるごとく、合せて一つなるを云ふ、

用兵有言章第六十九

用兵有言、吾不敢爲主、而爲客、不敢進寸、而退尺、是謂行無行、攘無臂、仍無敵、執無兵、禍莫大於輕敵、輕敵幾喪吾寶、故抗兵相加、哀者勝矣、

【用兵有言】とは、兵を用る人の語に云る言あるなり、【不敢爲主】とは、兵を用ることを專らとせずして、已ことを得ずして敵に應ずるを云なり、主は事を專らにするの稱なり、客は專にせずして、人に應ずるの稱なり、【不敢進】とは、兵を用ることを、愼しみ、重ずるなり、光武の、每用一兵鬚髮盡白と云るは、寸に進まずして、尺に退くものなり、此二句、兵家の言なり、是謂行無行より以下は、老子、上の句の意を述たり、【行無行】とは、軍を行ことなきを、行とするなり、【攘無臂】とは、いかめしからぬを以て、いかめしとするなり、攘臂とは、俗に云る、ひぢをはるなり、【仍無敵】とは、我方より、敵を招くことなきを以て、敵を引出すを云、【執無兵】とは、敵の兵を執ことなきを以て、執とするなり、皆怯を示し、弱を示して、敵をたばかるの術なり、是兵を重じ、敵を輕んぜざるもの也、若、敵を輕んじて、武にほこり、强にほこるものは、必敗る、魏の曹公の赤壁に敗れ、晉の符堅が八公山に敗しは、敵をかろんずる故なり、故曰、禍莫大於輕敵、弱を守り、爭はずして勝は、寶なり、敵を輕るものは、强梁にして爭ふ、故に曰、輕敵幾喪我寶、故に、兩國、兵を擧て加るときは、哀む者勝つ、哀むものは、兵を嗜まざるもの也、此章は、全く兵を借て道に喩、○翼曰、行上如字、下戶剛反、言行列也、○蘇注、主造事者也、客應敵者也、○吳臨川曰、此申言慈之寶用兵有言者、用兵者皆有是言、爲主、肇兵端以伐人也、爲客、不得已而應敵也、進寸難進也、退尺易退也、仍就也、雖爲應兵、亦不欲戰、不敢近進寧于遲退進戰者、整其行陣而行、攘臂以執兵、前進以仍敵、不行、則雖有行如無行、不攘、則雖有臂如無臂、不執、則雖有兵如無兵、不仍之、雖有敵在前如無敵也、

吾言甚易知章第七十

吾言甚易知、甚易行、天下莫能知、莫能行、言有宗、事有君、夫唯無知、是以不我知也、知我者希、則我貴矣、是以聖人被褐懷玉、

【吾言甚易】吾は、老子自云り、吾が言甚だ知やすく、行ひ易し、天下の人、知ものなし、行ふものなし、【言有宗】宗も主なり、君も主なり、衆言の中に至言あり、衆事の中に至道あり、至言は言の主なり、至道は事の主なり、老子の言行は、皆其主を言へり、【夫唯無知】夫、唯、衆人は言に宗あり、事に君あることをしらず、是を以て、吾を知ず、我を知もの希なるときは、我貴し、下愚の人悉く知る道ならば、豈貴とするに足んや、【是以聖人】是を以て、聖人の道は、褐を被て玉をふところにするが如し、人、其褐を知て、玉あることを知らず、其言行あることを知て、主あることをしらず、

知不知章第七十一

知不知上、不知知病、夫唯病病、是以不病、聖人之不病也、以其病病、是以不病、

【知不知上】道を知て、其知を忘れたるなり、是は道の上なり、回の愚なるが如き是なり、【不知知病】とは、知ざるを以て、剛て知れりとするは、道の病なり、宰我の、社を答が如き是なり、【夫唯病病】夫、唯、知ざるを知れりとするの病をやむ、是を以て、知らざるを知とするの病なし、不病とは、病なきを云、【聖人之】聖人の病なきは、其知らざるを、知とするの病を病めるを以て、病なし、衆人は、知らざるを知るとするの病を、やまざる故に、常に、知らざるを知とするの病をまぬかれず、

民不畏威章第七十二

民不畏威、大威至矣、無狹其所居、無厭其所生、夫唯不厭、是以不厭、是以、聖人、自知不自見、自愛不自貴、故去彼取此、

【民不畏―】民は人なり、威は刑なり、刑罰は、人のおそるべきところなり、刑を畏れざる人は、其終り、必ず天下の戮と成て、大刑至る、此一句は譬喩なり、【無狹其居】居は、天下の廣居と云の居なり、胸中廣大の德に居するときは、天地を包括し、宇宙を納絡す、豈限量あらんや、彼衆人は、耳目口鼻の小知に拘りて、自から其居を狹す、所謂、心無天遊、則六鑿相亂ものなり、故に戒て曰く、無狹其居【無厭其所生】人の生は長久なり、氣を煉り、神を守るものは、長生久視す、彼衆人は、四肢百骸の形にかゝはりて、神氣の延長なるを知らず、此生を厭ひ、貴て、却て生を損す、故戒て曰、無厭其所生、厭とは、身をいたはり、貴ぶを云、其居を狹みするときは、大に狹もの至る、其生を厭ときは、大に厭もの至る、威をおそれざれば、大威至るが如し、【夫唯不厭―】夫、唯、生を厭ざるときは、よく長く安し、是を以て厭はず、厭の一つを云て、狹居を云はざるは、略筆の文法なり、【是以聖人―】是を以て、聖人は、自から道を知て、自から見しかゝやかさず、是は居をひろくするなり、自から身を愛すれども、身を貴ばず、是は生を厭はざるなり、故に聖人は、彼狹と厭とを去て、此廣と不厭とを取、

勇於敢章第七十三

勇二於敢一則殺、勇於不敢一則活、此、
兩者或利、或害、天之所惡、孰知二
其故一、是以、聖人猶難レ之、天之道、
不爭而勝、不レ言而善應、不召而
自來、坦然而善謀、天網恢々、疎
而不レ失、

【勇於敢二則殺】敢は果敢なり、强梁なるを云、智巧果敢之列と云の敢なり、敢に勇むものは、强梁なるものなり、强梁なるものは、其死を得ず、暴虎憑河、死而無悔者、敢に勇むものなり、【勇於不敢―】不敢に勇ものは勇、弱を守るもの也、柔弱を守るものは、身を全す、此兩の者、敢は殺さる害あり、不敢は活く利あり、【天之所―】天道は盈てるを虧て、謙を益す、敢は天の惡む處なり、孰か其故を知ん、知ものなし、【是以聖人猶―】聖人だも、猶、此道を能し難しとす、【天之道―】天道は爭はずしてよく物に勝つ、言はずして、善惡必ず應報あり、召ざれども必ず來る、善なるものは福を來し、惡なるものは禍を來す、【坦然善―】坦然は簡易なるなり、善謀とは、天道盈虧、時と消長して、違はざるを云ぞ、恢は大なり、天道は恢々と、大にして、疎かなるに似たれども、天の網にもるゝものなし、善惡吉凶、定らずと云ことなし、

民不畏死章第七十四

民不レ畏レ死、奈何以レ死懼レ之、使二
民常畏レ死、而爲レ奇者、吾得二執而
殺一之、孰敢、常有二司殺者一殺、夫代二
司殺者一殺、是謂レ代二大匠一斲、夫代二
大匠一斲者、希有レ不レ傷レ手矣、

【民不畏―】とは、國を保ち、民を治むるもの、刑罰を用て、人を殺すを以て、民を懼れ服せしめんとす、然れども、民は死を畏れず、如何ぞ死を以て懼しめん、【若使民―】若果して、民をして常に死を畏れしめば、奇邪を爲ものを、我とらへて殺すことを得たらば、是より孰か、敢て刑を犯すことをせん、然れども、刑を犯すもの絶ざるは、是民死を懼ざるなり、【常有司―】民の惡を成ものは、司殺是を割殺す、司殺者は天道を云、【夫代司殺―】司殺の者に代て、人を殺は、大匠に代て、木を斲が如し、大匠に代て斲る者は、手を傷らざるは希なり、天道に代て人を殺すものは、身をあやまらざるはあらじ、○蘇子由、呂吉甫、李息齋、薛氏等の諸說は、譬喩にはあらず、世の刑を以て民を制する者は、治を成に足らざることを云、正當の說とす、凡そ林希逸は、多く譬喩になづめり、學者詳にすべし、○李息齋註、此言、世之刑法不足特以爲治也、民不畏死、吾奈何以死懼之、使民果畏死、有爲奇者、執而殺之、則殺一人、足以爲治矣、然愈殺而愈不可

禁、則刑之不足恃也、秦人用法嚴、其網密而姦究不勝、漢用法疎、網漏呑舟之魚而天下歸于漢、此亦是以見矣、天道福善禍淫、是有司殺者于冥々之中、不可逃也、必若代司殺者殺、如代大匠斲未有不傷手者也、

民之飢章第七十五

民之飢、以其上食稅之多、是以飢、民之難治、以其上之有爲、是以難治、民之輕死、以其求生之厚、是以輕死、夫唯無以生爲者、是賢於貴生、

【民之飢―】耕やして食ひ、織て衣る、黎民飢えず、寒えず、是を安平の民とす、今は民の飢るは、其君上たる人、稅租を食むこと多して、民を收斂する故に飢ゆ、【民之難】民は本、無事なり、今民の治めがたきは、其君上たる人、爲こと有て智を用ること多きが故に、民も又、智を以て上を欺く、故に治めがたし、此兩句は譬喩なり、【民之輕】人輕しく死するは、其生を求めむさぼることの厚きに過るが故に、却て生を損じ、命を隕して、輕しく死す、【夫唯無―】夫唯、生を以て爲ることなきものは、生を厚くせざる者なり、生を厚くせざるものは、生を貴ものに勝れり、所謂後其身而身存するもの也、○蘇子由、呂吉甫等の諸註は、正當の論なりとす、○呂吉甫註、一夫之耕、足以食數口、則奚至於飢哉、而至於飢者、非其上食稅之多故邪、織而衣、耕而食、是謂同德、奚難治哉、而至于難治者、非其上有爲之故邪、甘其食美、其服安其俗樂其居、則奚至于輕死哉、而至於輕死者、非其生生之厚故輕死邪、是以、聖人無事而民自富、無欲而民自樸、則飢無有也、無爲而民自化、好靜而民自正、則難治無有也、自富自樸、自化自正、則輕死無有也、夫唯生生之厚、遂至于輕死、則無以生爲者、賢于貴生可知矣、是故、聖人不自見以外其身、不自貴以遺其生、知其無以生爲而已矣、

人之生章第七十六

人之生也柔弱、其死也堅強、萬物草木之生也柔脆、其死也枯槁、故堅強者死之徒、柔弱者生之徒、是以兵強則不勝、木強則共、強大處下、柔弱處上、

【人之生―】人は柔弱を以て生す、故曰、人之生也柔弱、堅強なるを以て死を致す、故に曰、其死也堅強なり、此二句、一章の本意なり、【萬物草―】萬物草木の生ずるは、柔かに脆ければなり、其死るは、枯槁なればなり、枯槁は古木と云が如し、【故堅強―】故とは、上を受たる辭なり、此ことわりを以てみれば、堅強なる者は、死の類なり、柔弱なる者は、生の類なり、徒は類なり、【是以兵強】是を以てみれば、兵強きときは勝たず、楚の項王の、強梁にて亡ぶるの類なり、木強きときは共す、共は拱と通す、兩手にて圍を拱と云、大木なるを云、木の本の強大なるは、下にあり、枝葉の柔弱なるは、上にあり、是又、兵と木との喩を以て、柔弱なる者の、上に處ることを云へり、○吳幼清註、木強者近根之幹、是處下也、不得如小枝之處上、推此物理、則知、人之德行、凡堅強者、矜己凌人、必屬其貴高而反處人下矣、柔弱者、衆所尊戴而得一處人上矣、

天之道章第七十七

天之道、其猶張弓乎、高者抑之、下者擧之、有餘者損之、不足者補之、天之道、損有餘而補不足、人之道則不然、損不足以奉有餘、孰能有餘以奉天下、唯有道者是以、聖人爲而不恃、功成而

不處、其不欲見賢、

【天之道ー】天の道は張る弓の如し、張る弓は必ずはづす、其張ること久しからず、天の道も又如此、高き者をば是を抑ふ、下れる者をば是を擧ぐ、足ざる者をば是を補ふ、張る弓の弛が如し、【天之道ー】天の道は餘あるを損じて足ざるを補ふ、人の道は然らず、天下の物の足ざるを損じて、己れが所欲の餘あるに奉す、孰かよく、己が所欲の餘あるを損じて、天下の物の足ざるに奉せん、只有道の人にして、己が餘あるを損じて天下のたらざるに奉ずることを爲す、【是以聖人ー】是を以て、聖人は、天下を治ることをなすと云へども、自からたのまず、功成と云へども、其功にをらず、賢徳ありと云へども、其賢をあらはすことをせず、是己れが餘あるを損じて、天下に奉するもの也、

天下柔弱章第七十八

天下柔弱、莫過於水、而攻堅強、

者、莫之能勝、其無以易之、弱之勝強、柔之勝剛、天下莫不知、莫能行、故聖人云、受國之垢、是謂社稷主、受國之不祥、是謂天下王、正言若反、

【天下柔ー】天下の柔弱なる者、水に過たるはなし、而して堅強を攻る者も、又水にまさるなし、水の積りは木石を漂し、山岳を崩す、弱の強にかつ、この水の、石に勝つより知やすきはなし、無以易之とは、水より知やすきはなき也、【弱之勝ー】弱の強にかち、柔の剛に勝つことわり、天下の人知ずと云ことなし、よく行ふものなし、十歳之童、亦識之、百歳之翁、不得行なり、【故聖人云ー】故に聖人の言に云く、國の辱を受る人は、國を保て社稷の主となる、國の不祥を受る人は、天下の王となる、垢は辱なり、不祥は不美なり、所謂知其榮守其辱ものなり、垢と不祥とを受けざるは、衆人の所爲なり、垢と不祥とを受るは、聖人の所爲なり、常の言に反するに似て、實は正論なり、故曰、正言如反、反はそむくを云、

蘇子由註、正言、合道而反俗、俗以受垢爲辱、受不祥爲殃故也、

和大怨章第七十九

和大怨、必有餘怨、安可以爲善、是以、聖人執左契、而不責於人、有德司契、無德司徹、天道無親、常與善人、

【和大怨必有ー】とは、人に對して、大なる怨みあるを和げて、怨を執の心なしと云へども、怨みの怨みたることを知ものは、至道にあらす、怨を知るの心あるは、猶餘怨あるなり、安ぞ以て善とすべし、【是以聖人ー】契は今の割符なり、木を以て作る、二つに分て各々其一を執て信をなす、財を主るものは左契を執、來て財を責めず、德の守り我にあるのみ、人にもとめず、【有德司ー】有德の人は、契を執なり、人に竟めず、無德の人は、徹を執て同異を人にもとむ、徹は明徹なり、其德をあらはし、其智を照すを云也、【天道無ー】天道私親なし、常に善人に與す、有德の人をば、天必ず是を佑く、○呂幼清註、執左契不責于人、無心待物也、契者刻木爲券、中分之各執其一而合之以表信、取財物于人曰責、契有左右、左契在主財物者之所、右契以付來取財物之人、王元澤曰、史記云、操右契以責事、禮記云、獻田宅者、操右契、則知左契爲受責者之所執、徹謂、執左契者、己不責于人、待人來責于己、有持右契來合者、則與之、無心計較其人之善否、和怨者、有心于爲善人也、不若無心待物如執左契而不責于人、徹通也、古者助法、周改爲徹法、八家私田、通力合作、而均收之、八家所得、均平而無多寡之異、司左契者、任人來取、無心計較其人、故曰有德司徹、徹法者、患其不均、有心計較而責于人之道也、

小國寡民章第八十

小國寡民、使有什佰人之器而不用、使民重死而不遠徙、雖有舟輿無所乘之、雖有甲兵無所陳之、使民復結繩而用之、甘其食、美其服、安其居、樂其俗、隣國相望、雞狗之聲相聞、民至老死不相往來。

此章、謂は、我をして、試みに小なる國、寡き民を得て、是を治めしめば、如此ならしめん、十人を什とし、百人を佰とす、使有什佰とは、什人佰人を一與とするなり、人々皆用べきの器量、材幹ありとも、用ることなく、小民は死を重じて、遠く徙て利を求むるのことなく、舟輿ありとも、乘て行くべき用もなく、甲兵ありとも、陳ねて軍をするに用なく、民をして、上古結繩世に復しめて、是を用、各々其の食を甘んじ、其服を美みし、其居を安んじ、其風俗を樂しみ、隣國たがひに相望見て、雞狗の聲相聞るばかり、近しと云へども、老死に至まで相往來することなく、無爲安靜ならしめんとなり、【甘其食】とは、甘美之食を食ふにはあらず、何でまれ食ふところの食を甘するなり、【美其服】とは、美服を服するにはあらず、何でまれ服するところの服を美するなり、是老子、戰國紛爭の世に生れて、太古の無事を思ふなり、我を用て天下を治めしめば、如此ならしめんの意なり、つら〳〵此章をよむに、太古の世、目前にあり、形容するの妙なるものなり、○繫辭曰、上古結繩以治之、後世聖人易之以書契、百官以治、萬民以察、蓋取諸夬、○蘇子由註、老子生于衰周、文勝俗弊、將以無爲敎之、故于書之終、言其所志願得小國寡民、以試焉、民各安其分、則小有材者、不求用于世、什佰人之器、則材堪什夫佰夫之長者也、事少民朴、雖結繩足矣、內足而外無所慕、故以其所有爲美、以其所居爲樂、而不復求也、民物繁夥而不相求、則彼此皆足故也、

信言不美章第八十一

信言不美、美言不信、善者不辨、辨者不善、知者不博、博者不知、聖人不積、既以爲人、己愈有、既以與人、己愈多、天之道、利而不害、聖人之道、爲而不爭。

【信言不一】眞實の言は華美ならず、華美なる言は眞實にあらず、【善者不一】善は純なり、純德は言を容るる所なし、道は本無言なり、何の辨か有らん辨ずる者は純德にあらず、【知者不一】知者は道を知る人を云、道を知るものは博識を能とせず、博識にはこるものは道を知るものにあらず、【聖人不一】聖人の道は虛一のみなり、何のつむことあらん、若し積むときは、是博識を能とするなり、聖人の道は、人の爲めに用て、我に有もの愈〳〵あり、人と與にして、我に有ものいよ〳〵多し【天之道一】天の道は萬物を利して害せず、聖人の道は、天下の事を爲して爭はず、一書の意、爭はざるを主とす、故に不爭を以て一書を結せり、德清、發解に云、此結通篇、立言之旨、以明老子立敎之宗也、

老子諺解　終

莊子俚諺鈔目次

盧齋口義序……一
盧齋口義發題……一九
穆陵宸翰……四五
逍遙遊第一……四八
齊物論第二……八一
養生主第三……一五一
人間生第四……一六七
德充符第五……二一九
太宗師第六……二六九
應帝王第七……三二四

莊子俚諺鈔

毛利貞齋講述

○莊子膚齋口義序

漆園老仙之作是書也、其見道精、其憤世甚、亦惟其隱放之跡、足以行之奇崛之文、足以發之、

此は趙宋代の林同が希逸口義成就の後、其所註を褒讃する序なり、都て七段に分て看る、【漆園】は、曹州城名、莊子衰周代の末、戰國の時に、初曹州蒙縣漆園城の吏官となりたるに依て、逐世の已後に至ても、世上より漆園老人と呼名たり、史記卷六十三、列傳第三、莊周の傳にも、莊子者蒙人也、名周、周嘗爲蒙漆園吏、正義曰、括地志云、漆園故城、在曹州冤句縣北十七里、此云莊周爲漆園吏、即此、按其城、古屬蒙縣、○大明一統志卷二十二兗州府漆園城、在曹縣西北五十里、莊周爲漆園吏、即此○又同卷四、大名府漆園城、在東明廢縣東北五十里、今名漆園村、內有莊子廟、蓋莊周爲漆園吏之所○又同卷七鳳陽府云、漆園、在定遠縣東三十里、相傳即莊生爲吏之處、【老仙】は世塵を退散して、恬淡無爲を樂、壽考なるに依て、老と云、【仙】の字を加るとても、長生を願ひ、其術を勤めたるにはあらず、死而不亡、壽、本然の心を、全不虧人なるが故に、尊崇して云、魏志卷八、張魯傳、我乃南華老仙の語あり、【作是書】とは、莊子內外雜の全部、三十三篇を指、然も後漢代、班固所撰編の前漢書卷三十、藝文志第十には、莊子五十三篇と記す、其後諸儒の意度を用て、繁雜なるを刊去て、今の三十三篇と、刊定すること、此卷末に別に記之、【其見道—其憤——】とは、二【其】字、莊周を指す、言は舊來世間に出て、漆園城の吏官に事へたる莊周は、終に官爵を廢、塵網を脫れ壽考にして、本命元辰を正しく保養する頃、是莊子と題號する書を說著し編作して、今に迄るまで、長

く傳及べるを、林同が目力を浸し、意裏に移味へば、彼莊子と、今に名殘りて、稱せらるゝ人は、無相無色なる、本然の妙道を見察すること、精粹なるが故に、戰國の衰亂に當りて、亂臣賊子多く蜂起して、紛華なるを是とし、不易の常道を埋沒することを、憤憤る意の甚しきより、世風を誡ること、如此となり、【憤世】は、韓文卷十一雜說云、憤世疾邪○韻會上聲、吻韻、憤父吻切、說文懣也、从心賁聲【亦惟—】とは【亦】字は、微妙の道を觀察すること、明白にして、世の壞亂すること、憤激して、正邪を辨別するの、敎のみならず、其上に、末世に至るまでも、亦となり、【惟】は、おもんみると訓ず、思を深くして、料簡するを云、韻會支韻、惟夷隹切、說文、凡思也、从心隹聲毛詩、載謀載惟、嚴氏曰、思之專、史漢、深惟永惟、書中に所說を熟觀覽すればとなり、【其隱—】とは、此【其】字も、莊周を指す、【隱放】は論語微子篇、虞仲夷逸、隱居放言、身中淸、廢中權の語を借用て、莊子の世塵を遠、上下の交りを斷絕するに依て、無憚意裏に所含を、語句に吐露するを云、【跡】は事跡なり、人の形に見はるゝ威儀を、行狀と呼び、意の所運動を、事迹と云、韻會昔韻、迹資昔切、說文步處也、从辵亦聲、廣韻足迹、或作遺、亦作跡、說文或作蹟、人の路を行くに、地に足迹を著ても、又早如易消に、意裏より所發、模樣に見えても、又其象を無住に依て、比喩して、云辭なり、上の【隱】字は、隱居の義にて、形に系て云、【放】は放言の義、言句に系て見る、言は心聲なれば、意慮に就て見る、【足行之】とは、古の莊子の言行を、後世に於ても模行ふに、疵はあらずとなり、【奇崛—】とは、文選卷十、潘安仁西征賦云、構阿房之屈奇、屈崎と字異なれども、崛屈二字、共に渠勿切ありて、音同きに依て通用す、韻會勿韻、崛渠勿切、說文、山短而高也、从山屈聲、增韻、又勃起曰崛起、又奇は、崎と同、丘奇切を用て、崎は韻會支韻、崎嶇山險、今此序に、奇崛の二字を用ては、義を借て、高山の嶮峻なるを、仰ぐが如くに、二帝、三王、孔夫子を罵、五倫五常の敎を黜て、無爲質樸の道を、示すを云、【足以發之】とは、【發】は發明なり、聖賢の丁寧なる、日用の敎を、緊切に守る學者が、此書に所說を見ては茫然として、奇怪の文なりと思はんずれども本體を忘れて、枝葉に拘はる徒を、匡救、本然に復歸させんことを、求むるの指示なれば、疎略にすることにあらず、篤信じ肯て、心目を用ひて、發明すべきの、文句なるとなり、

至於茫昧浩渺之莫窮、鼓舞變化之不測、蓋亦信其眼力之所及、筆刀之所至、有不自知其過於激、鄰於誕者、

【茫昧—窮】とは、無爲自然の妙道を說ことを云、【茫】は、韻會唐韻、謨郎切、茫茫廣大貌、又養韻、母朗切、沆茫、前相如賦鴻濛沆茫廣大貌と註す、上聲沆茫の義にて、莊子の所說の道は、五常五典に不拘して、萬代不易の、妙道を示すに依て、今古に通達し、有情非情に迄るまで、彌淪して、無際涯が故に、茫と云、【昧】は、くらしと訓ず、昧に依て、物色を如不見分、其道無聲無臭凡慮に難思量を云、韻會隊韻、闇也、書昧昧我思之、註、不明也、亦作曶、此書の在宥篇、至道之精、窈窈冥冥、至道之極云云、窈窈冥冥、遠而不可窮云云と、如說是なり、【浩渺】は、おほいに、はるかなり、と訓ず、韻會皓韻、浩合老切、說文澆也、从水告聲、引書洪水浩浩、廣韻、浩汗大水貌、又浩然廣大貌、大水漫漫と湛へて、無際涯が如く、所說の道、無量無邊なるを云、【渺】は淼と同じ、同書篠韻渺弭沼切、渺溔水貌と註す、其字子に、淼字を連ねて、說文大水也、从三水、或作渺とあり、如此字註を合て考れば、畢竟茫昧浩渺の四字は、無始曠劫より所發出の、造化の神、無窮盡道を、此書中に說出すを云【鼓舞—】とは、此句は、筆端の微妙なることを、稱美して云、易上繫辭第十二章云、鼓之舞之、以盡神、鼓舞ことをなし、囃起て、人を慰悅ばするが如くに、所說を一樣に不云して、時としては、堯の大聖なるも、許由に罵れ、舜に抑下せらるゝことを、受玉ふと云ひ、孔夫子も、盜跖に辱られ、漁父に黜らるゝ抔と、抑揚無常、褒貶不一が故に、聞に耳に驚かすことを云ひ、或は自己の非を不省ことを、誡んが爲に、越國の醜婦が、絕色具へたる西施が顰に効ふて、尙踈んせられ、又己が非を、自知するの喩に、夜半に惡女が、子を平產して、闇を輝す燈を、急に求るの事を、寓言するの類、實を虛にし、虛を實に說に依て、後學の徒、此書

を綴ても、所沙汰の道は、我儒教と殊なる、高尚の玄談なれば、短才の意智を加へても、測度に難儘を記留られたればなり【蓋亦一】とは【其】字は、莊子を指す、【筆力】を、異本に作筆刀愚按、上に眼力と記して、此に又筆力と云へば、字重複なり、別本の筆刀可宜か、事文類聚別集巻二十六、書簡部云、嘉何曹參、起秦刀筆吏、注、刀所以削書、古者用簡牘、故吏皆以刀筆隨、木贄、然れども筆は秦代の蒙恬始て製るが故に、上代又戰國の時までも、無筆して、刀にて簡策に刊と云說を不可用、紙筆の沙汰を、百川學海に、詳論を載たり、○百川學海甲集上學齋先生佔筆云、傳記小說多失實、只如事始蒙恬造筆、蔡倫造紙、皆未必然、蒙恬乃秦時人、詩中已有彤管、謂女史所載之筆、又傳謂史載筆、又孔子作春秋筆則筆、削則削、絕筆於獲麟、又尚書中候云、玄龜負圖出、周公援筆以時文寫之、又爾雅及說文、秦謂之筆、楚謂之律、吳謂之不聿、燕謂之弗、其來尚矣、馬大年乃附會、以爲簡牘之筆、乃今竹筆也、非毫、至蒙恬而始用兎毫耳、殊不知、莊子書中、有祇筆和墨之句、則以毫染墨明矣、竹筆豈可祇耶、莊子在秦前筆、非造於蒙恬明矣、況

崔豹古今注、蒙恬之造筆也、以枯木爲管、鹿毛爲柱、羊毛爲被、亦非兎毛竹管也、則又豈可謂兎毫起於蒙恬耶、此端由說文秦謂筆一句、以誤後世、又如蔡倫乃後漢時人而前、外戚傳、云赫蹏乃小紙也、則紙字也、恐亦非蔡倫所始、蒙蔡所造、精王於前世、則有之、謂紙筆始此二人、則不可也、漢書外戚傳、趙皇后傳云云、蘇武發篋中有棗葉二枚赫蹏書、孟康曰、蹏猶地也、染紙素、令赤書之、若今黃紙也、鄧展曰、赫音、兄弟閱牆之閱、應劭曰、赫蹏薄小紙也、晉灼曰、今謂薄小物爲閱蹏、鄧音、應說是也、師古曰、孟說非也、今書本赫字、作擗、○陳留謝肇淛所著、五雜組卷十二、物部云、太公筆銘云、毫毛茂茂、陷水可脫、陷文不活、則周初已有筆矣、衛詩稱、彤管有煒、媛神契、孔子作孝經、著縹筆、又紀筆於獲麟、莊子畫者吮筆和墨、則謂筆始蒙恬非也、崔豹古今注、謂恬始作秦筆以枯木爲管、鹿毛爲柱、羊毛爲被、所謂弆毫非兎毫竹管也、果爾、則退之毛穎傳、謂中山人蒙恬暘、以湯沐者、亦誤矣、林同が愚意を用て、料簡するに、疑ふらくは、此も、亦莊子の、諧開したる正眼、大力量の所到及殊に歷朝の文章者に、特出したる人なるに依

て、自己の筆力の妙に、所契至に任せて、說くが故に、莊子殿も、我ながら、所吐露の辭、緊切にして、罵聖賢を辱しむるに超過、無實なる事を、寓言に設けて虛誕を語るの、譏を招くに、鄒きことをも、不覺知事共が、間繁多なるとなり【過於激】とは、流水の下るに、石木の類に礙られて、波を發し、邪に躍上るを激と云、韻會、錫韻、激吉歷切、說文、水礙衺疾波也、其義を借て、無憚辭を牽強にするを云【誕】はいつはりと訓す、韻會旱韻、誕蕩旱切、說文、詞誕也、从言延聲、徐曰、妄爲大言也、俗に、口より出盡に言と、云に同じ、【鄒】は同書眞韻、近也、

其初心豈曰吾欲以此而垂世、立教哉、又豈曰吾欲以此而崇老抑儒哉、

【其】は莊子を指す【初心】とは、此書を筆記せんと、思慮を發す、最初の心を云、【豈】は俗に何ぞしもと云に同じ、虛允武助語辭云、反說以見意有、如俗語那上裏是之意、○久我李廷機操觚字要云、文中豈有、豈非、豈得、豈可、如云、怎有、怎敢、怎非、怎得、怎可也、若夫此豈山之性哉、此豈人之情哉、則又斷其決非山之性、決非人之情也、【吾】は莊子に代て言の我なり、【垂下の吾も亦同じ、【以此】とは、此書を用てなり、【垂世】とは、世間の人に、垂示してとなり、【崇】は、たつとむ、あがめる、うやまふ、おもんずると訓す、韻會東韻、崇鉏弓切、廣韻敬也、又尊也、書崇信姦回、又重也、【抑】は抑下の義なり、禮記樂記篇云、強而弗抑、鄭玄古註抑猶推也、○韻會職韻、窮屈也、止也、言は莊周戰國衰亂の時、白眼にして、世上人を睥睨して、胸中憤激するの餘を、文句に連て、筆記せらるゝ、最初の心に、此書を永、後世に傳へ、天下の諸人に垂示し、我が所敎は、在此書中として敎誡を一流、建立することを、何ぞしも願求られたりと可謂や、又何ぞしも、我所說の書を用て、受續來る、老子を崇尊し、二帝三王より、寔傳へたりと稱する、儒者の道とする處を、抑下することを、願求られたりと、可云や、一派を立て已後に至るまで、我名を鳴世ことを求むるにもあらす、我傳來する、老子の敎を是なりとし、他の儒敎を、黜けんことを、好める人にも、あらずとなり、

柰之何讀之者之不之察也、非以虛無宗之、則以異端闢之、

此第二段【柰之何】とは、林同の意より、强世間の學者を難じ尤て、云ふ辭なり、【讀之】の【之】は、莊子の書を指す、【不之察】とは、【之】の字は、上の欲以此而垂世立教にもあらずの一ッと、又崇老抑儒との、意にもあらざる二ッを指す、【察】は後學の見解察識を云、字彙、察監也、諦也、知也、至也、審也、言は莊子の本意に、我所教の一流を、立んとも不求、受來る老子の道を熾にして、儒教を蔑にせんとの求も、あらざることを、學徒其書を讀ながらも、能味知ることを不得は、如何なることぞやとなり、【非以—】とは、上語を受て、偏見の學者共が、莊子の本意を、不曉知のみならず、却て誹謗を飽まで、與へることを云、言は、世上の學徒擧て、莊子の書中には、百姓日用、仁義五常をも、蔑棄し、五倫の道をも、破却して、一向に空虛淡泊にして、一物にも、意を無住を根本とするに依て、有情の身として、枯木に齊く、寒灰に不殊ことを說て、萬物に勝れて、靈妙の德を懷信を消失ふ、癖者の張本なりと難じ、又不如此ば、莊子が沙汰する一言半句も、可見可聞ことにあらず、句句言言總て、歷世所傳の聖人の道とは、其端異にして、雲泥の違あるからは、其書は可燒、其字は可滅とて、散々に莊子の所說を折闢く、普世間の所批判、此二つに外たるは、あらずとなり、【虛無】は史記卷百三十、列傳第七十太史公、自序傳云、道家無爲、其術以虛無爲本、【宗】は水分れて、衆流となるの根源を宗と云、韻會冬韻、宗祖賓切、流派所出爲宗と註す、義を借て、凡根元根本根源と、可云事に、必宗字を用ゆ、【異端】は論語爲政篇に、始て出たる、孔夫子の語にして、子曰、攻乎異端、斯害而已、邢罔疏云、異端謂諸子百家之書、正經善道、殊途而同歸、異端之書、或糠粃堯舜、殘毀仁義、是不同歸○朱子論語集註、異端非聖人之道、而別爲一端、如楊墨是也、とあり、此にては、專ばら莊子の教を指て云、【闢】は、閉たる門戶を、開くが如くに、邪說行はれて、正道の妨となるを、削除ふを云ふ、韻會昔韻闢、匹辟切、說文開也、从門辟聲、虞書開四門、又爾雅、癸闢流川、謂通流也、通作辟、

見既出塵、語又驚世、往往句讀之未盡通、字義之未盡明、則又以疑辭闕之、脫簡諉女圭切累也之彼其心、亦豈欲得此於後之人哉、

【見】は莊周の知見なり、上に所謂眼力字に應ず、【既】は、俗に以前よりと云に同じ、韻會未韻已也、【出塵】とは、世塵の雜務を、出離したるを云、文選卷四十三、孔德璋、北山移文云、耿介拔俗之標、瀟洒出塵想、【見既出塵】の四字は、上に所謂、茫昧浩渺之莫窮、の語に映照す、【語又驚世】とは、此四字、前の鼓舞變化之不測の語を受て云、【世】は泛世間の學徒を指す、【往往】は、ところどころと訓ず、典籍便覽云、往往猶言處處也、○史記卷百二十九、列傳第六十九、貨殖傳、范蠡傳云、銅鐵則千里、往往山出棊、置、○前漢書卷八十七、列傳第五十七上、楊雄傳、甘泉賦云、逞逞離宮、師古曰、逞、古往字、往往言所往之處、則有之、○文選甘泉賦註、往往非一也、【句讀】韻會屋韻、讀字註云、又宥韻、大透切、誦書也、周禮鄭司農讀必絕之、徐邈音豆、增韻句讀、凡經書成文、語絕處謂之句、語未絕、而點分之、以便誦咏、謂之讀、今秘書校書式、凡句絕則點於字之傍、讀分則點於字之中間、通作投、文選馬融長笛賦、察度於句投、集韻或作嘖、【疑辭闕】論語爲政篇、子張學于祿、子曰、多聞闕疑、愼言其餘、則寡尤、多見闕殆、愼行其餘、則寡悔、言寡尤、行寡悔、祿在其中と仰られたる語に、闕疑の二字出たり、【脫簡】は簡編を脫落するを云、紙は後世に製れり、古は竹を切、篦の如に割、刀にて文字を刊、牛の革を用て、編連たるに依て、古書を簡編と名たり、【諉】は細字に如記、小補韻會に反切、又說文を引こと此に同じ又爾雅註疏卷二、釋言諉諉累也、註以事相屬累爲諉諉、疏謂相累及也、孫炎曰、楚人曰諉、秦人曰諉とあり、以此見れば、自己の疎才なるを不省して、要道を說れたる、難會得文段をば、悉刊除たるに依て、簡編を脫落させて、此處は受用と、することにあらずと、私言を加へて、此書の邪魔を施すを云、【彼其心】とは、【彼】の字は、莊子全部の書に系

て云、【其心】は、莊周道を說示す、本意を云ふ、【得】は後世に傳へて、留得るを云、言は、莊周の見處は、疾已前より、凡俗と遙に勝れて、世俗の塵務に不羈、出格の人なるに依て、滯境縛相底の事を、都で掃蕩し、甚深微妙の大道を明たれば、闇昧の徒が、心性に認て、難明、又今古に超越したる、文章者なれば、鼓舞變化の自由を振に依て、片言隻字に至るまで、所說の語句は、世人の耳に聞ても難解、鐵橛子を囓に似て茫然として、何をか文字に寫出たることぞやと、皆驚駭し、目前の事相を離れて、向上の一路を說くに依て、處々に礙られて、一句に泥、一讀の些なるまで、傍彼此に、其敎を不餘して、通達する人あらず、平生世人の見聞に不涉事物を寓言比喩に借雇に依て、其文字の義理をも、明むることを不得しては、此一段一句は、埒が不明、疑ありとて、至極なる金言を、闕略し、或は莊子の罵聖、黜賢の本意を、不曉に依て、斯文段は、載て、可留置事ならずと、譏を加へて、簡編前後相續したるを、漏脫して、全書の害を與ること、專なれども、何ぞしも、莊子の意に、此書を後世の遠までに留得て、後來の學者にも、敎示さんとの志ならんや、惟戰國衰敗の時に當りて、大道の要を不知して、天下皆枝葉に拘り、模樣ばかりに、飾ることを、憤激するが故に、尤時、其風を、救はんが爲のみなるぞとなり、

鬳（牛建切、鬲別名、鬲鼎屬、）**齋先生玉堂林公、得聖人之道於樂軒、樂軒之視漆園、所謂後世之子雲、鬳齋之於樂軒、則太玄之侯芭也、**

自此第三段とす、此段には希逸が聖人の道統を、樂軒先生陳元潔より受傳へ、剩莊老の奧義までを、其門にて通徹するに依て、前代莊子を未得曉明學者の、刊非顯正の功を說く、【鬳齋】は希逸書齋の號なり、凡學者齋號を稱すること、側聲晉代に、殷仲堪が、小舍を構へ、其中にて、常に書卷を讀たるを、百姓より讀書齋と呼たるより始れり、齋はものいみと訓ず、字義は潔齋の意を用ひ此に閑居して、世事を放下し、貧富貴賤を忘れて、自己の思慮を明潔に養ふことを、要とすればなり、事物紀原卷八云、漢宣帝齋居決事、此齋名之起也、晉太和中、陳郡殷府君、引水入城穿池、殷仲堪、於此池北、立小舍讀書、百姓呼爲讀書齋、則齋之始、疑自此○小補韻會皆韻齋莊皆切說文戒潔也本作𩫖、从示𩫖聲、𩫖古齊字也、示齊爲齋、示明也、祗也、齊者萬物之潔齋也、隸作齋、又燕居之室曰齋、禮記齊之爲言齊也、齊不齊以致齊、經傳齋字、多作齊○事文類聚續集卷八云、齋潔也、說文、或曰、齋謂夫閑居平心、以養思慮者、於此、而齋戒也、歐陽公東齋記、希逸の書齋を、鬳齋と號したるを、近世本朝の儒者、臆見を加へ、鑿說を設て、後學を惑すことあり、其說に、細字に見えたるが如く、鬳鼎屬なりの、義に牽れて、此人老莊列の、三書に達して、口義を作ること、猶三足鼎と云ひ、又は希逸の、學術は儒敎に長ずるのみならず、三敎共に達するが故に、三足の鼎に、表し比たりと云、斯等の說合て當閉聞、希逸の本意は、此書の末林經德後序に、鬳其書室也、子號弓齋、父子以器名齋とあり、前の兩說の如くならば、我學を自負するの意なり、不可用は必せり、【玉堂】は學材秀逸の人、朝廷に登庸られて、翰林院に住、天子の玉堂に進て、文筆の事を、掌に依て、翰林の官となる者を、玉堂と稱す、唐太宗賜蘇易簡詩に、翰林承旨貴、淸淨玉堂中の句あり、杜子美が句にも、上君白玉堂、倚君金華省○東坡詩集卷一注に、翰林院公廳、謂之玉堂、文選卷四十五、揚雄解嘲云、歷金門上玉堂註、濟曰、金門天子門也、玉堂天子殿也、晉灼曰、黃圖有大玉堂、小玉堂、希逸は南宋理宗朝に、翰林學士の官を歷たるに依て、今此にも、其文學、君の寵感を得たることを、彰さんとて、玉堂林公と記せり、希逸の傳は、次自序の下に記すが故に略之【聖人之道】とは、二帝三王以來孔曾思孟續來る道統の傳を云、

希逸道學傳來之圖

艾軒（林光朝字謙之、莆田人也、從學程子門人尹彥明、得聖人之道）

綱山（林亦之字學可福淸人）

樂軒（陳藻字元潔福淸人）

竹溪（林希逸、字肅翁、福淸人）

【樂軒】明朝黃文炤所編道南一脈卷八云、陳藻字元潔、號樂軒、福淸人初從亦之于綱山、又從于紅泉、會讀國

風于古寺、吟諷累夕、俄至采蘋、掩卷而泣、頓得中庸之旨、亦之遂以藻見光朝、光朝喜曰、吾嘗語、若詩不歌、易不畫、無悟入處、而今於是尤益信、吾詩不亡矣、乃授其拜而接之若孫、藻因爲通儒、遂嗣亦之講席○劉后村序樂軒集略文云、樂軒七十五乃死、年出於其師、而窮尤甚於其師、城中無片瓦、僑居福清縣之橫塘、開門授徒、不足自給、至讀其文、講學明理、浩乎自得、不汲汲於希世求合、螢窗雪案猶宗廟百官也、菜羹脫粟、猶堂食萬錢也、入則課妻子畊織、勤生務本、有拾穗之歌焉、出則與諸生絃誦、登山臨水、有舞雩之詠焉、自昔遺佚阨窮之士、功名頓挫、時命齟齬、往往有感時觸事之作、以洩其無聊不平之鳴、若虞卿之愁、韓非之憤、墨翟之悲、梁鴻之噫、唐衢之哭是已、樂軒平生、可愁、可憤、可悲、可噫、可哭之時多矣、而以樂自扁、樂之爲義、在孔門、唯許顏子、先儒教人、必令求顏氏之所樂、嗚呼此固樂軒之所聞於二師與、樂軒歿二十餘年、余從竹溪林侯肅翁、傳抄遺藁、姑叙其平生大致如此、肅翁又樂軒之高弟也、他日居魏文貞之地、秉陳叔逵之筆、當爲河汾先生、立傳、無使天下後世、有遺恨云、○又本傳は宋史卷四百三十三、列傳第百九十三、儒林傳に載たり、【後世之子雲】とは、李唐代の韓退之が平生文章を著述するに、時の風俗に不汚、詞華言葉の飾を不用、好古六經の正道を說くことを、干要とするに依て、其文世に不賞、却て譏を招くこと多きを、同時馮宿字拱之と云文人より、韓退之が許へ、書を贈り、時世の意に不相應、文章を作られては、仕官の妨ともなり、他人の謗を、釣より外はあらず、深奧の文章は、爲身無益、と、親意の厚より、言遣したる時に、退之が返翰に、古前漢代に揚雄、字は子雲と稱する大儒、聖人の易に效て、卦畫を立て、陰陽消長吉凶悔吝の理を示し、太玄經と名る書を作たるを、其理幽深にして、難思量を、却て世上より揚雄を謗て、太玄の題號は、至極幽玄を曉さしむるとの、自負ならんずれども、其玄は白地なる事なりとて、玄尙白と、罵を受たる時、揚雄が返答に我所說玄玄なるに依て、當世に無知人、後世を竢て、我心に不異人、復世に興らば、必此書を好むことあらんと云ひたるが如く、某が所述の文章も、學材我に同人、於今あらざるが故に、其意味を無解世を過して、以後に、我學と一致なる人出て、此文を可知

との意を書中に記したる、故事を借て、趙宋代の樂軒先生の心目にて、年代舊たる莊子の說傳餘されたる、玄理妙道を、末世に於て、明たることは、比べて云へば、揚子雲が、太玄經を作ての後に、子雲に不殊人は、可知と、韓退之が返書に、書遣したると、同じとなり、然れども揚子雲が語に、後世有揚子雲必好之の語は、無之、退之が與馮宿論文書の中に、其意を斟て、云へる辭にして、韓文卷十七に載たり、其意の本は、前漢書卷八十七、列傳五十八、揚雄傳、鉅鹿侯芭、嘗從雄居、受太玄法言焉、劉歆亦嘗觀之謂雄曰、今學者祿利、尙不能明易、又如玄何、吾恐後人用覆醬瓿也雄笑而不應、年七十一、天鳳五年卒、侯芭爲起墳と記す○韓文與馮宿論文書云、辱示初筮賦、實有意思、但力爲之、古人不難到、但不知直似古人、亦何有得於今人也、僕爲文久、每自則意中、以爲好、則人必以爲惡矣、小稱意、即人亦小怪之、大稱意、即人亦大怪之、時時應事作俗下文字者、下筆令人慙、及示人、人必以爲好矣、小慙者、亦蒙謂之小好、大慙者、即必以爲大好矣、不知古文眞何用於今世也、然以竢知者知耳、昔揚子雲著太玄、人皆笑之、子雲之言曰、世不我知無害也、後世有揚子雲、必好之矣、子雲死近千歲、竟未有揚子雲、可歎也、其時桓譚亦以、雄書勝老子、老子未足道、子雲豈止與老子爭強而已哉、此不爲知雄者、其弟子侯芭、頗知之、以爲其師之書、勝周易、然侯之他文不見於世、不知其人果如何耳、以此而言、作者不祈人之知也明矣、直百世以竢聖人、而不惑、質於鬼神、而不疑耳、足下豈不謂然乎、近李翺從僕學文、頗有所得、然其人家貧多事、未能卒其業、有張籍者、年長於翺、而亦學於僕、其文與翺相上下、一二年業之、庶幾至于至、然閔其棄俗尙、而從寂寞之道以之爭名於時、久而不談、聊感足下能、自進於此、故復發憤、一道愈再拜と、韓子が所云は如此、然も古語を、用るの法に、其事を直に、意を不變して、述ることを忌むが故に、韓子が語と反覆して、此には用ひたり、韓子は揚雄が太玄經を、我文の深奧なるに比べ、其意を借て、當代こそ知人あらざれども、已來に明知人あらばとの意なり、此序には韓子が語を雇て、樂軒先生は、莊子より、年代已後に出られたれども、其書に所說の玄奧に、能通徹せられたるからは、生死

年代の隔遥なれども、千載の一會にして、彼所謂後世の子雲と、阿云は、此人なりと、醮粲して、用たる處が、學者の機轉なり【虞齋之一】とは、子雲が太玄經の故事を、借用たる緣語を受て、希逸は莊子の玄義を會得せられたる、樂軒の高弟にして、同く莊子の敎を、致したるを、今希逸は、逐一其理を、曉得るが故に、每篇奥儀を著明するとなり、上に所謂脫簡誂之の語に應ず【分其章焉】とは、上の以疑辭闕之に應ず、一章一章の敎、希逸の註に據て、分明なるの功、あるとなり、【析其句焉】とは、上の往往句讀之、未盡通に應ず、希逸の解釋明白なるに依て、一句一讀の間までも、莊子の語脈機鉾を見る人に、無疑となり、【析】は、わかつと訓ず、又きめきるとも訓ず、韻會錫韻先的切、說文、破木也、一曰、析也、从木从斤、徐按詩析薪柞矣、又分也、【明其字焉】とは、上の字義之未盡明に映ず、一字も其義を不釋はあらずとなり、此までは、前に所云の、往往より已下、脫簡誂之の語に當て、逐一此書の妨を正すことを云、【使篇一】とは、已下は希逸註釋の功を、上に述べたるを承けて、自今已後は、如日星麗天に、此書に一毫も無疑、其理明下の學者の爲に、廣大の補益あることを云、【出】とは、希逸衆に秀出るなり、【爲之】の之は、莊子の書を指す、【著其一】とは、四【其】字、皆莊子の書に系て云、【著】とは、希逸より以前に數十人の註者あれども、人々意裏に、不徹得に依て、簡編を脫落させ、種種の害を、曉得るが故に、今希逸は、逐一其理を、曉得るが故に、每篇奥儀を著明するとなり、上に所謂脫簡誂之の語に應ず、【分其章焉】とは、上の以疑辭闕之に應ず、一章一章の敎、希逸の註に據て、分明なるの功、あるとなり、【析其句焉】とは、上の往往句讀之、未盡通に應ず、希逸の解釋明白なるに依て、一句一讀の間までも、莊子の語脈機鉾を見る人に、無疑となり、【析】は、わかつと訓ず、又きめきるとも訓ず、韻會錫韻先的切、說文、破木也、一曰、析也、从木从斤、徐按詩析薪柞矣、又分也、【明其字焉】とは、上の字義之未盡明に映ず、一字も其義を不釋はあらずとなり、此までは、前に所云の、往往より已下、脫簡誂之の語に當て、逐一此書の妨を正すことを云、【使篇一】とは、已下は希逸註釋の功を、上に述べたるを承けて、自今已後は、如日星麗天に、此書に一毫も無疑、其理明

白にして學者心性に裁て、易會得ことを云、上は希逸の功を、逐一に分て云、此には其功を後學受被ることを云、言は三十三篇の中、何篇にても、難解得とする、一章もあらず、章の中に、一句、一句の中に、一字にても、此文字の義は、如何と未審も、あらすとなり、○韻會先韻、篇綖延切、詩書一篇一義、篇聯也、詩關雎註疏、篇偏也、出情鋪事、明而偏也、○南梁朝劉勰文心雕龍卷七云、夫設情有宅、置言有位、宅情曰章、位言曰句、故章者明也、句者局也、夫人之立言、因字而生句、積句而成章、積章而成篇也、○袁了凡綱鑑、後漢章帝紀註云、意斷處曰章、言斷處曰句、○毛詩正義云、句局也、聯字分局言也、

向之虛者以實異者以同疑者
以信脫者以完而南華一經歷
幾千百歲始得爲天地間全書
豈惟老仙將雀躍於九萬里之

【向】は嚮と同じ、さき、むかふと訓す、韻會漾韻、嚮許亮切、面也、對也亦作向、已往の學者が、莊子を惡見損て、虛無を干要に導と、難じたれども、今希逸の註釋に依て、目前日用を不離、實事を示すこと明に、異端を奬るぞと譏たるも、今は三敎一同の道となり、見人懷疑惑たるも、今は心中に通徹して、誠信の敎なりと感じ、難解とて、脫去たるも、今は隻字半言も、無滯が故に、可除一章もあらず、此皆希逸の註釋の大功にて、數百千年を歷て廢頓せられたる、南華老人の一經、忽上天下地の間に、人々不緗不學して、踈略に非可爲後世まで、長く可傳示萬物同體の理を、廣大に全備したるの書卷と、尊崇せらるゝことを、始めて得たるとなり【南華一經】は、莊子全部を指す、南華は、素莊子を、李唐玄宗より、諡號に賜はれり、事物紀原卷二云、莊子號、唐會要曰、天寶元年、二月十二日、追贈莊子南華眞人、三月十九日、李林甫奏、文子、列子、莊子、庚桑子、其書各從其號爲眞經、如此を以て見れば、古往は、此書も子書の中に混雜したるを、玄宗の朝に、李林甫が奏聞に依て、經書となり、南華眞經と、傳言なり、

上、樂軒亦必且手舞足蹈於瞻前忽後之間矣、

【老仙】は此序の發端に、漆園老仙と記したるが故に略して、此には、老仙の二字を用ゆ、【雀躍】は、末外篇在宥篇に、出たる字なり、在宥篇には、作雀躍所謂歡喜踴躍なり、雀爵共に即約切にて通用す、韻會爵字註云、盡也、足也○又雀字註云、通作爵、とあり、然れば、此に雀躍の字は、雀鳥の跳躍するが如きとの義にあらず、歡樂至極にして、不覺踴躍するとの義なり、【九萬里】は逍遙遊篇に所謂、大鵬九萬里の字を借て、凡人死して後、魂氣歸于天、形魄復于地、との事は、聖人の命根、往代に倒景に滅沒し、昔人と呼れて、今此世間に、不レ存を云はん爲なるべし、【手舞足蹈】は、禮記樂記篇、及孟子離婁上篇に、不知足之蹈之手之舞之の語あり、彼には、音樂の和に、人心悅感することを云、此には、其字を借て、希逸の註に感ずるを云、【瞻前忽後】は、理の微妙なるを稱する、異名と可見、論語子罕篇に出たる、顏子の辭にして、夫子の道を、讃歎して云へり、子罕篇云、顏淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽彌堅、瞻之在レ前忽然在レ後、此にては、語を借て、南華老仙所吐露の妙道は、醉泉を絶たることなければ、模索不著なるを、樂軒門人希逸の解釋にて、青天に輝、白日の如くなるが故に、師資の意、如合符節にして、往世の南華の意に、彼後世の子雲を得たるの、歡喜のみならず、同時の師範となりし、樂軒先生も、偕も無其形象、蘊奥の道に、註脚の功を遂たりと、感歎の餘りに、不覺手には、舞ことをなし、足には、小拍子に應て、蹈躍らるゝ底なるべしとなり、

或曰、以性命之書、加訓詁之學、若朱夫子所謂集大成者、其自易經以至騷詞、莫不有釋、乃獨闕然於莊書者將無不可哉、

自此第五段とす、或曰とは、實に他人此論をするにあらず、俗儒必可批判事を、先立て酌が故に、借に賓主を設て、下に委悉に論せんが爲なり、畢竟は、自問自答なり、【性命之書】とは、泛聖賢所教示の、五倫五常共に、天命の所賦にして、自己の性分に所有なることを曉さしむる、四書六經の類を云、易乾卦彖辭云、乾道變化、各正性命、朱子本義云、物所受爲性、天所賦爲命、大全朱子曰、乾道變化各正性命、總只是一箇理、此理處處相渾淪、如一粒粟生爲苗、苗便是生花花便是結實、又成粟還復本形、一穗有百粒、每粒箇箇完全、又將這百粒去種又各成百粒、生生只管不已、初間只是這一粒、分去物物各有理、總只是一箇理、【訓詁】は訓は訓導なり、詁は其事を、通曉させんが爲に、往古來今の言を合て、知らしむるの義なり、畢竟此二字は、註釋の異名と可見、或作訓故、○前漢書卷四十八、列傳第十八賈誼傳爲左氏傳訓故、註、師古曰、故通其指義也、○同卷八十八、儒林傳五十八訓故大義、註、故謂作詁也、○爾雅序、通詁訓之指歸、註、詁古也、通古今之言、使人知也、訓道也、道物之貌、以告人也、【朱夫子】は、趙宋代大儒、朱文公なり、宋史卷四百二十九、列傳一百八十八、道學傳三云、朱熹字元晦、一字仲晦、徽州婺源人、父松字喬年、熹幼顯悟、甫能言父指天示之曰、天也、熹問曰、天之上何物、松異之、就傅授以孝經、一閱題其上曰、不若是

非人也、嘗從群兒戲沙上、獨端坐以指畫沙、視之八卦云云、○宋史新編、列傳百四、伊洛淵源續錄等載傳、【集大成】は孟子萬章下篇に、孟子の伯夷、伊尹、柳下惠、孔夫子、數子を、聖之清者也、聖之任者也、聖之和者也、聖之時者也と、遂一評論ありての後に、孔子之謂集大成也と、讃歎なされたる語に出たる字なり、此語を用て、朱文公の功に配して云ふことは、其學術特出するが故に、經傳の註釋を、爲後學多下し玉ふを、强稱美するの意あるに、依てなり【自易一有釋】とは、上の加訓詁之學の字を受て、諸書に註釋あることを、以至の二字を用て、句中に約て云、【以至】は、乃至と云ふに同じくして、超間之辭なり、大學經文云、自天子以至於庶人壹是皆以脩身爲本、朱文公の所著、有易本義、易學啓蒙、易著卦考誤、詩經集傳、大學中庸章句、及或問、論語孟子集註、太極圖、通書、西銘等解、楚辭集註、辨証、韓文考異、所編次有論孟集義、孟子指要、中庸輯略、孝經刊誤、小學書、通鑑綱目、朱名臣言行錄、家禮、近思錄、河南程子遺書、伊洛淵源錄、儀禮經傳通解、【騷詞】とは、楚詞離騷經を云、【釋】は、とくと訓ず、正文の義理を、初學難曉を、英儒贍

聞の人、洪筆麗藻を施して、解釋するを云、韻會昔韻、釋施隻切、說文、解也、从釆、釆取其分別物也、从睪聲、【獨闕—】とは、【獨】は同書、屋韻、單獨也と註す、群書に解釋を加へ玉ふに、此莊子一部の書のみ、解釋の功を用ることを、欠闕し玉ふは、徒なることにはあらじ、朱文公の意に不應して、不可なりと、憎玉ふに依てならんとなり、何樣如朱子眞儒は、不許容からは、世間の批判するに同じく、異端の敎ならんと、不肯底に云ひて、次段に系て、微細に云はん爲なり、

同曰、上規姚姒、下逮莊騷、非韓公之言乎、晉宋人未足盡莊老、實處、非朱子之言乎、不然豈其猶有所未盡邪、抑果有所待而然耶、

自此第六段とす、前段の自答なり、【上下】二字は、上代下世の義に可見、【上規—莊騷】の句は、韓文卷十二、進學解に出たる辭なり、【姚】は韓文註云、姚虞姓

○史記卷一、五帝本紀云、虞舜者、名曰重華、正義曰、孔安國云、華謂文德也、言其光又重合於堯、瞽叟姓嬀、妻曰握登、見大虹、意感、而生舜於姚墟、故姓姚、【姒】韓文註、夏姓也○史記卷二、夏本紀云、禹遂即天子位、南面朝天下、國號曰夏后、姓姒氏、註、禮緯曰、祖以呑薏苡生、【規】は凡格式手本にするを云、韻會支韻、均窺切、說文有法度也、从夫从見、徐曰言爲可聞、行爲可見、言有規矩也、會意字、【晉宋人—】は、此語朱子語類卷百三十七云、晉宋人多說莊老、然恐其亦未足以莊老之實處、【晉宋】は二朝名、三國、衰亂の後に、魏臣司馬懿が孫、炎專權受元帝之禪、遂篡曹氏、號晉世、五代五十二年、其後元帝、中興傳世十一、歷年一百三年、而晉臣劉裕、遂篡晉位、號宋、傳世八主、六十年亡、言は上の難問に對へて、莊子の書を黜くまじきの證據を、二箇條を擧て云、汝の如言に、必疎ずまじきの證據あり、孟子沒後に、聖學不傳をも、繼絕世上に、高鳴名て、易に比しては、太玄經を作り、論語に配して、法言の書を說て、天下の學者に、泰山北斗の如くに、仰がれたる、韓文公自作の、進學解にも、上古には姚氏の舜、姒氏の禹の道を

模寫し、下世には、莊子の恬淡の敎、屈原の忠誠の志を、文字に寫したる離騷經に至るまでと、自己學術の表的とすることを、不吐露や、又前代司馬晉、劉宋の代に迄るまで、王弼何晏を魁として、竹林の七賢、王衍、衞玠、餘多の人、莊老の書を好て、信仰すれども、其極位眞實の處に至ては、未足明盡と云ひたるは、趙宋代に、道學の傳を續受たりと、天下に尊擧する、朱文公の言句ならずや、可抑下ことあらば、韓氏朱氏の兩文公、此語を可出や、其說妙道なりと、肯ふこと厚く、其理的當なりと感ずるにあらずや、【不然】とは、俗に左樣にては、あらずと云に同じ、上或曰字を受て、汝が所言の如きには、あらずとなり、【豈其—然耶】とは、此二句朱文公の他書には多く註釋を施し玉へども、莊子に無註脚ことを、林同が意を用て、料簡することを云、道に長じ、理に不昧が故に、爲後學、群書に註釋を施すことを不倦朱文公の、莊子一部に、不染指ことは、我熟思量するに、莊子の所說、勝れて幽深微妙なるに依て、其玄義を有所未明盡が故か、此一又は一朝一夕に非可下手、幽深の沙汰なれば、若天より我に、假年ことあらば、晚年に至るとも、其敎に我意純熟するの時を、決定して、有所待が故に、如此無施其功して、徒過たるかならん、此二には、不外となり、二【耶】字、字彙于遮切、音夜平聲、疑辭、○久我李廷機操觚字要云、耶此字、亦與哉字相近、但咏嘆之意、比乎哉字、趣味較長、如文中、云此何時也而可以如此耶、其婉曲之味、細玩當自見矣、【抑】はそも〳〵と訓じて、數義あれども、此にては、俗に但又と云ふに同じ、反覆して、疑ふの意に、用ひたり、左傳莊八年、抑臣又聞之、杜預註、抑疑辭、【果】は字彙決也と註す、果敢決斷の義なり、【有所待】とは、朱文公の意に、己を謙下して、俟後之君子と云意に、世儒は講辨すれども、愚意には、不肯之、韓文卷十四、重答張籍の韓退之が書中に、所謂今吾之得吾志、失吾志、未可知、俟五六十爲之未失也の語に、根て云へるならん【然】は助語辭云、然訓如是、曰然以爲然、皆是許其是如此、

虞齋之功、當不在朱子下矣、

言は、歷朝の久しき間、諸儒此書を崇尙しても、其正義に契ふことを不得に、今虞齋の註釋の大功に依

て、天下の全書となること比べては、朱子の群書に、解を下し玉ふと、可ㇾ齊ㇾ肩となり、【功當不ㇾ】とは、韓文卷十八、與ㇾ孟簡尚書ㇾ文云、愈嘗推ㇾ尊孟氏ㇾ以爲ㇾ功不ㇾ在ㇾ禹下ㇾ の語意を模寫して、希逸の註を、褒美す、【功】はいさをしと訓じて、凡勞苦を重ねて、其驗を廣大に遂たるを云、韻會東韻、沾紅切、說文、以勞定ㇾ國也、从ㇾ力工聲、周禮司勳、王功曰ㇾ勳、國功曰ㇾ功、廣韻功績也、又爾雅成也、註云、功績皆有ㇾ成也、

同懼夫學ㇾ者忘ㇾ昔之難ㇾ樂ㇾ今之易、而或至於忽ㇾ之也、故重言ㇾ焉、

自ㇾ此至ㇾ末、第七段、此序の結末とす、此には希逸の註功に依て、天下に補益あることを云、【夫學者】とは、林同と時代同じき、趙宋の天下の學徒を泛指て云、【昔之難】とは、希逸より以前、晉宋已來、諸儒の註は、皆南華老人の本意と齟齬するが故に、後進晩學、其註を便にして、本書の義理を窺へども愈疑惑重て、難ㇾ曉明ㇾ を云、【今之易】とは、希逸の口義は、前儒の非說を除き、正義を示し、然も俗言俚語を用て、記すに依て、其理には易通、其語は易讀を云、言は希逸の註釋、世に行はれて、莊子の敎は、日出乾坤朗ㇾ が如く、明白なるに依て、林同が意にも、歡喜踊躍の餘に、熟思へば、却て氣遣ことあり、當世の學者共が、今日希逸の註に就て、玄理易曉ことを、悅樂ばかりにて、已前未熟なる註にて難ㇾ明ことを、頓に打忘れて、南華の敎は、强て如ㇾ聖「戞然」ㇾ 子ㇾ ことならず、何時にても、希逸の註だにも繙讀ぞならば、悟入すること決せり、と云て、大功を盡されたる註本は、蠹魚の肆にし、拋擲する底ならんかと、存ずるが故に、上に希逸註釋の、大功あることを、述たる上にも、其註を踈忽に、させまじき爲に、笠上戴ㇾ 笠に似たれども、再三重て云ぞとなり、【懼】は韻會遇韻、衢遇切、音與ㇾ遇同、說文、恐也、从ㇾ心瞿聲、○又廣韻欋俱切、怖也、史記孟子傳、懼然顧ㇾ化、俗に氣遣すると云に同じ、【忽】韻會沒韻、呼骨切、輕也、

景定辛酉季夏望日、石塘林同謹書、

【景定】は南宋第五主、理宗の年號なり、【辛酉】は第二年、相ㇾ當本朝人皇第八十九主、龜山院、弘長元年、今茲本朝、元祿十五年より逆考すれば、四百四十八年已前なり、【季夏】は六月の異名【望日】は十五日を指す、韻會去聲宕韻云、無放切、說文月滿也、與ㇾ日相望ㇾ、如ㇾ朝ㇾ君也、从ㇾ臣、从ㇾ月、从ㇾ壬、壬朝廷也、徐曰、假借作ㇾ望ㇾ、增韻、今經典通作ㇾ望、後律歷志、分ㇾ天之中、相ㇾ與爲ㇾ衡、謂ㇾ之望ㇾ、謂ㇾ月半日月正相對、其平如ㇾ衡、左傳註、月體無ㇾ光、待ㇾ日照而光生、半照即爲ㇾ弦、全照乃成ㇾ望、交在ㇾ望前、朔則日食、望則月食、交在ㇾ望後、望則月食、後日朔則日食、交正在ㇾ朔、則日食既、前後望不ㇾ食、交正在ㇾ望、月食既、前後朔不ㇾ食、大率一百十三日有ㇾ餘、而道始一交、非ㇾ交、則不ㇾ相侵犯、故朔望不ㇾ常有ㇾ食、周禮卿士註、月大、十六日望、月小、十五日望、【石塘】は大明一統志卷四十、湖州府、石塘在ㇾ德濟縣、東北一里、臨大溪、即古之武承塘東、西岸爲ㇾ西石塘、聯接數里、【林同】は姓は林、名は同なり、氏族排韻、及萬姓統譜、大明一統志等にも、傳を不ㇾ載が故に、事蹟不詳、

○莊子虞齋口義發題

虞齋林希逸

此希逸の先輩所註を、革て、新註成就して、後の自序なり、【口義】とは、我所註は、初學の難解言句を、用るにあらず、平生相聚て、口號にする、街談衢話の卑劣なるを不ㇾ厭して、莊子の敎高尚なる義理を、暗昧の徒に迄るまで、易曉ことを、一向に願ふに依て、假にも詰屈聱牙なる辭を、不ㇾ雜となり、此書末に載たる希逸と、同ㇾ師林經德が、莊子後序云、此書以ㇾ口義名者、謂ㇾ其不ㇾ爲ㇾ文、雜俚俗而直述ㇾ之也、【發題】とは、序の異名と可ㇾ見【發】はあらはすと訓ず、發開て、說明すの意なり、韻會沒韻、方伐切、舒也、明也、舉也、揚也【題】は後漢代趙岐が、孟子七篇の書を、註釋の功畢て後に、序を加記す時に及で、平生其意に不ㇾ慕、舊、新しく異なることを好むが故に、序と不ㇾ言して、孟子題辭と號したるに根て、此にも題字を用ひたり、韻會齊韻、題田黎切、額也と註す、人の額は、對ふと其儘、五體の內、何くは未ㇾ見ども、先著るゝが故に、義を

借て、書の序は、巻頭に存して、本文には、何事ありとも、未知とも、第一に、其大綱を示すに依て、序は比べて、猶額の意にて、此には、希逸作註、莊子の事蹟及び其書の玄奥なる理、先儒の批判註釋區なるまでを、巻頭に要略して、發明すの序なるぞと云意なり、張傅四書註疏大全、張益釋云、孟子題辭、即序也、趙註尚異、故不謂之序、而謂之題辭、

【鳳齋】齋號の解は、前の林同序抄に記す、【林希逸】は道南一脈巻八云、林希逸、字肅翁、號鳳齋、福清人、事師陳藻、藻之學出於林亦之、亦之出於林光朝、其授受遠有源委、初爲平海軍節度推官、以清白稱、淳祐中、遷秘書省正字、因對乞信任給諫、又乞蚤決大計、以慰人望、理宗皆開納、歷翰林學士、兼崇政殿說書、出知興化軍、下車首詔學者、自南渡後、洛學中微、朱張未起、以經行倡東南、使知聖賢心、不在於訓詁者、自莆田夫子始、初疑漢儒不達性命、洛學不好文辭、使知性與天道不在文章外者、自福清兩夫子始、學者不可不知信從也、南夫子者、林光朝、兩夫子、亦之藻也、因爲三先生祠記、光朝、亦之、藻併錄、其遺文、以傳、景定四年、爲司農少卿、舉亦之、藻、爲有道之士、及林公遇幼承父澤、奉親不仕、益乞裒崇詔誥、亦之文介、藻文遠俱贈迪功郎、公遇誥文隱、進贈原官一級、有司爲三人樹表、書誌記之學官、希逸初學詩於陳藻、藻書劉克莊詩語之、希逸少克莊七歲耳、因而定交、才名相埒、願時之評者、謂希逸文、有楷範而遒於理學優之、克莊序希逸詩、以宋自光朝三傳至希逸、比之于師、稿而潤矣、散而密矣、嚴而紓矣、搜索如象罔之求玦、斲削如巨靈之施鑿、經緯如鮫人之織綃、及其得手應心也、簡者如蟲魚小篆之古、協者如韶鈞廣樂之奏焉、偶者如雌雄二劍之合焉、文天祥稱、其不戚戚得喪、而言語文章、足以詔今傳後、終中書舍人、所著有易講、春秋正附篇、老莊列口義、巧工記解、竹溪十一稿、按三山之學、自福唐王信伯、而施鹽官方次雲又一派、從南夫子來者爲福唐兩夫子、陸學也、質之羅李、合脈、紫陽晩年契心、其如至希逸無傳何、此非余言、郭萬鄰先生之言也、悠悠三四百年、馬恭敏、王黍竹、諸公出、兩夫子之道復振、子長不與恭敏爭乎、惜乎蚤世不及見其成也、引證郭萬程曰、自道學興、

詞命多鄙、光朝之門儘爲斐然、且閩自楊氏道南獨光朝可接羅李之宗、惜倫未深知者至希逸而亡傳矣、按するに、希逸は、本朝人皇後西院、明暦元年、入朝して、攝州富田庄普門寺に入院して、寺號を福元寺と改め、四來の大衆を會て、法幢を建たる隱元隆琦禪師法嗣即非如一禪師の先祖なり、即非禪師入朝の後に、異域連年の、兵戈の亂に罹て、先祖希逸老子口義、斷絶したることを歎き、我國に存傳はるを、幸として、梓人に命じ、新に翻刊して、彼地へ贈書の序文略云、是書傳至東國、將三百載、陰翼王化多矣、惜無序文、不紀世次只標鳳齋林某、後學不知爲何許人、時有洞上座者博通古今知是閩産、一日謁予致問曰、鳳齋居士、是貴族否、曰先遠祖也、因慮唐之一自三產、兩悟分一宗、尋補宸翰圖像、及省邑之名、前後二號、以便後之學者、知予祖之生緣出處、敢督逃焉、祖諱希逸、字肅翁、號竹溪、宋端平乙未會魁、嘗爲玉堂文字官、鳳齋其書室也、早年潛心此道、屏去腥羶、先從樂軒陳先生學、次參柔萬菴禪師、深有得于三教合一之眞、爲政之暇、釋三教之書、皎如三光、豈非世出世間之人表哉、其所著有易講、春秋傳、楞嚴維摩註疏、老莊列口義、及竹溪集等書、傳流布、歷今四百餘祀、隨世浮沈、十存四五、予幼時披誦不置、自學佛後、無復經目、不意甲辰秋、飛錫豐州、寓源太守之金粟園、重覩是書、不勝欣慰、但歲月久遠、版經幾翻、字至亥豕脫誤、且中間入一二語、不知何人增贅、與本文不相照合、甚戾當日作者之意、由是仍家傳舊本、而刪正之、遂捐鉢資、付梓、用廣流通、遠祖手眼、重新云云、遠孫即非頭陀如一和尙、書於蓬萊方丈、

莊子宋人也、名周字子休、生睢陽蒙縣、在戰國之初、與孟子同時、隱遁而放言者也、

此序六段として見る、【莊子一】とは、此には希逸其事蹟の大概を記すが故に、予初學の檢閲を助けん爲に、末に別記す、【宋人也】は、按李唐代韓退之が博洽なる才にて、送孟東野序に、莊周以荒唐辭鳴楚と筆せり、然も宋國と楚國は、始春秋の時に、其主を異にし、

土地も犬牙の境を爭たれども、戰國の時に、楚國より、宋を滅ぼし、其地を併取ること史記に見えたれば、楚を宋と云ふも、可なり、○史記卷三十八、宋世家第八云、王偃四十七年、楚滅宋取之○又所考訂の韓文本文、無於楚二字、註云、或有於楚二字、非是、莊子蒙人、蒙梁地、且辭楚威王之聘、未嘗仕楚云云○猶末に附出する、史記莊子本傳註に詳なり、【戰國之時】とは、周第三十二主、威烈王第二十三年に、晉國の魏桓子、韓虔子、趙襄子の三臣、獻公の遺迹を滅し、國を三分に割つ、魏氏、韓氏、趙氏、各其姓を、所取掠の地に名て、魏、韓、趙、の三國とす、威烈王二十四年に、楚國より、舊國楚王當を殺す、國人當の子類を立て、悼王と云、此戰國の楚王の始なり、其後周安王十三年に舊國齊大夫田和威を熾にし、王に請て、十六年に始て、諸侯に列なる、又其後、顯王の三十二年に、舊國秦孝公の子、惠文王立、同三十七年に、舊國燕文公の子、易王立、舊國と稱するは、成周の朝に、國に封せられたる、燕秦楚を云、韓魏趙は、諸侯の大夫として、滅君奪國、互に配分したる逆賊なり、齊は舊國なれども、春秋代に、陳國厲公佗が子陳完、齊國に出奔して、姓を田氏と稱して、桓公に見え、其意を獲て、子孫長く勢を振ひ、遂に奪國齊侯となり、太公望の久しき、支流を斷絶せり、已上の七國、春秋の末に、王法衰敗するを幸として、互に帝位を奪ひ、四海を一握にせんと、望が故に、干戈の戰無止日、連年に及ぶに依て、此時を世上より、戰國の時と稱傳へ、又七國數代の諸侯を、戰國の七雄とも云ふ、其年代の久しきを數へて、本朝に合比ぶれば、人皇第五主孝昭天皇の第七十三年より、此亂勃興して、同第七主、孝靈天皇の第七十年までなり、其間合一百八十三年なり、莊子は楚威王より、聘禮を厚くして、國の宰相に用ひんと、願はれたれども、犧牛の喩を說て、辭せられしこと、此書の末、雜篇讓王篇に見えたれば、戰國騷動始りてより、七十餘年に當るが故に【在戰國之初】と云、【與孟子同時】とは、七篇の敎道を說玉へる、孟軻と、生涯を竝べて、戰國同時の人なるとなり、朱子語類卷一百二十五云、李夢先問、莊子孟子同時、何不一相遇、又不聞相道及、如何、曰、莊子當時也、無人宗之、他只在僻處、自說、然亦止是楊朱之學、但楊氏說得大了、故孟子力排之、○問孟子、與莊子同時　否、曰、莊子後得幾

年、然亦不爭多、或云、莊子都不說著孟子一句、曰、孟子平生足跡、只齊魯滕宋大梁之間、不曾過大梁之南、莊子自是楚人、想見、聲聞不相接、大抵楚地便多有此樣差異底人物學問、所以孟子說陳良云云、曰、如今許行之說、如此鄙陋、當時亦有數十百人從他是如何、曰、不特此也、如莊子書中、說惠施鄧析之徒、與夫堅白異同之論是甚麼學問、然亦自名家、或云他恐是借此以顯理、曰、便是禪家要如此、凡事須要倒說、如所謂不管夜行、投明要到、如人上樹、口啣樹枝、手足懸空要答話、皆是此意、孟子の事跡は、史記卷七十四、列傳十四に、司馬遷か筆に載記して、詳なり、世間小學の徒も、常に知ることなれば、不及贅書、【隱遁】は、才德具足する人、自己の形骸を、江湖山林にも隱し、其居處を、他人に不知して、塵俗の中を退きて、韜光晦迹、心性の害を遯去を云、遁字彙與遯同○韻會去聲、慁韻、遯徒困切、說文逃也、集韻隱也、去也、或作遁、詩勉爾遁思○易乾卦文言云、初九曰、潛龍勿用、何謂也、子曰、龍德而隱者也、不易乎世、不成乎名、遯世無悶、不見是而無悶、樂則行之、憂則違之、確乎其不可拔、潛龍也、【放言】は前の林同が序に解するが如く、論語子罕篇に出たる字なり、莊子は不慕榮利が故に、王公の尤をも不怖、民人の辱をも、不憚は、憤世の意より、聲に發して吐露するを云、

所著之書、名以莊子、自分爲三、內篇七、外篇十五、雜篇十一、雖其分別次第如此、而所謂寓言重言卮言、三者通一書、皆然也、

【所著—】とは、自己の胸襟より發出して、所著述卷數疊たるに及びて、其姓を不藏、男子通稱とする、子字を配て、莊子と題號し、尹子、文子、鬻子、列子等の例の如し、【自分—】とは、【自】は莊子を指て云ふ、後人の僉議を、不俟して、一部の內を、自己の意にて、三篇に分截し、始を內篇と、大綱を稱し、其中に、逍遙遊、齊物論、養生主、人間世、德充符、太宗師、應帝王と、小目を七に區別し、其次を外篇と、大綱を稱じて、中間に小目を、駢拇、馬蹄、胠篋、在宥、天地、天道、天運、刻意、繕性、秋水、至樂、達生、山木、田子方、知北遊

の、十五に次第し、末に雜篇と稱じて、庚桑楚、徐無鬼、則陽、外物、寓言、讓王、盜跖、說劍、漁父、列禦寇、天下の十一に說き、都合して、三十三篇なり、【其分別】とは、【其】は莊子を指す、【分別】とは、內外雜の三篇に分ち、內篇の中七つは、身內本心の沙汰を說き、外篇十五には、既に身心立て後に、外物に交接するの常道を、彼此に借喩て說、雜篇は、內外の餘篇なり、【次第】とは、內外小目篇數の多中に、先道遙逸樂を說き、其逸樂を遂ることは、物論に拘りては、不得を云、是非物論を放下せんと求めても、主人公を能養はすして、無益ことを示し、主人公を得養の後には、人間世に交際するの、要道を告、人間世に、交ることを得るの信は、素理は天地同一體なるが故に、如合符節ぞと、德充符を、其次に說き、其德萬境合一に契ふは、自己に本然の大道不可不具ことを、太宗師篇に說、其太宗師と所仰を、己に具足する底ならば、四海の帝王、萬國を四聰四目の明德にて、坐靜謐に治め玉ふが如く、萬物の主宰となることを、如說黜を云、外雜の篇數多端なるにも、有次第ども、及繕性に依て、此には省略之末に詳記す、【如此】の二字は、後學を呼覺して云辭なり、篇篇の次序、必卒易勿看過撰者に、深意を含めりとなり、言は內外雜に、部を分ち、內に篇數を小劃に、三十三篇に重ねられたれども、次第を逐て有意、浮々と混亂して、說れたるには、あらずとなり、【所謂一】とは【所謂】は論語に出たる字なり、先進篇に、子曰、所謂大臣者、以道事君、不可則止とあり、後人此二字を受用ひて、或は上段の文句に所謂を指、又古人前輩も所謂と、呼系迎へんとする時に、語句の中間に書加ること每々なり、此にては、南華老人、此書卷の中に、所謂の義なり、【寓言】重言卮言の辭は、此書末、雜篇寓言第二十七篇に、南華翁の、平時所吐露の語に、此二樣あることを、自己より、說分示されたり、其寓言とは、韻會去聲過韻云、寓元具切、說文寄也、よすると訓す、元來自己の胸中より、所發出の語なれども、戰國衰亂の時、匹夫退遜の身にして、無勞が故に、他人嫂て、不信仰ことを省るに依て、其人を設け、或は篇中に如見嶷缺、王倪、庚桑楚等の、辭なりと、他人の云へると、寄託て說を云、【重言】とは、言句を尊重するの義なり、韻會去聲宋韻重儲用切、禮記祭統、而又以重其國也、註、猶尊也、又禮記緇衣臣儀行不重辭、註、猶尚也正道眞理を告れども衆人肯ふまじきことを察して、予が所語は、自語にあらず、三皇の神農黃帝、又歷朝至聖と尊崇する、孔子の辭なるぞと、自己にも、尊重するが如くに、說を云、【卮言】とは、喩の辭なり、【卮】はさかづきと訓す、酒は甘味にして、卮に充盛、人皆飮て樂む、南華の所說、辟臭にも難認、妙道を、凡愚までに、示さんとする、老婆心にて、狂言綺語を用ひ、目前事物を比喩に厝、心友と交て、雜談するが如くに說、戲言の中に、道理の實なるを、人々心地開發して、自然に悟入せしむる爲に敎るを云、言は篇々件々に所說、意慮を加へて、學者察得するの次第を分ち示されれども、自己の辭に云はれたる寓言、重言、卮言の三は、何篇に限りて、卮言を說き、彼篇は重言、此篇には、寓言ぞと、際涯を定められるにはあらず、一部背中に渾雜して、あるぞとなり、希逸如此の語中に、後學頓機を運して、一篇の中にも、此は重言の格、卮言の筆、寓言の說なるを、能察識して、咏へとの意あり、

外篇雜篇則即其篇首而名之、內篇則立爲名字各有意義、其文比之外篇雜篇爲尤精而立言之意則無彼此之異、

此には後學此書を繙に、三部の中、專干要なること、內篇に存することを、示す辭なり【外篇一】とは、外篇より、已下雜篇の終、天下篇までは、內篇七の篇號の如きにはあらず、此べは論語の學而爲政の篇目と同じく、發端に出たる二字、或は三字にても、兎角首初に出る字に就て、其儘傍彼此に、篇題とし、名られたるとなり、【內篇則一】とは三部の篇立の中にも、內篇の一部のみは、逍遙遊、齊物論等の、七の篇に名くる文字は、外雜の例と、一樣の看を不可爲、部を內篇と稱じて、心王內道場の沙汰を示さるゝに依て、逐一其篇號次第に就ては、南華老人の深意を含み、義理を包むが故に、外雜に比合ては、內篇は異に勝れて、句句言言精密なれば、必しも不可疎略となり、【首】は、はじめと訓すれば、上聲なり、韻會上聲有韻、始九

切、廣韻始也、又鄉飲酒義註、首先也、【即】同德韻、節力切、說文、即食也、从皀卩聲、本作卽隸作即、徐曰、即猶就也、就食也、【比】比竝の義、くらぶると訓ずる時は、平聲なり、字彙蒲縻切、竝也、【精】韻會淸韻、資盈切凡物之純至曰精、【而立言—】とは、立言とは、先人未說ことを、肇て言句を建立して、後世まで不絕、式法となるを云、二字左傳に出たり、左傳註疏卷三十五、襄二十四年、穆叔曰、魯有先大夫曰臧文仲、既沒其言立、其是之謂乎、豹聞之、大上有立德、其次有立功、其次有立言、疏立言、謂言得其要、理足可傳、記傳稱、史佚有言、論語稱、周任有言、及此臧文仲既沒、其言存、立於世、皆其身既沒、其言尙存、故服杜皆以史佚周任臧文仲當之、言如此之類、乃是立言也、老莊荀孟管晏楊墨孫吳之徒、制書子書、屈原、宋玉、賈逵、楊雄、馬遷、班固以後撰集史傳、及制作文章、使後世學習、皆是立言、【彼此】は內外雜の三に系て云ふ、言は部を三に割中にも、內篇には、深奧を籠るに依て、文句も精密に、又篇目にも、加意義ことあれども、總て南華老人、意地を發起して、世風を彈し、正道を曉させんが爲に、言言句句の敎を、新に建立せられたる本意には、內外雜の間に、所說に、分て深淺輕重の相違は、あらずとなり、

陳同甫嘗曰、天下不可以無此人、亦不可以無此書、而後足以當君子之論、若莊子者、其書雖爲不經、實天下所不可無者、

自此第三段とす、【陳同甫】姓陳、名亮、字同甫、務州永康郡人也、南宋第一主、高宗紹興四年、擧進士、本傳宋史卷四百三十六、列傳百九十五、儒林傳第六に載たり、希逸とは、同朝なれども、年代百年餘以前なるに依て、其語を擧引に、【嘗曰】と云、【嘗】はかつてとも、むかしとも訓ず、韻會陽韻、嘗辰羊切、曾也、論語、嘗從事於斯矣、【天下】は縱に云ふ天下なり、後世までを籠たり、【天下不可】と云より【此書】までの、十五字は、陳氏の語なり、【而後】已下の字は、陳氏の語を受て、希逸批判の辭なり、【此人】は莊子を指す、【此書】は三十三篇を指す、【其書】も同じ、【雖爲不經—】とは、【經】はつねと訓ず、萬代不易の常道を指す、韻會

青韻、堅靈切、釋名徑也、典常也、言如徑路無所不通常用也、孝經註疏云、經者常行之典、惡く見れば、莊子の書中に所說は、聖賢をも抑下するを尤めて、異端邪說なりと黜て、不經と云と可思が、其意にはあらず、日用とする五倫五常を、如蔑棄に、枝葉に拘はることを、嚴密に警むるが故に、千載不易とする經常の道も、廢て如不用に大抵の學者は、奇怪に思ふことあらんずれども、彼內を忘れて、外に意を費す、羊質虎皮の徒を彈し、體に依て、用は自行はるゝことを敎る、要道を說くが故に、貴賤に不拘、萬人の師範として、此書は天下後世まで、不可無行、肝要の書籍なり、如此に會得してこそ、君子公道を、行なふ人の、議論とは、可云となり、【君子】には、所用に依て、種種義異なれども、此にては、有德の人を指て云、

郭子玄謂、其不經、而爲百家之冠、此語甚公、然此書不可不讀、亦最難讀、

【郭子玄】側聲晉代人、姓郭、名象、字を子玄と稱ず、本傳は唐太宗皇帝御製晉書卷五十、列傳第二十に載たり、老莊の道を好て、淸淨の談を、能したる者なり、【其不經—冠】とは、郭象が註莊子十卷、其自序に出たる語なり、其序略云、夫莊子者、可謂知本矣、故未始藏其狂言、言雖無會而獨應者也、夫應而非會、則雖當無用、而非物事、則雖高不行、與夫寂然不動、不得已而後起者、固有間矣、斯可謂知無心者也、夫心無爲、則隨感而應、應隨其時、言唯謹爾、故與化爲體、流萬代而冥物、豈曾設對獨遘而遊、談平方外哉、此其所以不經、而爲百家之冠也、言は聖賢を黜け、彝倫をも蔑にするが如くなるに依て、不易の常道に、反覆するに似たれども、有爲に七顚八倒して、本地の靈光を喪ふ輩を、緊切に警むる爲の敎なれば、諸子百家の書に比べては、冠を頭上に戴くが如く、頂上第一に可重書なるぞとなり、【百家】書敍指南卷五云、諸書曰百家衆氏○前漢書卷六、武帝紀贊曰、卓然罷黜百家、百家、謂諸子雜說、違背六經○後漢書安帝紀、百家、言百家擧全數也、【此語甚公】とは、郭氏が語を、希逸最無偏倚言句なりと、許容して云へり、【公】と稱美するなれば、世儒が莊子の書

を、異端を勘るとして、放下するは、皆是私意の沙汰なることは、此一字の中に含めり、韻會東韻、公沽紅切、說文平分也、从八从厶、八猶背也、厶音私、韓非曰、自營爲厶、背厶爲公、徐曰、會意、爾雅無私也、春秋說云、公正無私、孝經序註引白虎通云、公者通也、公正無私之意也、【然此書—】とは、郭氏が莊子の書に、年光を重ね、心力を浸し、其教を感じて、如此語を傳ふすからは、至今も、俗儒必ず此書を疏末にせずして、吟誦すべきこととなり、【亦最難讀】とは、不可不吟誦、至極要道を敎示す書なれども、其器量を不具徒は、卒易に讀ても、難曉味となり、難讀の所以は、次第三段に、條目を擧て、詳に說れたるに依て、今此に贅筆不及、

東坡一生文字、只從此悟入、大藏經五百四十函、皆自此中紬繹出、

【東坡】趙宋代蘇氏軾名、字子瞻と云へる大儒、南宋第六主、神宗の朝に、王安石宰相に登庸れて、新法を起し、百姓を煩はすことを歎て、諫言を進めたるを、安石に憎まれ、讒を被り、中國を放逐せられ、黃州黃岡縣に謫けられたる時に、故守馬正卿が造營したる地、數十畝を受得て、堂を作りて住居す、其地、今官となる治處の、東方の坡に當るに依て、自東坡居士と號す、本傳は、宋史卷三百三十八、外傳第九十七に載たり、【一生文字】とは、東坡先生一生所著述の文集、凡一百五十卷傳世、【從此】とは、此莊書の句句言言よりなり【悟入】の字は、開示悟入と稱じて、釋家より出たり、四敎集解卷上云、開謂開發示謂顯示悟謂覺悟入謂證入據法華論說、開示在能化、悟入在所化、後世まで、名聲傳はる、三敎に通じ、文章に勝れたる東坡も、南華老人の書に依て、微妙の道を豁悟し、其理に入得し、文句に綴りて、天下の文範と、仰がれたるとなり【大藏—】とは【函】は、はこと訓す、韻會覃韻、又咸韻、胡讒切、匱也、又函書、世尊一代、四十九年、所演說の經、五千四十八卷を、大小乘の部を分て、五百四十函に納藏む、本朝にても如此、以後菩薩、及高德の名僧、佛勅を慕て所說を、又續藏とするは、其外なり、【自此中—】とは、佛說も、莊子の語より出たると、必不可失、佛は、西天竺に出生なされて、其時を漢土に牽合すれば、成周第四主、昭王二十六年、甲寅に當る、其入滅は、同第五主、穆王五十三年なり、莊子は、其より年代遐に後れて、衰周末戰國時の人なり、希逸の此序文の意は、西天の佛經漢土に傳來して、晉宋代より以來、梵語の聞ても難曉を、漢土に於て、三藏に達したる僧中華の辭に飜譯し、暗愚の徒に引導敎授とするも、皆佛よりは、土地も異にし、年代は以後なれども、南華老人は、又佛經漢土に不來、先立て、無色無相の妙道を、言句に寫たるを、用てこそ、見聞覺知の力にても、難屆、言句を離たる妙道を、覺絲の緻を繹、紬出が如くに、三藏法師の歷々も飜譯するの功を、遂たるに依て、畢竟は此莊書の中より、拔萃したるに同じとなり、【紬繹】ぬきぬくと訓す、韻會尤韻、紬丑鳩切、引絲緒也○同書昔韻、繹、夷益切、說文抽絲也、前漢書卷八十五、列傳第五十五、谷永傳、燕見紬繹、註師古曰、音抽、謂其端緒也、○韻會尤韻、抽丑鳩切、說文引也、本作摎、今文作抽、增韻拔也、通作紬○書經卷五、立政篇云、牧夫準人、則克宅之、克由繹之、蔡氏註、克由繹之者能紬繹用之、而盡其才也、

左丘明、司馬子長、諸人筆力未易敵、此、是豈可不讀、

【左丘明】魯國中都人、孔聖魯國の史記を所筆削の、春秋經に對して、解釋を加へたる人なり、【司馬子長】前漢第五主、武帝の朝に、太史令の官に事へたる、司馬遷字は子長にて、史記百三十卷を撰する人なり、【諸人】の二字には、唯二人のみならず、同前漢代の司馬相如、董仲舒、楊雄、劉向、劉歆の父子、及後漢傅毅、班固等も、中に可範、【此】とは、莊子の書を指す、言は莊子より前に左丘明、其以後には、名を高文章に、鳴世歷々が、筆頭に勢力を勵されれども、莊子の筆力には、敵當することにあらず、今古に超絶したる文章なれば、先著述に有志學者は、此書を、何ぞしも、不讀誦して、可放下ことには、あらずとなり、至此は、上の不可不讀の、語を受て細釋す、孔夫子より、第六十三世の遠裔、孔貞叢の所著の闕里誌卷三云、左丘明中都人、授經圖曰、魯人左史倚相之後、春秋魯史記之名也、周室既微、載籍殘缺、仲尼思存前聖、

之業、以魯周公之國、禮文備物、史官有法、故與左丘明觀其史記而脩之、皆口授弟子、弟子退而異說、丘明恐失其眞、乃爲之傳云云【司馬子長】史記集解、徐正義曰、司馬遷、字子長、左馮翊人也、漢武帝時、爲太史令撰史記一百三十卷〇前漢書卷六十二列傳第三十二、司馬遷傳云、談爲太史公、有子曰遷、遷生龍門、年十歲、則誦古文云云、遷爲太史令、紬史記石室金匱之書云云卒述陶唐以來至于麟止、自黃帝始、凡百三十篇、五十二萬六千五百字、爲太史公書云云【歟】は、あてると訓す、相手を受て不負と競ふを云、爾雅註疏卷一、釋詁下云、敵當也、疏、敵者、仇匹相當也、文六年左傳曰、敵惠敵怨、

然謂之難者、何也、伊川曰、佛書如淫聲美色、易以惑人、蓋以其語震動、而見易搖也、

自此第三段とす、以下は上に所云の、亦最難讀の語を受て、細說す、【然謂—】は此七字、問の語に設たり、【然】は反語辭なり、操觚字要云、凡轉折上文換出一層意思、若非然字、文不接續矣、上段の說の如くなれば、學者としては、不讀して、可措の書ならざると、信じ肯ふ中に、復難讀と云はるゝことは、如何なることぞやと、他人より詰問するなり、實は自問自答なり、【伊川曰—】とは、以下皆答話なり、【伊川】は、趙宋代の大儒、程頤字は正叔なり、世上より、伊川先生と號す、後に正公と諡し、伊陽伯に封じたり、程明道先生の弟にして、共に道學を濂溪先生より、受け玉ふ、本傳は、宋史卷四百二十七、列傳第百八十六、道學傳の一に載たり、【佛書—】の語は、明朝嘉興徐必達所校正二程全書卷二一に載て、遺書二先生語第二上云、學者於釋氏之說、直須如淫聲美色、以遠之、不爾則駸駸然入於其中矣、顏淵問爲邦、孔子既告之、以五帝三王之事而復戒以放鄭聲遠佞人、曰、鄭聲淫、佞人殆、彼佞人者、是佗一邊佞耳、然而於己則危、只是能使人移、故危也、至禹之言、曰何畏乎巧言令色、巧言令色、直消言長、只是須著如此戒愼、猶恐不免、釋氏之學更不消言、常戒到自家自信後、便不能亂得【淫聲】は淫娃通用して、たはるゝこゑとも、すぐるこゑとも訓す、遊燕の席にて、歌舞の伎樂、管絃の音樂の快然たるに、己が本心を、放蕩せらるゝを云、廣く云へば、平民の愛する琴三味線、淨瑠璃、里巷の歌謠にも、眞心を奪はるゝ時は、皆是淫聲なり、韻會侵韻、淫夷針切、過也、書、罔淫于樂、詩序疏云、過其度量謂之爲淫、〇同韻淫夷針切、說文、私逸也、廣韻、姪婬、集韻通作姪、【美色】は毛嬙西施が如き、美麗なる顏色を具へたるに、翠鬢丹臉の粧に惑はされて、志を傾くるを指て云、【色】は色慾の色なり、韻會職韻、色殺側切、色慾、論語戒之在色、詩序疏云、女有美色、男子悅之、故經傳之文、通謂女人爲色、程伊川の仰せらるゝ、本意は、釋氏の敎は、目前の實理常道を廢て、不用、過現未の三世を立、輪廻の說を設て、惑世誣民の害は、姪聲美色にて、衆人を、如易惑なれば、必其敎を不當肯、仇讐と同じきを、遠離れよとの誡なり、希逸此序に、其語を借意にて、遠離れよとは、義を取ること格別なり、莊書の難讀味の例に、引擧たり、【蓋以—易搖也】の句は、伊川の語を受て希逸の批判なり、三敎一目の看なる希逸なれば、程子の本意は、我と不一ことは、素より知れども、程子の語を、斷章取義の法を用て、元來の意と、別なるに依て、【蓋】の疑辭を加へて云、言は某が、莊書最難讀と云へるを、其方が不審あるぞならば、例を拔て、答へて聞明させん、彼我より先輩、道統の列に入玉ふ、伊川先生の語に、佛書を、淫聲美色の易惑人に喩比べ玉ふは、汝の意には、何とか會得せられたるぞや、釋典を緊く放斷するの意なりと、思へるや、全其意にはあらず、乍憚高德の語を、短才の某が臆見することは、重重慮外なれども、彼佛語は、素より天上天下、三界の大聖人にして、大道周圓、萬德統備て、衆人の所不見、所不聞までを、見明玉ひて、妙道の極談、秘蹟の玄奧を罄し玉ふが故に、天神地祇も感應震動ある底の妙法なれば、凡常の知見に難明滯句迷語、人々の意識、易搖動ことを、顧玉ふに依て、自己の塵妄をも不洗して、卒易に看過したらば、却て藥病厮治することを不得、顚倒惑亂せんぞとの發なるべしとなり、【震動】は書經卷四、周書部、武成篇云、天休震動、用附我大邑周、

況此書所言仁義性命之類、字義皆與吾書不同、一難也、

此又難讀を比校れば、釋典より、猶浮としては、難讀り所與の一理を、我方寸に受ての名とし、萬物に天味遂ことを、五箇條の數を擧て、委悉に解す、如此に地より所賦與を呼て、命とは云ぞとの、前後の階級條數を用て說こと禮記檀弓に其例見えたり、檀弓上に、意を不託、都て、天人一致、混沌一元より、萬殊に篇云、子夏喪其子而喪其明、曾子弔之曰、吾聞之著はれ、天とも位上下て地ともなり、有情非情一丸也、朋友喪明、則哭之、曾子哭、子夏亦哭曰、天乎、予にするが故に、平生沙汰する聖賢の言句とは、高尚に無罪也、曾子怒曰、商女何無罪也、吾與女事夫子於說昇せれば、不一同して、此大抵の力量にては、洙泗之間、退而老於西河之上、使西河之民疑女於難讀味の、第一箇條なるとなり、夫子、爾罪一也、喪爾親、使民未有聞焉、爾罪二也、喪爾子、喪爾明、爾罪三也而曰爾何無罪與【況】は、俗語に其に比べて、猶も益りと云に同じ、韻會去聲濛韻、況許放切、益也、又矧也、譬擬也、○助語辭云此更將別人物別事理來、與前所說、相形比、況夫則句更端況於則就句轉、夫字意悠揚、於字意切近、作語仍有分別【此書】は莊書を指す【仁義性命一】とは【吾書】は、希逸の表とする儒道聖賢の書を、外に不隔親切にする意より、吾と云、儒家には、仁義禮智を、天道の元亨利貞の、四德に配合し、四時に比べて、天地を我父母の如く、四德の根原とす、此書にては、天地同根萬物一體とする敎なれば、天地を先にし、我を後にするの差別に不拘、萬物共に我同胞とし、性は天よ

其意欲與吾夫子爭衡、故其言多過當、二難也、

【其意】とは、莊周此書を、筆記せんとする時の、意思なり【吾夫子】は【夫子】は孔子を指す、仲尼を不外、親重んじて【吾】と云、親辭に吾我二字を用ること、の權輿は、虛白按ずるに、事蹟たる辭なり、書經商書部、仲虺之誥篇、俟我后后來其蘇と、庶民の云へるは、小國なれども、湯の仁德に心服して、夏桀が暴虐を、免んことを求むる意の、厚よりなり、又夫子の魯史記を筆削し玉ひ、今に所傳の春秋經の中に、魯國は、先祖の故地、然も大勳勞を遂玉ひたる、周公の封せられ玉ふ、國なる故に、列國と殊に記別て、魯を我と、每度

書し玉ふより、起れり、又論語逃而舍、夫子の語に、逃而不作、信而好古、竊比於我老彭と商代の賢大夫を重んじ親て、仰られしを、例とし、後人も親辭に傳言へり、論語朱子註、我親之之辭とあり【爭衡】とは、二字、後漢書列傳五十六、陳蕃傳論曰、桓靈之世、若陳蕃之徒、咸能樹立風聲、抗論悟俗、而驅馳險阨之中、與刑人腐夫、同朝爭衡、注、前書班固曰、相與提衡、音義云、衡平也、言二人齊也、とあり、此二字を、後學惡く見たらば、莊子の意とも、希逸の意とも、差失をなす、莊子より、前聖仲尼の敎を、罵辱めて、推倒さんと、爭ふとにはあらず、元來其道は、至極なれども、去聖遠隔たるが故に、末儒小見の徒が、其眞實を喪ふて、威儀容貌の節文のみに拘ること、戰國の頃猶んにして、夫子の餘流なりと、呼號して、外貌に飾を盡し、內眞德を絕滅するを、憤激する意より、夫子の下流を汲罪と、爭論して、詐僞を廢去して、實に孔聖の所敎と、平等一致の正道に、復歸させんことを、願ふことの、厚きより、莊子の言句には、的當に大過したること、多きが故に、平生柔輭なる、聖賢の辭を、聞觸たる人は、莊子の語は、格外なる事かと、狼狽るに依て、難讀味の二個條となり、【過當】は其言無理にはあらざれども、強く言過すこと、可當的を、射外れ過したるが如しとなり、俗に理には、至極したれども、其辭を、餘に強言過したると云に同じ、

鄙略中下之人、如佛書所謂、爲最上乘者說故、其言每每過高三難也、

【中下之人】は論語雍也篇に、夫子の仰せられたる、中人以上、可以語上也、中人以下、不可以語上の、中人以下にして、俗に、十人並と云よりは、劣る人なり、【鄙略】はいやしめ、いるかせにすると訓す、韻會紙韻、鄙補美切、鄙薄輕易之也、書復鄙我周邦、○同藥韻、略力灼切、堉韻、忽也、其人を鄙劣なりと、輕易て、疎略にするを、鄙略と云【如佛書一】とは、金剛般若經云、無邊功德如來爲發大乘者說、爲發最上乘者說、○纂要卷三云、最乘者、一佛乘也、○刊定記卷五云、云是上乘者、今疏中、出最上乘體故云一佛乘、體當本覺故名爲佛、非二非三、故名一乘、又云、最

上者法身也、無漏無爲絶上上故○略疏云、大乘者、始教終教是也、最上乘、圓頓教是也、○筆削記卷一云、大乘者、亦名一乘、亦名無上乘也、又云、亦名佛乘、一乘、最上乘、○畢竟最上は、常談に、至極と云ふに同じ、乘は、佛乘なり、乘の字義は、天台四教義等を、搜索して、可識、文及繁縷が故に略す、法華經方便品第二にも、舍利弗、如來但以一佛乘故、爲衆生說法、無有餘乘若二、若三、舍利弗、一切十方諸佛法亦如是、舍利弗、過去諸佛、以無量無數方便種種因緣譬喩言詞、而爲衆生演說諸法、是法皆爲一佛乘故、是諸衆生、從諸佛聞法、究竟皆得一切種智、舍利弗、未來諸佛、當出於世云云、現在十方無量、百千萬億佛土中諸佛世尊、而爲衆生演說諸法、是法皆爲一佛乘故云云、又云舍利弗、十方世界中、尙無二乘、何況有三、言は本來の大道には、精粗の別は、あらざれども、人の根機に近上もあり、又凡下なるもあり、莊子の敎は、色相を脫離したる、高尙の玄談なるに依て、吾無隱乎爾の意ながらも、其機に應じて不說ば、却て聾盲に聲色を示すが如くなるに依て、中人より以下は、迚も、莫聞知を察して、所說の語を饒路にせず、聲臭をも離れたる、言句なれば、比べて佛書の中に、此敎は、最上乘の根機を具足する者の爲にのみ演說し玉ふと云ふに、一類して、動すれば、莊子の言句は、度度高峻なるに超過すると多し、此最下愚昧の徒が、容易に難讀味遂の、三箇條なるとなり、【每每】は、末外篇胠篋篇云、天下每每大亂、每每常常也【過高】は、高尙に說くが故に、常理に超過たるを云、

又其筆端鼓舞變化、皆不可以尋常文字蹊徑求之、四難也、

【又】は上に所云を、更むる時に、用る字なり、廣韻、又猶更也、此にては、上件三箇條の難讀を數る外に、又なり、【其】は莊子を指す、【筆端】は、文選卷十七、陸機文賦云、籠天地於形內、挫萬物於筆端、注銑曰、形文章之形也、挫折挫也、謂天地雖大、可籠於文章形內、萬物雖衆、可折挫、取其形、以書於筆之端、端筆鋒也、善曰、韓詩外傳曰、辟文士之筆端、辟武士之鋒端、辟辯士之舌端、【鼓舞】は易繫辭より出たる字なり、前林同が序に、記すが故に略之、畢竟筆端鼓舞變化の六字は、南華老人、文章に、手老たるが故に、其辭を、

自由無礙にして、筆頭に無滯、無色無相の妙道を種種に形容し、比喩を用て、著述するを云、【尋常文字】とは、如莊子達才の後を慕ふて、模寫する、漢朝已來の文章にて、釣名と望む學者を指て云、【蹊徑】とは、十字街道の車馬を廣不通、山路の狹に、纔に禽獸の通を遂を云、禮記月令、孟冬之月云云、謹關梁、塞徯徑、鄭玄古註云、徯徑禽獸之道也、○韻會齊韻、蹊弦雞切、又穿徑也、左牽牛以蹊人之田、註疏、蹊者先行無路、初爲徑路之名、集韻或作畯、通作徯、禮記月令、塞徯徑云云○同書靑韻云、徑吉定切、說文、徑步道也、徐曰、道不容車、故曰步道、小道也、今之移路、此に蹊徑と云は、借喩の語なり、文才秀たる、大手筆にもあらずして、古人の筆迹を盜竊して、自己の材に、衒んとするは、蹊徑を大道にせんとするに、似たればなり、言は上件に如云のみにあらず、文才特出したる、南華老人の筆頭を振ひ、有を無に、無を實に、種種變化して、所說出の言句が、樂器を用て囃起、袂を飄して、舞曲を著すが如く、語を面白く、其妙を盡されたれば、後人小才の徒が舊を眞似て、古文に齊からんとを、願る類の文章と、一樣には不看破、此四箇條の心易術にしては、雜讀味處ぞとなり、

況語脈機鋒、多如禪家頓宗、所謂劍刃上事、吾儒書中、未嘗有此、五難也、

【語脈機鋒】は、共に喩の語なり、所說回の語、不分裂して、上下連續次第することは、人身の中の經絡、頭上より、脚下に通ずるが如しと、義を借て、語脈と云、常に語路と云に同じ、韻會陌韻脈莫白切、說文、血理之分袤行體中者、徐曰、五藏六府之氣、分流四肢也、魯鈍なる徒を、敎曉さんが爲に鞭策を施すが如く、緊頓機を用ること、鋒刀の尖なるに似たるとなり、【鋒】は說文、兵耑也【禪家】は單傳直指の宗を云、禪寂家と、泛釋氏の敎へを指にあらず、字義末の養生主篇、題註の下に記す【頓宗】は臨濟の一喝、德山の三十棒にて、學者を接待するが如く、當機覿面に行令を云ふ【噸】は、にはか、はやしと訓ず、六祖法寶壇經頓漸篇云、時祖師居曹溪寶林神秀大師在荊南玉泉寺、于時兩宗盛化、人皆稱南能北秀、故有南北二宗

頓漸之分、而學者莫知宗趣、師謂衆曰、法本一宗、人有南北、法即一種、見有遲疾、何名頓漸、法無頓漸、人有利鈍、故名頓漸云云、又凡佛家頓漸の二教の沙汰は、禪源諸詮都序卷下云問、前云、佛說頓教漸教、禪開頓門漸門、未審、三種教中、何頓何漸、答法義深淺、已備盡於三種、但以世尊說時、儀式不同、有稱理頓說、有隨機漸教、故名頓教漸教、非三教外、別有頓漸、漸者爲中下根、即時未能信悟妙理者、且說人天小乘、乃至法相破相、待他根器成熟、方爲說於了義、即法華涅槃等經是也、頓者、復二、一逐機頓、二化儀頓、逐機頓者、忽遇凡夫上根利智、直示眞法、聞即頓悟、全同佛果、如華嚴中、初發心時、即得阿耨菩提、圓覺中、觀行成時、即同佛境、大佛頂經、識陰盡時、頓超十地、直入如來妙莊嚴海、二化儀頓者、佛初成道、爲病世緣熟上根之流、一時頓說性相理事、衆生萬惑、菩薩萬行、賢聖地位、諸佛萬德、因該果海、初心即得菩提、果徹因源、位滿猶稱菩薩、此唯華嚴一經、及十地一論、名爲圓教、此上頓漸、皆以就佛、約教而說、若就人、約悟修者、說意又不同、有云、先因漸修功成、而豁然頓悟、有云、因頓修、而漸悟、有云、先須頓悟、方可漸修、有云、頓悟頓修者、此說上上根性樂欲俱勝、一聞千悟、得大總持、一念不生、前後際斷、此人三業、唯獨自明了、餘人所不見、有云、法無頓漸、頓漸在機者、誠哉、此理固不在言本只論機、誰言法體頓漸義意有此多少門、門門有意、强非穿鑿、比見時輩論者、但有頓漸之言、都不分析、就教有化儀之頓漸、應機之頓漸、就人有教授方便之頓漸、根性悟入之頓漸、發意修行之頓漸、就中唯云先頓悟後漸修、似違返也、欲絕疑者、豈不見日光頓出、霜露漸銷、孩子頓生、志氣漸立、猛風頓息、波浪漸停、訴良頓成、禮樂漸學、是知、頓漸之義、其爲要云云、【劒刄上事】は禪門に有無不二、言語道斷にして、門庭嶮峻なる、向上の事を、請問するを、莫耶の利劒を觸るが如きに喩へて云、此語は素、臨濟慧照禪師の語錄に出たり、其書云、上堂僧問如何是劒刄上事、師云、禍事禍事、僧擬議、師便打、問如石室行者、碻碓、忘却移脚、向什麼處去、師云、沒溺深泉、言は其のみにあらず、莊子所說示の語路は、聖賢穩當に、與其進來丁寧に不倦教して、說與するとは、格別にして、向上の玄風を沙汰することなれば、下愚の難得聞、當機覿面に、事相を離れたる言句なるに依て、例すれば、禪門直指の家に、劒刄上事と、喩へて云へるに同じく、太阿龍泉の名劒に觸て、其刄に當るに似て、我儒門の書卷、教の廣き中に、昔より斯語話の格、あらざるが故に、小智下愚の輩は、此書を觀覽しても、難曉明の第五條となり、

是必精於語孟中庸大學等書、見理素定、識文字血脈、知禪宗解數、具此眼目、而後知其言意一一有所歸著、

【是】は、受上語言字なり、【語孟中庸大學】は、儒門に孺子に至るまで、晨昏手に不釋卷、聖賢日用、親切なる道理を教示し玉ひたる、五倫五常、在其中、學者平生、不可不習の書とす、【素定】とは、已前より、四書の中に、聖賢說示し玉へる、實理を見明るの無疑、決定するを云、素故也、謂舊時也と、前漢書師古註に見えたり、【文字血脈】とは、莊子一部に、所說記の文字血脈なり、【血脈】は、喩の辭なり、凡人の四肢百骸は、連て一體なれども、其中にも、血と、脈は、頭上より脚下までに、貫通するが如く、所說の區なることは、千言萬語に轉ずれども其言の干要は、此に存するぞと、上下に通徹して至極なるを指て云、【此眼目】は、形骸の外なる、肉眼にはあらず、禪門常に所謂、本來面目、人天眼目と云、此なり、【其言意】は【其】は莊子を指す、【言意】は言句と、意思なり、【一一有一】とは、妄誕語にはあらず、逐一訓辭の歸趣調り、玄理落著あるぞとなり、浮と初學の卒易に可見書にはあらず、其本を養遂て、後にせよとの意なり、

未嘗不跌蕩、未嘗不戲劇、而大綱領大宗旨、未嘗與聖人異也、若此眼未明、

【跌】は、つまづく、たをるゝと訓ず、韻會屑韻、徒結切、說文踢也、从足失聲、徐曰、跌踢過越不拘也、方言蹶也、郭曰、偃也、通俗文、失躡也、師古曰、足失據也、廣韻又差跌也、【蕩】は同養韻、待朗切、蕩蕩法度廢壞貌、【戲】は、たはふれと訓ず、俗左禮と云に同じ、韻會寘韻、香義切、廣韻、戲弄也、謔也、【劇】は、たはふ

る、又はなはだしと訓ず、同職韻云、又陌韻、竭戟切、尤甚也、又戲劇、言は聖賢の教をも、未會得、自己の面目をも不豁開徒が始て此書を見たる時は、一語も不明、何事を說たることぞやと、倒惑して、蹶僵たるが如く、教の辭塞胸、狼狽るか、又は莊子は、辯舌自由なるに任せて、無分曉なることを、放埒に吐散したる戲言のみなりと、云ふには、不過となり、【而大綱領―】とは、人には悟迷の、有違に依て、自己の力量、不足なる者こそ、種種惡く見失らんずれども、道には無今古が故に、其所道の大綱領、所受來の大宗旨は、始より、我儒門の、聖人の教と、差異することはあらざる程に、正眼を能開て、悟入せよとなり、【大綱領】は莊子所說示の道、不瑣細雜駁して、正眞干要なることを、喩へて、網に網あれば、綱に依て、衆目悉張が如く、衣服に有領、領を挈れば、裾に至るまで、皆順て擧るが如きに、比べて云、【大宗旨】は莊子所受續の道統、今古不易なる、宗原の旨趣を云、頓悟要門論云、問此頓悟門、以何爲旨、以何爲體、以何爲用、答無念爲宗、妄心不起爲旨、【若此―】本來眼目未豁開と也、

強生意見、非以異端邪說、鄙之、必爲其所恐動、或資以誕放、或流而空虛、則伊川淫聲美色之喩、誠不可不懼、

【意見】は、私意の臆見なり、言は希逸が上件の所云を、不肯して、無益意地を强張、臆見を熾に發生して、莊子の教を誹謗し、此こそ無紛、異端邪說を勸る、癖者なるぞと、此書を難し、其人を抑下して、鄙劣なりとせば、必定自己の見力齟齬するに依て、此書は、必目にも不可近と云て、恐怖の意を發し、却て此書が、障となり心地を震動するの害を生ずるか、又は句句言言、實事なることは、一箇もあらず、辯舌勝れたるに任せて、都て虛誕の辭を、放逸に吐露せりと云ひ、又は生智術なる者が、莊子の教は、別事にあらず、本來、空虛と云に決定したりと、其書の字面のみを蚤合點して、言句に牽れて、流蕩するか、此三數の偏見に陷ぞならば、彼程伊川の、淫聲美色に喩へて、喪己の誡を、必己を省、恐懼の意を生じて、不可不愼となり、

希逸少嘗有聞於樂軒、因樂軒而聞艾軒之說、文字血脈、稍知梗槩、又頗嘗涉獵佛書、而後悟其縱橫變化之機、自謂於此書、稍有所得、實前人所未盡究者、

自此第四段とす、【少】は幼少の義は、去聲なり、すくなし、まれなり、かくは、上聲に用ゆ、韻會上聲篠韻少始紹切、說文不多也、○又嘯韻、失照切、幼也、增韻老少之少、【樂軒】は、傳、前林同序に記す、【艾軒】は、希逸の師、樂軒の所受道の、林亦之の師範にして、林光朝、字謙之を云ふ、道南一脈卷十一云、林光朝字謙之、莆田人、聞吳中陸子靜、得程門尹焞之學、因往從游、自是專心踐履、四方來學、亡慮數百、號曰南夫子、歸莆以講于東井紅泉、閩之陸學、光朝其宗也、平生未嘗著書、唯口授學者、使之心通理解、嘗曰、道之全體存乎太虛、六經發明之矣、若復多詮、於道愈遠、龍興元年五十、以進士及第、調袁州司戶參軍、乾道三年、龍大淵會覲以潛邸恩倖、進臺諫、給舍、論駁不行、光朝與劉朔、方以名儒薦對、頗及二人、由是改知永福縣、而大臣論薦不已、召試館職、爲秘書省正字、兼禮部郎官、進國子司業、兼太子侍讀、史職如故、是時張說用事、遂出爲廣西提點刑獄、移廣東、茶寇自荊湘、剽江西、薄嶺南、鋒銳甚、先生自將郡兵、檄摧鋒、統制路海鈐轄黃進控要害、會督二將、遮擊連敗之、賊驚懼宵遁、孝宗喜曰、光朝儒生、乃知兵耶、加直寶謨閣、召拜國子祭酒、孝宗幸國子監、命講中庸、大稱善、賜金紫不數日、除中書舍人、是時吏部郎謝廓然、由曾覿薦、除殿中侍御史、命從中出、光朝立封還詞頭、孝宗度光朝決不奉詔、而輟先生老儒宿望、在中書省、未有建明、或疑之、及聞繳駁、士論始服、久之引疾去、卒謚文節、學者稱艾軒先生、時相趙汝愚祭之有曰、制行似黃憲、當官如陽城、誨人如王通、又曰汝愚登第時、先公無喜色、後與莆人林光朝入館同舍、先公聞之、而後喜可知也、公死、莆紅泉、東井之學湮矣、朱子曰、這道理易晦難明、熹少年過莆、見林謙之、方次雲、說一種道理、說得精神極好、聽爲之踴躍鼓動、退而思之、

忘寢與食者數時、今再過則二公已死、更無一人、能繼其學矣、王融陳叔盥受詩於先生嘗與樂軒讀國風於古寺、吟諷累夕、俄而至采蘋掩卷泣、頓得中庸之旨、叔盥喜以告綱山、綱山遂以樂軒見、先生曰、吾嘗語、若詩不歌、易不畫、無悟入處、今於元潔猶信吾詩不亡矣、福唐一拂先生鄭俠、以女妻艾軒、俠直聲振天下、其學有源委、嘗曰、吾學以孔氏爲宗、參之老釋、而道益明、紅泉東井、無一言闢佛、職此之故與、艾軒爲祭酒、車駕幸學、命講中庸、天下國家、有九經、所以行之者一也、曰、一乃中庸、孝宗嘉歎、以爲深得中庸之旨、日用是根株、言語文字、是註脚、陳寔管寧元德秀、資稟如許、數百年中、乃一見、又却不聞道、此爲大可惜、世間惟有榮辱毀譽、所不到處、爲建德之國、大凡舉措須要愛重、賣不得貨自在、豈可有此忙迫氣象耶、此五十年、布衣受用不可不使仲蒼知之、某幼歲、聞李太白、石曼卿之爲人、卽踴躍道其事、又初讀晉書、見一樣人物如寒蟬孤潔不入俗調、此心甚樂之、一日對方次雲說、古人如此、終是不俗、次雲云、此數人在孔門、恐一日著脚不得、某乃悟夫子之門、爲人物準的、千載人物、要入得此堂室中、乃爲無媿耳、文王演周易、流而爲卜筮之書、箕子作洪範、流而爲災異五行之說、嗚呼聖人之經、何其不幸也、夫八卦之文、九疇之叙、雖無文王、無箕子、而此理素定也、天下由之、而不自知耳、聖人患其如是、於是乎作書以示之、學者之觀書也、捨編簡而求之可也、奈何源流一失、迂儒曲士、肆爲異言、天人之理、不復見矣、嗚呼學者之弊、流毒至此、則河圖洛書安得爲帝王之嘉瑞也、○按、劉後村、稱、艾軒古文詞、高處迫檀弓穀梁、平處猶與韓並驅、諒哉、而欲於集中、聞所爲、與次雲說一種道理處、又何微也、豈文章可傳、性道竟不以語人耶、福唐郭子長曰、閩自龜山道南、獨光朝可接羅李之傳、惜時儒無深知者、按此則楊陸、原是一脈、王信伯學不可考、觀次雲知信伯矣、艾軒不著書、及其晚年、柬王舍人宣有云、某亦欲集聚偶然所見處、謂之六經章句、須得十年定坐以畢此心、然日過一日、擾擾不暫息、十年之期、無乃大自寬耳、今先生微言湮然、豈爲榆光所限耶、抑其書竟零落人間耶、噫、○又宋史卷四百三十三、列傳第一百九十二、儒林傳第三に載す、○後學檢閱を助て、綱山傳を附記于此、同卷八云、林亦之、字學可號綱山、福清人、盛年

挾策游四方、卒以不契去、及將之莆紅泉、謁林光朝、齋宿與客語、夜半聞息入而驚、寢者以語光朝、先生曰、寢與人同、夢乃自作、遂大喜曰、吾得師矣、自此事之三十餘年、光朝席下、歲率百人、莆劉朔爲福清賢令、顯貴相望、然言高弟、必亦之也、光朝卒莆人推亦之詞講席、紅泉之學、一本躬行、亦之戶外履、幾半於師矣、或勸其著書、答之詩曰、講學紅泉不著書、只將心學授生徒、趙汝愚帥閩、辟入東井書堂、待以賓友之禮、上其學業、辟于朝、命未下卒、所著論語、考工記、毛詩、曾子解、多門人所述、唯詩數卷、及玉融志其筆也、莆中劉克莊、稱亦之曰、宋來詩、第視經義、有韻者耳、艾軒始好詩、深湛而加煅練、有累月經歲、繕一章、未就者亦之之文皓、似其師、詩高妙絕類唐人、律詩得少陵之髓、疑老師當避其鋒、他文稱是、學者稱綱山先生、一曰月魚先生、景定間、邑人司農少卿林希逸、追擧其賢、贈廸功郎、學者私謚曰文介、【文字血脈】とは、莊書に所說記の文段の字句を接續したる語路を云【稍】はやゝと訓じて、次第を經て、漸々に長ずるを云、韻會去聲效韻、所敎切漸也韓文詩、余初不下喉、近亦能稍稍【梗槩】は、おほむねと訓す、大槩大略と云に同じ、文選卷三、張平子東京賦、言其梗槩如此、注、翰曰、梗槩猶大綱也○同卷五、左太冲、吳都賦云、略擧其梗槩、而未得其要妙也、註、向曰、梗槩大綱也、【頗】は、すこぶると訓じては、上聲なり、かたぶく、偏頗の時は、平聲なり、韻會歌韻、滂禾切、說文頭偏也、又偏頗不正也、○又苛韻普火切、差多曰頗多、良久曰頗久、多有曰頗有、俗に餘程と云ふに同じ、【涉獵】は充棟汗牛數萬の書卷を、博洽の名を釣ん意ばかりにて、考見ることの、疎略なるを、深水を舟筏を不用、颯と涉するが如く、獸を獲せんとて、曠野を急疾に馳回るに似て、不丁寧を喩て云辭なり、廬陵胡繼宗書言故事、卷三云、博覽曰涉獵、○前漢書卷五十一、列傳第二十一、賈山傳、涉獵書記註師古曰、涉獵若涉水獵獸、言歷覽之、不專精也、此にては、【涉獵佛書】と云は、平時專我學業の第一とするには、あらざれども、衆理を窮めんと願ふが故に、釋氏の藏經の多き、諸錄の廣きまでを、博歷覽したるとの義までに用ゆ、按ずるに、希逸は臨濟宗南嶽十八世、天童山密菴咸傑禪師法嗣、隱靜致柔禪師に、參學して、禪門の玄關を扣き、佛典に

思を浸して、楞嚴及維摩經註疏を著せり、虛白往年隱元禪師の許に、有故寓居し、其嗣法、即非禪師は、希逸の遠裔なると聞て、二佛經註疏、及老莊列口義の眞本を、檢閱したり、希逸は三教に不味人なり、【其縱橫變化之機】とは、【其】の字、莊子を指す、莊子の智德辯才、兼足れるが故、無色無相の妙道を、縱說橫說することを、自由にし、有を無にし、無を實に、玄辯を傾けて、吐露せられたるの頓機を、某樂軒の下にて、教授の荷恩間に、先師も教を受玉へる根源、艾軒の說までを、傳聞たる力にて、玄妙を沙汰したる、莊書の文段語路を、歲月を經るに隨て、大槩を知たれども、猶聲臭をも、離れたることなるに依て、釋典諸錄までを、餘程觀覽の功を、積ての後に至て、莊子の縱橫變化して、所說出の頓機を、覺悟したるとなり、【自謂於—】とは、【此書】は、莊書を指す、言は我ながらも、歡樂するに、餘ることあり、釋典漢土に未傳來已前に、佛說を不聞知して、說れたる書なれども、某は樂軒教授の恩を被る次に、艾軒の說をも傳受、些宛は、莊書の大抵を知るに似たれども、猶意に不滿事ありて、佛經までを、搜索しての以後に、莊子の教、縱橫變化の頓機あることを、悟入し、今に至りては、此書の理を、會得したるの效に依て、儒門の所教、老莊の玄談、釋典の開示、三家の道、合一にして、不殊ことを、日を逐、月を重ぬるに就て、明得たることを、自知するとなり、【實前人—】とは、三教一致なることを、悟入したる、今日の希逸が意より、料度すれば、往年に我れより先立て、此書に註解を施されたる、人は何も其理をも、未明盡、其奧義も、十分に析究むることを、未得して、人々自己見力の及ぶ長程に、記住て、至極に屆るは、あらずとなり、【前人】の二字は、書經周書部、大誥篇云、敷前人受命、茲不忘大功、此にては、我より前輩の人なり、【自謂】以下の句は、言中有響、他人の註を抑下して、自己口義を、天晴と自負の意を含めり、

最後乃得呂吉甫、王元澤、諸家解說、雖比郭象稍爲分章析句、而大旨不明、因王呂之言、愈使人有疑於莊子、

自此第五段とす【最後】とは、莊書行世以來側聲晉代向秀、同時に續郭象が註を、先として、李唐代に至るまで、歷朝の長が間、註釋に染翰數十家の多端なるをも、希逸は此書に篤志するが故に、搜抉せられて、無隱ども、群註の中に、此こそは、要を括て、其義を盡せりと、意に契たるは、あらざりしに、當趙宋の代に呂氏王氏の新註始めて、往世の註に後れて出たるを、頃間見ことを、得たるとなり、【呂吉甫】は姓は呂、名は惠卿、字、吉甫、本傳は、宋史卷四百七十一、列傳第二百三十、姦臣傳第一に載たり、呂氏註莊子十卷あり、【王元澤】姓は王、名は雱、字元澤、宋朝に事て、龍圖閣學士、左諫議大夫に任せらる、彼が所註、莊子も十卷なり【諸家解說】の字を味へば、呂氏王氏二人の外に、同時に註者ありや、未知誰何【雖比郭—】とは、二氏の註は、往昔の郭子玄が、無臘次、註釋を混亂したるに比合せて、餘程章段も分明に、句讀も剖析して、初學の助もあれども、第一總大綱の意旨括が不明白して、却て二氏の註解妨となり、若は便ならんかと、窺見る人は、莊書本文に猶疑惑を重さするとなり、

若以管見推之、則此書自可獨行天地之間、初無得罪於聖門者、

自此第六段、此序結束なり、【管見】は物大なるを、竹管の細中より、窺見て、其大を不得見盡、が如く、自己の見知狹陋を喩て云、卑下の辭なり、此書末外篇天地篇に、直用管闚天用錐指地の語より出で、後に晉代王獻之が門生管中見豹、特見一斑の語も、莊子の辭を、受借て云へり、言は我小才の身として、至妙の道を沙汰することは、譬て云へば、竹管の中より、廣大なる天上四維の極を、闚ふに似たれども、不測の理を推量るに、此莊子の書は、無聲無臭の道理を、卷中に包藏するからは、後人の見解は、種種展轉し、註釋は、彼此其本意と、齟齬に及ぶとも、南華翁の言言句句は、諸子百家の書に超出で、專自然に、上天下地の間だに、不絕して、可流行教の干要なれば、不識得人こそ、異端邪說とも謗り、又は件件誕放なりとも、抑下すれども、元來天人一致の奧義を、演說する

に依て、聖人門流より受ㇾ罪ことは、毛頭もあらずとなり、

使ㇾ莊子復生、謂之千載而下子一雲可也、非敢進之作者、聊與諸同ㇾ志者共之、

【復生】は、蘇生するを云、史記前漢書に、出たる字なり、史記、卷七十九、列傳第十九范雎傳上書の文に、雖ㇾ舜禹復生、不ㇾ能ㇾ改也、【復】は韻會屋韻云、又有ㇾ韻、扶富切又也、增韻再也とあり、一旦死して、又蘇るを、復生と云、又前漢書卷五十七、列傳二十七、司馬遷傳に、神雕則死、死者不ㇾ可ㇾ復生三【之】字、上は此書に、可獨行天地之間、初無得罪於聖門者と云へる、批評を指す、下の二【之】は、共に口義を指て云、【千載一】とは、韓文卷十七、與馮宿論文書に、昔楊子雲、著太玄、人皆笑之、子雲之言曰、世不我知、無害也、後世有楊子雲、必好之矣、子雲死近千載、意未有楊子可歎也と、韓退之が、書たる辭を、借用て、既に死去たる、南華翁が、或は、今日蘇生することあらば、我如此の批判を聞ては、韓子が所云の楊子雲死して、後千載に、子雲と學才同じき人出たらば、太玄經の玄理を曉さんと、云へるに同く、汝希逸は、此莊子と生死の隔は、千年餘の久しきを經たれども、意は一致にして、我所説を能曉明たりと、褒美を受んぞと、我より自負の辭を吐とも、不可なることは、あらじとなり、【千載一】字は、文選卷四十七、袁彥伯三國名臣序に、千載一遇、賢知之嘉會の語あり、使莊子より、可也の字までは、前輩の註を退けて、自己の口義を、擲脚大言なり、【非敢一】とは、如上大言を吐て、此より復強く謙下の辭なり、【敢】は說文進取也、廣韻勇也、犯也、他人を不ㇾ憚、自負するを云、【非敢】は其反にて、恐憚なり、如上件云ふことは、云ひたれども、元來疎才の我なれば、此口義ば、天下に高名を振ふ、作者達の、面前に、進見さんとの願には、あらずとなり、【作者】は李白全集卷一、大鵬賦序云、豈敢傳諸作者、庶可示之子弟而已、論語憲問篇に、所謂作者七人の作者と、一同にはあらず、作は造也、起也と註して、自己に器量足れるが故に、其能を振起して、信を廣大に著はす人を云、【聊與一】とは【聊】は少しの義なり、文選張銑

曰、且也、詩曰、聊與之謀、箋云、聊、且略之辭、【同志】は、親友の異名なり、公羊傳云、同ㇾ門曰ㇾ朋、同ㇾ志曰ㇾ友、○周禮大司徒註云、同ㇾ師曰ㇾ朋、同ㇾ志曰ㇾ友、言は迎も不ㇾ至極注なれば、世間に流布することは有ㇾ怖、惟我同輩の學友のみと、料簡相談の助ばかりには共にせんとなり、

○穆陵宸翰

【穆陵】は、趙姓南宋第五主、理宗の廟號なり、詩經大雅部、文王篇に所謂、穆穆文王の義を取て稱す、詩經朱子註、穆穆深遠之意、華谷嚴氏曰、文王德容、穆穆然可ㇾ見、故穆穆足ㇾ以形ㇾ容之、【穆】は、つゝしむ、うるはし、あつしと訓す、韻會屋韻、穆莫六切、集韻敬也、美也、廣韻又厚也、又爾雅、穆穆肅肅、敬也、註云、皆容儀謹敬、疏引ㇾ天子穆穆、禮記曲禮、天子穆穆一理、宗の帝位に在て、德儀容貌に著れて、嚴正なるを、殂落以後までも、天下に感ずると云の義にて、此一字を用ひたり、【陵】は、みさゝきと訓じて、凡帝王皇后の遺骸を、葬藏る處を云、韻會蒸韻、陵閭承切、帝王所ㇾ葬、曰ㇾ山陵ㇾと註す、素說文に、大阜也と註して、平地と殊に崇高なるを云、帝を葬地なれば、車馬の穢を忌、洪水の難を防、其宅兆を擇定むるに依て、墓墳の稱と別て、陵と云、事文類聚前集卷五十云、宋朝陵名、太祖昌陵、太宗熙陵、真宗定陵、仁宗昭陵、英宗厚陵、神宗裕陵、哲宗泰陵、哲宗泰陵、徽宗祐陵、欽宗寧陵、高宗思陵、孝宗阜陵、光宗獻陵、寧宗茂陵、理宗穆陵、度宗安陵、【宸】は、天子の玉座に定め玉ふ處を云、萬乘の君は、北辰の宿處を定めて、衆星を拱すが如くに、四極の民人まで、咸來朝させて、服從するの義を取て、北方に居て、南面し玉ふが故なり、韻會眞韻、宸丞眞切、說文屋宇也、从宀辰、聲、賈逵曰、室之奥者、後人指帝居、曰宸、帝居北辰之宮故、从宀從辰、天子之居、【翰】は、ふんでと訓じて、大抵は、文翰、詞翰、書翰の時は、去聲とし、又、はねと訓じて、羽翰は兩音とす、然れども、文選卷十七、陸機文賦云、始躡躅於操觚、終流離於濡翰、音寒と注して、平聲に用ゆ、李周翰注、翰筆也とす、韻會去聲、

翰韻、翰侯肝切、詞翰と註す、此に宸翰の二字は、俗に勅筆と云ふに同じ、希逸老莊列三子の口義を、理宗叡覽ありて、感歎の餘に、下の文句を筆記して賜ふなり、希逸の後裔即非禪師家藏の本には、作二宋理宗皇帝宸翰一

披二昧奏函一、敷陳子義、以二天地人之實理一、明二老莊列之寓言一、

【奏】は、すゝむると訓す、五車韻瑞に云、奏進也、天子の叡覽に、可供として、下より奏進するを云、【函】は、はこと訓す、韻會亟韻、胡南切容也、○又咸韻、胡讒切、匱也と註す、老莊列三書の口義成就して、眞贋を朝廷にて、訂されんことを請、其註本を容たる函なり、【子】は事物紀原卷四云、文心雕龍曰、齠齡辨慧、謂二之子一、蓋周初人、此名子之始也、聖人の說は、逐一常道なるが故に、尊信して經と稱す、五經六經と平時稱する此なり、賢者の書は、其姓に子字を加へて、總て子書と呼、今此に云、老子、莊子、列子の類此なり、孟軻の書を、孟子と云ふも又同じ、【敷陳】は、あまねく、しくとも、しきつらぬるとも訓す、韻會虞韻、敷芳無切、說文施也、一曰、陳也、詩敷時繹思、箋云、敷猶徧也、正義云、敷訓爲布、是廣及之義、故云猶徧也、○同眞韻、陳他鄰切、布也、又列也、言は下より奏進獻上する函の蓋を披かせて、所筆記を熟〳〵味へば、子書の玄義を解釋して、文句に敷陳するに、天地人三才合一の實理を用て、古昔の老聃、莊周、列禦寇の三人が、萬種に所二徧滿流通一の道を、泛暗愚の徒に至るまで、曉示さんが爲に、敎辭を事物に、寓託比擬したるを、逐一丁寧に、註解を施して、說明示したるとなり、此に寓言と云ふは、莊子の說を稱するとは別なり、莊子には、無二其人一無二其事一を、主客を立て、素不二在ことを、實事の如くに、設て說を云、

得二其指歸一、各爲二詁訓一、卿之該貫若此、時備觀覽、所益良多、

【得】は、希逸三書の敎を明得るを云、【其】一字は、上の老莊列之寓言を指す、【指歸】は指示して、敎導かんとの意思、歸嚮ふを云、【詁訓】は註釋の異名なり、爾雅郭璞序、夫爾雅者、所以通二詁訓之指歸一、詁古也、通古今之言一、使二人知一也、訓、導也、道物之貌、以告二人一也、

指歸謂二指意歸鄕一、言此書所二以通暢古今之言一、訓道、百物之貌、使二人知一其指意歸鄕、【各爲一】とは、三書共に、口義の註を、下したるを指す、【卿】はなんぢと訓す、理宗皇帝より、希逸を呼系て指す辭なり、韻會淸韻云、秦漢以來、君呼二臣以一卿、【該貫】は、かねつらぬくと訓す、希逸の表とする學術は、聖門の敎なるに、老莊の玄學までを、曉明たるは、儒道の二敎を兼載て、貫徹するとなり、字彙、該備也、咸也、皆也、載也、兼也と註す、【若此】とは、三書の註に、三才の實理を用て、其所說を明白にするを指す、【時備一】とは、【時】は、俗に時時刻刻と云ふに同じ、叡感の餘に、須臾も無二間斷一、心目に照して、觀察し、文字に肉眼を浸して、叡覽あるとなり、【所益一】とは、希逸が口義に據て、昔時未二曉明一事理を、一朝頓に、心裏の所資益不二些スクナカラ一となり、

簡有二朕心一、故茲嘉奬、付二林希逸一、

【簡有一】とは、書經卷三商書、湯誥篇に、湯王兵を發し、天下の憂を救玉ふ時に、列國諸侯に對して、今暴虐を熾にして、天下の民を煩はしたる桀は、天より不赦の、罪あるに依て、南巢に放たり、已來は天下の賢人、皆天帝の臣なれば我其人を不二赦一して、其簡は、上帝の心に順はんと、仰せられたる語意を、借用ひたる句なり、然も書經にては、不二逆天命一の義なり、此に用ひて、衆人の正邪曲直も書卷の眞贋も、萬乘の君より、明德を照し玉ひて、吟味することを、職と云の意なり、書經湯誥云、爾有善、朕弗二敢蔽一、罪當朕躬、弗二敢自赦一、惟簡在二上帝之心一、簡閱也、俗に吟味すると云に同じ、【朕】は、昔は、上下の無差別、自己の義に用ゆ、秦始皇六國を滅し、四海一統してより、權威を崇くして、天子に限れり、事物紀原卷一、朝廷注措部云、朕我也、古通稱之、秦始皇二十六年、始獨天子稱朕云、史記曰、李斯議二天子自稱一曰レ朕也、○事文類聚後集卷二云、始皇已幷二天下一、李斯等議曰、有二天皇有一地皇、有二泰皇一、泰皇最貴、臣等昧死上二尊號一、王爲二泰皇一、帝命爲制、令爲詔、天子自稱曰レ朕、禁邕註曰、朕、我也、古者上下共稱之、至二秦然一、後天子獨以爲稱、【故茲一】とは、【嘉奬】はよみんじすゝむると訓す、偖も三書の口義其理を能解說したりと、叡慮に契たる

倫に、天下後世に至るまで、此註を疏略にさせまじき爲めに、宸筆を染玉ひ、其功を著述なされて、希逸に付與し玉ふとなり、韻會麻韻嘉居牙切說文美也、增韻又褒也、○同上聲袞韻獎子兩切說文嗾犬厲之也、今作奬、廣韻勸也、譽也又崇也、○同去聲過韻、付方遇切、說文與也、增韻授也、

○內篇逍遙遊第一

【內篇】は、一箇の心內を說示すが故に、七篇都て內篇の部に聯たり【逍遙遊】とは、此一篇に於て、莊子の眞樂を建立して名稱なり、逍遙は優游自在なり、義に依て、たのしび、あそぶと訓ず、一箇の眞心、千變萬化に不變、轉轆轤地にして、順境逆境、都て我を不失を云、

北冥有魚、其名爲鯤、鯤之大、不知其幾千里也、化而爲鳥、其名爲鵬、鵬之大、不知其幾千里也、

此以下、至將圖南、莊子例の寓言にして、自己の胸中物に不泥著、廣大無量の眞樂を形容せんが爲に、此譬喩を設られたり、卒易に不可看過、能會得之、則莊子と千歲の一會にして、眉毛厮結の人ならん、先ッ字面の如くならば【北冥】北海と云に同じ、【鯤】は、本俗に云卵醬、至極瑣小なる物なり、今此には、大不知其幾千里と云て、廣大無量の物と云有意、楊升庵文集卷四十六云、內則卵醬、讀作鯤、國語亦云、魚禁鯤鮞、皆以鯤爲魚子、莊子乃以至小爲至大、便是滑稽之開端、【化而爲——】鯤が忽變化して、鳥となりたるを、鵬と云、初より鯤が大きなる物なれは、鳥に變じても、其大も、亦不知幾千里となり【鵬】は梅膺祚字彙云、大鵬、莊子北溟之鯤、化而爲鵬、又古作鳳字、愚謂本是寓言譬喩なれば、北冥は、極陰の方、魚は陰物なれば、我眞心不起一念にして、滿然なるは、北海の廣大なるに鯤魚の潛りて、外に不見して、海中に常に如游泳、然も此眞心も凝滯して、枯木寒灰底に、一生寂然たるにあらず、素萬理に應ずる能あれば、幾千里なることを、難料知は誠もなり、此は眞心の體能を云、變化して鳥となるが面白、若鳳鳥の靈瑞なるが

如き、信なくんば、彼黑山下鬼窟裏の活計にして、不宜に、此でこそ、天眞獨朗、妙應無方、不住脚迹して、嚮所を不定、鵬の背、四維の極まで翱翔するが如く、應用無礙にして、一種一偏に不墮著からは、其心の鳥の所翔翔は、幾千里とは、不定筈ぞ、

怒而飛、其翼若垂天之雲、

【怒】は、憤怒の義ならず、應機接物の時、無滯礙、覿面に、此心鳥が、萬境活脫自由に、觸動を【怒而飛】と云、所謂逢茶喫茶、遇飯喫飯是なり、【飛】字は、上の鳥の緣語に依て云、梅膺祚怒字解、怒如强弩之發、故從弩省、怒當以心節之、故從心と云へり、今又此說當配思【垂】は字彙自上綴下也、たるゝと訓ず【其翼】は心鳥の羽翼なり【垂天之雲】は、上天より、四維一盃に綴下る雲なり、【如】は、似也、ごとしと訓じても、似たりと云義なり、此所謂妙應無方なり、

是鳥也、海運、則將徙於南冥、南冥者、天池也、

【南冥】は、南海なり、南方は、正陽の地なり、此心鳥血

陰の海、湧沸する時は、北海に滯在ことではないぞ、正陽の南海に徙去んとするぞ、此所謂萬境一如なり、又登泰山而小天下なりとすると同【南冥者——】とは、已に云て、復抑たる語なり、前に說く、北冥に對して、方に冥拘と云意なり、假に南北とこそ云へ、方所に不被縛、此八面玲瓏、四顧清底なれば、心に住て、穿鑿することにあらず、惡すると認、賊爲子ぞ、盆池底の看を不爲、天然と終始を不識、四河朝宗する大池なり、說文海字注云、天池也と、又可合思、能明めたらば、八角磨盤空裏走るを識得せんぞ、何様終始淺深を論ずる處に此心鳥が徙去んとする底は不嬉ぞ、

齊諧者、志怪者也、諧之言曰、鵬之徙於南冥也、水擊三千里、摶扶搖而上者九萬里、去以六月息者也、

【齊諧】は、莊子題號を造て、無其書を、先に此書如在に態引用て、上に所說を、實事にせんが爲の、證據に立るなり、題號さへ、ひとしくやはらぐると訓する

字なれば、見聞に渉て、實なりと、難思怪異なる事共を、志逸する書ぞと、可察、然れども、先に此書世に行はれて、今我如所説事を載たるからは、如此事、有間敷を世を欺て、云ふには、あらずとなり【諧之言曰—】とは【擊】は、小補韻會云、刑狄切説文支也、徐曰支撲也又擊動也、水面を鳥の飛んとする勢にて、羽翼にて、擊動を云、言は大鵬の形大なる、北海より南海に徙去んとする時に當ては、凡鳥とは、殊にして、唯一勢に、三千里の長遠なる水面を、はたくと羽擊して、扶搖とて、高吹上行、大風に打乘て、飛翔翔て、其勢に、任せて上ること、九萬里の高きを凌ぐ、思の儘に飛去て、六月の長きを過て、休息すると云へり、如此なれば、我所言有據、雜談ならざるとなり、寓言の上に、寓言にして、揑怪不少、愚意を用て、觀察するに、水は周流する陰物、自己心の鵬鳥が萬理無間周流する一大水を擊時は、三千里を一翔翔するに、何んぞ有滯礙、又風は、陽氣の物なり、人の物に觸て、氣の進むは陽なり、扶搖の大風に乘らば、九萬里上ること不足怪【三千里】は、水面の遠を云、三才天地人に、此心鳥徧滿するを云、【九萬里】は、上ること高きを云、此心鳥の氣進むこと、目前を離れて、高古に不一昧を云【三】と【九】は、陽數、動を云、分て、九は、老陽の數【去以六月—】とは【六】は、老陰の數、進去て後に、六月に至て、休息するは、卷舒得自由【上者九萬里去以六月息】は三略所謂舒之彌四海卷之不滿一握と同じ、今古毎歳の陰陽の運も、陰月六、陽月六、毎日も陰六時、陽六時、高天の盧陽、地下の大海極陰、已に具へたる陰陽の二氣、其偏倚無過不及到得ては、天人一致底ならば、何んぞ不如此【息】は、易所謂退藏於密の地位にして、寂然不動の處なり、垂竟鯤鵬の形、大に、其動の廣きを云ことは、廣大の知行に比す、下に所云の蜩鳩鳩の小見小行と並て、世俗の小知小見を罵辱しめんが、爲の張本なり、

野馬也、塵埃也、生物之以息相吹也、

【野馬】は、春日に當て、艸木發生せんとする時、陽氣に催されて、蒸升る底を見れば、郊野の間に放馬の馳回るが如くなるを、世俗より此を野馬と名く、又陽燄の映ふが故かと思て、陽燄とも呼、又は生絲の白きを攪亂したるが如く、散々に見るが故に、遊絲とも云、楊升菴文集卷四十六云、莊子野馬、注云、日光倘未詳悉、按内典龍樹大士曰、日光著塵、微風吹之、驟野中轉、名之爲陽燄愚夫見之謂之野馬、渴人見之以爲流水【塵埃】其に、ちりと訓す、分ちて云へば、塵は泥土のちり、埃は細塵なり、俗に微塵と云、手にも不採、微細なるを云、言は彼野馬と塵埃の二物の如きは、素より定まる形あらず、春日少陽の氣を受て、無情の物まで、發生する勢、蒸升るを愚夫は見住て、野馬と稱し、日光の映するに依て、手に不採、微塵の發生し、起上を塵埃と呼、此成萬物發生する節に遊て、其氣を吹出すは、世人の氣息を吐て、呴噓呼吸すると同じとなり、

天之蒼蒼、其正色邪、其遠而無所至極邪、其視下也亦若是則已矣、

【蒼々】は、青黒色を云、あをしと訓す、下地より、高天を仰げば萬々仞の高、觀んとするに無量なれば、唯蒼々たるを、見るのみ也、此眼力の不及ばなり、言は高天を料らんとする時、蒼々たりと見るは、決定して、天の正しき色なりと思へるか、又餘に高遠なるに依て、自己の眼力其高に無所至、遂極盡が故か、如何となり、明藉文清公讀書錄卷八云、天之蒼々、其正色邪、其遠而無所止極邪、其視下也亦若是而已矣、此論天之色體俱盡【其視下—】は、指鵬、言は、大鵬が九萬里の高天に飛上て、下界を視ることも、亦萬物一體にして、何角と差別することは、あるまじとなり、上に不連屬野馬塵埃を、前立て云ふことは、此天之蒼々と云より、下三句を、云はんが爲なり、無情無形の物も、陽氣に隨ては、發現す、人も賢愚無隔寂然たる、不起一念の地より、無量無數の念々發生すること、今古無異、然れども、凡人は境に觸れ、物に對して、生ずる處の迹に泥て、各稱號を定て、素無思無爲の地より、薫發することを不識、彼大鵬の心鳥は、萬物の根なる、天に高飛して、四維上下、一眼看にして、區別の騒動は、全あらずとなり、

且夫水之積也、不厚則負大舟、

也無力、覆杯水於坳堂上、則芥爲之舟、置杯焉則膠、水淺而舟大也、

【且夫】は、俗に、其上又と云に同じ、【坳堂】は、堂邊の土地不平、凹なる處を云、字彙於交切音凹與凹同、地坳、下也、不平也【膠】は、素にかはと訓ず、今は膠漆にて、黏たる如く、凹なる小水に、杯の必至と、居を云、此は、下に至德の人、萬物の上に、轉醮醮地に高上る、大風を說んが爲に比て、小人の事物に、汚染して、泥滯ることを、譬を用て云なり、言は、小水にして、深厚を不レ積時は、水は能浮舟能ありとは、云へども、大舟は、小水の力を用て、背に負が如く、浮ぶことは、ならず、然れども縱に一杯の水を、堂邊の土地坳なる處へ、打覆して試よ、細芥は、無落無落と、大海に、舟を浮べたるが如くならん、又直に其杯を置て、見たらば、膠漆にて、堅黏たる如くに居て、浮ぶことはあるまじ、芥は浮て、杯を浮ることを、不レ得は、小水の淺きに、長に不レ應杯の大なるを、舟の如にするが故ならずや△下意は小人自己の心淺きにも、目前の一種一物は、左右と、下度すれども、萬境萬物を、同一體に載て、曉すことの、不能を云、

風之積也不厚、則其負大翼也無力、故九萬里則風斯在下矣、而後乃今培風、背負青天、而莫之夭閼者、而後乃今將圖南、

【培】は、あつしと訓ず【天閼】は、くじき、とむると訓す、物に障られて、不自由を云、言は今至德の人は、我に培風を、天然と具足して、萬化に障礙せらるゝこと、毛頭なくして、今北海極陰寂然の地より、盛陽南海の冥々たるに造徒ることを、自由に謀るとなり、

蜩與學鳩笑之曰、我決起而飛、槍榆枋時、則不至而控於地而已矣、奚以之九萬里而南爲、

【蜩】は、つく〳〵ぼうしと云蟬の類、形黑して、五月に鳴【學鳩】は羽翼漸生じて、飛んとする小鳩なり、【之】字、大鵬高飛を指て云【我】は蜩と、學鳩に係る【決起】は、勢氣を奮起して、飛んと、思を決定するを云、【榆】はにれやなぎと訓ず【枋】は小木の名【搶】は突也、一勢に頓至らんとするを云、つくと訓す【控】はするぼふと訓す、飛んと志して、不得飛、平地に颯て形を投るを云、言は蜩や學鳩の小蟲小鳥が、大鵬の自由に高飛するを莞爾て、我等も翼を具へて、飛ことを、とす、涯分志を奮起して、飛はんと思を決定して、楡や枋木に、指矢を射るが如く、一勢に搶到らんとする時に、至得ることを不遂、形惱羸れて、平地に身を投ること數度なること、此方に例て、覺あり、何んぞしも、嗄に九萬里の高天に翔往て、南海の遙なるに行んとするや、念慮を企てゝも、不遽遂なりと云て、譏となり、

適莽蒼者、三飡而反、腹猶果然、

三樣の比喩を設造て、畢竟知行に小、大の違あることを、示さんが爲なり【莽蒼】は、莽はくさむらと訓す、蒼青黑色、草叢茂にして、山城國より山崎、八幡の邊を、打渡して見る如き十許里程にて、地の不遠を云【三飡】は、往に一時、中間に一飯、還て復一喫、三度の食なり【果然】は、三飯しても、往來不遠に依て、食氣未消、滿腹するを云、此れは接物時奈何と一思惟して、意に計較するは、跋行とするに望て、一飯するに同じ、正邪曲直を察して、火なることを知り、水なることを知るは、行て後、中間に、一食するに齊し、其後火は陽なり、水は陰なりと、復て意に住著するは、還後に、又一飯するに不異、拘境滯物底の死漢なり、事物の上に認著して、擔枷鎖の漢となるは、食氣の未消滅と、相同じ、掃迹しても、復生迹底なり、此小知小行ならずして、何者とや云はん【適百里】とは、此は數日を重ぬるが故に、糗子に貯たる少分にては不足、必路程遠きが故に、兼日より夜を隔て、糧

適百里者、宿舂糧、適千里者、三月聚糧、

米を舂き造へて、長途の用意を丁寧に營むなり、此又一等高則高、然れども、未十分、最鑑在機前が如くなれども宿舂糧底に、喩るからは、事物の理を、模索不著の病なり、【適千里―】とは、西國や關東千里の遠きに往くには、三月前より聚糧、已上三等の、別あるとなり、三月は、四時の內、一季は三月なり、想ふに、回也三月不違仁と、云に同じ、然も四時の氣に乘て、應用無礙なるには未至、右の三等は、托言借喩とす、凡人足迹を運して、行くにも、遠近の別に依て、食にも多少の隔あるが如く、人の見知にも小大の差に依て、志の物に所趣向にも、亦遠近あることを、曉示さん爲なり、

之二蟲又何知、小知不及大知、小年不及大年、

【二蟲】は、蜩と、鳩の二を云、鳩は、蟲にあらずと、不可泥、籠て云、人をも、裸蟲と云【又何知】とは、彼二蟲何としてか、此大鵬高飛の樂を知んやとなり、【小知不―年】此二句は、結前生後の文法なり、【知】は智惠の智字として可見、小知と大知を云て、上の鵬が廣大の樂を自知することを結び、小知を說て、蜩鳩の小分の偏知を結び【小年大年】の一句は、下一段の譬喩を生ず、言は、小智見解の徒は、大圓鏡智超宗越格の長には、不及至、其證據には、蜩鳩は、大鵬の樂には不及、其生短して、早終者は、長大に生を存長者には、生を齊くするには、不及至、

奚以知其然也、朝菌不知晦朔、蟪蛄不知春秋、此小年也、楚之南、有冥靈者、以五百歲爲春、五百歲爲秋、上古有大椿者、以八千歲爲春、八千歲爲秋、而彭祖乃今以久特聞、衆人匹之不亦悲乎、

此は、小年大年の證を擧て云【朝菌】は文選卷二十一郭景純遊仙詩第七首下李善注云、潘岳朝菌賦序曰、朝菌者時人以爲蕣華、莊生以爲朝菌、其物向晨而結絕日殞とあれども、此義を用て本文及注の意に難應於

註詳記【蟪蛄】はひぐらしせみと訓○本艸綱目卷四十一、化生類蚱蟬下集解時珍曰、蟬諸蜩總名也、皆自蠐螬腹蛸變而爲蟬、亦有轉丸化成者、皆三十日而死、俱方首廣額兩翼六足、以脇而鳴、吸風飲露溺而不糞、古人食之、夜以火取、謂之耀蟬、爾雅、淮南子、揚雄方言、陸機草木疏、陳藏器本草諸書所載、往々混亂不一、今考定于左、庶不誤用也、夏月始鳴、大而色黑者、蚱蟬也、又曰、蝒音綿、曰馬蜩、豳詩五月鳴蜩者是也、頭上有花冠、曰螗蜩、曰蝘、曰胡蟬、蕩詩如蜩如螗者是也、具五色者、曰蜋蜩、見夏小正、並可入藥用、小而有文者、曰螓、曰麥蚻、小而色青綠者曰茅蜩、曰茅蠽、秋月鳴而色青紫者曰蟪蛄、曰蛁蟟、曰蜓蚞、曰蟥蟯、曰蛥蚗、音舌決、小而色青赤者、曰寒蟬、曰寒蜩、曰寒蟞、曰蜺、未得秋風則瘖不能鳴、謂之啞蟬、亦曰瘖蟬、二三月鳴而小於寒蟞者曰蟷母、並不入藥云云、春時に生じて、秋節に死し、夏に生じて、秋に死する蟲なれば、【不知春秋】と云【此】の字は、朝菌、蟪蛄の二に系て云、朝暮の間のみにして、朔日より三十日の終、晦日まで生を不存、蟪蛄は四時の全次第を不知故に、短小の年と云、【楚之―】【楚】は國名、東南方にあり、列子卷下湯問篇第五にも前立て、八千歲爲秋の語あり、列子には、荊之南とあれども、荊も楚も同地なり、荊は楚國の本號なり【冥靈】【大椿】共に木名として看る【上古】は禮記に、太古と云に同じ▲成玄英說伏羲時を指すと云、如此强不可拘○言は中國遙に隔たる、正陽の地、楚國の南に生長する、冥靈と名る木は、世俗凡庸の人は、知るまじきぞ、云て聽せん、五百歲の長を春として、枝葉榮へ、五百歲の久を秋として、枝葉枯落て、合せて、一千年を世間の一年とするなり、未此より、長生の物あり、太古に大椿と云木あり、此木は、八千年を春とし、八千年を秋とし、合て一萬六千年を、一年とする、此重々長大の年ならずや▲仙家の不老不死、禪家の生死元來假名、老子の死而不滅も、語中にありと見よ【而彭祖―】【彭祖】は姓は籛、名鏗と云て、五帝の中の顓頊の玄孫にして、自己の本性を養ふことを能して、鼎味を能調ることをして、雉羹を帝堯に進めて、堯に感せられて、彭城の地の諸侯に封せられたり、子孫其道術を祖とし崇慕ふが故に、彭祖と云へり、夏商周の三代久年月を歷て、八百歲の壽命を保てり、列仙傳卷一云、彭祖

錢鏗帝顓頊玄孫、至殷之末世、年已七百餘歲、而不衰、好恬靜、惟以養神治生爲事、穆王聞之以爲大夫、稱疾不與政事、善於補導之術、並服水晶、雲母粉、麋角、常有少容、采女乘輜軿、往問道於彭祖、采女具受諸要以教王、王試爲之有驗、彭祖知之乃去不知所往、其後七十餘年門人於流沙西見之一云、周衰始浮遊四方、晚入蜀抵武陽留、家喪四十九妻失五十四子、言は纔に八百歲を限として、不盡を不得保を、今に至るまで、壽久なりと、此一人の名高聞世、暗昧の衆人共が、似たしと匹慕ふて、生死の名に意を奪るゝことは、何と亦悲哀に餘ることにはあらずやとなり、

湯之問棘也是已、窮髮之北、有冥海者、天池也、有魚焉、其廣數千里、未有知其脩者、其名爲鯤、有鳥焉爲鵬、背若泰山、翼若垂天之雲、摶扶搖羊角、而上者九萬里、絕雲氣負青天、然後圖南、且適南冥也、斥鷃笑之曰、彼且奚適也、我騰躍而上不過數仞、而下翱翔蓬蒿之間、此亦飛之至也、而彼且奚適也、此小大之辨也、

此一件も、列子卷下湯問篇第五に、此書より、以前に載記す【棘】は人名、列子には、夏革と記す、趙宋李石續博物志卷五云、夏棘字子棘、爲湯大夫、列子作夏革とあり、今按ずるに、革、棘共に、きよくの音に唱へて、無害、韻會陌韻革字注云、史始皇紀不用兵革音棘、通作棘【問棘】とは君臣相交て、問答ある事と云意に可見、連續する鯤鵬の語は、湯の疑問にあらず、其餘に前後數條の事あり、本書に依て、可考【是已】と讀て、是已と不可誦ことは、口義に斷れり列子に、無此二字、先輩の列禦寇が語を、上に說く段々の證據に、今援用るに依て、殷湯王の棘に、尋問れたることも、予が所云と同く是也との意なり【窮髮】列子作終

髮、字彙不毛之地、謂之窮髮○玄英疏云地以草爲毛髮、北方寒冱之地、草木不生、故名窮髮、所謂不毛之地、又按ずるに字彙終窮也と註す、然ば列子に終髮と記しても意同じ、列子口義終髮即窮髮也とあり、【天池】楊升菴文集卷七十七云、海曰天池、江曰天塹、鹽曰天藏【未有知其脩者】列子作其長稱焉、【背若泰山】四字、列子無之【若垂天之雲】此下、列子有其體稱焉四字、兩書文字增減あるに依て、列莊文勢筆格の優劣を可考【泰山】は五岳の一、群書拾唾卷二云、五嶽東岳泰山南岳衡山西岳華山北岳恒山中岳嵩山○爾雅註疏釋地云、泰山一曰岱宗、岱始也、宗長也、萬物之始、陰陽交代、故爲五山之長○大明一統志卷二十二濟南府有泰山、如此抄出すれども、其方地に、強て不可拘、唯五岳の中、主長とする、泰山の東、方陽の起る地に峨々と聳て、不毀不崩が如く、背に萬物の多き衆數の重を負載ても、不變滅を借喩へん爲ばかりなり【羊角而―】以下文句列子不出、莊子發端に所吐露と、結合する爲に、懸河の辯にて、前書に記したるを、說擧る如くに云はるゝ辭なり、【羊角】は旋風を云、風吹曲戾ること、羊角の曲旋したるが如し【斥鷃】はかやぐきと訓ず、俗に云、みそさゞいなり、本艸綱目卷四十八、原禽類云、鷃、釋名鵪鶉鴽鳸、時珍曰、鷃不木處、可謂安寧自如矣、莊子所謂騰躍不過數仞、下翔蓬蒿之間矣云云【數仞】數は三以上七以下、四五六の間を云、仞は明朝錢塘田子藝留青日札卷三云、四尺曰仞倍仞、曰尋、故曰八尺曰尋、今論語注以七尺爲仞非也、一丈六尺曰常、蓋倍尋也、按ずるに孟子盡心上篇掘井九軔云々朱註八尺曰仞、大全陳新安曰集註於語夫子之墻數仞下云、七尺曰仞、愚按周書爲山九仞、孔安國云、八尺曰仞、鄭玄云、七尺曰仞、集註兩存其說歟、蔡氏傳從孔說、愚證之周禮匠人、爲溝洫、廣四尺、深四尺、謂之溝、廣八尺、深八尺謂之洫、廣二尋、深二仞謂之澮、蓋其爲溝洫澮是加一倍之數、尋八尺也、仞亦八尺也、度脩廣則計之以尋、度高深則計之以仞是澮之廣與深各一丈六尺也、以此觀之、則孔說爲是、鄭說恐非○爾雅云、四尺謂之仞、倍仞謂之尋○章圖通義吳氏程曰、顏師古註漢書以八尺爲是、與說文合、當從之云々【翱翔】はかけると訓ず、鳥の飛回るを云【蓬蒿】は共に、えもぎと訓ず、蒿に種類多あれども、此に用ては、野外小草の

短きを、假云ふのみなり【彼】は鵬を指す【此小大―】此一句括、小大知行の辭なり、言は此莊子が、齊諧の書を擧て、世人難肯說を好て、語るにはあらず、古の殷湯王の棘と云へる賢大夫と、問答ありし時の、棘が語たることも、此事と同じ、北方極陰にして、人の頭上に生ずる髮の如き、草一莖をも窮て不生地の北に、冥々として、無涯大海あり、此は天池なり、其天池に魚安居す、其形の廣は、數千里に亙て、長さは幾と云ことを不知、其魚の名を鯤と云【有鳥―】鳥に變じて、鵬と名く、其背は、凡鳥とは格別にして、泰山の横峰倒嶺に秀出して、木石禽獸を容ても不狹が如く、有情非情の萬理を、我に載負ても、不重、飛行自由の時は、上天に一盃漫る雲の舒卷得自由が如し、何かあらん寂然の陰より、發動の陽進二氣和合して、扶搖の猛風は、羊角の旋回するが如き、四象四維より二氣連和するに搏て上るならば、九萬里の高きに至り、恁麼ならば、空中に所有、浮雲塵霧を絕離れ、青天の至極に高きを、負底に飛昇して、其上に茫々渺々たるに、到得んことを企て志し、南方極陽の許に、快然として適んとす、斯時斥鷃の小鳥が、以己方他て、莞爾と呵々大笑して、彼鵬は、何の地に適んと、望を起すことぞや、此斥鷃が身にも、羽翼を具へて、同類なれば、飛行の事は我身に徹して、不曉にあらず、我最や飛騰んとし、踊躍しても、上ること二三丈の高きには、超過ることを不得して、終に形體羸れて下降りて、蓬蒿小草の間に、翱翔のみ、此程の働にても、亦鳥中至極の歡樂なり、彼鵬鳥は、大膽なる願をして、何地に適んとは、望むことぞやと、語を重て謗を致せりとあり、如此なる前言あるなれば、予が所說も、是と不一同やと、占たる【是已】の二字を、却て、始に安置するが、莊子の文章の活機用の妙處なり、【此】の一字にて、承て上に云、小知大知の辨別を結束して【小大―也】と云へり、

故夫知效一官、行去聲比一鄉、德合一君、而徵一國者、其自視也亦若此矣、

【故夫】の二字を、用ることは、上に所言と、不離隔して、故字にて、連承て夫字にて、又語を發して云に依て用ゆ、明朝東嘉盧允武助語辭云、故夫者、有所因而言【知效一官】とは、自己の才智の所能、唯一事に長じて、其事を掌て、不拙を云【官】字官職の義に不可見、耳目之官と、孟子に云と同じ、此俗に云、茶臼藝なり【行比一鄉】とは、此は己が行狀、一鄉の人多きに比合て、無並者が故に、一鄉の人に感ぜられて、歸服さする底なり【行】と、音義を加へたるは、おこなひと、訓じ見させん爲なり、はたらきと讀でも同じ、凡歌行、往也、去也、步也、用也、路也、又五行、又はゆく、おこなふは、庚韻平聲、言行、行迹、德行、丈人行、行縣、おこなひは、敬韻去聲、又陽韻にて、つらなる、行列、行伍、漾韻にて、論語の行々如、又次第の義、つらと訓ず【德合―】【德】字可輕看、性德道德等の例に、不可準看、此れは己が心を、一國の君に感じ知られて、上に召れ、其權威を負者もあり【其自視】とは【其】一字、上の三樣の人を云【自】の字も同じ、人々自己【視】は各々の管見【亦若此矣】は、上の三句を包括して、云辭なり【亦】は面々小分の品を、十分に思我こそ四海に獨步、今古第一人なれと、足れりとするに系て云、如此自滿する底を束て、若此矣と云、此等の人は斥鷃が蓬蒿の間に翱翔して、天晴我こそ飛ことの至極なりと思と、一類なり、

而宋榮子猶然笑之、

【宋】は國名【榮子】は宋國の賢人なり【猶然】莞爾貌【之】の字は、右三樣の人を指す、右三子は小廉小節に拘りて、是なりとす、榮子は毀譽の二を忘れ、內外の分を明定め、榮辱の境を、辨別したる高一等の器量ある人なれば、斯底の者共は、人とも不思笑ぞ、

且擧世、而譽之而不加勸、擧世而非之而不加沮、定乎內外之分、辨乎榮辱之境、斯已矣、彼其於世未數數然也、雖然猶有未樹矣、

【且】は上聲、七也切、發語辭、且夫、且如之類【擧世】は俗に世上推並と云に同じ、文選卷十一、孫興公遊天台山賦云、擧世罕能登陟註擧盡也、二【之】の字

は、榮子を指す、世上一枚に榮子を偕も徒なる人では無と云て、異口同音に譽感ずれども、嬉しがりて、志を勵めて彌羊質虎皮の莊嚴を加增すに無意、天下一同に、榮子を非毀して惡く言穢すれども、氣毒がりて、他人の口を閉させたしと、意に宿て、沮防ぎたがりも、せぬなり、如此なるは、胸間に保つ本心は、內にして、主人公なり、他人の毀譽は、我に預る事ならず、外邊なりと、揺蕩して、二の名分を眞心に不取合が故に世人に一己を譽られて、榮耀と甘ひ、毀れて辱を被るとして、悲底は、外撓に主人公を博せらるゝことにして、無益事とする なり【斯已矣】此三字にて、上の榮子が心の守とする所を抑下して、似たることは、似たれども、未十分と點たる辭なり、內外主賓に意を、配るは、不至極最負と、是とするが、此而已にして、道人の心は、水鏡清と云には、白雲萬里ぞとなり【彼其於一】【彼】は榮子を指す【數數】は、しばしばわづらはしと、しきりとも訓ず、字彙生角切、音朔頻也、頻也、屢也、二字は、世人の造作に無間に系て云、世人は己が智行才德を、高擧して、世に用られんことを、願とする、此等に視ふれば、榮子は內外を定め、榮辱の境に、心を不被奪者にして、斯事には、不失己して、大に有間となり、此又少揚て云辭【雖然】は反語辭【猶】は似也、似則似、脫體不是なり【有未樹】とは、樹は天眞獨朗の一家を建立するを云、內外に、意拘るは、孤明歷々地には、未至となり、

夫列子御風而行、冷然善也、旬有五日而反、彼於致福者未數數然也、

【夫】は發語辭、又夫字を用ひて、重て、高一等を說く【列子】前漢劉向所著新序卷七節士篇云、子列子窮容貌有飢色、客有言於鄭子陽者、子列子禦寇、蓋有道之士也、居君之國而窮、君無乃爲不好士乎、子陽令官遺之粟數十乘、子列子出見使者再拜而辭、使者去、子列子入、其妻望而拊心曰、聞爲有道者妻子皆得佚樂、今妻子皆有飢色、君過而遺先生、先生又辭、豈非命也哉、子列子笑而謂之曰、君非自知我者也、以人之言而遺我粟也、其罪我也、又將以人之言、此吾所以不受也旦受人之賚而不

死、其難不義也、死其難、是死無道之人、豈義哉、其後民果作難殺子陽、子列子之見徵除不義遠矣、且子列子內有飢寒之色、猶不苟取、見得思義見利思害況在富貴乎、故子列子通乎性命之情、可謂能守節矣、○晉皇甫謐高士傳卷中云、列禦寇鄭人也、隱居不仕、鄭穆公時子陽爲相、專任刑法、列禦寇乃絕迹窮巷、而有飢色、或告子陽曰、列禦寇、蓋有道之士也、居君之國而窮、君無乃爲不好士乎、子陽聞而悟、使官載粟數十乘而與之、禦寇出見使者再拜而辭之、入見其妻、挈之而拊心曰、妾聞爲有道之妻子皆得佚樂、今有飢色、君過而遺先生、先生不受豈非命也哉、禦寇笑曰、君非自知我也、以人言而遺我粟、至其罪我也、又且以人言、此吾所以不受也、居一年鄭人殺子陽、其黨皆死、禦寇安然獨全、終身不仕、著書八篇、言道家之意、號曰列子、○列仙傳卷一云、列子鄭人、名禦寇、問道於關尹子、復師壺丘子、九年能御風而行、隱居鄭國、四十年、無知者、著書行於世、唐天寶初冊爲沖虛眞人、題其書曰沖虛眞經、宋景德四年敕加至德二字、○列子林希逸序云、列子鄭人列姓也、禦寇名也、莊子多稱其人、必有道者也、與鄭繻公同時、繻公殺其相子陽、去春秋猶麟之歲庚申五十年矣、其書云、子陽餽列子粟、列子不受、俄而子陽見殺、則以時計之、列子必後子陽、而居孟子之先故、其書多推尊吾聖人以自神、其說云々【御風】は乘風なり【冷然】は浮波浮波と、自然に風に任するを云【旬】は十日を云、左傳宣十二年云、事三旬而成、杜預注十日爲旬【有】は書經堯典云、朞三百有六旬有六日、大全蘇氏曰、有讀爲又、古有又通、往古に、文字少き時は、又字あらず、有と通用ゆ【致】は郭子玄註云、致得也【旬有五日】は、十五日なり、天原發徵卷二云、朱子曰、五行相爲陰陽、又自爲陰陽、春爲少陽、夏爲老陽、秋爲少陰、冬爲老陰、註、此以流行於四時而言也、自一歲言、六箇月陽、六箇月陰、一日亦然、晝陽夜陰、午前陽午後陰、一月言望前陽、望後陰、六甲言、甲子陽、乙丑陰、分言之、則甲陽子陰、從古至今只、悉去屈伸往來循環不已、就使然哉、天地是一箇大陰陽、一年一月一日一時、皆自其中流出とあり、如此なれば、其兩間に命せられて、萬物の靈と、呼る人は、誰か此理に不可違ことなれども、私意に障らる徒は、天地の父母に不順、不孝の魁、非理の惡人となり、就中志ある人は、

陰陽の源は、己に具足することを曉して平生起居動靜共に、須臾も不可不法之、陽時は、陽に順ひ陰れども、地は離れても、猶風を待の煩あり、時は、陰に應ずるは、十五日宛、陰陽の風に不逆乘て往還をなすが如底なれば、世俗の徒が容貌に意を認て、倣模畫樣外邊の脩身威儀のみに拘りて、福を釣んと、願求て、無際數々然たる底は、列子が上には微塵もなきとなり【旬有五日】の字は、日數に不可滯　泥唯時陰時陽不差を云までなり【彼】の字は列子を指、

此雖免乎行猶有所待者也、

此二句、又抑下して云辭にして、次の百尺竿頭進歩とを、說んが爲の張本なり、二句の中に、又有抑揚、上一句揚、下一句は抑なり、此と當て、列子は、不著履、舟事をも便とせざれば、行歩の苦は、免かれて、自由轉變なるが如くなれども、風不吹起ば空中を意に隨せて、飛行することは、不成、風起るを待は、未だ因邪打正底の汙染ありて、冤解氷消に未至なり【待】の字に有疾ことを可察、世上の脩身整德、富貴の福を鈞んとするに、數々然として、無間者に比ぶれば、列子が虛空に飛行し、陰陽の氣に馭は、遙に如有間なれども、地は離れても、猶風を待の煩あり、

若夫乘天地之正而御六氣之辨、以遊無窮者、彼且惡乎待哉、故曰、至人無己、神人無功、聖人無名、

【故夫知一】と云より、件々所說、此高至極を說著さんが、爲なり【若夫】は、盧允武助語辭、此欲指別事別意別名件入、此文中故以此轉喚起と云へり、若字にて轉換て、夫字にて、又喚起す【天地之正】は萬代不易の正理なり【六氣】は左傳昭元年云、天有六氣、杜註謂陰陽風雨晦明也【辨】は變也、字彙云、楚辭九辨、宋玉所作也、辨者變也、謂陳道德以變說君也【無窮】は、よてなし、又きはまりなしと訓す、無盡無量を云【彼】は此にては、至德の人を指す、言は若此に有人、天地の正理に乘て、足迹不運、坐見生敗、心は四海八隅に優遊し、陰陽風雨晦明の六氣の變に、自然と御て順境逆境共に、無厭無求して、入境隨俗底ならば、如

列子が風を須待ことは、更になし、【故曰】は承上辭、助語辭云、故曰、乃是在先曾有此語、今舉而說之、俗語所以說道、今此二字を用ることは、先輩の語と、云ふにはあらず、我曾て常にも云へりの意なり【至人無己】とは、至極の人は、自他を聞せず、我と說ことなければ、萬物と常に應用無礙なり、萬境に應じて、自然と不露主角底なれば、至矣盡矣、至人は其體に就て云【神人無功】とは、凡天下の有情非情の受命出生する物々、松葉の直きも、棘の曲れる、烏の黑きも、鷺の白きも、都て、自然なるは、今古一なり、人爲を用ひて、叻くること毫釐もあらざれば、神人は、其自然に順せて、至理と一樣にするが故に、大功ありながら、有功とすること、一毛もなくして、意を加へて、我助くるに依て、花は紅に咲するぞ、柳は綠にするも、我功なりと、思ふことは、完なきぞとなり、神はあやしと訓す、無量の活機用の見るゝを云、神人二字は、就用言【聖人無名】とは、其人を感じ名て云はんとしても、大德廣大に充足して、萬境萬物に、自然と徧滿するが故に、何程の動と、名稱ことを、不知を聖と云、例せば、論語泰伯篇泰伯其可謂至德也已矣、民無得

而稱焉と云ひ、又大哉堯之爲君也、巍々乎、唯天爲大、唯堯則之、蕩々乎、民無能名焉と云ふが如し、他より稱美して、至人と云、神人と名を異にし、又聖人と呼ことを別にすれども、實は一なり、分て三人と、不可見、一人の上に、三號を施すのみなり、如此底が、前に云、乘天地之正、御六氣之辨と云人なり、

堯讓天下於許由、曰、日月出矣、而爝火不息、其於光、不亦難乎、時雨降矣、而猶浸灌、其於澤、不亦勞乎、夫子立而天下治、而我猶尸之、吾自視缺然、請致天下、

此より第二段とす、前段の末に、至人無己、神人無功、聖人無名、と云を說て、於此寓言に、堯、許由讓辭の事を擧て、莊子の至極とする本意を見さんが爲に、先此事を設云て、其次に又藐姑射の神人に說及せり、堯と、許由は、是亦大なるに似たれども、至大と難言、先世上に就て云へば、功と、名とは、大者なり、功

名の大なるは、有天下に超過たるはなし、有天下の功名、自己に受に當ては、誰か讓ることをせん、誰か辭退せんや、然るに堯、許由、天下の富貴を視ること如傳舍、輕んずること、如棄屣なれば、二人の所見は、此亦無己無功して、無名に幾し、然れども、不讓ば、堯の富貴に無意處不見不辭退は、許由が貧賤を安んずること不見、此も亦列子が御風雖免乎行而猶有待也、其上爝火に喩へて、明を讓り、浸灌に比べて、澤を讓るぞなれば、是猶未離功ことあり、又鷦鷯が巢に取て、許由自安んじ、偃鼠が飲に配して、自滿りとし、尸祝不以樽俎代庖と云時は、是許由も、猶見己處あり、然れば堯と、許由は、大なることは、大なれども、至極有所不大が故に、堯と許由は、大年の冥靈と可云、字外に此意を加て可味

【堯】史記五帝本紀云、帝堯者放勳其仁如天、其知如神、就之如日、望之如雲、富而不驕、貴而不舒云々

【許由】晋皇甫謐高士傳に載事迹、○成玄英曰、姓許、名由、字仲武潁川陽城人也隱於箕山、師於齧缺、依於山而食、就河而飲、堯知其賢讓以帝位許由聞之乃臨河洗耳、巢父飲犢牽而避之曰、惡吾水也、死後堯封其墓、謚曰賓公、即堯之師也と如此記傳れども莊子の寓言にして、字面に著されたるを、後世の學者失ていゝ實事とし、或は道家者流競て、此事を語る可、悲○晋張華博物志卷五云、司馬遷云、堯無以天下讓許由事、揚雄亦云、誇大者爲之、揚雄又云、仙道無之、桓譚亦同【日月出矣】は許由が德の燋ことを、堯より喩へて、云辭なり【爝火】は、燋は二音、去聲小韻子肖切藥韻即約切、共に義同くして、炬火也と注す、此を堯自己の德光小きなるを比す【其】は爝火を指す【時雨】は成玄英曰、神農時、十五日一雨、謂之時雨、農功の助となる時節に應じて、降を云、今は許由が德澤に比す、孟子盡心上篇有如時雨化之者とあり、朱子注時雨及時之雨也、及時而雨之、則其化速矣【爝火】と【浸灌】とを、堯の所爲に喩へて、卑下の辭なり【浸灌】はひたしそゝぐと訓ず、此【其】の字は、浸灌を指す【夫子】は指許由崇敬する辭なり【缺然】は、虧也、十分至極ならぬを云、言は堯天下を治むること、年久して、昇平四海八荒まで、盡滑讒なるに當て、堯の心に自己を謙下し、今世に許由は、富貴に不淫、貧賤を不厭、山林の中に寂然として、無爲を樂まる

ことは、上天に日月照燭て、寸土を加不、徐なり、我世慶の位に登りて、天下の廣を治めさせるは、炬火の小光を雇ふて、普天の下を爾さんとするに不異、許由の德の厚重なるは、時雨滂沱にして、萬物を潤澤するが如し、然るを我仁を施し民を救はんとする役に、身を居させて措は、小水を用て、浸灌の澤を、盜んとするに同く、心力を苦勞するのみにして、信を不得して、尸位なり、夫子許由殿が代我て、今日より帝位に立玉はゝ、天下大に可治に、然るに、我長尻を、帝位に宿て、不及身を用て、今に迄まで、天下を治むることを、浮々と勤たるは、大なる過たり、公に感動して、自己に反照すれば、我德は缺然として、比べて、不足ことを、自知するからは、否でも應でも、天下の治を、公に歸致さんことを請望むと云て、帝位を讓らんとなり、

許由曰子治天下天下既已治也而我猶代子吾將爲名乎名者實之賓也吾將爲賓乎鷦鷯巢於深林不過一枝偃鼠飲河不過滿腹歸休乎君予無所用天下爲庖人雖不治庖尸祝不越樽俎而代之矣

【子】はなんぢと訓ず、貧富に心を不關許由なれば、渠知天子是何官と云に同く、輕推して云辭【鷦鷯】はさゝきと訓ず、巧嬉鳥の異名なり【偃鼠】は、うしねずみと訓ず、此は偃鼠を借て、許由が蔬食水飲を、安んずるに、喩へたり【君】とは、咽奔する辭と可見、徒に年光を費て、天下の治を、擔枷鎖の漢となり、君樣をすると、云意なり【庖人】は俗に云、庖丁人、掌處邊に踞りて、料理調菜を、主者なり、此は、堯の天下の民を酖酌して、措手足に得所させたしと、慮を回すを、喩へて罵辭なり【庖】は、くりやと訓ず、禽獸の肉を宰割する處なり【不治】は禪位、帝位を退んとするは、如不治庖【尸祝】は二つなり、尸は、かたしろと訓ず、宗廟の神を祭る時に至て、神の名代に設へて、壇に升せて、供物を受者を云、天子を祭るには、

卿を尸とし、諸侯には、大夫を用ひ、卿大夫より以下には、其家の孫を、尸とす【祝】ははふりと訓ず、禰宜なり、祭る主人の爲に、神前に對て、祝祭文を讀人なり、尸祝は、許由が自己に喩とす【樽】は、たると訓ず、酒器也【俎】はまないたと訓ず、肉器也、言は汝連年天下を治めて、靜謐の信見はれたるからは、何ぞ勞煩なりとして、我に讓らんとの、辭の費をなすや、我は箕山に偃臥し潁水に逍遙して、榮利を膻とし、聲名を厭ふ、汝慇懃に讓ることを請、我に代れと求むるや、我若九五の位を、高として、萬乘の名を慕ふとするや、然も實さへ立ば、不求とも、名は生起る、實は是內にして、主人なり、名は是外にして、賓客に同じ、主人を捨て、賓を取るならば、內を喪ふて、外を求むるにして、隱者の所尙にあらず、我爲求賓にする者なりと、思入たるや、彼鷦鷯を不知や、此鳥は、茂林の深山中に居ても、巢一枝の外に無求、又偃鼠は河水の流を飮て、己が滿腹の上に、浩洋の深に無需、況や我茲蓬篳を安んじて、金圍を不顧して、蔬食を甘ふからは、何ぞ玉食を希ふて、天下の治に勞せんや、我は素より、寡欲淸廉を樂へり、君の任を久く擔ふ其方は早速に黃屋に還坐し、紫微宮に入て休息めされよ、重て復我を尋訪ふこと必無用にせよ、天下四海の尊は、於我無用、九五の貴は、予何用らるゝことをせん、彼庖人尸祝は各主所司、假令膳夫が、禽獸の肉を掌治むることを、不肯とも、尸祝の人は、必我職を濫りて、樽俎を打棄、其所掌を越去て、庖人に代て、烹割することをせんや、底意は堯强て讓、天下を不治とも、許由は、必山林を去て、帝位に就ことを、不爲となり、

肩吾問於連叔曰、吾聞言於接輿、大而無當、往而不反、吾驚怖其言、猶河漢而無極也、大有逕庭、不近人情焉、

此より第三段とす【肩吾】【連叔】の二人は、必實に無其人、例の寓言にして問答の相手を造設たるのみ、【言】は此方より不問に、彼方より前立て云を言字を用ゆ、俗に咄出、又不問咄と云に同じ、詩經大雅部公劉篇云于時言言于時語語、朱子注云、直言曰言、

論難曰語○又論語鄕黨篇朱子注云、自言曰言、答述曰語【接輿】は其人あり、周代末春秋の頃楚國に生れて、賢德在己とも、亂臣賊子のみ漫て、知己者なきに依て、陽狂の風を見して、爲免禍に、隱者となりたる、孔子と同時人也、西華法師云、接輿者、姓陸、名通、字接輿、楚之賢人隱者也、與孔子同時、而佯狂不仕、常以躬耕爲務、楚平王知其賢聘以黃金百鎰車駟二乘、並不受、於是夫負妻戴、以遊山海、莫知所終【大而無當】とは、大は大言を云【當】は道理に的當する實を指す【往而不反】とは、口に任せて、說前去計にして、言句の前後を不占を云【其】の字は、接輿を指す【河漢】は天上の銀漢なり【逕庭】は接輿が言の平生世間の言と比べて遙に遠て、似依たることもなきを云、言は肩吾と云者が、友とする、連叔が許に來て、我は其方も知られたる接輿の處へ參たが、此方より不前言に、接輿が不問咄をせられたるを、聞たるが、餘に難誠大言にして、奈何と、料簡して、道理に不都合言にして、其人も辯舌に任せて、云ばかりにして、言の前後をも、心に不反照ことなれば、某聞ても、化轉して、彼物語は、丁ど上天に見はれたる、天河の迢遞にして、其源流を尋ねても、無窮極が如に似て、至極外落離としたることなれば、我のみならず、誰が聞ても、天下の人情に、左もあらんかと、可肯點頭事に、あらずと思ふ、其義理落著すること、ありやと問なり、

連叔曰、其言謂何哉、

凡胸中に疑團塞りては、必其事を不語して、己が疑の煩ばかりを云こと常に如此、言は、其方が我に問ふことは、歌咄の歌忘の樣なることぞ、根本の接輿が言は、皆目不語して、咄に氣を奪はれた計を云ては、判斷は、ならぬ、始の言の次第を聞ての後に、垂手示さんとなり、句面に據て見れば、其人皆無れども、連叔は、肩吾より一等高、此一段の文勢を見れば、道の玄奧微妙は、予曾て不知、文段は、直に莊子は畫筆と可謂不可及不可企、又按ずるに、次第して、畫出す模樣は、論語に夫子の門人樊遲が、仁智を問に及びて、孔子舌頭を不餘ども不會得、重て同門の子夏に復問に似たり、

曰、藐姑射之山、有神人居焉、肌

膚若氷雪、綽約若處子、不食五穀、吸風飲露、乘雲氣、御飛龍、而遊乎四海之外、其神凝、使物不疵癘、而年穀熟、吾以是狂而不信也、

【曰】は、肩吾が曰なり【藐姑射之山】藐は、遠也、はるかと訓す、三註には、藐音眇、射音夜とす、書言故事巻五引之、藐音莫、射音亦とす、此山不實在、希逸の註には、本文の【之山】の二字に順て山名也とあれども、希逸も如據模寫形、不可泥、萬境萬物を脫離したる底を、比喩ふれば、至今不得見、寰海の外なる、藐姑射山に登て、安坐するが如きを云、又大明一統志巻二十平陽府姑射山在府城西五十里と記せども、此地山を指すかと、不可思、如此ノ、例せば、佛家に沙汰する、須彌山は、在西北四海を照す、日月も、此山の表裏に、行度するに依て、晝夜の分あると云高山を日本にも安藝國に峨々たる高山あるを、彼に思配せて、彌山と云に同じ【肌膚】は共に、はだえと訓す、別て云へば、肌は骨肉の間を云、膚は、身皮の外、薄皮を云、字彙肌肌膚、列子肌骨不隔と注す、膚、禮記禮運綺疏云、革外薄皮、革膚肉厚皮とあり【綽約】は、にこやかと訓す、婦女が、夫と、陰陽の意和合して、柔輭なるが如く、一毫も角節あらざるを云【處子】は父母の膝下を不去、親の家に住て、未嫁他を云【氷雪】は肌膚表裏無隔、明白にして、潔清なるを云【五穀】は群書拾唾巻十云、禾、麻、粟、麥、豆、一云、黍、稷、麻、麥、豆、【熟】は豐年なり【四海】前に記之【疵癘】は傷毀を云【年穀】は毎年の五穀なり【狂】誕と通じて、たぶらかすと訓す、俗に云人を倥侗にすると云に同じ、【信】は信仰なり、言は然らば語らん、連叔が咄には、遥に世間を遠たる姑射と稱する山に、神異なる人が、安居せり、其人の肌膚は、表裏明徹にして、氷の如潔雪の如白して、至極柔輭にして、些も威嚴なること、なくして、人家の如小女子、平生五穀の類を不食して、空中吹巡る風を吸、夜に至て、下る露を飲て、生涯の養とし、無心の雲に乘、變現無常飛龍に御して、四海六合の外まで、自由自在に遊行して、其神魂は、凝寂にして、有情非情の萬物までを、一毫も無毀傷して、毎年の五穀、成熟の功彰ると云へり、如此を聞が故に、我を倥侗にして、あるまじきことを設て、云はるゝと思ふて、不信仰となり、此是莊子設事、至德の人の妙用を、借喩て示す、世塵に雑居るといへども、事物に不轉化應用無礙なるは、姑射山の遠に安坐するが如し、觸物對境ても不住心不染物底は、氷雪の潔白なるが如し、無求無慕は、處子の柔和にして、陰陽夫婦の密契に無意に不殊、世味を甘ことを忘れたるは、不食五穀に齊し、智光普照し、靈妙の德自然に通達するは、乘雲氣と同じ、不疾而速に妙應無方にして、變現無常は、御飛龍と、一なり、萬物の上に立て、生を寄る計にして、神は六合の外に超出るを、四海の外に遊ぶと云、聖人の形は、枯木に同く、心は死灰に齊し、內外一等にして、動寂俱に妙なり、其神凝に照應し、潛に通達し、懷を空虛にして、物を利するに依て、四時次第調り、五穀豐登て、無災害、物をして、天壯することなからしめ玉ふ、聖人の處世有功能如此を模寫したる辭なり、

連叔曰然、瞽者無以與乎文章之觀、聾者無以與乎鐘鼓之聲、豈唯形骸有聾盲哉、夫知亦有之、

【然】は俗に左樣と云に同じ、肩吾が寫語るを、一通聞受て、又微妙の意旨、別に接與が言中に有舍を釋せん爲なり、助語辭云、訓如是、曰然以爲然、然之、皆是許其是如此○操觚字要云、凡轉折上文換出一層意思若非然字文不接續矣【瞽】は俗に、あきしひと云に同じ、字彙目在瞑而無明○玄英曰瞽者謂無眸縫冥冥如鼓皮【聾】は、みゝしひと訓す、俗に、つんぼふと云に同じ、字彙耳無聞也、釋名、聾、籠也、如在蒙籠之內、聽不察○左傳僖公二十五年云、耳不聽五聲之和爲聾○廬陵羅經綸鶴林玉露云、宋齊皇問王季海曰、聾字何以從龍從耳、對曰、山海經曰、龍聽以角、不以耳【盲】は、字彙慕與の註あり、然れば、其れと一同に、意與する義なり、言は、凡目には、視ること

とを主どり、耳は、聽ことを官とするは、古今人の常なれども、目を聳し、耳を豎たる者には、五色の文章、八音鐘鼓の聲色を見よ、聞と示しても、形骸の病に障らるゝが故に、傍も面白し、堀聞と、意を此に浸すことのならざるは、衆人と劣れるが故なり、然も形骸の外にのみ、何ぞ限らんや、至言妙道は、知者、能識、愚惑の徒、心の面目瞎却しては、知障盲闇にして、照曉することを、不レ得に依て、接興が言を、汝乍聞、却て欺誣されたりと思、不信仰は、悲哉となり、

是其言也猶時、女也之人也、之德也、將旁礴萬物、以爲一世、蕲乎亂、孰弊弊焉、以天下爲事、

此より接興が言を細釋して、肩吾に曉示すの辭なり【是】は當て指示する辭【其言】は接興が言を指す【猶時】は、汝こそ欺誣されたりと思へ、如何にも於理如此となり【女也】とは、汝底が何として、此高妙の趣を聞て、明知ることを、能せんとなり【之人之德】は、至人の至德と云を、分て云たる計なり【旁礴】は、彼此一九に混同するを云【一世】は舉世と云に同じ【蕲】は、をさまると訓す、倒語の法なり【弊弊】は、自心根を勞するを云、言は汝が如所聞神人は、徒人にはあらず、如此底の人は、有情非情の萬物を、彼此に無拘自然に天地同根萬物一體と、安んずるが故に、世上より推並て、斯人に安平に治らるゝことを、仰慕へども、其人何ぞ容力盡心勞苦して、天下を治むることを、事業とせんや、治に無意ども、其德に依て、所過者化し此所存者は、神なるに依て、一世の廣き、自然と治まること我無爲にして、民自治まり、我無欲にして、民自質朴に、我靜にして、民自正しくして、一毫も治に無意となり、堯舜の兢々業々、一日二日萬幾の如きは、此弊々として、天下を治むるを爲事の有意、

之人也、物莫之傷、

上には、至德の人不拘事物ことを云、此一句は他より無傷を云、言は我より意を無染物に依て、物又我を無傷、

大浸稽天、而不溺、大旱金石流、

土山焦、而不熱、

此二句至極物に不能傷の信を云、神德の妙、有若此者は、其本心不轉動物なり、後漢魏伯陽參同契云、入水不濡、跨火不焦、非得道者不足以語此【大浸稽天】は白浪滔天なり、大浸は、水勢勃興して、天に躍揚るを、稽天と云、水は陰にして、地にあり、天は、陽にして、位上、此四字陰陽【大旱金石流土山焦】とは、旱は陽の强にして、不雨、金石土山は、地にありて、陰なり、此七字は、陽陰陰、大浸而不熱の語、世人の難曉明處なり、水に浸されて、溺れざるは、あらじ、大旱山焦底に責られては、熱かるまじきことならず、然るに、水火の强きに觸れても不溺、不熱は如何、此二字には、一生の久きを、經過しても、自得することにあらず、予今、辨別するに、凡有生は咸陰陽の二氣を受て、不生者は、四夷の遠きに至るまで、一人もあらず、所受の二氣は、生命の間暫時も、不離、我に在て、陽を魂と名、陰を魄と稱す、命數盡る時は、魂歸冥漠、魄歸泉ば、形は殘りて、未土灰ども、不見不聞を見て、生涯の中には、二氣不離ことを可察、賢愚に於ても、貴賤に於ても、無間こと、今古一致ならずや、然れども凡庸人は、時々陰に偏、陽に偏なる煩あり、是故晝夜喜怒哀懼愛惡欲の七情、事物に對して、其正を不得、神人は自己に所具の二氣陽に不偏、陰に不倚、陽中に陰、陰中に陽、趣舍萬殊の上に、時々中して、應用無礙なれば、陰水不得溺、陽火不能使之熱底ならず、末の德充府篇所謂雖天地覆墜、墜亦將不與之遺と、當合案至德人は、自然と生死の二門に達し、無死無生、水火二の理に契ふ時は、無溺無熱、溺熱の二字は言を緊吐て世人の繫縛を脫離させんが爲の、過當の語なり、禪家の祖師の佛を無と云ひ、又乾屎橛の例なり、縱令陽九流金の災、百六沼天の禍、彼より我に觸來るとも、何ぞ顚倒錯亂することあらんや、閑人倚杜笑雷公と、晉代夏侯玄が作略を、詩人感じて賦したる底に、異なることあらじ、士農工商共に人面獸心の疵を耻ば、當念當曉、

是其塵垢粃糠將猶陶鑄堯舜者也、孰肯以物爲事、

【是】の字は上を承て云辭なり【其】の字は神人の德を指て云、視るに不足して、散亂するを【塵】と云、膩くを【垢】と云、凡穀の不熟は【粃】と云、しひなせと訓す、穀の皮を【糠】と呼ぶ、ぬかと訓す、此四は、皆猥物なり、此實德の根本あれば、其枝葉自對物驗あるの喩とす、金鐵を鎔を【鑄】とし、土を用て、物を範を【陶】と云、すえものづくりと訓す、言は、道の眞に依て、俯身底なれば、其餘有を出して、天下を理むるに足れり、今古に長く崇聚して、夥敷堯舜の聖治なりと感ずる程の事は、斯人の德の微塵程か爪垢の些きなる、動容周旋の輕きことにても、容易することにて、器物を陶鑄して、用を賑すが如く、無造作なれば、何ぞ一物一事に拘て、力を入れ、心を苦むることを、事業とせんやとなり、

宋人資章甫、而適諸越、越人斷髮文身、無所用之、

字面の通は、中夏宋國の人が、常に頭上に戴く冠を、重寶なる物と、思ふから、中國に遼遠なる、東南方越國の邊鄙なるには、此を首に著ることを不知と傳聞て、大分造へて、彼國に往て、賣て利を得んとして、遙々持行たれども、平生彼は水國にて、江湖に近處なれば、耕作の田地もあらざるに依て、粮の便と志し、入水捕魚時に、有髮ては、水に濕て、目を蓋はされ、衣服を著ては、水に浸されて、身重く働が不得自由に依て、髮も斷割、衣服をも脫去て、裸裎なるを、五色に文來して、水中蛟龍を威懼させて、自己の難害を避ることを、第一とする、風俗なれば、此冠を偖も結構なる物として、買留て、身の用にせんと、思ふ者は、一人もなしとなり、此を希逸の料簡には、章甫を莊子の上に所設言の、高尙に喩へ、越國邊鄙に生れて、中國とは、形體を猥に毀者を、見識の淺陋者に比べて、幽深の理は、世上の耳に不通、心に不得明を、越國の人が、形骸の首頂なる頭に、加冠ことを不知に配當すと、見られたり、

堯治天下之民、平海內之政、往見四子藐姑射之山、汾水之陽、窅然喪其天下焉、

此は己が見知豁開する時は、已前に至極なりとする處を、此節に到ては、却て偖も無分曉なることを、是なりとしたることかなと、自己に耻て、卑陋千萬なりと自知して、悔ることを、設事喩となす【治】は條調へて、理るを云【政】は自己の德風を演て、敎るを云【海內】の字は、詩經に出て、四海の內なり、海外又更有九州と云底には、未到なり【四子】は希逸より先儒種々鑿說あれども、不用、只四維までの義に可見【藐姑射之山】は註に見えたり、上にも抄出す、【汾水】は大明一統志卷二十、平陽府汾河源出岢嵐州流經靈石趙城洪洞臨汾南歷襄陵太平絳州稷山河津榮河注于黃河【陽】は玄英の說には、水北曰陽と記す、希逸の口義には、汾水之南と、陽字に當て、云へり【窅然】は我心に其人を感ずること篤きに依て、茫然果たる底を云、言は堯舜萬國の上に立て、天下の兆民に臨て、條目逐一調へ理て、四海の內、德風傳はりて、平均の後、海外遙隔離たる藐姑射山上に、四子安坐するを、我所都の汾水の南より見て、此四子に意を取れて、茫然果て、昨日まで、天下政治の事を、頓速に忘却せられたるとなり○治と、政には有意【往】の字可味、逕、足行にあらす、妙應無方の本心不住脫迹して、自然に發向するなり、如此不見ば、下の語に藐姑射山の遠と、所都汾水之陽と云に、齟齬して、難自得、

惠子謂莊子曰、魏王貽我大瓠之種、我樹之成、而實五石、以盛水漿、其堅不能自擧也、剖之以爲瓢、則瓠落無所容、非不呺然大也、吾爲其無用、而掊之、

此より第四段とす【惠子】姓惠、名施、宋國人也、魏國に用られて、宰相となれり【謂】は字彙與之言也、かたると訓す【魏王】は孟子の書に出たる戰國の頃梁惠王此なり【魏】は國名周代春秋末に當りて、晉國の諸侯獻公に事へたる、畢萬が後胤、魏桓子、同晉國に大夫たる韓康子、趙襄子と、合志晉國を伐、三分にして趙氏が所配分を、越國と稱し、韓氏が所執を、韓國魏氏が所得を、魏國と名て、周第三十二主威烈王二

十三年に强請望て、列國の諸侯となりたる、魏文公名を斯と云者の孫にして、名を罃と云、謚を惠王と呼れし人なり、始都安邑、國を號魏、惠王の時、虎狼の如き强秦國に逼迫せられて、大梁に都を徙してより、梁と云、周末衰亂の時なれば、上を潛て、無憚、王と稱す【貽】は遺也、貺也【樹】は上聲、上主切、扶樹植也と、字彙に注す、樹木と連綿して植木の時は去聲に用ゆ【漿】は地漿、漿水の別あること本艸綱目卷五地水類に載て詳なり、地漿は頓に土地を深三尺に掘て、井より新に汲水を掘たる三尺の深に沃入れ、攪濁し、少時清るを待て用るを云、此を、つくりみづと訓す、又土漿とも云、漿水は、俗に酢と云此なり、粟米を炊て熱を冷水の中に投入浸すこと、五六日過て、酢味に變じ、白花色を生じたる時、其色地漿に似たるを云、又酸漿とも、若浸とも云、此を、こんづと訓す、如此別あれども今此に用ては、酢、漿油、酒の類をも、籠て可見、地漿を指すには、あらず【堅】はおもしと訓す【自擧】とは、多人の力を不借雇、自己一分にて、持擧るを云【剖之】とは、正二に打剖なり【瓠】は俗に云、柄杓の如きを云【瓠落】は底淺して、横にして、樋竹を倒したるが如く、場を塞て、廣大なるを云【呺然】は字彙吁驕切、呺然虛大貌、莊子非不呺然大也と注す、瓠の腹大に肪脹れて、大なるを云【掊】は微塵の如くに擊碎を云、此段は惠子が大瓠の譬を用て、莊子の所說言辭は恢弘なれども、連月所聞國の政機急務に無功ことを、詰んが爲に設けて云、字面を云へば、莊子魏國惠子が許に、連月逗留する時に當て、惠子が方より莊子に對て、無何不圖としたることを、咄懸たり、所事の魏君より、我を愛して、莫大なる瓠の種を給はれり、君の貴より心を加へ玉ふ賜なれば、此種を我屋敷に蒔種て、生長成就したる時は、最始聞たるに不差、瓠形莫大にして、中に積る實、五石の多を、貯たれども、其實を彈出して、水を入ても、酢酒を入ても、五石の實拔出たる後に積ては、堅重にして、一己の力にて、左邊右邊へ、執擧ること、心任にならず、所詮無用の物なり、何ぞ小分の事に相應せんかと、料簡して、直に中より兩邊に打剖て、柄杓底の物に用らるゝかとしたれば、根元大なる物なれば、横にして見ても塞場豁亂離としたるばかりにて、何物を入れても不被入には、あらざれども、入用て、却て重し、場を妨ぐれば、一種の役にも、不被用に依て、此瓠をば擊碎んとなり、

莊子曰夫子固拙於用大矣、

此句一通承て、又不肯意あり【夫子】は國の執權の高に居るが故に、先崇擧て云【固拙—】とは、倒行令て、惠子を罵辱の辭なり【固】は、唐韻常也、字彙執滯也、又陋也と注す、然れば、平生前方と云義に見ても、又一邊に執著滯礙の意に見ても又人品卑陋なる者としても無害【拙於一】とは【拙】は字彙不巧也と注す、俗に無鍛錬と云に同じ【大】は瓠の大なるを云、言は、其方殿は平生執權の威を振ふても、人品卑陋なるが故に一概に小事を執著して、見力廣大ならぬから、廣大の物に向て、氣を呑れて、其大なるに順ふて、用に立ることが、無調法なるとなり、

宋人有善爲不龜手之藥者、世世以洴澼絖爲事、客聞之請買其方百金、聚族而謀曰、我世世爲洴澼絖、不過數金、今一朝而鬻技百金、請與之、客得之、以說吳王、越有難、吳王使之將、冬與越人水戰、大敗越人、裂地而封之、能不龜手一也、或以封、或不免於洴澼絖、則所用之異也、今子有五石之瓠、何不慮以爲大樽、而浮乎江湖、而憂其瓠落無所容、則夫子猶有蓬之心也夫、

【宋人有—】此拙於用大と、惠子を罵辱たる句の證據を引擧たり、莊子每々國を擧て、人を云ふに、宋人の多きは、其生國は楚なれども、戰國より前春秋代末、宋國微子より第二十七世孫、宋王偃の時、爲楚國滅されて、楚國に合せられたるに依て、昔日の宋も、今

に當ては、國不異、平生所見聞に聽せて、引用られたり【不龜手之藥】は今世本朝にも用る、當藥の類なるべし【龜】は、音三に分て、用ること別なり、支韻居爲切、音規氣形にして、四靈の一、かめ、又は春秋經の龜陰之田、又尤韻驅尤切、音丘、龜茲西域國名、又眞韻規倫切、音均、手凍坼也、莊子不龜手之藥と、字彙にも注す【絖】は字彙同纊、又纊字註云、苦謗切音曠、絮之細者、左傳三軍之士、皆如挾纊、蠶の繭絲綿延て、細を絖と云【洴澼】は蠶繭の中に、糞の雜はりたるを、清水の流に漂して、不潔を洗去るを云、字彙洴注漂濯、又澼注漂絮とあり【技】は同云、藝也【百金】は小補韻會云、史記平準書云、秦以一鎰爲一金、漢以一斤爲一金、董彥遠曰、漢一斤、金四兩、直二千五百文、公羊隱五年傳百金之魚、注猶百萬也、古以金重一斤、若今萬錢【請與之】とは、一族が家傳の妙方を、他人に傳授することを制止せんかと、憚意あること、請字に依て、可見、上請買の請は、是非共に傳授したしと願求る意あり【吳王】は春秋時吳國の王なり、戰國頃は、吳國斷滅したり、其王を誰を指すこと、素より寓言なれば、不可拘ども、下越有難の字に依て、案ずれば、吳王夫差と、越王勾踐が時ならん【使之將】之字は、買方人を指す、將は攻越軍兵の將帥なり【水戰】とは、越國は、四邊咸江水にて、淮南子卷十一齊俗訓にも、胡人便於馬、越人便於舟と云へり、水に調練し、舟に捷利なり、中國に接、東南吳國なれども、此地の人は、水舟に不熟、殊に嚴寒の節、水の深きに、身を沒て、不自由に、却て藥力に依て、大功を立ることを、强云はんが爲なり【何】とは、當て咎たる意なり【蓬心】は譬言なり、野外の廣きに蓬艸の漫生ずるが如くに、胸中に私意塞り、小智雜念重なるを云、きたなしとも、和訓して、往々太平記の如き、野史にも、此蓬字を用ひたり、言は用大に無調法なること、其方殿に似たることあり、宋國人に、寒水に手足を浸しても、胼胝不發妙藥を、家傳にして、代々此藥力を賴にして、水に沒、手足を浸し、絖の汚糞を煩擱て、己身には、胼胝の害を免れ、價を取て、渡世の便にして、歲月を送者あり、斯處に、他鄕の旅客、此妙藥を聞て、其藥方を、百金を償ふて、買はんと、頻に求むるに及で、得百金ことの、多きを喜、一家一族を寄聚、談合するには、何も如知我代々此藥力に依て、身を水に浸し、

絖を漂洗ふことを、勤めても、至今所貯積、纔に數金に、不超過、然るに今不意に、家傳の技藝を、一旦の間に百金の多きに鬻ことは、天の所與なり、我に秘密せよと、制止することなかれ、是非に不拘、我は此旅客に藥方を授與んとて、百金に易たり、彼旅客は、大分に買に心あり、此方を授得て、又他方に走り、東南大國の、諸侯吳王に逢て、我社寒氣嚴凝の節、人の支體を水に沒れても、胼胝の害を免るゝ藥を識りと、丁寧に語る、其頃江水を隔たる越國より、寒天を幸とし、水に馴たるを賴にして、吳國を攻滅さんと、企る聞ありて、此事を難義に苦む時なれば、吳王其藥の妙を聞て、越國の敵に、逆寄して、彼方の利とする所、敵を崩す便り、水戰に味方の利なりと悅て、買方人を、諸軍勢の將帥に任じ、嚴冬の節に、越國の勢と、水中の合戰させたれは、藥力の助を、士卒悉得て、不疲、無故莫大に越の軍勢を、攻破りぬ、吳王喜悅不斜、我國の土地を裂分て、所領を充行ふて、歷々に封ぜられたり、賣方人も、買方人も、藥力に依て、手足胼胝の害を免るゝことは、互に同一なれども、一人は封地輝富貴、一人は、代々長く水に苦て、絖を漂洗ふことの、賤役を不免ことは、何ぞや、大を知て、大に用ると、大を不知して、小に用んとするの等、異なるにあらずや、今惠子の家に、五石の瓠あらば、何ぞ大なるを、大に用ることをなして、此を江湖の深廣なるを、渡らんとする時に、腰に繫で、波濤の漫々たるを、容易越凌の用に、思慮不屆して、却て瓠の形を、剖割んと思ひ、又豁亂離として、物を無所容を憂ふるならば、夫子の心中は、野外の廣に、蓬艸の漫生するが如くにして、塵勞妄想が塞りて、本來の知見は、瞎却したぞとなり、

惠子謂莊子曰、吾有大樹、人謂之樗、其大本擁腫、而不中繩墨、其小枝卷曲、而不中規矩、立之塗、匠者不顧、今子之言、大而無用、衆所同去也、

第五段、此篇の結束なり【吾】とは、我家なり【樗】は、いぬだらと訓ず、椿に似て、臭木なり、腐朽たるが如

き性にして不用、無材の木なり、【大本】は、小枝に對し比べて云、其木の本體充大に太たるを云【擁腫】は、はれものを、いだくと訓ずる字なり此見立にて、喩へたる辭なり、其木節目盤曲りて人身に癭の病生じたる如くなり、【繩墨】は番匠の用る繩墨なり、【小枝】は大本より、西東へ引れて、生出たる枝なり【卷曲】は卷は仙韻平聲逵員切曲也、二字連綿してまがりまがると訓ず【規矩】は匠人此を借て、方員の二を正くするの具なり、孟子離婁上篇云、離婁之明、公輸子之工、不以規矩、不能成方員、朱註規所以爲員之器也、矩者所以爲方之器也、此一段は、前段に惠子が莊子を譏らんとして、却て逆行令て強罵れたるに依て、素より知辯足るが故に、又一樹の事を設けて、白地に莊子を罵復す辭なり、言は我屋敷の中に、大に生長する樹木があれども見人皆偖も大木なりと、感ずることなく、異口同聲に何用にも不立、樗の惡木なりと云へり、世人口を齊へて云ふ社、實もなれ、大木は、大木なれども、其太癰瘍の腫物を、擁抱へたる如く容裔曲りて、器に用んとしても、匠者の繩墨に不都合ば、棟梁の用にも、不當其小枝も直に不舒、卷曲にして、規矩の二つに、都合することなし、天然の廢物なるが故に、此木を切て往還の道塗に、材木屋の前に、如駢樹すれども、此木は、何樣用らるべしと、無思ば、匠人數回經過すれども、顧眄て、見者もなし、今其方の平生所云の言も、迂遠虛誕のみにして、國政の爲にもならず、民被澤の信もなく、何の無用ことなれば我のみならず、衆人の所疎去なりとなり、

莊子曰、子獨不見狸狌乎、卑身而伏以候敖者、東西跳梁、不避高下、中於機辟、死於網罟、

此又莊子が設譬惠子を罵詈する辭なり【狸狌】は西華法師注野貓也とあり、然れば貍なり、貍の異名を野貓と云こと、本艸綱目卷五十一、獸類に載出す、又狸狌をねこまたと云說あり字彙狌猫屬と注す、續字彙補、莊子捕鼠不如狸狌の句を、擧引、狸と、猫とは、相似たるに依て、貓を、家貍と云こと、又本艸に見えたり、可拘ことならねども、捕鼠の字に依て、見れば、猫の異名とすべし、貍に數類ありて、虎貍と云は、

善食蟲鼠果實と本艸に記したれども、其餘の貍は、不捕鼠【敖】は、小補韻會云、牛刀切、說文出游也【跳梁】は、快然として、跳行るを云【機】はあやつると訓ず【辟】は法也、狸狌を執へん爲に、垣や埒を架へて、不得逃の設具を云【網罟】は、共に、あみなり、言は面前に露見したることなれども、分て貴殿には獨狸狌が鼠を捕へんとするを見玉はざるや、彼貪得、己が身を卑縮め、形を伏陰して、快敖樂物共を候覘て、東西に無懼跳行て、高處をも、不厭、下處にも無憚して、伶利に見ゆれども、其利根術が、喪身害になりて、遂には機辟に羈され、網罟に懸て、死するにあらずや、

今夫斄牛、其大若垂天之雲、此能爲大矣、而不能執鼠、

此は、莊子の自己分上に喩て云、發端に所謂若垂天之雲の字を、結段に至て、復呼出す、此回護照融の筆力可見【斄牛】斄同、郭璞曰、斄牛黑色、出西南徼外、楊子雲校獵賦、跋犀斄○集韻、郎才切、莊子斄牛、注旄牛也○西華法師注云、斄牛猶旄牛也、出西南夷、其形甚大、山中遠望、如天際之雲、藪澤之中、逍遙養性跳梁、捉鼠不及野狸、亦猶莊子之言、不狎流俗、可以理國治身、且長且久者也、言は、貴殿には彼斄牛と云獸を不見や、不知や、其形の大なることは、上天に覆塞る雲の如無際、如此にして社、至極廣大なりとはせん、然れども、狸狌の如くに、鼠の小なるを執て、快しとすることは、却て不得爲、此廣大の器量具はるに依て、小技に拘はることに、あらず、其代には、鼠を執ることを好て不爲が故に機辟網罟の滅身害は、自然とあらざるは、大活計ならずやとなり、

今子有大樹、患其無用、何不樹之於無何有之鄉廣莫之野、彷徨乎無爲其側、逍遙乎寢臥其下、不夭斤斧、物無害者、無所可用安所困苦哉、

至于此難倒【之】は大樹を指す【無何有之—】は何も無有と云意【廣莫之—】は廣曠莫大の義【彷徨】は末太

宗師篇彷徨乎塵垢之外、希逸口義、彷徨浮遊之意とあり、事物に本心を不轉、萬境の上に安んじ樂を云、不思善不思惡の境界なり【其側】は大樹の側なり、下の其下も、大樹の下なり【寢臥】は閑脚舒布臥白雲の意なり、必寢字に不可拘、所謂行亦禪、坐亦禪、語默動靜體安然なり【天】はわかじに、いのちみじかしと、訓ず、木の天然を不終して、番匠の爲に、伐るゝことは、人が天命を、不盡して陷過、命を奪るゝと同じ【斤斧】は斧は形大に、斤は小なり、禮記檀弓篇注、斧形、旁殺、及而長○釋名斧甫也、甫、始也、凡將制器、始用斧、伐木已乃制之○小補韻會斤、擧欣切、說文斫木也、齊語惡金以鑄斤、注斤形似斧、而小、或作釿、言は今其方殿に、大木あれども、何の用にも不立とて、氣毒がりめさるゝが、此を苦に擔ふことにあらず、其方の心が狹して、廣處を不得知が故なり、我教へん、如此大木は、無何有の鄉とて何角も、悉皆無なる地、廣莫の野とて、無量無邊の豁朗なる處に、樹生長て、其木陰に湛然寂靜にして、萬化に不轉、其根本に倚て、夏日の熱に、涼風を承て、心儘に晝寢することを不得ことは、拙ことならずや、我所教に、生長たらば、匠人も見付不得に依て、斧斤にて、伐れ、天然を不盡して、夭死することは、思も不寄、萬物より、害を受ることも、あるまじ、用られぬこそ、活計なれ、離四苦絕百非、何ぞしも、困阨苦勞することの、微塵もあるまじきは、至歡至樂では、あるまいかとなり、

逍遙遊一篇總評

凡至理に循者は、以道自然と、萬事に通達す、全正性者は、物と同一なり、天理性己に全保得たる底に到て、逍遙ならざる人は、未之有也、彼赤子の心は、本無知識、識は、形の長ずるに隨ふ、外物の面前に、接ての後に、得失懷に塞り、氷炭交作て、彼を舍て、此に役れて、休歇の無時、儻理を燭すこと洞明ならずんば、道義の戰勝て、至貴至富に身を居とも、人面獸心の譏不可免が故に、學道の干要は、先聖賢の樂處は、如何と、索めて、身に親切に、體認究竟せば、始て可得力、易云樂天知命と、顏氏は一簞一瓢にして、自樂めり、孟子は、浩然の氣を養て、天地に充塞がり、原憲は、行歌て、其聲金石に出づ、此皆外物の累を超出て、自己の天を全くして、出處動靜無適非樂、斯時こそ逍遙遊を可論、發端に北溟の鯤が、變化して、鵬となり、搏風擊水南溟に徙ることを、說ことは、蓋學者の見聞狹陋にして、志の趣向細微なるが故に自性を無知、海水淵汀、共に命と殊にして、淪胥して、失ふことを、南華老仙の憐て、此大物が、大處に生ずることを、說擧用ひて、己が所自來を曉明させ、涵養を久しうして、神に體し、變に合、陰を出て陽に入り、其用無測して彼知の效一官行比一鄉、德合一君一國に徵者までに、外者の可輕ことを悟らしめんとの意なり、天の當重、培風、絕雲、與化無極ことを見明たらば、何の世塵の累か、及ぶことあらんや、是故乘天地、御六氣、無窮に遊ての後、逍遙の至極とす、所謂至人、神人、聖人と、別てるも、亦混融して、俱化而已、功名の二は、皆外物、堯の許由に讓るの章は、前說の義を訂成、廉潔辭遜の風を啓て、後人を警醒し、務外の慕を、絕せんが爲にし、治道補益することを退け、肩吾が口に、接輿が言を語るに及で、神人の秘を、發揮して、身中の至靈に喩へ、操存涵養ことを、務めて、窮盡さんとするの初は、遠求ることにあらず、塵垢粃糠にても、堯舜を陶鑄すと云ふことは、神人の德は、與天同運、其緒餘を推及ても、猶唐虞の治は、成就するに足れり、然も其眞は世人の所知にあらず、堯は往て、四子を、藐姑射の山中に見る、存妙理ことは、臆度の非所及、必親姑射に我往造たらば、四子を云ふまでもなく、當喩、學者は專勉之、是篇首には、鯤、鵬、蜩鳩、靈椿、朝菌を論じて、年の小大を知しむること、皆窮理の談柄なり、末に大瓠を擧て、虛中にして、自全し、大樗は、深根自固は、盡性より、至命に喩へたり、此道の大成を擧て、入神者也、不疾して、速に、不行して、至る、何往としてか、逍遙にあらざらんや、

○內篇齊物論第二

【齊物論】とは、物論を、同一齊に見よと云ことを、指示すると云義なり、所謂天地同根、萬物一體と、